
IS・ゴースト

gyudon280yen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS・ゴースト

【Nコード】

N7949T

【作者名】

gYudon280yen

【あらすじ】

事故で死んで幽霊になった僕。マテリアルゴーストになり、物質化能力もなぜか手に入った。さあ新生活だ！・・・異世界に飛ばされました。ってここはどこ？ISってこれなんだ、ふうん。あれ、動いた。どうしよう！？原作キャラは一部出てきます。陽慈、なにそれ？男操縦者はオリ主以外には原作で出ない限り出ませんのであしからず。

シヤル好きはバック推奨です、

プロローグ（前書き）

まさかの幽霊×科学の異色コラボ。奇跡的に式見蛸と同じ力を手にした元幽霊はどうするのか？

科学と非科学の交錯に世界はどうなる。性懲りもなく新作！勢いでやるから不定期更新です。

プロローグ

さてと、僕はいたって普通の社会人。だった。

過去形というのもさきほど駅のホームに突き落とされて轢かれて死んじやっただよ。

ごめんね母さん、父さん。先に逝くことを許してください。

ってあれ？普通に歩いてるなあ………轢かれた感触はあるが。

あ、僕の体が……うわ、グロい。見なきゃ良かった、よりによって自分のだよ。

あゝあ、つまりは僕は

電車に轢かれた

死んだ

幽霊になった

ええ、家族に会えないじゃん。霊感ないんだから……。

とほほ、これからどうすればいいんだよ。

あ、深螺ん家に行けばどうにかなるかなあ。

よし行ってみよう、多分どうにかなるっしょ！

> i25224 — 3095 <

プロローグ（後書き）

はい、深螺さんとオリ主は幼馴染設定です。勢いでやりました、後悔は……してません。いや、しっちゃんいけない

タイトルロゴ追加しました。

1・知り合いの幽霊が会いに来たら驚くよね？(前書き)

時間的に本編終了後です

1・知り合いの幽霊が会いに来たら驚くよね？

そんなわけでやってきました、神無家！

「すいませ〜ん、開けてもらえませんか？」

扉を叩く。あれ、触れる。まあいいや。

ぎいぎいという音を立てて大きな扉が開いた、よかったあ。
めんどくさそうな顔の深螺が立っていた。

「どうしたのです、こんな時間に」

現在時刻・・・午後五時。うん。

「死んじゃったんだよ、どうすれば良いかな？」

「扉を叩いておいてなんですか、ん？」

深螺がケータイを開いてすぐに驚愕の表情を浮かべる。

「駅で事故、被害者ー西川流！？」にしかわながれ

もう、ニュースになったのか。早いなあ。

「おう、そんなわけだ」

「流、あなた。マテリアルゴーストになったのですね」

マテリアルゴースト、実体化して一般人にも見えるようになった幽

霊。ふ〜ん。

「そうみたいだね、どうすればいいかなあ？」

「保護します、ここで」

「え？」

さも当たり前のように言う深螺。いや、そりゃあ死んだ人間が普通に生活してたら驚くけどさあ。

「でも、あなたに死んでも会えて嬉しいですよ。丁度話したかったですし」

言われるがままに屋敷のなかをついていく。やっぱり広いなあ。

「死後の人生どうしようかなあ。いや、成仏しなきゃいけないか。
う〜ん」

僕が悩んでいると、深螺が手招きしている。なんだろう？

「流、どうしますか？今後の生活」

「うーん、成仏しなきゃ駄目じゃね？」

「それができません」

「はい！？」

明後日の方向を向いた深螺がぼそりと呟く。

「マテリアルゴーストは成仏できません、普通の霊能力では」

「成仏「不可能です」・・・ええ」

即答だよ、幽霊にどう生活しろと？

家に帰ったりしようものなら近所が大パニックだし、まじでどうすりゃ。

「一つだけ、方法があります」

「まじか！？」

「異世界に飛ばすんです」

「なるほど、存在しない人間なら大丈夫だしなあ・・・おい！」

「なにか問題でも」

「あるわ！ありまくるわ、異世界ってあるのか、どう飛ばすんだよ？」

「気合です」

なるほど、やる気さえあればなんとやらってヤツだな。

「大丈夫か、特にお前の頭が」

「問題ありません・・・おそらく」

その間はじゃあなんだよ。まあいいや、あきらめよう。不思議なのは今に始まったことじゃない。

「そうか、まあいいや。で、いつできる？」

「すぐにでもやれますが・・・いいんですか？」

「ああ、最後にお前の顔見れたし。悔いがないようにつて生きてきたから大丈夫」

「そう・・・ですか。では」

深螺がそう言うのと床になにか置いて呟いた。

「――――」

なに言ってるかわからんが呪文みたいだ、体が光りに包まれる。

「最後にありがとな、深螺！」

「私の寿命が来たらそちらに行きます、楽しみにしてください」
なにか言っていたが、強い光りに包まれて聞こえなかった。

そして、引つ張られるような感覚とともに僕は消えた。

1 知り合いの幽霊が会いに来たら驚くよね？ (後書き)

ね、どうなるじゃあね、

2・変身か装着かそれが問題だ(前書き)

趣味に走りました、後悔はしてないぜ！

2・変身か装着かそれが問題だ

あのさ、飛ばすならまともな場所にしてほしいんだよ。
みんなもそう思うよね？

辺りを見回して叫んだ。

「どうしろってんだよ！」

現在地は・・・廃工場。

え、どうしろって？この状況。

「うっ・・・」

見知らぬ男の子が頑丈そうな柱につながれていた、しかも顔は恐怖に染まっている。

反対側にはアニメにでも出てきそうなパワードスーツらしきものを纏った女性。

あれ、あのお姉さんこっちを睨んでる。どうしよ。
バシユ

本能で横に飛んだ。瞬間、先ほどいた場所が抉れた。

射線の先を見れば女性が持ったライフルの銃口から硝煙が上がっている。

「小僧、悪いが死んでもらうよ！」

え、小僧？社会人だぞこっちは！

ひとまず落ち着いてポケットを探る、あつたあつた鏡だ。

「なんでガキに戻ってんだ！？」

「知るか！さつさと逝きな」

マテリアルゴーストであることを生かして、重力を無視した動きで銃弾を避ける。

えくつとそうだ体の形を変えて・・・。

壁の影に隠れて自分の形を意識して変化させる。

ちなみに、趣味でG4にさせていただきました。スペックも設定通りにイメージできたし、多分大丈夫！

「IS、しかも全身装甲だと!？」
フルスキン

驚いていらつしやるな、まあ関係ない。まずは安全のために倒させてもらう!

全速力で走って近づくと、そしてそのままの勢いでキック!

「せい!」

上手くいったのか脚部?らしき部分が楽しいくらいに凹んだ。そう
だ、身長は大人ですよ?

「ぐう、てめえ!」

剣らしきもので斬りかかってくるが動かない、動体視力は自信があるんでね。

見事に真剣白羽どり!結構ビビったのは秘密だ。

「これでえ!!」

全てを壊すイメージを載せた右腕で胸部を殴りつける。

金属の歪む音が聞こえて、女性がそれごと後ろに吹き飛ぶ。

ぶつかった壁が音をたてて崩れる、倒したかな?

「ちっ、くそつたれ。覚えてろよ!」

おお、まさかリアルで聞けるとは。つてかまだいたんだああいうの
。。

逃げていったので、残ったのは少年と僕だけになった。

ひとまず逃げたほうがいいかな?

柱に隠れてもとの姿に戻る。

ありや、寝ちゃってるなあ。まあいいや、鎖を外さないよ。

少し力を入れただけで鎖は千切れた。よし、出ようか。

「一夏!!」

おんぶした途端にさつきとは別の女性が壊れてできた穴から入ってきた。

「この子ですか?大丈夫ですよ」

「は?」

これが僕の織斑千冬との出会いだった。

2・変身か装着かそれが問題だ(後書き)

G4とかWW、暴走はしませんよ？

3・前代未聞、ISが動かせる男と死人(前書き)

ヒロイン1は千冬さん

3・前代未聞、ISが動かせる男と死人

「さてと、そろそろ行くぞ。一夏」

「わかつてるって」

あれから数年、身寄りのない僕は織斑家に引き取られた。

義姉さんにはとてもお世話になった、この世界で身動きがとれない僕を実の弟のように扱い。学校にも行かせてくれた、実際は感謝してもしきれないくらいだ。

一夏を助けてくれた、ということとで恩人扱いだ。実際は自己防衛のついで、という状況だったんだけど。

ただ、年上に恩人扱いされるのも気が引けるので普通に接してもらっている。その後、事情を拷問のごとく言わされて「じゃあいっしょに住めばいい」というわけだ。

まあ、たまに酔った義姉さんがそのことをたまに言うのだが。

「流、一夏を頼むぞ」

「わかつてるって。一夏、IS学園と間違えるなよ」

「間違えるわけないだろ！姉さんも笑うな！」

今では家族同然の生活を送ってる、ある意味幸せなのか。

ちなみに今日は高校受験、二人して藍越学園に合格（予定、まあ判定はAだった）するために家を出る。

ちなみに僕、いや口調が変わって俺は恩義として家事をしていたりする。得意なんだよ全般、すっかり一夏にも教えたからどこに出しても恥ずかしくないぞ。義姉さんは家事スキルが絶望的だが……。

「なあ一夏」

「なんだ」

「迷ったよな、中三が迷子とか恥ずかしいぞ」

現在、受験会場を探しています。どうなってるんだここは、案内図も迷路みたいだし・・・。

通路は続くよ、どこまでも？いや、ねえよ。

「次だ、多分次が出口だ」

「どこから来るんだよ、その自信」

しかし、進むしか方法がないのも事実である。

仕方なく目に入った扉を開けて入る、ここか？

「ああ、受験生ね。着替えて進んでね」

受付らしき女性がこちらを見ずに指差す。適当だなあ、おい！

まあ、あらかたカンニング対策だろ。去年あつてその関係で会場が遠くなつたんだし。

「おお、ISだ。すげえな流」

興奮した表情で話しかけてくる一夏、気持ちはわかるが使えないぞ。

「そうだな「大変だ！どうしよう」「はい？」

突然あわてた声がしたのでそちらを見ると、ISを纏った一夏バカがいた。

付近にいた係員らしき人も驚愕の表情を浮かべている。

「おお、すごいな一夏。がんばら」

笑いながら近くにあつたなにかに手をつく。

大量の情報がなぜか頭の中に流し込まれてきた、気づけば視線が高い。一夏が驚いてる？

「どうして「お、お前もかよ・・・」「は？・・・うえ！？」

なんと俺も纏ってるではありませんか・・・なんか周りが騒がしいし。

「男が動かしてるぞ！」

「すぐに連絡だ！」

慌しいなか俺らの視線が近くのと立て看板に向く。

『IS学園受験会場2』

それを見た俺らは同時に嘆息した、あゝああ・・・。

それからの一週間はテレビに俺らの顔が映っていた、いきなり有名な人かよ・・・。

「はっはっは、注意した人間もろとも合格か。まったく、面白いことをするな」

義姉さんが大爆笑してる。いや、結果的にそうだけど・・・。

「うげ・・・」

三日前に配送されてきたIS学園の書類を見て一夏が絶望的な表情をしていた。

対して俺は余裕、将来の進路がIS整備士だから丁度いい。自分で使えるのだから尚更だ。

事実、すごい楽しみだ。

「流は大丈夫そうだが一夏は大変だな」

「流、なんでお前は涼しい顔なんだよ。よくわかるなあ」

「整備士希望だからな、お前だっついていいだろ。有名人だぞ？」

心底嫌そうな顔をしているけど、無視。

「あ、そうだ。義姉さん、新しいスーツ出しておいたから」

「ああ、ありがとう。・・・お前が夫ならいいんだがな」

最後らへんがすっかり聞こえなかったが、まあいいか。

一週間後の入学式を待ち遠しくする流を嬉しそうにながめる千冬だった。

3・前代未聞、ISが動かせる男と死人（後書き）

アイテムや一部世界観は「二人目の適合者」と同じです。

4・振り下ろされる名刀「出席簿」(前書き)

―夏はバカです

―夏「ひでえ！」

4・振り下ろされる名刀「出席簿」

「orz……」

一夏も同じような表情で隣に座っている、そりゃあそうだろう。

俺ら以外全員女子なんだから

そりゃあ、ISを動かせるのは女性だけだから仕方ないのだが……。

男子が二人だけ、という状況なので周囲からの視線が突き刺さる。

一夏はとつくにorz状態で、それを見ている俺も結構きつい。

初めこそ大丈夫だろうと思っていた俺も心配になってきた。

ああ、上手くやっていけるだろうか……。

「みなさん入学おめでとう！私は副担任の山田真耶です。一年間よろしく願いますね」

緑色の髪をした小柄な女性が自己紹介をする。

なんか、子どもが背伸びしたかのような感じがする。

なんかに近いと思っただらあれだ、小型犬みたいなイメージだ。

それにしても、女性特有のふくらみが大きいと思う。

一夏はちらちら見てるし、おいおい。

「……」

「……」

返事をしない女子とその空気にあてられて返事ができない男たち。

さらにそんな状況にやられて戸惑う教師、という中々にきつい状況の出来上がりだ。

すみません、山田先生。無言の圧力で返事できませんでした……。

「えっと、じゃあ名簿順で自己紹介をお願いします」

おお、持ち直した。流石教師！

「織斑君、織斑一夏君！自己紹介してくれるかなあ、だめかなあ？」
一夏、いくら緊張してても先生無視はいけないぞ。

それと山田先生、上目遣いは反則ですよ。一夏が顔赤くして固まってるじゃないですか。

「や・・・やります、やりますから大丈夫です。はい」
「本当！良かったあ」

すごい安心してんな、どれだけ心配してるんだよ山田先生。

おお、一夏が久しぶりに真面目な顔を！いや、いつも真面目ですって顔向けんな。

「え、と。織斑一夏です。・・・」

おいおいいつまで黙ってるつもりだ、みんな待ちわびて
以上です」

ずがしゃくん

クラス全体がずっこけた、俺とポニーテールと白髪の人の三人は残して。

他の二人もこういうの慣れてるんだろうか。いや、ひどすぎて無視シカトしてるのか？

まあ、こういうのは慣れてるけどな。（一夏がフラグ建築士&バカ）
うゝむ、ここでやっていけるのか？（主に一夏が）

「あの〜西川君？君の番なんだけど・・・」

やべ、考え事しすぎた。すみません・・・。
立ち上がって自己紹介、これが自己紹介だ！

「男ながらISを動かしてしまった一人の西川流です、専門科目については最近学び始めたばかりですのでご迷惑をかけてしまうかもしれませんがお願します。趣味は料理とナイフ戦です」
ナイフ戦は得意だ、だって自衛隊にいたし。成績は一位でしたよ？
一夏は感心した目で見んな、これが普通だ。

ん？誰か来た、担任の先生か？

「遅れてしまったが、私が担任の織斑千冬だ。一年間よろしく頼む」
え、嘘お！？なんでここにいるんだよ。ってか、滅多に帰ってこない理由はこれか・・・。

連絡ぐらいしろよ、心配したじゃねえか。

一夏は固まつてるし。お、スーツはちゃんと着てるな。一応社会人なんだから自分でやんなきゃいけないと思うんだ

スパーン！

「ぐおおおおお」

出席簿で叩くとは、ってかこれは出席簿で出る痛みじゃないぞ。

「失礼なことを考えてはいないか？西川」

「すみませんでした織斑先生」

「わかればよろしい」

一夏が笑ってやがる、ちくせう。

「それにしてもなんで千冬姉がこじこじ」

スパーン！

「おおおお」

「織斑先生だ」

あ、一夏のバカ。姉弟だつてのがバレたじゃんか、さわがしくなるぞ。って既に騒がしい！

「え、織斑君つて千冬さまの弟？」

「じゃあ、ISが動かせるつてもそれが？」

あちやゝ、頭抱えてるし。まったくこの一夏のせいバカで・・・。

「仕方あるまい、西川も弟のようなものだ。わけあってこいつもだ」
なに顔赤くしてぶつちやけてんのゝ！？はっ！

女子の視線がすげえ突き刺さってる（恨み・妬み・その他・・・）
怖ええええええ！！ほとんどハイライトが無いよ？

「なに勘違いしている、所詮手のかかる弟だ」

一気に静かになった、みんな安堵の表情浮かべてるし。

その後

どこの鬼軍曹ですかというセリフを言ったタイミングでチャイムが鳴った。

ああ、まあ義姉さんが先生なら心配ないか。

「ちよつといいですか？」

ん？誰だろう・・・。

4・振り下ろされる名刀「出席簿」(後書き)

感想で原作キャラが出てこないの?というものがあつたのでお答えします、(ネタバレですが)。

原作キャラは順次出てきます、タグで随時追加しますのでお楽しみに!

5 やあ久しぶり、早かったな。え、ちがう？（前書き）

喧嘩腰って大変だね

5 ・やあ久しぶり、早かったな。え、ちがう？

「ちょっといいですか？」

SHRが終わり、教科書を出して授業の準備が終わったとき。見知らぬ（どこかで見たような）少女に声をかけられた。はて、どちら様でしょう？

場所は変わって屋上。おお、風が気持ちいいなあ。

「んで、なんの用事ですか？初対面だと思いますが」
「やっぱりどこかで見たことある気がする・・・うむ。」

「忘れたのですか、まあそれなりに経っていますからね」
「ん」と、思い出した。この声は、ってかこの容姿にその頬に手をあてるしぐさは・・・。

「深螺？まじで来たのか・・・てか本当だったのね」

「嘘を言うはずが無いでしょう。久しぶりですね、流」

あれ、ここにいてるってことは・・・。

「お前、もう寿命？まさか・・・」

「早死にはありません、それにこちらに来るときに移動先の時間をあなたと同じにしました」

・・・つまりは、俺が来たときにもういたってことか。じゃあ、向こうでは幸せに？

「それなりに楽しい人生でしたよ。まあ、こちらでもそうしたいです
すね」

そうか、まあ良かった。ならいいや。

キーンコーンカーンコーン

「あ、やべ。チャイム鳴った、急ぐぞ！」

「ひう！」

手を引いて教室に走る、出席簿は食らいたくない！

走っている間、深螺の顔が真っ赤になっていたのは別の話。

「さて、授業を始める。だが、その前にクラス代表を決めなければいけないな。自薦他薦は問わない、誰かいないか？」

クラス代表―対抗戦に出たり、会議に出席したりする。所謂、学級委員長。

一夏がまたわからないって顔だし、お前はそれでいいのか・・・。

「はい、織斑君が良いと思います」

「わたしも！」

おお、人気だな一夏。いや、なんで他に織斑っていたのかあって顔してるんだよ。

「西川君を推薦します！」

「わたしも西川君がいいと思います」

え、俺？いや、まあ別にいいけどさ。なんか金髪のお嬢様っぽい人が震えてるんだよね、さつきから。

あ、立った。

「納得いきませんわ！」

なにが？まあ、男だからって推薦するのもおかしいが。普通は実力だよな。

「男が代表なんていい恥さらしですわ、このセシリア＝オルコットに一年間屈辱を味わえとでも言うのですか！？」

ああ、こういうタイプ苦手だわ。つうか嫌い、いくら今の世の中が女性は偉いって感じでも言いすぎじゃね？

「第一、このような極東の地で暮らすこと自体苦痛ですのに、文化も後進的な国で学ぶなど屈辱ですわ！」

まだ言ってるよ、ある意味賞賛に値するよ。ってか、嫌なら来るなよ。

「ですので、極東の猿が代表だなんて納得いきませんわ！」

ほお、黙ってれば好き勝手言いやがって。

「ただ古いだけで何偉そうに言ってるんだよ。後進的なのはおたくが一番だろ？不味い飯を作る国がうだうだ言ってるんじゃないよ」「一夏と千冬が怯えていた。まあ、俺は滅多に怒らないからな。山田先生なんか涙目だよ。まあ、目以外がとびっきりの笑顔だったらそうなるよな。つまりは、キレたら俺は笑顔ってことだ。」

「あなた、わたくしの祖国をバカにしますの!？」

ほうほう、記憶能力に障害があるようですね。

「先にバカにしたのはお前だろうが。それとも、相手の国をバカにするのが作法なんですか？ひどいですね」

「なっ、あなた！ふざけないでくださいまし！」

知るか、バカにするヤツに真面目に付き合う人間じゃねえよ。

お、手袋投げてきた。たしかこれが決闘の申し込みだっけか、マジでやるんだなあ。

「決闘ですわ！」

「ああ、いいだろう。後で後悔するなよ？」

「ふん、負けたらあなたは小間使い、いや奴隷にしますわ！」

え。。。。。

「引くわ、まじ引くわ。そんな趣味なのかよ。。。」

わざと(40%)軽蔑の反応をする、つまりはほとんど本気で。

「ちがいますわ！「もういいだろう」く。。。」

織斑先生がため息をしながらしゃべった。

「ならば来週にクラス代表決定戦を開く、西川・オルコット・織斑。それでいいな？」

流石、わかってるねえ。あ、一夏がまだ怯えてる。

「わかりました」

「わかりましたわ」

「俺も？」

いや、クラス代表決定戦って言ったろうが。どこ聞いているんだよ。。。

「では授業を始める、教科書8ページを開け」

一夏だけでなく、千冬も少し怯えていたのはここだけの話。

5 やあ久しぶり、早かったな。え、ちがう？（後書き）

深螺さんキターーーー！！

6 ・食堂のおばちゃんの作る飯は美味しい(前書き)

ー夏〓バカは揺らぎません！

6・食堂のおばちゃんの作る飯は美味しい

「流、飯食いにいこうぜ」

いつもどおりの言い方で一夏がきた、そついや食堂があるんだっけか。

言われなくても行くけどな、動物園のパンダを見るような視線に死にそうになってるし。

「篝、お前も行くこうぜ」

ん、顔が赤い。まさか・・・あの一夏^{バカ}、いつの間にフラグを。

今に始まったことじゃないからあきらめてるが、どうせなら深螺も連れていくか。

「おゝい、深螺。いつしよに行こうぜ」

「はひ!? ああ、わかりました」

なんかおかしい反応があったがまあいいか。（流もそれなりに鈍感である）

食堂と呼べる広さじゃないよね、これ。まあ、在籍する生徒全員が来るから納得といえれば納得だが。

おお、厨房の設備良いのばっかりだなあ。一度でいいからあそこでやってみてえ。

そんなことを考えながら焼き魚定食（鮭）を受け取り、近くのテーブル席に座った。

「なあ一夏、その子は彼女か？」

なんか「私が一夏の彼女・・・ノノ」とか言ってる、あちゃ〜。

「いや、幼馴染だよ。ああ、そうか。まだ流がないところに転校したからなあ」

確か、篠ノ之篝^{バカ}だっけか。確かあの天才が「篝ちゃんは可愛いよ〜」とか言ってたが、この子か。

なんか一夏が素で否定した途端に不機嫌そうになったし。こりゃあ確定ですな。

「がんばれ篝さん（小声で）」

ボシユーとかいう音が聞こえて真っ赤になった。純情ですねえ。

「・・・う、うむ。篝でいい、ところであなたは？」

「ちよいと訳ありで織斑家に住まわせてもらってる西川流だ。よろしく、流って呼んでくれ」

ちなみに義姉さんにもG4になって戦ったことも、マテリアルゴーストだということも言っではない。しゃべったら大変なことになるからな。今のところは身体能力が平均異常（誤字ではない）の少年ってことになってる。

「流、その人は？知り合いか？」

「ああ、「神無深螺です、昔に親交がありました」というわけだ」

なんか篝さんが深螺に向けて同情の視線を送ってる、そっぴや深螺はなぜ顔が赤い？

まあ、いいか。顔が赤くなるのは今に始まったことじゃない。変に気をきかせるボコられるからな。

それにしても飯が美味しい、時間があつたらおばちゃんにコツを教えてくださいらおう。

「orz・・・」

隣の一夏が死にそうな顔で机に突っ伏している、一体どうしたんだ。

「大丈夫ですか、織斑君。わからなかったら聞いてくださいね」

流石先生だ。あ、一夏がギギギとでも聞こえてきそうな動きで頭を上げた。正直気持ち悪い。

「先生・・・全部、わかりません」

ズドン

大半の人がずっこけた、オルコットもしかり。まあ、今やってる内

容は事前に渡さされた教本（ウンページみたいな）に書いてある内容だしな。

「織斑、教本は読んだか？」

「古いウンページと思って捨てました」

ズバン！！

「必読と書いてあっただろうが」

「すみません・・・」

俺が見覚えないうことは一夏がゴミ当番だった日に出しちゃまったってことか。

あいかわらずバカを發揮してくれるよ・・・。

義姉さんもため息ついてるし・・・はあ。

「西川、教えてやれ・・・」

申し訳ないという顔で頼んでくる、めんどいが仕方ないか。

「はい、わかりました」

ああ、めんどい。一夏め、覚えてろよ！！

そんな恨みの籠った視線を一日中一夏に浴びせるのだった。

6・食堂のおばちゃんの作る飯は美味い(後書き)

なんだかんだ言っ
て優しいオリ主
です、誰にでも
・・・。

7・個人情報保護法、なにそれおいしいの？（前書き）

オ리지の情報を公開します

7・個人情報保護法、なにそれおいしいの？

にしかわながれ
西川流

性別―男

身長―178？

体重―計測不能

好きな物―美味しい食べ物・猫・可愛いもの

嫌いな物―家族や友人を傷つける存在・男を見下す女

前世で電車に轢かれて死亡。マテリアルゴーストになり復活するが、成仏できないので緊急措置としてISの世界に飛ばされた。（深螺に他意はない）

前世では自衛隊に所属しており、身体能力は抜群。銃器の扱いにも長けている。

能力的には式見螢と同じである。誰にでも優しいが、キレると怖い。キレた流は千冬でも抑えるのが難しい。緊急時には体をG4にして戦ったりなどしている。

一夏を助けたことにより織斑家に住むことに、今では一夏の兄貴分のような存在。

一夏ほどでは無いが鈍感でもある。

短い黒髪で長身、細身だが想像もできないほどの力がある。

視覚的には消えることはできないが、物質化を任意で解除できる。

イメージC.V - 鈴村健一

容姿イメージ―生徒会役員共の津田タカトシ

7・個人情報保護法、なにそれおいしいの？（後書き）

プライバシーの侵害？知りませんよ

8 ・大半の心配は杞憂で済むことが多い(前書き)

深螺さんは最初から少しデレています・・・

8 ・大半の心配は杞憂で済むことが多い

初日の授業をどうにか終わてくたくたになっていた。

いや、理解はできたが視線がきつかった。

休み時間のたびに全学年から来るんだよ。クラスからも・・・早く休みたいよ。

一夏はプラスで理解できないが追加されていて目が死んでいる、うわ。

「あ、二人ともいたんですね。丁度良かったです」

山田先生が小走りで近づいてきた、やっぱり背伸びした感じがする。

「どうしたんですか？」

はて、やらかした覚えは無いぞ。ふむ、なんだろうか？

「はい、寮の鍵です。特別措置により緊急に部屋が用意されました」

一夏はなんで？って顔してる、まあ一週間は自宅から通学って言われてたからなあ。

「わかりました「自宅通学って」保護目的だって、わかれよ」

しつこい、決まったんならそれで良いだろ。安全なんだし。

「でも荷物「私が運んでおいた、着替えと携帯電話の充電器でいだらう」ありがとうございます」

すごい落ち込んでるよ、まあ日々の潤いは必要だからなあ。あ、つまりは俺のもか。

「さて、早く鍵をかけるから出る。道草食つなよ」

50mしかありませんよって思ったのは秘密だ、どうやって道草食えと。

そんな文句を心の中で考えながら俺と一夏は寮へと歩いていった。

「そついや俺達部屋違つよな、なんでだろう？」

それはさっきから気にはなっていたが、仕方ないだろう。今日ぐら

いは我慢しよう。

「どうせ調整終わったら同じ部屋になるだろ、少しくらい我慢しとけ。じゃ、俺はこのへんで」

1026室と書かれたドアに近づく。あ、隣じゃん。

「おお、隣なのか。良かったあ」

「じゃあ、また後でな」

「おう」

さてと、同室の人は誰かなあ。そう思いながらドアを開けて入った。なんと、どこそのホテルより物が良いぞ……。恐るべし国立。とにかくベッドにダイブ、羽毛布団が俺を待っている！

「同室の人ですね、私は神無深螺。これからよろしくk……」

シャワーを浴びた直後でバスタオルしかまとっていない深螺がいた、同室って深螺かあ。

「よ、よう……。ごめんなさい！！」

すぐさま隣を超速で通り抜け、部屋の外に出る。あぶなかった……。あれ、一夏？

つてうわあ、ドアを木刀が貫いてるよ……。怖ええええ。

「入ってください流」

「入れ」

同時に聞こえる声、良かった。

このままだったら色々と危なかった、他の女子のラフな姿を見続けるのはきついいし。

なにはともあれ、部屋に入る。

「すまん、考えずに入って」

正直に悪いと思ったら謝ろう。ここ大事！

「いえ、無防備な格好で確認しなかった私もです。気にしないでください」

おお、あなたが女神か……。ありがたい。

「気にしていませんから……。別にあなたなら良いですし」

最後が小声だがツツコムとろくなことに発展しかねないのでスルー

しておく。

経験が言ってるんだよ、スルーしろ！って。

「さてと、先にシャワーの使用時間でも決めましょう」

「ああ、そうだな。俺はいつでもいいぞ」

「そうですか、では私は19時から20時で。流はその後使ってください」

「おお、わかった」

いやあ、同室の相手が深螺で良かった。もし知らない人だったら眠れないところだったよ。

「そうだ、落ち着いたことだし。飯食いにいきましょう」

「そうですね、行きましょう」

いやあ、幼馴染って素晴らしい！

8 ・大半の心配は杞憂で済むことが多い(後書き)

2話にタイトルロゴ(おふざけですが・・・)を追加しました。不評でしたらやめます

9・姉弟はよく似るって言っよね(前書き)

作者はブラックビツ党です……

9・姉弟はよく似るって言うよね

いやあ、授業ってきついね。歴史なんて機械関係以外が頭に入ってこないよ、まあ駄目だと思うが……。

もう放課後だよ。え、早いって？g d g dと授業の描写見たいのか、ダルくなるぞ。

「おい」

「なんだ？」

なぜ気づいたら剣道場にいるのでしょうか、なぜ箒さんと竹刀を持って向かい合ってるのでしょうか。

なんか箒さんは真剣な表情だし、これはしっかり相手しなきゃいけないのか？

ひとまず終わったら一夏をぶちのめす、そうだよあいつが腕掴んで引っ張ったんだよ。

んで、剣道かあなつかしいなあって言うたら、では一戦って……はあ。

「覚えてろよ」

「ヒイイ！」

怯えた一夏を尻目に竹刀を構える、やるからには本気だ。体が鈍ってなければ大丈夫なはず……心配だけど。

「はああああああ！！！」

「せいやああああ！！！」

あゝ、結果から言おう。鈍ってた、あと一歩ってとこで見事に面やられた。

いや、優勝者は違うね。油断してたら危ないわ……。

「さてと、箒。次は……」

「ああ、一夏。お前だ」

あゝ、一夏はバカで弱かった。いや、鈍ってた。動きが思い出せてない感じがめっちゃする。

「なぜ弱くなっている！なにをしていた」

「帰宅部だ、しかも三年連続皆勤賞だぞ！」

いや、それは自信もって言うことじゃないぞ。うん。筈なんてぶるぶる震えてるし。

字体が可愛いけど、怒りを浮かべた顔で睨まれると怖いぞ実際。さて、俺は逃げる。

「がんばれよ」

さらば一夏、お前のことは忘れないぞ。

「明日から放課後三時間みっちり鍛えてやる！」

そんな言葉を背に聞きながら、剣道場をあとにした。

その後。くたくたになった一夏が目撃されたのは言うまでもない。

次の日、専用機が渡されるということを義姉さんから聞いた。

「専用機？なんでだ」

「男だからデータ取りってことだろ、それでいつくるんですか？」

「クラス代表決定戦当日だそうだ」

つまりは本番で全部やれってことかよ、うわゝ。

「これで平等ですわね、安心しましたわ」

あゝはいそうですね。早く座ったほうがいいよ。そのほうが身のためだから、あ間に合わん

ズガン！

「ッ〜！」

あまりの痛みにもがき苦しむオルコット、一応あの音は出席簿から出る音じゃあないと思うんだ。

やっぱり義姉さんは人外か、人のこと言えないけど
ズドン！

「……………！！！」

声にならない叫びを上げてのたうち回る、ううあく今ので靈気が結構減ったぞ〜！！

「失礼なことを考えていたようだからな」

読心術使うな、プライバシーがないだろ。いや、すみませんでした、笑顔で振り上げなくていいです。はい。

ああ、怖い。やはり鬼神か。

「キレたお前が一番怖いよ」

一夏まで読心術を…………やはり弟だもんねえ…………。

9 ・姉弟はよく似るって言うよね（後書き）

さて、どうなりますかなあ。オリ主はセシリアに勝つべきか、負けるべきか……。悩む。

10・冷静になって考えよう(前書き)

さあ、クラス代表決定戦開幕!

10・冷静になって考えよう

専用機が来るんだってさ、今日。

あと五分で一夏VSオルコット戦が始まるけど……。

「箒」

「なんだ？」

「剣道ばかりやっている記憶しかないんだが」

「当たり前だろう、それしかやっていないのだから（キリッ）」

実際、放課後には剣道をしている一夏と箒しか見ない。まあ届くのが当日だし、訓練機は借りれなかったしね

俺はなにかしたかって？毎晩悪霊の皆さんと戯れてましたがなにか。

「織斑君、西川君。来ましたよ」

おお、ついに！

山田先生が指差した格納庫のエアロックが外れ、ガキンという音を立てて開いた。

そこには、「白」と「蒼」がいた。

「ええと、右の白いのが「白式」（せいはくしき）蒼いのが「蒼月」（そうげつ）です！」

一夏はおもちゃを貰った子どものように喜んでいて、まあ俺も嬉しいが。

「さて、織斑は実戦で決める。できるだろう？」

「ああ、大丈夫だ」

一夏が自信に満ちた表情で白式を装着した、空気が抜けるようにカシュツという音声が鳴り。

まるで体の一部のように組み合わさる。

さて、追いかけるように装着した俺は設定をし始めた。

「あいつに一泡吹かせてやれ」

「一夏、勝って来い」

「ああ、わかった。行って来る！」

そのまま一夏はアリーナへと飛び立っていった。

「あつはつは、見事にやられてるwww」

ファーストシフト
一時移行をしたはいいが、零落白夜を使って一歩手前でエネルギー切れであつさりと負けていた。

ちなみに平等をきして試合を俺は見ることはできなかった、それ以前に設定変更で頭が行っていて見れなかったが。

篤と義姉さんとの挟み撃ちに会っている一夏を笑いながら、俺は力タパルトに両脚を固定する。

「じゃ、俺の順番だな」

「行って来い、負けたら承知せんぞ」

「笑いやがって、負けたら笑ってやるからな」

「流、あの女に見せてやれ」

嬉しいねえ、皆に期待されるって。ここまでされたら期待に答えなきゃな。

皆の思いを背に、俺は飛び立った。

10・冷静になって考えよう(後書き)

次回はセシリアVS流戦!!

11・人生は面白くなきゃいけないよね！（前書き）

結構長くなりましたね

11・人生は面白くなきゃいけないよね！

「よくきましたわね」

腰に手をあてたセシリア「オルコットがスターライトMK？（以下ライフル）を立てて滞空していた。

さまになりますね、どうでもいいけど。

「誰が逃げるか、逆にお前が来ないかと思ったよ」

一触即発の状況で睨みあう。だが、まだだ。

オルコットを指差し、叫んだ。

「男をバカにしたこと、後悔させてやる！」

「大口を叩いたこと、後悔してさしあげますわ！」

戦いの火蓋が切って落とされた。

早速オルコットが後退しながらライフルで正確にシールドバリアーを狙って的確に撃ってくる。

えっと武器はなんだ、あった！

「でえい！！！」

青いレーザーがそれに命中した途端、レーザーが弾けた。

「なっ！？」

オルコットの驚きの声上がる。

主力武器の弾が目の前で拡散したのだから、一本のナイフによって。

「え」と、名前が攻防一体近接兵器ねえ。初期装備はこんなもんか」

つまりは、上手くエネルギー系攻撃を受けられればダメージ0で戦えるらしい。

冷却のため、連続使用は武装溶解の危険性ありと。

「さてと、今度は俺から行かせてもらう！」

「させませんわ！」

ブルーティアーズ（以下ビット）を射出してきた。

とここで皆、ISは基本的に動きは自動で補正されている、つまりおまかな動きでもそれなりにしっかりとした機動ができる。ただし、

自動補正のために細かい動きができない。

そのため、熟練操縦者はフルマニュアルという操縦者の動きをそのまま再現する操縦システムがある。

そして俺は人外の動きができるマテリアルゴースト。

ここまでくればわかるだろう、人外の動きをそのまま再現する。

そして機体が見事に操縦者に着いて行ける性能なら？

「せいやあああ！！」

通常ではありえない速度で襲撃してくるISのできあがりだ。

今も三機目のビットを蹴り壊した瞬間だ。即座に四機目に飛び掛る、背後で三連続の爆発音。

そう、蹴り壊した。

煙が上がっている脚部のつま先部分には小型のレーザーブレードが展開されていた。

「機体に固定武装ですか。ですが近づかせませんわ！」

先ほどより命中精度が上がってきた、本気だな。でも、ここで負けるわけにはいかない。

本気に答えるためにナイフを持って一直線に加速した。

引っ張られるような感覚と共に前に押し出される、刃の先端を向けて突っ込んだ。

「もらったああああ！！」

だが、オルコットの顔が笑みを浮かべた。

「ブルーティアーズはまだあつてよ！」

尾を引いて弾道型が二機迫ってきた。やばい、避けられない！

『空間圧重力衝撃砲防御レベルで作動』

そう、空間投影ディスプレイに映し出された。その瞬間、目前に迫ったミサイルが爆散した。

状態を確認するために交差させていた腕を解くと、両肩に砲門が展開されていた。

ガキン

シリンダーが回転するような音が聞こえた。

『エネルギーバレットイニシャルイズ完了』

目の前にそう表示された。どうやら、まだ撃てるみたいだな。

『ラグナロク空間圧重力衝撃砲使用可能』

ラグナロクを肩から外し、片方を構える。体が高校生に戻っても自衛隊での銃火器の扱いは忘れていなかった。

オルコットもライフルを構える、そのままお互いに動かない。

世界が止まったかのようにアリーナ全体を静寂が満ちた。

お互いに相手の顔を見た、真剣な表情を浮かべている。

『負けない！』

トリガーが引かれ、二つのエネルギーの奔流がそれぞれを包み込んだ。

「勝者、西川流！」

「おいおい、大丈夫かよ」

高威力の武器を受けたせいでブルーティアーズが落下していく。あ

あ、もう！

アンロックユニット非固定部位のブースターを吹かして落下していく機体を受け止める。

仕方なくお嬢様抱っこになっているがまあ問題ないだろう。

「う、すみません／＼」

「気にするな、戻るぞ」

そのままピットに帰還した。やっと終わったよ・・・疲れたあ。

機体を解除した。ほう、白式はガントレットで蒼月は指輪か。

「あの・・・流さん、一夏さん。申し訳ございませんでした！」
深く腰を曲げて謝るオルコットさん。

「なに、わかってくれればそれでいい。な、一夏？」

「ああ、本気で戦ったんだ。もういいだろ」

「ありがとうございますう……」

涙目でこちらを見つめるオルコットさん、やっぱり根は良い人なんじゃない。

「さてと、仲直りの握手でも」

右手を差し出した、すると力強く握り返してくる。

「はい、セシリアと呼んでください」

これで一件落着……あ、勝っちゃった。

「あ、織斑先生。クラス代表は一夏ってことで」わかった、お前は副でいいな？」「はい」

「ちよ、流。決めるなよ」

「勝者に従え」

「ぐ……」

強くなってもらうためにはそれが一番だ、さてと腹減ったな。

「よし、食堂行こうぜ」

「はい、行きましょー！」

「そうですね」

なんか深螺もいたがまあいいや、さあレッシンゴー

「話を聞けー！」

11・人生は面白くなきゃいけないよね！（後書き）

チート武装登場・・・やっちゃったZE

12・ 覚つてあるらしいな。え、そんなに？（前書き）

少しクロスです

12・ 覚つてあるらしいな。え、そんなに？

そんなわけで、クラス代表は一夏になった。いや、させた。どうせ守るってんなら経験を積んだほうがいい。

「クラス代表は織斑一夏君、副代表は西川流君に決まりました。がんばってくださいね」

クラス中から喜びの声上がる、そんなにかよ……。

一夏は諦めたような表情で座っている、目が死んでるぞおい。

あ、義姉さんが入ってきた。

「さて、授業を始めるぞ」

『はい！』

今日も元気な一年一組です。（一夏はオワタけど）

さて、放課後だ。

一夏が訓練をすると言っていたので俺も付き合うことになった。

「流、あなたも行くのですか？」

「おお、お前も行くか？あ、訓練機必y」

「専用機は持っています、これでも頑張つて日本の代表候補生です」
心なしか顔が赤い。つて候補生か、すごいな……どうせ男つて理由ですよ……。

つてふぎゅ、痛いって引つ張るなああああ！！

そんなわけで引きずられて来ました、第三アリーナ。さつき浮いたような気がしたんだが、いえなんでもないです。

「い、一夏あ。来たぞ」

「ついでですが私も参加させて頂いてよろしいでしょうか？」

そう言つてえええええ、右腕だけ部分展開してる。器用だなあ、おい。
しかも怪力になっちゃって・・・、いえなんでもございませぬ、はい。

「別に織斑一夏に興味はありません（ボソツ）」
「なんか言つて俺のほうをちらつと見てきた、なんだ？」

「でしたら話は早いですが、どうぞ」

「はい、それでは」

アリーナに深螺が飛び降りた（俺を掴んで）

「おおああああああ！？」

いきなりなにしゃがる、つて眩しい！

「お待ちせしました「ゴブファア！！」あの流は無視して結構でs
「なわけあるかああ！！」・・・」

さて、ピットから落とされました。死ぬかと思つたぜ！もう死んでるだろとかは言わないでくれ。

セシリアと一夏の顔が引きつってるだろうが、怪我はないけどさ！

「深螺さんでしたか、お互い頑張りましょう」

おお、なんか友情が芽生えたみたいだ。なんで俺と一夏を見るのさ？
いや、人を見てため息つくな。失礼だろうが（俺に対して）

「俺はいいのかよ！」

地の文読むな、一夏「バカなんだから。つてなんか受信したみたいだ、世界の意思のせいかな？」

「もちろん」

某 コちゃんみたいに笑顔でお返事、一夏弄りは楽しいなあつと。
さて、飽きたし混ざるか。一夏がなんか言ってるが無視。

「そついや深螺のISつて名前なんだ？」

「『残月』です、中近特化型の第2.5世代です。蒼月とは兄弟機と聞きましたよ」

「兄弟機ですか、開発はどこですか？」

へえ、兄弟機かあ。ということは俺と深螺で組むことになるのか？色々。

「戦乙女工業という知る人ぞ知るその筋では有名らしいです、設計開発リーダーは同じ年らしいです」

天才っているんだなあ、一度会ってみたいもんだ。いい話ができるに違いない。

ああ、設計開発者になりたいなああああ！（キラキラキラ）

「ああ、これはやはり健在でしたか」

（流が楽しいことなどを考えているときは瞳がキラキラと子どもものようになるのだ！ちなみにこれを見たものはギャップ萌えを理解するらしい。）

「いいなあ（キラキラキラ）」

「はうう！」

「……ぐふっ（鼻血……）」

「流君、やばい……」

ん、なんかアリーナがおかしいな。一体どうしたんだ？

「なあ深螺……どうした、鼻押さえて。セシリアも」

「い、いえ。気にしないでください、私も気にしませんから
なんか怪しいがまあいいか。さて、特訓だ。」

「よし、始めるぞー夏」

この一件でストリーム党（瞳を輝かせた流をみんなで愛でる党）が発足したのは言うまでもない。

12・ 党ってあるらしいな。え、そんなに？（後書き）

ストリーム党WWW、戦乙女工業製ですから安心です！
もちろん同じ年って言ったら、彼ですよ！

13 お祝って大事だよ、限度もだけど（前書き）

いやあ、パーティーっていいですね

13・お祝いって大事だよ、限度もだけど

「おめでとぅ〜！」

現在、一夏のクラス代表就任と俺の副代表就任お祝いパーティーが開かれています。

いやあ、女子ってすごいね。でも、なんで二組の人も混ぜてるのかねえ。

どう考えても三十人超えてるぞ、おい。いや、祝ってくれるのは嬉しいけど。

それと、深螺。なぜに睨む、男は一人だけなんだから女子に囲まれるのは当たり前だ。

「楽しそうですね、流」

いや、囲まれてて動けないからきついんですけど……。

「祝ってくれるのは嬉しいが、きついぞ」

なんか一夏も同じ状況だなあ、筭が責めてるし。なにかしましたかねえ？

「まあ、いいや。こっちこいよ、話するならそのほうがいいだろ？」

「そ、そうですね」

ふう、さて

「はいは〜い、新聞部です。今話題の二人にインタビューに来ました！」

新聞部か、つて名刺を渡すんだあ今の時代……。

「じゃあ、まずは織斑一夏君。クラス代表就任しての抱負をお願いします！」

おお、考えこんだな。一体なにを……。

「一生懸命がんばります
ずで〜」

みんな転んだ、考えての結果がそれですかい。おいおい。

なんかインタビュアーも顔が引きつってるし、うちのバカ一夏がすみま

せん。

「え、えっと。じゃあ次は代表候補生を倒した西川流君、抱負をど
うぞー！」

ふむ、女子総勢三十人超の期待が籠った視線が突き刺さる。やって
やるさ！

「学年別トーナメントで一組を優勝させてみせます！いや、優勝す
る！！！」

「おお、とてもいい感じの返答ありがとうございます！いやあ、
そんなのを待ってたんだよ」

グサツ

なんか刺さった音が聞こえたな、なんだろうか。・・・気のせいか。
「流石、西川君！織斑君とはなんか違う！」

グサツグサツ

また聞こえる・・・一夏が泣いてるよ、いや気にスンナ。箒にな
だめられてるし、セシリアは微妙な目で見てるし。

さてと、気をとりなおして。

「さあ、みんな。次は食事を楽しもうじゃないか！」

『はい！』

パーティーに用意された料理は西川流の提供でお送り致します。あ、
おいにつられて一夏が復活した。

「おお、皆楽しんでるようだな。む、この香りは流が作ったな？」

義姉さんも来た、すげえ見てくるよ。食べたいなら言えばいいのに。
・・・。

「先生方もどうぞ、美味しいですよー！」

ちやつかり山田先生も来ていた、仕事が終わったんだな。さあて、
好評みたいだし作ってよかったあ。

「わあ、すごい・・・」

「これが流君の・・・負けたわ」

「やはり美味しいな」

「腕を上げましたね、流」

「やっぱり勝てないのか」

「ふむ、教えてもらいたいものだ」

うん、一夏が落ち込んでるね。まあ、俺に料理で勝とうなど十年早いわ！はははははは。

すみません、調子に乗りました。反省はしていません。

そんな楽しい宴は23時まで続いた。女子の体力半端無いです・・・。

宴を終え、なぜか酔っている義姉さんを部屋に送る羽目になった俺だった。

そのころ

「ここがIS学園ね、一夏、流。待ってなさい！」
ツインテールの少女の声が響いた（別の場所で）

13・お祝いつて大事だよね、限度もだけど（後書き）

次回はマテゴのあるキャラと漢字が同じ人が出ます

14・鈍感一夏を刑に処す(前書き)

セカン党のみなさん、お待たせしました！

14・鈍感一夏を刑に処す

「あ、流君。噂聞いてる？」

朝、突如として声をかけられた。隣には深螺もいる。噂ねえ、あれかな？

「転校生が来るとかってやつか？でも他のクラスだろ、関係ないっしょ」

ふむ、誰だこいつは。入り口塞ぐなよ、入れないじゃねえかよ。

「すまんがどいてくれないか、入れないんだが「ああっ！！」って鈴かよ」

そう、転校生つてのは鈴でした。丁度織斑家にやっかいになってからできた友人である、騒がしいんだよな。

「久しぶり、だが戻れ。そろそろく「グボハア！！」

見事に朝から出席簿アタック（一夏命名）を食らった、うう痛い。

「早く席につけ、鈴音も教室に戻れ」

「は、はいいい！！」

教室のみんなもすぐさま席についた。どれだけだよ……。

さて、昼だ。え、早すぎだつて？だから（中略）ってことだよ。

「待ってたわよ！」「わかったからどけ、邪魔になつてる」「わかったわよ……」

まず、周りを見てから行動しましょう。他の人の迷惑になるなんて言語道断だ。

まあ、騒がしい鈴を置いてテーブル席へ。幕とセシリアがさつきから質問ばかりぶつけて来る。

「流さん、その方とはどういう関係で？」

「一夏、そいつは誰だ！」

「流、その方は？」

「なにもそこまでやらなくても、って深螺も混ざってるし。」

「幼馴染だよ、簡単に言えばセカンド幼馴染」

「中学のときの友達ってやつだよ」

「安心したのか三人して胸をなでおろしていた、なんだっていうんだこいつら。」

「なんか鈴は鈴でこっちを睨むし、って一夏を睨んでるのか。ああ、なぐる。」

「一夏目当てか？（ボソツ）」

「な、なわけないじゃにやい・・・ノノ」

「噛んだ、凶星だwww。はあ、一夏めフラグ立てやがって。なぜ睨むのでしょうかお二人（セ&深）？」

「それにしても鈴が代表候補生かあ、専用機持ちだろ？」

「ふふん、そうよ。そうだ一夏、私が教えようか？流もどう？」

「おお、そりや助かる」

「なんかここで返事したらボコられそうな感じが・・・。」

「私たちが教えているんだ、貴様などいらん」

「あなたは二組でしょう？敵の施しなどいりませんわ！」

「あゝあゝ、うるさい。飯時くらい静かにできないのか、まったく。」

「それにしても味噌汁が美味しい、やっぱりおばちゃんはすごいや。」

「まだ言い合っているよ、まあアドバンテージ取られたからなあ。」

「等は幼馴染、セシリアは専用機持ち。俺は関係ないがな！」

「そっぴや鈴、クラス代表になつたって本当か？」

「そうよ、クラス対抗戦は楽しみにしてなさい。あれ、代表は一夏だっけ？」

「そっぴや、流に押し付けられて」

「ふん」

「その後はやっぱり騒がしかった、ああ疲れた。午後の授業もがんばろう。」

「最低、馬に蹴られて死ね！」

あそこは一夏の部屋だったはずだがなぜ鈴が、しかも涙目だし。「どうしたんだ？話なら聞くぞ」

仕方ないので部屋に招き入れた、はて一夏が^{バカ}やらかしたな？

「もしかしくなくても酢豚のあれか？」

「そうよ、あいつつたら奢ってくれるだよなあって……」

……可愛そうにも程がある、鈍感も考え物だぜ一夏。

「あちゃあ、味噌汁をーってヤツだよなそれ」

「そうよ、文句ある？」

「無いけど、一夏は昔からなんだ？」

思い出したように立ち上がる鈴。

「そうよ、唐変朴よ……はあ」

深螺もうわあつて顔だ、そりやあなあ？まったく、こんな可愛い娘に好かれてるのに……おしおきが必要だな。

「鈴、ちよい耳貸せ。ごによごによ、かくかくしかじか。どうだ？」

「なるほどね、やってみるわ！ありがと流！」

「おう、がんばれよー！」

さて、クラス対抗戦楽しみだなあ

「またろくでもないことを、面白そうですが」

「だろ？まあ、これで一夏が気づかなかつたらフルボッコだなあ、寝る前に。メール送信っと。」

『バカ一夏にメールだ、バカ一夏にメールだ』

「誰からだ一夏、予想はつくが」

「流だ、なにになに……だからどこがだよまったく」

ケータイの画面には

Ｔ〇バカ一夏

題「バカ……」

本文「やあ、一夏。鈴を怒らせたようだな、そんなお前に良い言葉を教えてやる。」

『犬に噛まれて死ぬ、この鈍感野郎!!』 (音声つき)

「鈴……」

このときばかりは同情した筈だった。

14・鈍感一夏を刑に処す（後書き）

深螺「織斑一夏、トロルに踏まれて死んでください」

鈴音「姉さん、そこはもっと残酷にしなきゃ」

あれ、マテゴキヤラがこっちに来てる。もしかして……

15・幽霊に科学など効かんわ！（前書き）

チートの能力・・・

15・幽霊に科学など効かんわ!

さて、作戦通りに鈴が一夏に対して無愛想にしている。

見事に不機嫌オーラが出てるな、さて今日も特訓しますか。つうかほっとくなんて、一夏知らないぞ?

あああああ、四つ角浮かんでるし……作戦立案俺だけでも
う知らん。すぐに謝ると思ってたのに……謝らなかつたらクラス
対抗戦で叩きのめすって言っちゃったしなあ。

手は出さないって言っちゃったし……。

「流、大丈夫なのですか?これでは織斑一夏が瀕死の重傷ですよ」

「鈍感バカのあいつが悪い!つうわけで問題無し」

なにかを諦めたような顔に深螺がなっていた、問題ないぞ。多分。

「流、相手してくれ」

「わかった、じゃあ少し待ってる」

蒼月を纏い、近づく。ラグナロクを両手で構えた。

「さあ一夏、OHANASIの時間だ。安心しろ、分子結合が壊れるだけだから」

「安心できるか!つうわあ!」

実際はただのレーザー撃ってるだけだけどな!色は紫だし、思い込みで必死に逃げてる。

別に怒りをぶつけてるわけじゃあないよ?腕が勝手に動くんですよ、ええ。

「四つ角浮かべておいて何を言ってるのですか……」

あっはっは、俺がそんなことするわけ……あるよ。

「うらうらうらうらあ!」

レーザーをフルオートに切り替えて連射中、ああ怖いね。そっこの立場じゃないから知らんけど。

この鈍感バカめ、鈴の前に俺が制裁を加えてやる。

「あなたも人のこと言えませんわよ、ねえ深螺さん?」

「そうですね・・・どれだけ苦労したか」
「なんか言ってるが関係ないことだろう、俺は俺で一夏^{バカ}を叩きのめす！
「だああああ、なにに怒ってるんだよ！」
「自分の胸に手を当てて考えろ！！」
それから一時間にわたって訓練という名の制裁が行われた、さあて
すつきりしたあ。

さあ、みんな。お待ちかねのクラス対抗戦だよ、一夏^{バカ}はやられてしまえええええ！

(鈴に同情しすぎて少々おかしくなっています)

早速始まるな、ちなみに管制室にいます。セシリアと篝もいる。

「一夏、謝るなら痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「そんなの雀の涙くらいだろ、全力で来い」

鈴、一夏を倒してしまえ。鈍感野郎に鉄槌を！

(やっぱりおかしくなっています)

。おお、衝撃砲が良い物持ってるなあ。って素晴らしい二段攻撃・・・

連結式の青龍刀か、おおブーメランみたいにして使えるのか。中国もすごいし鈴もすげえな。

一夏は衝撃砲を避け始めたな、頭使うようになったか。また避けた。ふむ、今週の特訓が役立つてるみたいだな。このまま行けば一夏は良い線行けるんじゃないか？

(一夏が良い動きをしているので元に戻りました)

「鈴、本気でいくからな」

「あ、当たり前よ！かかつてきなさい！！」

ん、あの目は……。瞬間加速！イグニッションブーストそうか短期決戦で行くか、流石一夏本番で力あるな。

零落白夜を発動した雪片式型が命中する、という瞬間。アリーナに轟音が鳴り響いた。

アリーナの中央にそれはいた。

通常をはるかに超えた巨体、脚部まで届きそうなほど長い腕、胴体と頭部は直接接続され首が見えない。

そして、一番特徴的なのは全身装甲フルスキンだった。

ここからでは良くわからないが赤いセンサーアイが一夏をとらえていた。

「織斑君、鈴音さん。早く戻ってください！」

山田先生がプライベートチャネルだというのに叫んでいた、義姉さんはつま先を床にコツコツとぶつけていた。

管制室のディスプレイに映し出されていたのは、防御シールドがレベル4（通常では破れない）に設定されていることが表されていた。

「織斑先生、出撃許可を！」

「無理だ、解除でき「俺がやる」西川……」

そのままコントロールパネルに手を近づける。そのままコンソールを見たまま、指示する。

「セシリアはAピットへ、山田先生は避難誘導を。「お前」黙ってください」

「わかりましたわ」

セシリアがピットへと駆けていく、箒も行ったか。

「さてと、深螺はセシリアとあそこにいる二人の援護を頼む。俺もすぐ行く」

「わかりました」

セシリアを追いかけていつのまにかいた深螺も走っていった。

なにか言いたげな義姉さんを尻目にコンソールに霊気を送る、よし。

「Aピット、観覧席出入り口の隔壁を開放。セシリア、深螺行け！」

小さな電子音が鳴り、モニターに隔壁開放の文字が浮かぶ。さて、これでよし。

「今は聞かん、あとは任せろ。流、頼んだぞ」

「ああ、わかつてるよ。姉さん」

そのままピットへと俺は走り出した。

15・幽霊に科学など効かんわ！（後書き）

機械が霊体の干渉で動かなくなったりなんてよくあることです、え、無いって？

16・ISSiNGHOSTあれ、やばくね？（前書き）

オリジナル展開？

16・ISingHostあれ、やばくね？

通常外部からのコントロールを受け付けられないはずのセキュリティを破った相手たれかから奪い返したのか、30秒と経たずに流さんから突撃の合図。ですが、今はそれを気にしている暇は無い。早くあれを倒さなければお二人が危ない。

通信が終わったと同時に私はピットから飛び出した。

流は自身がマテリアルゴーストであることを生かして靈気による操作をした。でなければあれほどの強固なものをあの速さで解除などできるはずがない。そして、プライベートチャネルで言ってきた「目標に靈気を感知、注意して」を私は聞き逃さなかった。つまり、私に靈的攻撃をしろという指示。おそらくすぐに来るでしょうが、それまで持ちこたえなくては。久しぶりの実戦に緊張しながら私は神無深螺として、靈能力者としてピットから飛び降りた。

「一夏、鈴。避ける!!!」

二人が射線上から退避したことを確認すると、ためらわずにラグナロクの引き金を押し込んだ。

紫色のエネルギーの奔流は致命傷にはならなかったものの、左腕部をまるごと削り取った。

ここからでもわかる、あれは無人機だ。生きた人間の靈気を感じな

い、霊体特有の冷たいものだ。

「全機に通達、目標は無人機。本気で叩け」

「わかった」

「ちよつと、そりゃあ機械的な動きだけど」

「了解しましたわ」

「援護をたのみます、結界を使いますので」

これで布陣は整った、あとは倒すだけ。奴に逃げ場は無い。

「セシリア、深螺。長距離からの射撃、牽制してくれ。当ててもいい！」

返事代わりに二機が後退していく、指示をした俺に標的が変わった。複雑な軌道で砲撃を避ける。

「鈴、衝撃砲で一夏を撃て！一夏、構えろ！」

「わかった、頼む！」

「どうなつても知らないわよ〜！！」

甲龍の非固定部位が上下に開き、光りを放つ。その先には白式。放たれたエネルギーを変換し、零落白夜が発動する。

それと同時に蒼月に映し出される唯一仕様能力。

『創造主使用可能』

すぐさま発動し、近接装備の日本刀に似た「月下」を抜き放つ。

イメージを浮かべた瞬間、刃が紫色のエネルギーに包まれる。

そう、創造主は任意の武装を作り変えたり、機能の追加。その名の通り、創造主なのだ。

そして今は「月下」にラグナロクの重力場を纏わせた、事実上の万物を切裂く剣の出来上がりだ。

一夏が瞬間加速で斬りかかる。

追いかけるように限界ギリギリの瞬間加速。

身体が前に引つ張られるような感覚とともに無人機が目の前に迫る。月下に霊気をも纏わせる。

ズガンツバシユツ！！

二連続の斬撃、瞬間。後方からの大爆発。

紫電を走らせ、無人機だったものは霊体特有の光りを放出しながら崩れ落ちた。

「ふう、終わったあ」

一夏の眩きが響いた瞬間、ありえないことが起こった。

無人機から黒い霧らしきものが溢れ、蠟人形を溶かした映像を巻き戻すかのように異形の怪物が現れたのだから。

「な、なんだよあれ・・・」

異形のそれは形を変え、人型になる。だが、右手は鎌に左手は錆びた鋸に。そして、その顔は火の中に突っ込んだ蠟人形のように歪んでいた。セシリアの悲鳴が聞こえる。

深螺がプライベートチャネルで話しかけてきた。

「負の感情でできたマテリアルゴーストです、厄介ですが私たちがやるしかありません」

そう、マテリアルゴーストは基本的に近代兵器が効かない怪物なのだから・・・。

16・iSinghostあれ、やばくね？（後書き）

現れた敵、それはこの世界に存在しないものだった。

17・機密をばら撒くな、え、いいのか製作者？（前書き）

深螺「われながら凄い機体に乗ってるものです」
流「重力衝撃砲とかやばいだろ」

17・機密をばら撒くな、え、いいのか製作者？

蒼月 そうげつ

近中距離特化型IS

戦乙女工業製第3・5世代型

機動力重視のために各部装甲は流線型であり、全身に小型レーザーブレードが内蔵されている。

機体名にもある通り、深い蒼色である。

専用装備である空間圧重力衝撃砲は出力調整で攻撃にも防御にも使用可能。

他にも特殊装備が多数搭載されている。唯一仕様能力は「ワンオフアヒリテイー創造主」

装備武装（16話時点）

- 1・空間圧重力衝撃砲・ラグナロク
- 2・攻防一体近接兵器・エネルギーアブゾーバー
- 3・近接専用実剣・月下
- 4・固定近接装備・小型レーザーブレード

その他多数の装備が搭載されている模様

残月 ざんげつ

近中距離特化型IS

戦乙女工業製2・5世代型

蒼月とは兄弟機にあたる。特徴的な女性的丸みを帯びた装甲が特徴的で、明るい灰色。

機動力重視で非固定部位にはフィン状のスラスターが搭載されている。腕部には近接用のレーザーランスが内蔵されている。

装備武装（上記に同じく）

- 1 ・固定近接用レーザーランス・風穴^{ふうけつ}
- 2 ・ホーミングレーザーライフル・ウインドスピア
- 3 ・攻防一体近接兵器・エネルギーアブゾーバー
- 4 ・防御装備・タクティカルウォール

その他特殊装備、連携専用装備多数搭載

17・機密をばら撒くな、え、いいのか製作者？（後書き）

ラグナロクは対象を強力な重力場で分子結合を崩壊させて破壊するというチート仕様……うわ。

修正しました

18・死人と悪と（前書き）

.....

18・死人と悪と

「セシリア連れて鈴は下がれ。一夏、油断するなよ？」

「わかってる、でもあれは何なんだ？」

ふう、バラすしかないか。仕方なくISを仕舞い、宙に浮かぶ、これくらいならできるんだよ。

ああ、一夏が固まってる。そりゃあ目の前の人間が生身で浮かんでたら驚くだろうけど。

「おお、すげえ。いつのまにできるようになったんだ？教えてくれよ」

あゝ、そうだよ。こいつは馬鹿だったよ、まったく。そんな素直に目をキラキラさせたら困るじゃねえかよ。

「ほんとお前は大物だよ、一夏。まあいい、エネルギーはどれくらい残ってる？」

「210、二回くらいはやれるぞ」

上等、それくらいなら大丈夫だ。右手を振り、手首から先を刀に変換する。

「なっ！？流、その腕は・・・仕様だ」ああ、そうなのか」

深螺が微妙な顔でため息ついていた。ある意味すごいわ一夏。

ほっとくなくて感じに怪物が襲ってきた。まあ、俺もある意味怪物だな！

正面から向かい、振られた鎌を蹴って上に跳ぶ。そのまま身体ごと回して頭部を一閃。

悲鳴のような叫びを発しながら鋸をぶつけてくる。そして、俺の身体を切裂く。

「流〜！！」

一夏が奴に斬りかかる、おお流石IS。ってことは、大丈夫だな。

「まったく、危ないよ」

奴の頭の上に見慣れない少女が立っていた。いつの間にか？

そしてこの感じ……仲間か。なら話は早い。

「まずはこいつを倒してからにしないか？」

「それもそうね、その君。頼むよ？」

「うえ？ああ、わかった」

さあ、戦いの時間だ。

「行くぞ一夏！」

「ああ！」

それに向けて俺は空間を蹴り、一夏は瞬間加速で肉薄する。イグニッションブースト

その手には月下と雪片が握られていた、少女もどこからかナイフを取り出していた。

深螺も後方でウィンドスピアがレーザーを放ち、正確に四肢を撃ち抜く。

動きが止まった瞬間、三つの影が奔った。

原因不明の無人ISを撃墜した俺たち、気がつけば少女は消えていた。

で、俺と深螺は説明中。俺が転生者（正確には違うが）とか、実は幽霊でしたとか、でも身体があつて自在に形や材質を変えられたり。ほら、指がドライバーになっちゃった！（ジト）悪かったな、つまらなくて。とか、こんな風に空も飛べるんです。

「……………（開いた口が塞がらない）」 千冬

「おお、すげえなあ。（馬鹿、楽しむなよ）」

そんなわけで結論、幽霊で人外です。以上説明終わり！

ああ、非科学的だから固まってるよ（義姉さんが）。

というかみんな固まってないか？（一夏以外）

「ちょっとみなさん？お〜い」

『はっ！』

思考停止していたんかい。さあて人外は去るしかないな。

「えっと、そんなわけで・・・俺は出て行くしかないの。さよ
うなら」

がしっ

「え？」

義姉さんが俺を後ろから抱きしめていた、へ？

「お前がたとえ異世界の人間だろうと、拒絶するわけないだろ。お
前は家族なんだから」

「あたしたちだって細かいことなんて気にしないわよ、だって」

『ここにいるからな（んだから）』

振り返るとみんなが笑顔でそこにいた。

「ここにもいいのか？こんな俺でも」

「流、みんなが望んでいるのです。避ける必要はないでしょう」

「そ、そうだな。じゃあ、その・・・改めましてよろしく。そして、
ただいま」

みんながそろって言った。

「ああ」

「それでいいのよ」

「流さんは流さんでいいのですわ」

「ふっ、手のかかる弟だ」

そんな今日はなぜか涙が止まらなかった。

こんな俺でも受け入れてくれたことが嬉しかったんだ。

マテリアルゴーストとの戦闘は無人機との戦闘が長引いただけ、と
いうことで片付けられた。

俺はこれからも普通の人間として生活を送っていける。

だからこそ、力を持つ者としての責任を果たそうと決意した。

18・死人と悪と（後書き）

果たして少女の正体は一体……

19・ファーストとパーフェクト(前書き)

ギター……!!!

19・ファーストとパーフェクト

あれから一週間、なにことも無く生活していたある日。

一人になった教室でなにかにたたかれ、気絶した……………
つて待てよ！

「んあ？ここは…………屋上か、つて暗っ！」

なんか気絶して結構経っていたのか……………ん？

見覚えのあるような人がフェンスによっかかっていた、あいつは……………

勢いをつけて立ち上がる。さて、何が目的だ？

「おい」

「ああ、起きたのか。ごめんね、手荒な真似しちゃって」

あの時のマテリアルゴーストの上に突然現れて消えた少女だった。

「後ろから叩かれるのは嫌いなんだがな、なにがしたい？」

霊体ナイフを展開準備をしながら近づく。やはり同類か。

「悪いけど敵対したくないんだ、^{パーフェクト}完成された^{マテリアルゴースト}実体化幽霊」

完成された？

「そう、あなたは私と違って物質化能力をコントロールできている。
干渉できない絶対な力なのに」

「そんなことを知ってるあんたは何者だ？同類みたいだが？」

本能が叫んでいた、危ないと。だが少女は近づいてきた、地面に縫い付けられたように身体が動かない。

「私もあなたと同じ世界にいたマテリアルゴースト、成仏したはずなのに気づいたらこの世界にいた」

「へえ、そうかい。それで？まさかそれだけなわけないよな？」

警戒しながらもどうにか悟られないように実体化を切る。

「はい、おそらくこの世界に467体存在しています。その内の私
たちは二体ですね、あの日までで10体消えましたが」

「それで？どうしろって言うんだ」

ナイフを分解してフェンスに腰掛ける。さてどうするか。

「全てがあのと看みたいなわけじゃないだろ、普通にしてる奴もいる」

「ええ、そうですが。あのようなタイプが出現したらISでも対応できません」

確かにそれは当たり前だ、一体くらいなら大丈夫だが数体で来られたらいくらISでも対抗できない。

マテリアルゴーストが強力すぎる存在なのだ、実際IS学園に入るまえにも深夜に群れと戦った。

その強さはわかる。

「対抗できる強さを持つあなたにも戦ってほしいの」
まっすぐと俺の瞳を見つめる信念を宿した瞳、それを断れる俺じゃなかった。

「もしやらなかったら、大切な奴らも失うんだろ？わかってるよ」
俺が家族にしてしまった悲しみを今の家族にも味あわせたくない。

「ありがとう、これで大丈夫ね」

「じゃあ、握手だ」

右手を差し出す、同類なかもに対する俺の誠意だ。

「ええ、これで明日から普通にできるわ。あなたと同じクラスなのよ」

「名前は？すまんがまだ全員覚えてないんだ」

特徴的な長い髪を振りながらまっすぐ見つめてきた。

「私は、水月鏡花」

19・ファーストとパーフェクト(後書き)

ついにきた、われらの………フラグは立てませんよ!?

20・気になる視線・・・睨むなよ(前書き)

見やすすくしてみました・・・どげどげごめっ?

20・気になる視線・・・睨むなよ

なんとか鈴と一夏は仲直りした、鈴は恥ずかしがって正直にいえなかつたみたいだが。

そんなこんなで今日は二クラス合同の実習だ。

「さて、授業を始める。今日は装着と起動までだ、専用機持ちがリーダーになってグループでやれ」

わくって歓声とともに女子大勢が俺と一夏に集まる、専用機持ちはあと三人いるぞおい。

姉さんも額に四つ角浮いてるし・・・みんな早く別れないとだめだぞ。

「名簿順に六人ずつ分かれろ、もたもたするな！」

一瞬でみんなが直立して綺麗に移動していく、その間6秒・・・お前からこそ人外じゃね？

いや、ギャグ補正か・・・なんか受信したっぽい。

「じゃあ、装着からだね。夏木さん、腰掛けるようにやってみて。そう、そんな感じ」

おお、流石女子。飲み込みが早い！このくらい一夏も早かったらいいのに。

「よし、良い感じだね。じゃあ降りて変わるうか」

げ、専用機持ちだからしゃがませるの忘れてた・・・。

「ええと・・・・・・・・・・」

そんな期待した目で見つめられても困るんだがなあ、深螺も羨ましそうに見てるし。

「西川、乗せてやれ。・・・・・・・・私も・・・」

仕方ないか、次誰よ。

「ええと、私ですね。お願いします流さん」

え、水月さんですか。なぐんだ、問題ないわ。なぜ深螺は羨ましそうに見る？

ああもう、蒼月来い。光りに一瞬包まれ、視線が上昇する。さてと。

「きゃあー！」

「どうした？しっかり掴まってるよ」

他の女子五月蠅いぞ、どうしてキヤーキヤー言うかな。水月さんもなんでそんな声を出すんだよ。

深螺は睨んでるし、俺がなにしたんだよ・・・・。つてセシリアもこっち見てるし、そんなにして欲しいのか？女子の感性はよく分かん。

「おゝい、いつまで掴まってる？早く移らないと居残り補習だぞ」

「ふへ？ああ、ごめんね」

器用に打鉄のコックピットに入り込む、動きに無駄が無いとはこれか。

さあて、ってしゃがめよ！またやらなきゃいけないだろうが……まったく。

その後は全員がしゃがまずに降りるために一人ずつ乗せてあげることに……疲れた。

「orz……疲れたあ」

「おつかれさまです、流さん。あ、深螺。奇遇だね」

現在、ベンチで休憩中。水月さんがくれたスポドリが美味しい……ふひひ。

「!？」

なんか深螺が固まってる、どうしたんだ？それより知ってるのか。

「なぜ鏡花がここに？成仏したはずじゃ」

「いや、気づいたらこの世界にいたんだよ。身体はそのままだし、でも100%女子になっちゃった」

「そうですか、流はいつ？」

「ん、ああクラス対抗戦のときに突然出てきてな。昨日呼び出しされてから」

「そうですか、ではまたよろしく願いしますね鏡花」

「ええ、こちらこそ。そうだ、もしかしたら三学年の鈴音先生すずねって鈴音りんねかもしれないよ」

まじか、なんか複雑な気分……（幼いころからの鈴音を知っている）

歳を逆転されてるって……。

つうか同じ世界出身があちこちって、鈴音は転生か？

俺 転送（容姿が学生時代にもどった）

深螺（この世界の神無家に転生）

水月さん（気づいたら、おそらく転生）

鈴音りんねかもしれない？（転生）

なんて状況だよまったく。

20・気になる視線・・・睨むなよ（後書き）

鏡花もとい螢は転生で女子として産まれてます・・・式見螢ではなく水月鏡花としてのキャラでいきますのでご了承ください。

21・ドイツからの贈り物(前書き)

流の馬鹿野郎!!!

21・ドイツからの贈り物

「さて、今日は転校生を紹介する。入ってこい」

この時期にか……。男!?まじかよ。一夏は安心したような顔してるし。

金髪の貴公子をイメージされる少年(なんか女子っぽい見た目)と銀髪の見覚えがある少女がならんでいる。

「フランスから来ました、シャルル」デュノアです。同じ境遇の方がいると聞いて本国から転入してきました」

あゝ、男子三人か。まあ女子ばかりだから気が楽になるなあ、つうかも男の娘じゃね?

ああ、チガイマスヨね。ええ。

「き」

「き?」

デュノアとかぶった、き?

「きゃあああああああ!」

「三人目の男子!」

「守ってあげたくなる系の!」

「地球に生まれてよかった!」

「あはは」

「たはは」

微妙な顔でお互いみつめた、まあがんばる……。

「まだ紹介が終わってませんよ！」

ああ、そついやそつだ。まさかここに来るとはなあ。

「ラウラッボーデウィツヒだ……」

先生、ここにも一夏がいます！もう少しなにか言おうよ。
ひよえっ！睨んできた……。

「貴様が！」

ふえ？なんだあ？

バシン！

「ふみや！……」

「貴様があの人の弟なんて認めん！」

「俺、一夏じゃないぞ」

「!？」

間違ったらしい。あ、顔がめっちゃ赤い……ご愁傷様です。

「まぎらわしい顔をしているからだ！」

え、そんなこと言われても……外国から来た人がみんなして
頷いてるよ。

そりゃあ、黒人の人の見分けつくかっていわれたらどうしようもな
いけどさ。

やり直しするらしい、見ててすげえいたたまれないが。
歩いていったので腕を掴む。

「はいストップ」

「な、離せ。わたしはこいつを」

どうしようもなく俺をぼかぼか叩いてくる、痛くねえ。

みんながラウラを見る目はやんちゃな子どもを見つめる親のよう。

「ボーデウィツヒ、話はあとにする」

「ッ！わかりました」

「ふい〜」

「ありがとうな、流」

「ああ、いやいいよ」

まだ、ばれてないか。まあ、ドイツにいたころは女装（特殊なIS
スーツを着ていた）してたしなあ。

「西川、どうするんだ？」

「姉さ、織斑先生。まあ、そのうちに」

「ふふっ、そうか」

なんだ？まあいいや。

21・ドイツからの贈り物（後書き）

流のドイツ滞在時の話もやろうと思ってます

22・幸せな時間……なわけねえだろ!! (閑話) (前書き)

深螺さんが素晴らしいほどにキャラ崩壊します

22・幸せな時間・・・・・・・・・・なわけねえだろ！！（閑話）

みなさん、もしこんな状況になったらどうしますか？
本当に嬉しいですか？

なぜに俺のベッドに深螺が入って来てるんだよ、ちやっかり抱きついてきてるし・・・・・・・・。

困った、めっちゃ困った。両腕回されてるから動けないし。（押し倒されている感じですね）

コンコン

「西川君いますか？三年の鈴音です」

よりによって一番やばい奴が来た、もし鏡花の推測が本当でも嘘でもどっちにせよやばい（汗）
だって、抱きついてるだけならまだしも下着だけですよ？ね、やばいでしょ？

「西川k・・・・・・・・・・」

「お、おはようございます・・・・・・・・・・」

次の式を解きなさい

（深螺 \parallel 寝てる）+（俺 \parallel 抱き付かれている）+（鈴音^{しづね}の可能性がある教師） \parallel ？

「さて、流さん。姉さんになにしてるんですか？」

怖いって！目が笑ってないよ、つつかまじで鈴音しんねかよ。一目でわかったよもう。

つつか早く起きろ深螺！

「んみゆう、ふにゆ。にゃがれ〜ふにゆう」

今誰言った？いや、違ってる・・・深螺なのか！？だから抱きつくな！当たってるから、やばいから。

「流さん？ナニヲシテイルノカシラ？」

「いや、俺は被害者だ！そうだ、鏡花がいるぞ。うん」

「え？うそ、マジ？」

「本当だ、確か1030号室だ」

シュン！

一瞬で目の前から消えた、助かったあ・・・今何時だ？
・・・七時・・・そうか、七時か・・・遅刻だあああ
あああ！！

「深螺起きろ、遅刻するぞ！つてむぐ！？」

「えへへ〜、きょうは日曜日だもんね〜」

いくら高校時代の身体とはいえ、深螺はそれなりに・・・うん。
つまりは、その・・・男に無い双丘に顔を沈められているんだ。
く、苦しい！

し、死ぬ、死ねないけど！

「しゅきでしゅ・・・ハッ！」

「むぐぐ、むぐぐむぐ（はやく、苦しい）！」

いきなり視界が開けた、最初に入ってきたのは真っ赤になった深螺の顔。

俺は酸素補給のために深呼吸・・・あと五秒遅かったらやばかった。
（アレ的な意味で）

「まだ直ってなかったんだな、まあ気にしてない」

「うう、すみません（あれとかそれとかしゃべってしまいました）
／／」

そっぴやしゆき、手記？酒気？スキーか？まあいいや。

ボタン！

「姉さん、大丈夫ですか！？」

「・・・鈴音りんねですか？私は大丈夫ですよ」

「だから俺は何もしてねえっての、それより職員会議大丈夫か？」

「げ、また後でね！姉さん、あと流さんも」

「俺はついでだよ」

ダッシュで鈴音りんねもとい鈴音すずね先生が走っていく。元気だなあ。

ちなみにシャルルは一夏と同室に、箒が悔しそうにしていた。まあ、仕方ないよ。

俺と深螺が同室ってのは事情を知っている姉さんの計らいだ。

「深螺、買い物いこうぜ」

「ふへ！？ああ、そうですね（これはデートでしょうか？）」

その後、俺と深螺は出かけた。

22・幸せな時間・・・・・・・・・・なわけねえだろ！！（閑話）（後書き）

そのうちに買い物編もやります

23・実習は突然に（前書き）

長くなりそうですので切りました

23・実習は突然に

さて、今日はまたニクラス合同でIS実習。

「さて、オルコット、織斑、西川。飛んでみる」

「わかりましたわ」

「はい」

「え、俺も？」

ズガン！

はい、出席簿炸裂。一夏は乙でした、返事くらいしっかりしろよま
つたく。

頭を押さえて涙目の一夏をスルーしつつ蒼月を展開、その間0・1
秒。

一夏はなんとか展開、正直遅い。姉さんにも注意されてるし……
・まあ、がんばれ。

「よし、離陸！」

少しジャンプして、そのまま空気を蹴って急上昇。一瞬だが景色が
流れる。

少し遅れてセシリアが、その後ろをふらふら揺れながら一夏が追
かけてくる。

見てるこつちが危ないよ……。

「スペック上は白式がブルー・ティアーズより上だぞ」

「そんなこと言われても、角錐をイメージたって分からないぞ」

「所詮イメージはイメージですわ、ご自分のやりやすいようにするのがベストですわよ」

ふむ、やはり代表候補生か。いや、なんで飛んでるかなんて聞かなくても。反重力制御とP.I.Cの説明になるが。

いや、露骨に嫌そうな顔されても。そうなってるものは仕方ないだろ。

「別に無理に理解しようとしなくてもいいだろ、まずは飛べなきゃいけないんだから」

「そ、そうだよな」

「でしたら一夏さん、放課後にも特訓を……二人きりで」

お〜お〜、お熱いことで。つうか一夏、フラグ立てすぎだぞ。『あなたも人のこと言えません』

なぜに靈気使つて話しかけるんだよ深螺、無駄なことに体力使うな。

「一夏、いつまでいるんだ！」

箒、山田先生のヘッドギアとって叫ぶのやめようね。いくら見た目が子どもっぽくても先生だし、先生も涙目でうるうるした状態ではないでくださいよ……。

「西川、オルコット、織斑。急降下と完全停止をやってみる。目標は10センチだ」

「わかりました」

「了解」

「ええっ!?!」

「それではお先に」

スカート状のフィンアーマーを翻しセシリアが降下していく、すぐさま停止。

ふむ、見事だな。じゃあ俺も行くか。

「じゃあ一夏、頑張れよ。せい！」

腰部付近の非固定部位アンロックユニットのブースターを噴かして加速、一気に地上へと近づく。

この速さは素晴らしいな、製作者に礼が言いたい！いやっふう！！
高速で地上に近づき、ギリギリの高度で逆噴射とAMBACで停止。
フルマニュアルで動かしてるからタイミングがずれると大惨事・・・
・SEがあるから大丈夫だけど。
さて、一夏はどうだろうk

ズドン！！

クレーターのできあがりつてか、おいおい。

「一夏さん！」

「一夏、大丈夫か？」

セシリアと俺が駆け寄る・・・無事でした、まあ当たり前か。

「ISを装着しているのだ、無事に決まっているだろう」

そうだけでも心配してるんだろ？鼻がびくびくしてますよ、って二人して睨みあうな。

仕方ないので一夏を助け起こす。

「大丈夫か？」

「な、なんとか・・・。火花が見えるのは俺だけか？」
「いや、俺もだ」

まじで火花が散ってるよ、疲れてるのかなあ。

23 ・ 実習は突然に（後書き）

マテゴ要素が生かしきれてないな・・・

24・周りのことも考えまじょう(前書き)

長い・・・

24・周りのことも考えましょう

さて、一夏が開けたクレーターを休み時間に急いで埋め立てて二時間目。

デュノアも手伝ってくれたおかげで早く終わった・・・

「すまん流、助かった」

「謝らなくていいから二度目をなくせよ」

「特訓しなきゃねえ」

さて、さっきからこちらを見つめてくる某ビット使いと某酢豚と某霊能者さんはなんでしょうか。

いくら女子に見えても男だぞ？あっち側には走らないから安心してくれ。うわ、引くぐらい安心してよ。

なぜそんな風にされてたかというのと、それはSHRが終わったころに時間が戻る。

～SHR終了後～

「さて、次は実習だ。織斑と西川はデュノアの手助けしてやれ、同じ男だろう」

「わかりました、さて一夏。行くぞ」

「ああ」

「えっと、君が「自己紹介は後だ」えっ？」

なぜなら噂を聞きつけた他のクラスの女子が早くも集まり始めていたからだ！

捕まれば質問攻めで授業に遅れ、出席簿が振り下ろされる。それだ

まさかの一夏が生身で並走しやがった、こいつも十分人外じゃね？
でもあと少し、5、4、3、2、1、0！

「着いたああああ！！」

「ふわあ！？」

「負けた・・・」

一步の差で俺の勝ち・・・何の勝負だよ。まあ着替えないとな。

「えっと、改めてシャルルIIデユノアです。シャルルって呼んでね」

「西川流だ、流って呼んでくれ」

「織斑一夏だ、一夏って呼んでくれ。よろしくな」

で、今に戻る。うん、人外すぎるよね・・・。

「やっぱり男同士が一番だよな」とかって言うもんだからさっきの
みなさんが心配するんですよ。

「え、模擬線をしてもらう。鈴音、オルコット、神無」

「わたくしですか？」

「なんであたしが・・・」

「このタイミングですか」

「あいつらにいいとこ見せられるぞ？（ボソッ）」

なに言ったんだ？一夏もわからないみたいだ。

「ここはわたくしの出番ですわね！」

「実力を見せてやるわ！」

「ふふふ、いいでしょう」

なんかいきなりやる気になった、深螺は怪しい目をしてるし……。

「お相手は誰ですか？」

「まあ待て……来たぞ」

キイイイイン

ん？上からか、ふむ。って危ない！って一夏、俺を盾にするなぎやあああああ！！

「gghsdckchjckj……ガクリ」

「わああああ、流れええ！！」

「織斑君、手をどけてくださ、ひゃん！」

状況

1・流がラファールの下敷き

2・一夏の右手が山田先生の（視聴できません）に

3・山田先生を一夏が押し倒してるような……

「あ、すみません」

ヴン

目の前をレーザーが通り抜ける、その先にはセシリアが。後ろには双天牙月を構えた鈴がいる。

って投げてきたああああ！？いつのまにか復活した流が足を押さえつけてて動けないし……わああ！

深螺さんも笑顔でライフル構えてるし……し、死ぬ！

復讐だ、やれ鈴。ナイスだ！って一夏がイナ　ウアーで避けやがった。千ツ。

でも双天牙月はブーメランみたいに返ってきます、ざまあ。

「はっ」

ドンドン

規則正しいライフルの音、上半身を起こした山田先生が双天牙月を撃ち落した。すごい。

「……相手は山田先生だ、では始め！」

どうしようも無いので結果だけ……。

深螺の指示を聞かず、鈴とセシリアが攻撃開始。

深螺が牽制して動きを止めるも、鈴とセシリア同時にしかけて激突。

グレネードを食らって撃墜

残った深螺と山田先生、相打ち。

うん、なんつうか。ひでえ、深螺は的確な指示をしているんだが二人が我流でやるものだから意味が無い。
しかも連携もあつたものじゃないからビットにぶつかるわ、衝突するわで大惨事。

あちゃ〜……………。一夏も微妙な目で見てる。

その後は手早く終わらせた俺のチームが解散したあとにラウラのチームに補佐しに行ったりして終わった。

訓練機を運んでいたのが男は俺と一夏だけという差別を受けたが……。

24・周りのことも考えましょう(後書き)

次回は・・・？

25・久しぶりですね、バカも相変わらずです(前書き)

流しゅうへいはフラグメーカーVer2.0を実装しています。

一夏は3.0.....

25 久しぶりですね、バカも相変わらずです

「だああ！？そこでラッシュとか反則だろ！」

「油断するお前が悪い、もらったあ！」

現在、五反田の家に遊びに来てる。久しぶりなので家に帰るついでに寄ったのだ。

いやあ、弾をゲームで弄るのは楽しいわ。

「そつえばお前らいい思いしてるんじゃないか？」

羨むような顔で聞いてくる弾。現実はきついぞ……うん。

「別にそつでもないぞ、なあ？」

「そつだな、いつも珍獣扱いだよ。思ってるよりきついぞ？」

「そつかねえ？」

そんな怪しむような顔しなくても……ねえ？

「そついや鈴に会ったぞ、流石に二人だけじゃ気まずくて助かったよ」

「まあ、そつだな。俺は知り合いに会えたからそつでもなかったが」

「知り合い？つて女かあああ！？」

「当たり前だろ、IS学園で男は俺らだけなんだから、なあ？」

弾が飛び掛ってくる、どれだけ飢えてるんだよ。

「女の知り合いだとう？一夏、美人か？」

「そつだな、羨ましいぜ」

「お前が言うか……裏切り者おおお！」別に友達ってだけだつての！」

裏切り者って……ひでえなあ、おい。

ガチャ

ふむ、誰か来たようだ。

「弾兄……一夏さん！？流さんも！」

おお、蘭だ。

「久しぶり、元気してたかい？」

「ええ、なんとか。お久しぶりです、兄さんなんて言わなかったのかなあ？」

「え？いやあ、言ってなかったかなあ。あはははは」

なぜだ、弾が某マ オみたいに小さくなってる。もしかして蘭に頭が上がらないのか？

「そうだ、蘭ちゃん。久しぶりに会ったし、ちょっと後ろ向いててな」

「へ？わかりました／＼」

ちよちよいと、よし！

「どづかな？似合ってると思うけど」

蘭のポニーテールに蝶の飾りがついたりボンを結ぶ、おいしいじゃ

ん。

「わあ ありがとうございます！」

「く、まあ一夏よりかはいいか」

「どどういう意味だよ」

なんか言ってるが無視、やっぱり似合ってるねえ。うんうん。

「やっぱり、蘭ちゃんは可愛いんだからもっとおしゃれしてほうが良いよ。俺が保障しよう」

「そうですか？やったあ！そうだ、私来年IS学園受験するんです」「マジ？適正はどうなんだ」「Aです！」「おお、安心だなあ。がんばれよ！」

「はい！入学したら教えてくださいね！」

「了解！待ってるよ」

「やはり流なら任せられる」

「だからなにがだよ」「鈍感な黙ってる」？

「流さん、お昼食べていきませんか？」

「ああ、久しぶりに敵さんの食べたかったしなあ。じゃあお言葉に甘えて」

さあて、久しぶりの敵さんの飯だ〜いやっふう！一夏も弾も行くぞ。

「流はいいなあ、蘭に仲良くしてもらって・・・」

『おいおい』

ため息をつきながら一階へ、おばさんも蔵さんもお元気そうで。

「お久しぶりです、お元気そうだなによりです」

「おお、お前も元気そうじゃねえか」

「うふふ、元気そうで嬉しいよ」

恰幅の良い親父！な蔵さんとおばさん。やっぱり格好いいよ！俺も深螺と……ってなぜに深螺が浮かぶ？

危ない危ない、どうかしてるよ俺。おお、甘すぎることで定評のあるかぼちゃ定食。やった！

「　　美味い」

「これが噂のキラキラ流か……」

「ああ……」

「流さん……ハアハア」

「蘭がやばくないか？」

「これくらいはまだいい方だ、学園ならもっとやばい」

その後、結構話し込み蘭と弾、蔵さんとおばさんに別れを告げて帰宅した。

深螺に話したら不機嫌になった……なぜ？

25・久しぶりですね、バカも相変わらずです(後書き)

ー夏ではなく流にフラグを立てられている蘭……

26・俺って一応幽霊なんですけど・・・(前書き)

ちょっと過去が入ってきます

26・俺って一応幽霊なんですけど・・・

「一夏がみんなに勝てないのは射撃武装の特徴をわかってないからだよ」

「そうなのか？わかってるつもりなんだけどー」

いつのまにか寝ていた、あれなんか後頭部がやわらかい。zzzz

ガキン！

それが聞こえた途端、俺は飛び起きた。瞬間、なにかに顔が激突。

「ふにゆ！？」

「ふわっ！？」

『・・・・・・・・』

なんとということでしょう、目の前に深螺がいた。あ、膝枕ってことね・・・・・・・・／＼

「す、すみません。そのままだと痛いでしょうからと・・・」

「いや、助かった。ありがとうって今のはなんだ？」

音がした方向を向く、すると硝煙が上がったりニアカノンを一夏に向けたラウラとそれを防いだシャルルがいた。

やばい、今のあいっすらじゃAICに対抗できない。いくら代表候補生でもラファールじゃ無理がある。

「深螺、今からの秘密な」

「はい？」

自らある時の身体をイメージして定着させる。深螺が驚きの表情を浮かべていたが気にしている暇はない。

すぐさま観客席から緊急通路を通り、アリーナへ出る。

俺を視認したのかラウラが驚愕の表情を浮かべる、なぜなら俺は茶髪の女性になっていたのだから。

「誰だろうあの人」

「綺麗・・・」

「ちよ、危ないですよ！」

「下がってください！」

一夏とシャルルが声をかけてくるが無視、ラウラの元へ走る。

「ラウラ!! ボーデウィツヒ、久しぶりだな」

ラウラにいきなり撃たれて驚いたのも束の間、見知らぬ長い茶髪（スタイル抜群）の女性がアリーナに入ってきた。

どこか見覚えのある人物に似ている・・・？先ほどまでこちらを睨んでいたラウラもその女性に釘付けになっている。

「ラウラ!! ボーデウィツヒ、久しぶりだな」

「西川技師!？」

どうやら知り合いのようだ、威圧感が半端ないが……西川？

「戦う意思の無い人間を攻撃するとはどういうことだ？」

「ツ！すみません、頭に血が登っていました」

あの、転校以来誰とも口を聞かないラウラが女性に向かって話している。リボンは……青、一年か。

でも、あれほどまでになるなんて何者だ？すると、女性がこちらを向いてきた。

「すまない、一夏。大丈夫だったか？」

「ふえ？まあ、なんとか。助かりました……どこかで会ったことありましたっけ？」

「あ、そうか。まあいい、あとで話がある。ではな、行くぞラウラ」
「は、はい！」

女性がいつのまにかISを収納していたラウラを連れてアリーナからいなくなった。

なぜかその後には第・セシリア・鈴に言い寄られた。

「織斑一夏、いるか？」

「はい、ああさっきの」

同室になったシャルルは今はいない、書類を書かなければいけないらしい。

はて、この人は誰だろうか？見知った誰かに似ているのは確かなのだが……。

26・俺って一応幽霊なんですけど・・・(後書き)

まさかの流(女性バージョン)登場

27・我輩は女性である(前書き)

超がつくほど短いです、さらに会話ばかりです。

27・我輩は女性である

く流が一夏sルームへ行く前く

「西川技師、あなたもここで生徒を？」

「ああ、それと今は同じ生徒だ。名前で呼んでくれ」

やはり西川技師はすごい、織斑教官と同等の気迫がある。これでも技術士官なのだから実戦ではすばらしいはず。残念ながら見たことがない。

「ところで一夏を叩こうとしたって噂だけど、もしかして誘拐事件が絡んでる？」

「・・・はい、教官の経歴に泥を塗った本人ですし」

「そう、そういうえば間違っただう人を最初叩いちゃったとかって聞いたけど。本当？」

「ノノ事実ではありません、しまった謝罪していない！」

「あはは、気にしてないって」

「？」

「あ、いやなんでもない」

「食事にも行きましょう、久しぶりに話もしたいですし」

く食堂く

「ほう、お前らはやはり仲がいいな（ニヤニヤ）」

「織斑先生も仕事上がりですか？」

「ああ、面白いことをしていると聞いてな」

「（ギクー）」

「？」

「まあいい、ボーデウィツピ。あまり暴走するなよ？まあ西川が止めるだろうが」

「は、はい」

「そうだ、西川。お前の蒼月の定期整備だが、開発者がおまけをつけたと言っていてな」

「おまけ？それを取りつけるために渡せばいいんですか？」

「ああ……三日後には返せるそうだ」

「わかりました」

「技師は専用機持ちなのですか？」

「ん、ああ。まあね」

↳数分後、屋上にて

「どうしても一夏を倒したいの？」

「はい、教官の汚点を潰すために」

「本当にそれだけ？」

「それだけです！理由はそれで十分です」

「そう、わかった。無茶はしないでね？」

「はい」

「じゃあ私は行くよ、偽りの気持ちじゃなくて本当の気持ちに気づいたほうがいいんだけどね。まあ、私も人のこと言えないか」

27・我輩は女性である（後書き）

女体化流君、もちろん身体に精神が引っ張られて心も女性です

28・男女で靈気はちょっと違う(前書き)

今日も人外流君!

28・男女で霊気はちょっと違う

「お姉さま〜！」

「西川姉さまこっち向いて〜！」

仕方なく昨日に続き今日もラウラと食事（女体で）

そんな歓声を尻目に疾走する俺、いや今は私。なんにせよ派手に動きすぎたわ、部屋に戻らないと。

でも後ろから大勢の女子が追っかけてくるのよね・・・面倒なことしなければよかったわ。久しぶりに話せてよかったけど、周りに注意しておけばよかった。

『お姉さま〜！』

「いや〜、来ないで〜！」

仕方なく、曲がり角で実体化を切る。服は身体の一部だし問題ない、いざ自室へ！

丁度柱や壁になっている場所を突っ切る。もしかしたら壁から生える腕とかって騒がれるかも・・・。

「とうちや〜く！・・・あれ？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

目の前には驚いた顔の一夏とシャルル？みたいな女の子・・・出るところ間違えた〜！

しかもなんか空気がやばい、めっちゃまずったなわね。

「あ、西川さん？」

「ええ、そうよ・・・間違っではないわ(汗)」

「な、流。どうする？いや、こうなったら仕方ないか」

「あはははは、複雑な状況ね。シャルル、怒らないでね？」

「え？どういこと」

まあ、立ったままじゃどうしようも無いのでベッドに腰掛ける。

「じゃあ、とんでもない私から。いいよね？」

「実技を交えながら説明中」

「というわけでして・・・大丈夫？」

「う、うん。なんとか」

まあ、いきなり幽霊で身体持ってて形変えられてe t c・・・を説明されてもなあ。

「ふむ、まあしゃべるのも酷か。よし、二人とも目をつぶれ」

「なぜに？」

「どうして？」

二人の頭に手を載せる、そしてシャルルが言おうとしていたことを霊気を使って伝達。

「そんなことが・・・」

「うん、ばれっちゃったk」いればいい、少なくとも三年間は安心だ「え？」

両手を離して壁によりかかる、流石に霊気を使いすぎた。

「一夏、特記事項22」

「そうか、在学中の生徒はいかなる外部からの干渉を受けない！」

「よく覚えてるね、二人とも」

「勤勉だな」

「必要な知識だよ、まあそんなわけで俺らが黙っていれば良い問題だ。お前は どうする？」

「……ここに、居たい。みんなと暮らしたい！」

「よし、オッケーだな。よし、そんなシャルルにプレゼントだ」

霊気化しておいたUSBメモリ（超大容量版）を投げ渡す。

「これは？」

「自分の人生歩き始めたシャルルへのプレゼントだ、まあ初日にもう気づいてたけどね」

「ええっ！まじかよ……」

「じゃあなんで……」

向き直り最高の笑顔で答える。

「悪い人じゃないって思ったから自分からやるまで黙ってようと思つてね。一応幽霊ですから」

「これで一件落着か？」

「二人とも、ありがとう！僕、頑張るよ」

「上等、なにかあったら頼れよ？じゃあこのへんで、そろそろセシ

リア来るぞ」

「俺たちがシャルルを助けるさ、ってセシリアが！？よし、隠れるんだ！」

「ええっ！？わ、わかった」

28・男女で靈気はちょっと違う(後書き)

IS技師としても優秀です

29.これがマテゴの能力・・・今更かよ(前書き)

やっとマテゴである意味が・・・あるかな？

29・これがマテゴの能力・・・今更かよ

「嫌な予感がする」

自身が幽霊だからだろうか、女体化してから一週間。突然、不吉な予感がした。

今日の授業は終わった、もしかして……。不安になったままアリーナに向かった。

『あ』

学年別トーナメントの特訓のために二人の少女が来ていた。

「偶然ですわね」

「そうね、丁度いいわ。決着つけない？」

「ええ」

ズガン

二人の視線の先にはISを纏ったラウラがいた。リニアカノンからは煙が上がっている。

二人に向けて撃ってきたのは確実だった。

「データで見たほうがまだ強そうだったな」

「だったら、試してみたら？」

「鈴さん、ここは私にやらせてくださいな」

「フン、くだらん。種馬を取り合うようなメスに負けるわけがなからう、二人がかりで来い」

アリーナに向かうほど、鈴とセシリアの靈気が不安定になっていた。嫌な予感しかしなかった。

「間に合えよ！」

全速力でアリーナへと走る、一方は弱り一方は黒く感じる。靈気が弱るといふのは生命に危険が生じていることの証だった。アリーナで二人が危ない！

反対側からは一夏とシャルル、箒が走っていた。どこかで聞いたのか焦りが見えた。

なにせよ急がなければ危ない。黒い感じは・・・ラウラ？なぜ・・・。

今自分にはISが無い、生身で行くしかないか。誰もいない観客席のバリアから中に入る、向こうには倒れたセシリアと鈴がいた。生命活動イタルサインが弱い、反対にはラウラがいる。ッ！？まだやる気かよ。

物質化を切り、一瞬で一夏とラウラの間に入り込む。

「そこまでだ、下がれ」

プラズマブレードと雪片を腕だけ変化させたG4で押さえる。

「西川技師、邪魔をしないだ」

聞き終わる前にレーゲンごとラウラを転ばせる。

「無関係な人間を攻撃するな、こいつらは民間人だ。わかるだろう？」

「く、すみません・・・」

「む、どうやら西川が止めたようだな。まあいい、トーナメントまでの私闘を禁止する。解散！」

翌日、神出鬼没の西川お姉さまは強い！という新聞が張り出されたとか・・・おい。

29・これがマテゴの能力・・・今更かよ（後書き）

まだ女体です、そろそろ軌道修正しなければ・・・（汗）

30・人も集まりや地揺れを起こす(前書き)

どんどん便利ツール化していく流・・・

30・人も集まりや地揺れを起こす

「なにも無くてよかったわよ、本当に」

現在、怪我をしたセシリアと鈴のいる保健室。一応怪我はたいしたほどじゃなかったけど・・・当分は動けないな。

「あのままでしたら勝っていましたわ」

「あそこからがいいとこだったのに」

いや、あのままだと瀕死の重傷だぞ。と思ったがしゃべると面倒なことになりそうだったので心の中にしまっておいた。

「まあ、大事にならなくてよかったよ」

本当に、こいつらもあいつも。

「ところで、いつまで女なのよ」

「しかも美人ですし」

「え？ああ、いや。ドイツに行つてたときに女装しててね、その時の姿よ」

「なぜに女言葉・・・」

あゝ、まだ言っていなかったな。面倒だしこの際だ、言っちゃおう。うん。

「あゝ、俺がマテリアルゴーストってのは話したよね？」

「まあね、それがどう関係するのよ」

「簡単に言えば、身体に魂が引つ張られるの。つまり身体が女なら心も女、おk？」

鏡花も同じような感じらしい、前世は男ってのは驚いたが。まあ自身で経験すると良く分かる。

実際のところ長くそんな姿でいたおかげで女子の裸なぞで興奮しなくなった。

「……………別にいいけど、なんか悲しいなあ。」

「ある意味すごいことですわね、でもなんでそんな体つきなのですか？」

「ぐ、痛いところを突くな……………話さなきゃ駄目か。」

「いやあ、高校時代に女装させられてな……………そのときのさ」

「いやあ、あれはショックだったなあ。つつか辱めだったよ、その経験が役に立つのも複雑な気分だなあ。」

（遠い目……………）

「なにか遠い目をしていらっしやる……………」

「流って結構不幸よね、前の世界といいこといい……………」

「別に役に立たないよりかはいいけどさ、あれはマジできつかったよ。つつか提案したエリーはマジで許さん」

「あいつもここに来てないかなあ、来てたら半殺しだ。まあいないか。」

つか女体疲れた。戻ろう、うん。

トトトトトトトトトトトトトトトトトトトトト

「あ？」

「なに？」

「なんででしょうか？」

地震？いや違うな、揺れてはいるが・・・近づいてくる！？一体なにが・・・。

複数の人間か、いやなにこの速度。やばいだら、ってうわあ！

ドカン！ズドン！ガン！メキヤ！

目の前で保健室の扉が、

- 1．外れる
 - 2．窓側まで吹き飛ば
 - 3．反対側の壁にぶつかる
 - 4．衝撃でぐにやりと曲がる
- なんと恐ろしい・・・。二人も軽く青ざめてるし。

『西川君、私と組んで！』

なになに、学年別トーナメント・・・ふむ。ペアで出場か、でもそのまえに。

「君たち、ここは保健室だよ。わかるね？俺は場をわきまえない人とは組めないなあ、ごめんね」

正論を笑顔で言う、別にこちらは間違っていない。これで印象が悪

くなくても知らん、その程度の人達ってことだ。

『じ、ごめんなさーい!』

また豪快な足音をさせながら去っていった。うん、問題は無かったみたいだね。

さてと今度はこっちの相手か・・・元気だねえまったく。

「ダメージレベルがD超えてるんだから無理だよ、影響あるんだから。次をお楽しみにね?」

そう言つて二人の頭に触れる、流石に動けないのは悲しいから治療でもしておくか。

「な、なにをノノ」

「流さん!?!」

「動くな」

怪我を回復させる効果を付加した靈気を送る、ヒーリングビームみたいなものだね。

にしても便利だなこの身体・・・不便なこともあるけど。効果が高度な分消費する靈気が半端無いんだよな。食事すればすぐに回復するけど・・・。

「よし、オツケー。少し休めば大丈夫」

「すごい、痛みが消えた。なんか身体が軽いし」

「これが流さんのお力なのですね」

さて、ペアはどうしようかなあ。シャルルは一夏と組むだろうし・・・

・深螺に頼もうかなあ。
ISのプライベートチャンネルを開く。

「もしもし、深螺？」

『どうしました？』

「トーナメントで俺と組んでくれないか？」

『！？・・・私で良ければいいですよ』

「マジか、助かるよ。そうだ、食堂で待ってるからいっしょに飯食おうよ」

『わかりました、今行きます／＼』

よし、これでおk。さあ行くか。

「絶対に勝ちなさいよ！」

「負けたら許しませんわ！」

いきなり思い出したように焦ったと思ったたら声援だった、嬉しいがなぜにそんな切羽詰ったような顔なんだよ・・・。

30・人も集まりや地揺れを起こす（後書き）

エリーって誰？まあ、そのうちわかるでしょ。

31・噂をすればなんとやら・・・(前書き)

前回で名前だけだった人が出る？

31 噂をすればなんとやら・・・

「知ってる？」

「なにが？いい話？」

「とびきりいい話だよ！」

「聞く！」

「学年別トーナメントで優勝すると男子の誰かと付き合えるみたいだよ！」

なんか女子だけの噂が流れているらしい、俺たち男子（シャルル含む）は内容を聞くこともおならはぐらかされている。

ただ、噂が焦っているのはわかった。話を聞けば優勝したら一夏と付き合う！という宣言をしたらしい。

「大胆だねえ。まあ、応援してるよ箒」

「ノノす、すまん。ありがとう」

どうやらその宣言が尾ひれがついて広がってしまったらしい。

大丈夫だろうか、まあ箒のことだ上手くやるだろう。

応援はするが・・・手加減したら怒るだろうなあ。

「流さん、絶対に優勝してください」

「優勝しなきゃ許さないわよ」

なんてありがたい声援（という名の脅迫）をもらったし、俺も負けられないんだよなあ。

確実に修理が終わったら襲われる・・・おお怖い。

・・・そうだ！

「筈はトーナメントで誰と組むんだ？」

「む、考えてなかったな。どうするか……」

うむ、セシリアと鈴はISが動かせないし、シャルルは一夏と組むし。

かといって俺は深螺とだし……どうしようか？

「なぐくん!!」

なんか聞き覚えのある声がするんだ、うん。この世界で聞こえるわけがない声が、深螺も顔が引きつってるし。

みんなは誰？って顔だし……。なんですか、なんで別世界で再会する人が多いんですか。

「はいはい、お帰りはそちらですよ」

「はい、わかった。って違うよ！」

(誰だろうこの人……知り合い?) みんな

「エイリアス、ですね。あなたもここにですか……」

「そうだよ、愛しいなぐくんのためなら世界の壁も無視するよ！」

はい、みんなが固まっています。なぜにこいつがこの世界にいるんだよ、思い出したからかなあ。

「なぐくん、久しぶりの再会を祝ってハグしよー！」

「もとの世界帰れ、管制官でもやってる」

(誰？マジでだれなの?)

みんなの視線が痛い、俺も頭が痛い。こいつのせいだ。

「あゝ、こいつは・・・自衛隊の同期だった奴だ、高校もいつしよだった。自己紹介しろ」

すると彼女、オレンジ色の長い髪をはためかせて口を開いた。

「前の世界のなぐくんの恋人、エイリアス・凧沙・リヒテンシュタインです。よろしくね」

「どこが恋人だ、どこが。寮で同室だったただけだろうが」

実際に付き合っていたわけではない、まあ仲がいい友人ってところだ。こう見えてもけっこういい奴なんだよなあ。

「それで、今はオーストラリアの代表候補生なんだよ！すごいだよ」

「そつだな」

あ、そつだ。

「篝ちゃんだっけ？」

「は、はい。なんででしょうか」

な、なんだ？なにをする気だ・・・みんなも気になるようでガン見してるし。

めっちゃ顔が怖いし・・・？

「トーナメント組んで〜！」

ドテーン

皆して転んだ、さっきまでの鬼気迫る顔はなんだっただよ……
。 箒も急展開についていけないし、大丈夫か？

「は、はい。 お願いします」

あれ？承諾しちゃったぞおい、まあ管制官やってたけど歩兵戦闘は強いしなあ。問題はなにか、代表候補生だし。

31・噂をすればなんとやら・・・(後書き)

新キャラ登場!

32・運命の悪戯・・・絶対違う！(前書き)

短めです

3.2・運命の悪戯・・・絶対違う！

あのいきなりの登場だったエリーが当日に転校してくる予定だったらしい。

その後は・・・

篤がエリーにしごかれたり、一夏とシャルルが連携したり、俺と深螺で特訓したり。

流石にエリーに鍛えられた結果、篤はどうやらい感じになってきたらしい。

一夏達も連携がものになってきたらしく、昨日も嬉しそうに話していた。

ちなみに俺達は深夜や休日の悪霊退治がISを纏ったものになるだけ、とはいかず真面目に特訓していた。

（一週間後）

「・・・・・・・・・・!?!」

「んな・・・・・・・・」

「なんでやねん!」

俺が思わずツツコミを入れてしまうほどの内容が投影スクリーンに映し出されていた。

急遽ペアでの開催になったために従来のシステムが不具合でくじ引きで対戦表は決められたとは聞いていたが、そこには驚きの結果があった。

いや、篤ペアと一夏ペアとグループが違うのはいいんだ、うん。

なぜ、なぜにこうなるんだよ。絶対狙ってるよね？

『西川流&mp;神無深螺VSラウラ』ボーデウィツヒ&mp;フレイス』グレイ』

Cブロックだからすぐでは無いが、初戦で当たるとは思っていなかった。普通にするしかないかな。

ちなみに他のみんなはそれぞれブロックが別だった。がんばれ篤！

で、あつという間に自分たちの出番。早くね？

ちなみにどちらも初戦を勝ち抜いた、俺らだけ負けるってのは許されない感じ……。

とにかく今は男として、本当の自分で向き合うしかない。

「Falsche Anwendung von Gewalt
ist nur Gewaltか」

32・運命の悪戯・・・絶対違う！（後書き）

Falsche Anwendung von Gewalt
st nur Gewalt

誤った力の行使は暴力ではない

33 恋は盲目、故に空しい(前書き)

アニメや原作小説と違ってラウラのパートナーになった人もやり手です

33・恋は盲目、故に空しい

「よお」

「ふむ、初戦からか。それはそうと・・初日は済まなかった」

これからというのに素直に謝られたら、なんか・・ねえ？やりにくいよ。

「いや、気にしてないよ。それに俺も謝らなくちゃいけないことがあるからさ」

「そうか？わかった、では勝負は勝負だ。正々堂々とやろう」

「そう来なくちゃ」

マジで恨んでるのは一夏だけなのねラウラ、なんか複雑だわ。

まあ、試合とそれとは別だ。本気で行かせてもらおう。一応あのときの仕返しはしなきゃ気が済まない。

『Gewinnen！（負けない）』

同時に叫び、駆ける。

俺はハンドガンタイプのラグナロクを二挺構えて正面から突っ込む。

「直線的な動きなど、意味は無い！」

AICを発動させて動きを止めにかかるラウラ、向こうではフレイスさんと深螺が戦っている。

「過信は油断の元だ」

効果射程に入る直前、地面を蹴り上がって上空からレーザーの雨を降らせる。

わざと当てずに周囲に連続で撃ち込む。命中すれば装甲を容易く焼き貫く光は地面を穿つ。

「その程度で倒せるものか！」

「熱くなるな、冷静に行動しろ」

「それは・・・」

動きが止まったラウラに瞬間加速イクニッションブーストで肉薄する。

両手で月下を構える。すぐさまプラズマブレードを展開して応戦してくる。

しかし、月下はプラズマ波を切裂き右腕部の発振機を切断する。

後退したラウラの顔は驚愕で彩られていた。

「対エネルギーコーティング!? 技師しか施工できない技術をどうしてお前が！」

「勝てたら教えてあげる、負ける気はしないけどね！」

対エネルギーコーティングはドイツに行っていたところに暇つぶしで出来た特殊技術である。

機能的にはいいけどコストがかかり過ぎるし、とんでもない代物だったために俺（私）しか施工方法を知らない。

ワイヤーブレードを射出してくるが、その内の一本を掴んで引っ張る。

フルマニユアルで動かしているために有効な力の掛け方がそのままトレースされる。

「な、その動きは技師！？何者なのだお前は！」

引つ張られながらラウラが姿勢制御をして逆にナイフを持ち、飛び掛ってくる。

その目は本気の目だった。

「こつちもナイフで行かせてもらおう！」

近距離で特殊装備を使うことの無い戦いだっただ。

特殊合金で作られたIS用のナイフが幾度と無くぶつかり合い、そのたびに火花が散る。

「どうした、押されてるぞ？」

「それがどうした！」

強い一撃でラウラのナイフが俺のナイフを弾き飛ばす、取りに行く時間は無い。

すぐ目の前に迫っていたからだ。

「もらった！」

「残念、惜しかったね」

左手で振り下ろされたナイフの刃を挟み込むようにして押さえつけていた。

通常の補正がかけられた操縦方法なら不可能な芸当だ、なぜならハイパーセンサーの捕捉を超えた速さだったのだから。

「先ほどからのお前の動き、技師と同じだ。どうしても勝って聞かせてもらおう！」

体術で倒そうとした途端、空間に縫い付けられたように身体が動かなくなる。

ＡＩＣが発動した証拠だった。だが、いたって平然としていた。

「なぜ平然としていられるのだ、まあいいこれで終わらせてやる！」

右肩に装備されたりニアカノンが発射される瞬間、それが爆発した。砲身が紫色のレーザーに貫かれていたのだから。

「一度に複数に干渉はできないんだよね」

蒼月の左脚の爪先部分にはレーザー発振機が立ち上がっていた。

ＡＩＣはその効果を発動するには対象への意識の集中が必要、その集中力は一つが限界である。

つまり、機体を停止させられたが固定装備までは干渉できなかったというわけ。

「クリエイター創造主発動」

月下に重力場を付加してラウラに突っ込む、これで終わりだ！

「うおおおおおー！」

重力場に切り裂かれ、レーゲンのシールドエネルギーが高速で減少していく。

私は負けるのか、織斑一夏を倒さずしてこの男に
『汝、力を欲するか。全てを破壊する力を』
まだ、負けるわけには行かない。寄こせ、その力。
『全てを超越した破壊をもたらせ』

深螺とフレイスさんが決着を着け、こちらも時間の問題となった瞬間。

目の前のレーゲンから思わず後退するほどの悪寒が発した。

その途端、レーゲンから紫電が迸る。

ラウラを飲み込むようにレーゲンが灰色の液体のようにどろどろに溶けてその形を変える。

それは変形というよりはまるで粘土人形を作り直ししているかのようだった。

それは倍近くの身長に変わった。体つきは少女のそれだが、その目と思われる場所からは赤い二つの光が漏れている。

特徴的なのは、その右手に雪片が握られていたことだったが、それが、それすら気にならないことがあった。

レーゲンだったものからどす黒い霊気が発せられていたのだから・・・。

33・恋は盲目、故に空しい（後書き）

科学の結晶のISと異世界の脅威であるマテリアルゴーストが交錯する

次回、決戦

34・偽りの力、思いの強さ（前書き）

原作ブレイク！

34・偽りの力、思いの強さ

「管制室、アリーナ内に誰も入れないでください。対抗戦よりも強力なのが出ました」

『了解した、フレイスを退避後は任せよう。・・・待て一夏！』

マテリアルゴーストは、脅威的な戦闘能力を持つ。だが、それ以前に霊体なのだ。

抵抗力が無い人間は霊気を吸い取られて死ぬ、強固な意思が無ければいけない。

「来るな一夏あー!!」

そう、たかが姉の複写(ニセモノ)に怒るくらいでは隙を突かれて命を吸い取れるのがオチだ。

そして、マテリアルゴーストに対抗できるのは同じくマテリアルゴーストしか無い。

霊能力を持たない一夏では永遠に勝つことができないのだ・・・悲しいことに。

「あれは、俺がやらなきゃいけないんだ！」

「駄目だ、下がれ！」

「千冬姉のなんだよ、俺がやらなきゃ意味が無いんだ！」

気持ちは痛いほどわかる、俺だって。・・・そうだ。

「一夏、お前を死なせたくない。ここは任せてくれないか」

一度救った命の灯をこの場で失いたくない、それだけが俺の思い。

そして、力を持つ者の責任。

「俺に任せてくれないか、今だけは」

「………わかった、頼む」

「すまないな、一夏」

「勝つて来るんだろ？」

「当たり前だ……行ってくる。深螺、二人を頼む」

早くフレイスさんと一夏を退避させなければ、一夏はまだいいとしてもフレイスさんは危ない。

深螺たちの退避を確認すると、俺はそれに向き合った。霊体干渉で停止した蒼月を外して、生身で見つめる。

「A u r e v o i r」

後ろからなにかが投げられた、見ずにそれを掴む。

「妖刀か、丁度いい」

幾多の命を絶ち、刃を血で紅く染めた凶刃「紅」を抜き放つ。血で染められたようにその刃は紅く、血を求めるかのように光を鈍く反射していた。強大な靈気に反応しているのか、刃が微かに紅く光る。

「参る！」

同時に灰色の巨人も走り出す、だが紅が早かった。雪片を持つ腕を斬り上げる。

紅い軌跡が走った。それは場違いなほどに美しく、人の目を惹きつける。

「Fu？」

返す刃で両足を斬りおとす、同時に傷口から血のように黒い液体と青い光が溢れる。

すぐさま修復を始めた脚部を足場に頭部付近まで飛び上がる、流の瞳は赤く光っていた。

重力と体重を合わせた一撃が繰り出される、その姿は流れ星のようだった。

その一撃で勝負が決まった、灰色の巨人の一部は崩壊し、また一部は青い光を放ち掻き消える。

崩れ落ちる巨人の中から助けを求めるかのようにラウラが虚ろな目で出てきた。

「まったく・・・」

出てきたラウラを抱きかかえたと、文句を言いたそうな流の顔には安堵の表情が浮かんでいた。

「よう、ラウラ。吹っ切れたか？」

「ああ、私の力は暴力でしかなかった

「わかったんなら結構、後は自分で頑張れ」

「・・・探してみる、自分の強さを

「その意気だ。それまで、俺が支えよう」

「ありがとう」

「はっ」

「zzzz」

どうやら、ここは保健室のようだった。ベッドの隣には相手だった男が座っている、窓から入ってくる夕日から時間が経っていることがわかった。

「zzzz・・・だましてごめんよ、ラウラ・・・zzzz」

なにかしゃべった？私の名前を言ったようだが。

「男でしたって言ったら怒るだろうなあ・・・zzzz」

男？こいつは元からではないのか。む、確かこいつの名前は・・・
西川、流・・・！？

「zzzzz・・・うお！？寝てたのか・・・あ、大丈夫か？」

「なんとか、それより寝言が気になるのだが・・・騙してとはど
ういうことだ？」

いきなり焦った表情になる西川、西川とは技師と同じ名前だな。

「……怒らない？」

戦闘中のあの威圧感はどこへ行ったのか、おどおどしている。なんだというのだ。

「いいから教えてくれ、別に怒るわけではないだろう？」

「……西川技師っていたよね？」

「ああ、教官の次に尊敬する人物だが……」

西川の顔が例えではなく、本当に青くなっていた。汗も尋常ではないほど出ている、大丈夫なのか？

「Sie m?ssen nicht versiehtlich
h die Anwendung von Gewalt」

「それは、技師の言葉。『力の行使を誤ってはならない』……もしや」

困ったような顔で西川が頭を掻いていた、確か名前は……流！

「お前が考えてる通り、西川流技術士官は俺だ。騙していてすまなかつたな」

「……いえ、あの状況では仕方ないでしょう。それに……/」

「どうした？熱でもあるのか」

「いえ、問題ありません」

もしあの時点で男としていたなら、ドイツからは出られなかっただろう。だが、技師はやはり技師だ。

あの思いを貫き続ける瞳はあのときに憧れたそれだった。

「じゃあ、少し休んだら出てもいいってさ。頑張れよ、ラウラ。偽りの強さじゃ無く、自分の強さを見つけれ」

「はい！」

あのときの教官の言葉通りだ、惚れてしまったよ。まったく、つくづく卑怯だ。

だが、これでさっぱりした。今では負けたことも清々しい。

その後、教官に説明を受けたが気分が落ち込むことは無かった。

あの人の言葉があったから。

「私は、ラウラ＝ボーデウィツヒです。それ以上でもそれ以下でもない！」

34・偽りの力、思いの強さ（後書き）

結局、フラグを立てやがりました。

35、平穩が一番なのに

「あれ、シャルルはいつしょじゃないのか？」

「ああ、先に行つてつて言われてさ」

「ふうん」

ふむ、どうしたものか。そういや紅を渡した人って誰だろうか、わかんないんだよなあ。

あ、山田先生が来た。……なぜにそんな疲れた顔なんですか。

「SHRを始めます、えつと最初に転校生を紹介します。いえ、皆さんはもう知っているというか……とにかくどうぞ」

めっちゃ不安なのは俺だけか？違うのか？

「失礼します」

あ、この声は……（汗だらだら）

「シャルロット＝デュノアです。改めましてよろしくお願ひします」

「決めたのか、頑張れよ。応援してるぞ」

「めでたしめでたしつてとこか」

「織斑、西川。知っていたのか？」

げ、しまった……一夏も顔が真っ青になっている。

「え、まあ。自分から言うのを待とうかと思ったので」

「バラすのも無粋だなと、はい」

ドガン

『!?!』

目の前に龍砲を今にも発射してきそうな鈴がいた、その顔は怒りに染まっている。

お、恐ろしい!

「お前ら〜!」

「わ、やめる。一夏、俺を盾にするな!」

「俺はまだ死にたくない!」

龍砲が光を帯び、発射され

ブン

オワタなと思って諦めた瞬間、目の前に黒い装甲のISがいた。

「ラウラか、助かったよ。ありがt!?!」

いきなり前に引つ張られた・・・あ?

俺の唇が塞がれた、ラウラの唇によつて。・・・・・・い
つまで続くのでしょうか。

クラス中の視線が集まる、鈴はあわあわと口を開けているし・・・
深螺はいつもの無表情ではなく赤く染めてるし。

エリーに限っては絶望に染まった顔だ。

「んむう。・・・技師、いや流。あなたを私の嫁とする、異論は認め
ない!」

「はい？」

「婿じゃないのか？」

いや、待てよ一夏。なぜそこで冷静なツツコミを入れるんだよ、おい。

ビシュン

深螺が除霊に使う札を投げてきた、咄嗟に避ける。それは高レベルのに使う強力なやつじゃないか！

しかも霊気を対消滅させる危険なタイプの・・・霊気で出来てる俺には有効すぎるものだ。

殺す気がよ！

ドン

「うお！？ああ、すまんシャルロット・・・なぜにシールドピアースを展開してるのでしょうか」

「流って女の子の前でキスできるんだね、びっくりしたなあ」

目のハイライトが消えてる！こ、殺される。逃げなければ！

「うわあー！」

逃げようと窓へ走るが目の前で衝撃砲がはじける・・・みんな怖いよ、うん。

「だああー！」

がしり

錆びたブリキ人形のように首を回して振り返る、そこにはエリーがいた。

しまった、こいつは馬鹿力だった・・・やばい。

「なぐくん　なんで逃げようとするのかな？」

目が、目が怖い。もう、オワタ。

その後、文字通りに教室が揺れた。

35、平穩が一番なのに(後書き)

次回は弁当イベント!

36・俺はファース党（前書き）

流君の家事技術は一夏以上です

36・俺はファース党

「……………（じー）」

「すまん箒（小声）」

現在、ぼろぼろになりながらも実習を終えて昼食。

どうやら箒が二人きりで食べたかったのに、一夏が俺達（鈴・深螺・シャルロット・ラウラ）を誘ってしまったらしい。

ちなみにセシリアはいつの間にかいた。

「なあラウラ、ここに座らなくてもいいんじゃないか？」

「夫婦はこうしているものだ」と聞いたが？」

ラウラが俺の膝に座っているのだ、傍目から見れば良いだろうが……さつきから鈴と深螺、なぜかエリーまで睨んでいる。どうにかならないものかこの状況。

「まあいいや、いただきます」

今日は久しぶりの弁当だ、料理自信があるんだよなあ。

ちなみにメニューはほうれん草のおひたしと卵焼き、焼き鮭に栄養ドリンク。

流石に昨日は靈気の消費が多かったらしくふらふらしていた、早く戻るために靈気補充のためだ。

「はい、箒。あ〜ん」

「！う、うむ。あ〜ん」

初々しいねえ、箒も嬉しそうだし。良かったな。

で、みなさんは期待した目でなに見てるんだよ。して欲しいのか？

「どうしてもってんなら一人決めろ、時間も無いし」

すぐさまじゃんけんが始まった、動き早いなあ。にぎやかにじゃんけんするのを眺めながら栄養ドリンクを飲み干す。

やっぱり普通に食事したほうが良かったか？あ、決まったみたい。

「頼むわ」

「必死すぎだろ、お前は一夏にやってもらったほうが良いんじゃないかねの？ほら、あ〜ん」

「別にいいの！あ〜ん」

なんか顔が赤いがまあいいや、喜んでるみたいだし。俺でよかったのか？

あれ、俯いてる。どうしたんだ？

「う、プロの味ね・・・」

「そんなにか・・・ぐ・・・」

「オーバーだなあ・・・はむ!？」

「もしや、また腕を上げたのですか・・・orz」

なんとということでしょう、あつと言う間にorzな感じになった少女達の出来上がり。

一夏も複雑な表情で見てる。なんだよ。あ、箸も食べた。

「流、どうかこの技術を教えてほしい！頼む」

断れないようなくらい真剣な顔の箸、おお。まあ熱心だし応援する

って言っちゃったしなあ。

「わかった、わかったから離れてくれ。近い」

「ああ、すまない。・・・」

頑張れ箒、後ろから睨んでくるみなさんを無視しながら俺はそう願った。

だって、後ろから威圧感バリバリの靈気を感じたんだもの。

36・俺はファース党（後書き）

そのうちエリーとの馴れ初めでもやりまじょうかな

37・幽霊の恨みは怖いよ（前書き）

クラリッサさん登場！

37・幽霊の恨みは怖いよ

朝、外から小鳥のさえずりが聞こえた。

窓からは朝日が入り込んでいる、ちなみに部屋は一夏と同じになった。

当たり前の処置ではあるが、深螺が残念そうな顔をしていたのとおとなしくさせるために骨が折れた。

(疲労も物理も……)

深螺も気が置ける人物の一人ではあるが、やはり男同士が一番だ。というか、実際はかなりやばかったし(意味はご想像にお任せします)

「うーん、朝か」

ベッドに手を着く、隣を見ると一夏はいなかった。いつもの朝の特別な訓か？

「んみゆう……」

……なにか聞こえてはいけない声でしたぞ

しかもなにかやわらかいものに触っているような感じが……
そして冷や汗が止まらないのはなぜ？

「ら、ラウラ？」

やっと目を覚ましたらしいラウラが目をごすりながら起き上がる。

「もう朝か？早いな」

ちなみにその姿は……ISの待機状態であるレッグベルト以外は何も着けていない
ぶっちやけ裸……

「早くなにか着てくれ、頼む」

「夫婦は包み隠さずいるものだと聞いたが？」

無垢な瞳で見上げてくるラウラ、それは反則だぞ、うん

「間違つてはいないけど、服は着るから。うん」

「そうなのか？クラリツサが言っていたこととは違うな」

やっぱりですか、そうですね。あいつですか。

でも、今はそんなことを気にしている暇は無い。早く服を着せなければ！

と思って立ち上がるうとすると押し倒された。否、関節技を決められて動けない。

「いてて。痛い！ちよ、やめ、が！？」

「嫁と一夜をとにしたのだ、寝技の練習でもしておかなければならぬ」

絶対違う、ラウラの考えてるのは格闘技のだ。なのになぜ顔を赤くする！

つつか紛らわしい言い方するな、てか晩から入り込んでいたのかよ！
痛ててて！一応身体は人間だからね？普通に痛いからな！？

「関節外れる！ちよ、待って……」

カシャン

銃器を落としたとき特有の音が入り口から聞こえた、そこにはエリ
ーが仁王立ちしていた。

見てないで助けてくれ、右腕の関節が外れた。めっちゃ痛い……
加減しろよ。

「な、ななななな!? 浮気者!?!」

「どこがだ! つてもうやめろラウラ、右腕がやばい! つてえ!」

「受けになれば良いと言っていた」

クラリツサああああ!!

その後は流の追跡劇が始まったとか……

日本時間午前七時、修羅場と化した自室からの心の叫びはドイツに
も届いたそう。

「技師……むにゃ……はづっ!?!」

37・幽霊の恨みは怖いよ（後書き）

再会話もしようかなあ・・・

あ、この後の二話は駄文垂れ流しのEFですので。なるべくは見ないほうが良いと思います。マジで駄文ですので・・・

38・新たな革新（閑話）（前書き）

オリジナル！

38・新たな革新（閑話）

あ~~~~~うん。

現在、フランスのとある研究所にいます。周りには誰もいないけど、いや誰も寄つて来ないのが正しいか。

カチャカチャ チューーン

機械加工の音が響く、ここは誰にも知られていない俺だけの研究所。ISの影響による女尊男卑が納得いかない、それ以上に陸海空を奪われた男達のために。元通りとは行かなくとも、いくらかは良くなることを祈って。

「こんなところか？」

工具を置いた流の目の前には、青い人型の物体があった。

二つのオレンジ色に染まった大きな瞳

力強さを感じさせる四肢には鎧をイメージさせる装甲

特徴的な形をしたそれは、戦士を彷彿とさせる

その名は『強化装甲外筋システム』

目の前にあるのは、試験第三号機であり実用型「G3」

流が密に開発していた男女平等の世界の為の切り札

自衛隊にいたからこそ、自分を奪われた者たちへの希望として

発表会は明日に迫っている、世界の二度目の革新が

翌日、全世界が揺れた

そして、陸海空を奪われた者たちは喜びに湧き上がった

38・新たな革新（閑話）（後書き）

はい、まさかのG3登場です！

ちなみに、これはIfですので本編には関係ありません

39・しゃっちゃんになりました(閑話)(前書き)

ノリでやさかしちゃいました(笑)

39. しゃっちゃんになりました(閑話)

『どづいうことだ!』

今さ、みんなに襲われてるんだ。理由はわかるけど。

さきほど、世界中の技術者や企業の人達に説明し終えたところ。ほとんどこから採用だつてさ、やったね!

事前に何も言わなかったから仕方ないんだけどさ。

「なんなんだあれは!」

「ISより少々劣るが半端ないぞ!」

「あのとときの黒いやつに似てるし」

うん、性能的にはIsよりは利便性に欠けるけどパワースーツとしては文句無しってくらい。

小隊組めばISとも互角に戦える、しかも性別に関係無く装着できる。

我ながら凄いのを作ったもんだ、あつはつは!

「もう一度、自分の舞台をあげたいんだよ。苦しさはわかるから」

『・・・・・・・・』

結論を言えば

ISによって縮小、除名処分にされた人達の新たな舞台をプレゼントしてこと。

実際、IS部隊のサポートとして採用する国もある。専用部隊を作るって言った国もある。

ちやつかり、安全装置によって製作者権限での強制停止を組み込んであるって言ったから襲撃もない。安全面も保障され、尚且つ生産性にも優れる。数に限りがあるISより評価されるのも納得である。

「とんでも無いもの作ったな、流」

一夏がため息をつきながらしゃべった。

みんなも同じ感じだ、だって知人がISに並ぶかもしれない代物を休日に発表したのだから。

「いや、女尊男卑がちよっと行き過ぎな感じもしたしさあ」

「そんな理由で規格外な物を作ったのか嫁は・・・」

ちなみに日本のある企業が協力してくれたおかげで工場もある、現在も銀行の口座の金額は増え続けていることだろう。

今は規格外なパワードスーツ開発者兼社長である。しかも二人目の男性IS操縦者である。

「週明けには社長ってどういう状況よ・・・」

鈴があきれたような顔で見てる、というかみんながそんな感じだ。まあ、学園にいる間は生徒でしかないが。

それに委託製造のため、当分は部下任せになる。しかも製造方法は委託企業も不明、わざとそうしたのだが。

戦争目的ではなく、自衛として国が使うように。ISのようにならないために。

「いや、あっはっは。とんでもないことしちゃったねえ」

『笑い事じゃない!』

そのとき、流の腰に特徴的な形をしたベルトが巻かれていたことは誰も気づかなかつた。

流が開発した本当の理由も……。

39・しゃっちゃんになりました(閑話)(後書き)

ネタに走りました・・・後悔はしています

あくまでご意見であり、誹謗中傷は無しでお願いします。

二度目ですが、本編とは関係ありません

40・買い物・・・別に俺は必要無いんだが(前書き)

なんでこういうのは筆が進みすぎるかなあ

40・買い物・・・別に俺は必要無いんだが

気持ちの良い天気の中、なぜか鈴と出かけている。

こいつは一夏LOVEなはずだが、なぜ俺と？まあ、親しい間柄ではあるが・・・。

「んで、なんで俺なんだよ。一夏を誘えばよかったじゃねえか」

「べ、別にいいじゃない。それに水着は当日に見せなきゃ意味が無いんだから！」

ふむ、それも一理あるか。サプライズというのが一夏に有効かは知らないが。

ちなみにモノレールで移動中である、別に抱き上げて空の旅でもよかったのだがなあ。

目立ちまくるけど。

鈴はラフな格好である（ご自由に想像ください）

「久しぶりだな、こうやって出かけるの」

「そうよね、たまにはいいでしょ」

まあ、鈴が転校する前もこうして二人だけで買い物に出かけたこともあるけどね。

基本的に一夏対策で強制的に連れられたのがほとんどだが。

と、回想していたら既にレゾナンスに到着していた。大きいなあ、ここ。

「あのさ・・・／＼」

鈴が手をだしてきた。ふむ、結構人が多いしはぐれたら大変だしな

あ。

なんか顔が赤いが暑いからだろう、最近気温が高いからなあ。

「はいよ、はぐれんなよ?」

「子どもじゃないわよ……/」

なんか体温が上がった?暑いからだろうな、まあいいや。

さて、水着売り場はこっちだったかな?手早く済ませるか。

む、一夏とシャルロットが近くににいるか。ふむ、シャルロットの邪魔をするのも無粋だな。

それなりに空気が読める俺は鈴の手を引いて隣の店に入った。

「ちよつとそこの人」

おお、こんなに種類あるのか。水着ってだけでも結構あるんだな。

「聞いているの?あなたよ!」

なんだよさつきから、いくら女尊男卑だからって全部偉いってわけじゃないぞ。

って警備員呼んできたよ、面倒だなあ。自分でやったんなら自分で片付けるよ。

「あんたがか……って技師?」

久しい顔に会った、ドイツでの工房の客だった。がんばってんだなあ。

「おお、久しぶりだな。悪いな、くだらないことで呼ばれちゃって」

「いえいえ、そのうちどつかでパーティーしましょうよ」

「ああ、そうだな。じゃあな」

「な、なんなのよ！もう！」

「残念ながら勘違いしてるような奴の言うことは聞かない主義でね。鈴、行くぞ」

「え、わ、わかった」

後ろであわあわとしている女性を無視して水着コーナーに移動する。なんか鈴が不機嫌になってる、女性だったからか？

〈数分後〉

「お？もう終わったのか？」

「いや、選んでもらおうかなあって」

「そうか？わかった」

つてなぜに鈴は試着室に連れ込む？おいおいおいおい！？

危ないって（色々な意味で）特に俺が……ナニヲシテイルの
カこの人は！？

（いきなりの展開でおかしくなっています）

「ちょ、鈴。外に出てるから、な？」

「いや、すぐだから。待ってて！」

後ろで服がこすれる音がする、どうにか理性で煩惱を押さえつける。
これは一夏にやればいいんじゃないかねえのか！？俺はお門違いだぞおい。

「どうかしら？」

着替えが終わったらしい、そろりと振り返る。

すると、スポーツタイプでへそ出しの水着を着た鈴がいた。

活発な鈴にはとても似合っている姿だった、一瞬見惚れたのは秘密

だ……うん。
にしても一夏はなんでこんな可愛い娘の好意に気づかないかなあ・
・まったたく。

「うん、良いんじゃないかな？似合ってるよ」

「そ、そう？じゃあこれにしようかな」

「おお、じゃあ出てるよ」

なんとか煩惱に打ち勝ち、試着室から出る。

「あ？」

「え？」

「お？」

「流さん、なにしているのかしら？」

鈴音^{すずね}先生もとい鈴音^{りんね}がいた。やべ、見つかった……。後ろになぜか一夏とシャルロットまでいる。あれ、回避したはず……。しくじったか。ちくせう。

正座させられて姉さん、山田先生、鈴音^{りんね}に説教される。うう、きついで。

つて実体化切ろうとしたら睨まれるし、わかりましたよ。足が痺れる……。

「……………!!」

「……………!!」

「……………!!」

もはや一個大隊に機銃掃射を受けているような気分だ。てか、一人が知人の妹ってのがきつい。

「……………やっと終わった。ん、女子勢連れて山田先生はどこへ？」

「はあ、まったく。気をつかわなくても」

「ああ、そういうことね。一夏もいるし。」

「一夏はわからないで顔してるけど……………わかれよ。」

「まあいい、さてお前ら。どっちがいい？」

「そうやって見せてきたのは白と黒のビキニ、どっちも露出度が高い。うゝむ、黒か？変な男は寄って来るわけないし。」

「黒でいいんじゃない？」

「いや、白だろ」

「む、一夏……………さつきから黒をガン見しておいてか。なんか感づいてるみたいな顔を姉さんもしてるし。」

「お前は気に入ったやつを見まくるだろ？」

「流ほど正直だといいいんだがな、別に心配されるほど柔じゃないさ」

「ところでお前らは彼女作らないのか？よりどりみどりだろっ」

「一夏の場合は本当にだな、ってなぜ俺を見るのよ姉さん。」

「そういえばラウラはどうだ？あれでいて一途なやつだぞ」

「うむ、まあ可愛いと思うけど。わからないなまだ」

「キスしたというのにか？」

痛いところを突いてくるなあ、一応奪われたんですけど。ファース

トを（泣）

一夏も笑うな。なんて恥ずかしい……。

そのころ、フリーズしたラウラが付近にいたそう。

40・買い物・・・別に俺は必要無いんだが(後書き)

合宿編は長くなる予定です

41・海って幽霊が多いって知ってた？（前書き）

暴走流・・・

41・海って幽霊が多いって知ってた？

「海だ〜〜!!」

テンション高いな・・・暑い(xox)

なんかシャルロットと鈴がご機嫌だし・・・なに!?一夏がプレゼントだったって!

そりゃあ、喜ぶわなあ。って鈴もお詫びに渡したネックレス見てるし、まあ喜んでくれたならいいか。

で、深螺とエリーも欲しいんですね、わかります。

「記念日になったらなんかやるよ、まあ高すぎるのは無理だがな」

お、なんか嬉しそうにして戻った。多分、言わなかったらボコられてたなこれ。

それぞれの思いを乗せてバスは海へと向かっていった。

並木を抜ければ、蒼穹の世界が広がっていた。

なんか窓に映っていたが気にしない・・・気にしない(大事なので二回言いました)

んで・・・お世話になる旅館に着いた、なんか憑いてる気がするが無視。

あとでとっちめるからおk、てか荷物が多いからなあ・・・いくらマテゴでも重い物は重いからね?

旅館の名前は花月荘だって、なんでも毎年お世話になってるとか。

あ、窓から幽霊が。こんちわ〜、お邪魔するよ〜

「あら、こちらが噂の?」

ここの女将さん、静洲景子さん。三十代らしいのだが年齢を感じさせない、仕事柄だろうが笑顔が美しい。

どうして女将さんって綺麗ですかね、羨ましいわ……なぜ女の俺が出てくる……。

「今年は男子二人のせいで浴場分けが難しくなってますみません」

姉さん、もとい織斑先生がしゃべってる。まあ、そくだよな去年まで女子だけだったんだもの。

今年は男と幽霊だけ……うん、戯れなきやいけないよね。今日。

「西川流です、よろしくお願いします」

「お、織斑一夏です。お世話になります」

なぜ詰まるのだ一夏よ……まあ、女将さんが笑ってるからいいけどさ。

そついや俺達の部屋ってどこになるんだろう?まさか廊下か!?!やだなあ……。

なんで微妙な顔でこちらを見るんだよ、本気じゃないから冗談だつて。

つて考え事をしていたら、「教員室」という張り紙がされた部屋の前に……。

「もしかしなくてもここか?」

「だろうな」

「早く入れ、押しかけないための対策だ」

まあ、俺達に会いに鬼がいる場所にまで行かないよな・・・うん。

「あれ、この後はどうするんですか？」

「打ち合わせと確認がある、お前らは海にでも行って来い。一段落ついたら私も行く」

「了解。一夏、じゃあ行くつぜ」

一夏の手を引き、海へダッシュ！ついでに近くに隠れていた幽霊さんも掴む、驚いてるけど知らん。

大勢で楽しめば良いんだよ！いざ行かん海へ！！

「海が俺を待っている〜！！」

「ちよ、浮いてるから！てかその子誰！？」

「待ってください、私なんでつかまれているんですか〜！」

「夏の海は誰だろうと楽しむべきだ〜！！」

霊気で幽霊を着替えさせ、一夏も着替える。さあ、遊ぶぞ！

41・海って幽霊が多いって知ってた？（後書き）

りゅうくんがはっちゃけてる・・・キャラが暴走しました

42 海では安全に留意してみんなで楽しもう(前書き)

あれ、鈴にフラグ……

42・海では安全に留意してみんなで楽しもう

「おお、これぞ夏の醍醐味……人生で二回目の高校生の夏……」

「あゝ、そうだったっけか。つてお!？」

「ん? どうしせ!？」

いきなり上からの荷重が来た……なんだ? つてこの感じは……。

「鈴か、いきなり飛び乗るなよ」

「別にいいじゃない、あんたは大丈夫でしょ?」

「変わらないなあ、鈴は」

まあ、いつものことだからいいけどさ。てか、こいつに女としての自覚はないのだろうか。

つつか一夏にやってやれよ、まんざらでもないみたいだけどさ。

つてなんかみなさんが集まってきたんだけど、めんどろなことになるなこれ。

「鈴、ひとまず降りてくれ。勘違いが増える」

「仕方ないわね、じゃああそこのブイまで競争ね。負けたら@クルーズのパフェ奢ってもらわよ!」

な、あそこのパフェって安いのも1000円はするんだぞ! 確実に大量に注文する気だよ……。

負けられない戦いがここにある!

「負けるかあああ!」

「その意気よ!」

勝たなければ大量の出費が！！
全力で、でも人並みで追いかける。いや、だって・・・ねえ？
本気でやったら可哀想だし、卑怯だし・・・負けたくないけど
さ。

つて鈴早いぞおい、なんでモーターボートみたいな波ができてるん
だよ！？

人間が出せる速度じゃないぞ・・・だあああ、負けるかあああ
ああ！！

「わたしの勝ちよ・・・」

おいおい、いきなり沈んでいくな。つて、靈気が不安定に・・・
マジで溺れてるのかよ。

待ってる！全力で泳いで近づくと、間に合え！

どうにか沈んでいく鈴を抱きかかえて、水面に出る。そのままブイ
まで泳ぎきる。

なるべく苦しくないようにして・・・危なかった・・・。

「大丈夫か？心配したぞまったく」

「う、ごめん・・・」

「調子戻るまで休んでろ、いいいな？」

「・・・うん、わかった」

まあ、仕方ない。また溺れそうになったら大変だしなあ・・・
鈴がそうなるのは避けたい。

うん、マジで。なんか抱きかかえてたときに顔赤かったけど大丈夫

だったろうか、海水飲んじやったんじゃないかな？

あとで謝っておこう……。

あ、一夏がセシリアにサンオイル塗ってる。あはは……
汗)

(一夏がセシリアの(検閲されました)を見そうになってボコられてる。)

42・海では安全に留意してみんなで楽しもう(後書き)

まだまだ海で続きます

43・海では楽しく！（前書き）

まだまだリア充爆発しろタイムは続きます・・・

43・海では楽しく！

昼食を終え、午後になり再び海へ！すっかり午前中から浮遊霊ちゃん（さつき命名）もみんなといっしょに楽しんでるみたいだし、良かった良かった。（地元の子という説明をしています）

「あゝ、海はいいなあ。「流、ちょっといいかな？」「？」

声が出た方向を見ると、オレンジ色のビキニタイプの水着を着たシヤルロツトと……タオルがぐるぐる巻きにされたミイラもどきがいた。なんだこれ……。

「なあ、それなに？」

「技師、それとは失礼な！」

え、この声って。てかその眼帯とレッグベルトは……。

「もしかしてラウラ？ラウラなのか？どうしてそんな格好を……」

見てるほうが暑いってやつだよなこれ、タオルでミイラになろうとするなんて驚いたわ。

てか、暑くないのかそれ？俺だったら嫌だな、いや普通は嫌だろ。うん。

「脱いだらどうだ？暑いだろ、絶対」

「ラウラが恥ずかしいんだってさ、似合ってるのに」

「大丈夫かどうかは私が決める！」

いや・・・おいおい、海来て水着じゃないって意味なくね？そう思うよねみんな！

海行つてタオルのミイラもどき見ても楽しくないよね！？多分、某ガクぽ君も同意してくれるはず。

「じゃあ流と遊びに行くよ？ほら行こう」

「そうだな、タオル着てたら遊べないしなあ？」

ちやっかり腕を組んでわざとらしく歩いて行こうとする。あ、なんか震えてる。

お？

「わ、笑いたければ笑え！」

そう言つてラウラがタオルを剥ぎ取るように脱ぎ捨てた。

そして、そこにもじもじと恥ずかしそうにしているラウラがいた。

どう見ても大人の水着に見える・・・でも。

「似合ってるぞラウラ、可愛いよ」

「せ、世辞などいらん・・・」

素直に喜べばいいのに、勿体無い。でもせつかくだし、遊びましようか！

「もう少し自身持てつて、ラウラは可愛いんだから。な？」

ん、どうしたんだ？いきなり固まって、って走り出した！？・・・あつという間に見えなくなつた・・・。

どうしたんだあいつ・・・？追いかけないほうがいいのかこれつて。

「なんだろうか・・・ぶげふ!？」

なんか顔にぶつかった・・・ん、ビーチバレーしてるのか。ふむ、
丁度いい。

お、姉さんも仕事一段落ついたので。お疲れ様。

「どうだ？似合ってるか？」

「ああ、良いと思うよ。可愛いじゃん」

「ふ、どこかの馬鹿が選んだだけあるか」

うん、たださえスタイルが良いのに強調されててやばいです。

もし他人だったら普通に惚れてますな・・・はははシャルロットの視線が痛いわ。

別に大丈夫ですよ？ええ。そっぴや昼食はすごかったなあ・・・だから怖いっての。

「じゃあ、やろうか。行くぞ～～～～!!」

なんか、めっちゃ楽しかった。久しぶりに遊んだなあ・・・夕食はなにかなあ？

そっぴや深螺とエリーの姿を見かけなかったけどどうしたんだろう？

43・海では楽しく！（後書き）

まだまだ続くよ！

ちなみに某ガクぽ君は『おとなのラジオ』の彼です。

おとならP様のhttp://www.nicovideo.jp
/user/5262110/video

44・今宵はにぎやか(前書き)

いや、温泉っていいですね

44・今宵はにぎやか

時間は経ち既に日は沈み、外からは虫の音が聞こえている。

「これって高校生の夕食じゃないぞ」

そう、どこの高級料亭ですか？つてくらいに豪華な食事です。

なぜカワハギがキモつきであるんだよ、今は高級魚なんだぞおい。

いや、貴重なものを食べれるってのは嬉しいけど………国営はこんなに違うのか。

「本わさとかどれだけだよ……」

「そうね、流石ISS学園よね」

「お、もう大丈夫なのか？心配したよ」

うん、まあ大丈夫らしい。安心したよまったく……ん、向こうでシャルロットが悶絶してる。

わさびそのまま食ったな、あれ。

まあ一夏がどうにかするでしょ、うんキモが美味い！

「そっぴや流ってどこの部屋なの？」

「それを聞くか……織斑先生と同じだ。一夏も」

あ、顔がひきつった。まあ、鬼のいる場所にわざわざ行く輩はいないからなあ。

てか、深螺もそんな顔するなよ。仕方ないだろ、男は俺らだけだし……。

いや、俺も女になれり！？

「くだらないことを考えていないか？」

「いえ、なにも……（汗）」

なぜここでも出席簿が……い、痛い。それと冗談だって、てか心読むなよ。

く、マテゴにダメージ食らわせるとかどれだけだよ……く、痛い。

それから少しして、味付けはどうされているのかとか考えながら食べていたらあつという間に平らげていた。

ふむ、とても良いお食事でした。やっぱり高校生に出す料理じゃない気がするけど。

「それじゃ俺部屋に行くわ、じゃな」

「わかった」

「わかりました、明日は早いですからね？」

「おう、じゃ」

「いや〜美味かったなあ」

「そうだな、あんな高級なの食べれるなんて思わなかったよ」

現在、自室でくつろいでいる。一夏は姉さんにマッサージ中、一夏のマッサージは最高だしなあ。

「もう少し優しくしろ、いててて！」

「ずつとやってなかったから溜まってたな？たまには気を抜けばいいのに」

「教師なのだからできたら苦労はしな、くう〜！」

うん、痛そうだね。まあ最初はそんなもんだよな、あの痛さは経験しなきゃわからないし。

あとで俺もやってもらおう・・・でもその前に・・・。

「流」

「了解！」

入り口の扉を一気に引きあける！

『みぎや！！』

十代乙女の声とは思えないものが聞こえて候補生+深螺が雪崩込んできた。

なにやってんだこいつら・・・。

『失礼しましたあ！！』

「まあいい、入っていけ」

『え？』

みなさん仲良いですね、さっきからぴったりハモツてますけど。

てかうらとシャルロットはなぜに顔が赤いんだ？いや、声だけでどうやらなにかしらを詳しく想像したらしい。

お前らなあ・・・。

「まあいいや、ほい」

それぞれに飲み物を投げ渡す、しっかり選ぶ必要の無いように。
さてと、わかってますよ。

「一夏、汗かいたろ？風呂行こうぜ！」

「そうだな、確か夜空が綺麗とかって聞いたぞ？」

こいつが単純バカで良かった。うん。

「じゃあみんなくつろいでくれ、むずいかもしれんけど」

44・今宵はにぎやか(後書き)

次回は・・・おク、そついでにやります

45・男性陣入浴中（前書き）

今回男性陣の出番はありません（描写が残念クオリティです）

45・男性陣入浴中

「くく、美味しい。お前らもいつもどおりに騒げ」

既に缶ビールの空き缶が二つ並んでいる。その隣には流が作った軟骨の唐揚げが置いてあった。

「いえ、その……お酒飲んでもいいのですか？」

「仕事中は……?」

にやりと笑うと千冬が一飲みして口を開く。

「口止め料は払ったぞ？」

『あっ!』

全員が流に渡された飲み物を見る、去り際ににやりと笑った流の顔を思い出しながら。

ラウラにいたっては先ほどから信じられないのか動きが止まっている。

「……」

「どうした、私は作業オイルでも飲むように思ってたか？」

「い、いえ」

千冬が笑いながら足を組みなおした、あぐらをかいているのは変わらないが。

「さてと、お前らあいつらのどこが良いんだ？」

『!?!』

いきなりの質問に硬直する全員、深螺以外が顔からボンツと音がした。

「べ、別に一夏が弱くなっていたからで……」

「な、流には助けてもらっただけで……」

「一夏さんにはクラス代表ですからしっかりしてほしいだけですわ」

「優しいところですよ、一夏は……」

「女装していたとはいえ、技師の強さに」

「前世でも片思いでしたからね……」

笑いながら千冬が真剣な顔つきでしゃべった。

「それではあいつらに言っておこう、正直に言う奴がいたとは思わなかったがな」

けたけた笑いながら再びビールを今度は喉を鳴らして飲む。
おそらく誰もが惚れ惚れする飲みっぷりだろう。

そして、何気ない感じで一言。

「まあ、家事はできるし片やマッサージが得意に最強か。付き合え

る女は羨ましいな、欲しいか？」

『くれるんですか？』

いきなり飛び掛るかのように身を乗り出した女子一同、その目はキラキラとしていた。

そのとき浴場にいた男子二人はいきなり『ビクッ！』としたとか。

「誰がやるか、奪うくらいで行かなくてどうする。自分を磨けよ小娘？」

一気に「え〜（そこまで言ってそりゃないよ的な）」と言って落ち込んだ。

そのころ一夏は女体化流に弄られていたとか・・・。

「誰がやるか

45・男性陣入浴中（後書き）

次回は……ついに……？

46・天災・・・なんか嫌い(前書き)

東さん登場!

46・天災・・・なんか嫌い

「あゝ、今日は実習だったけか？」

「そうだよな、千冬姉？」

「ああ、へまはするなよ？」

確か、専用機持ちはパッケージの試験運用だったけか。戦乙女工業から来てるって聞いたし、真面目にやるかなあ。

まあ、まずは朝食だ。なにかな？

で、廊下を歩いていたら庭にウサ耳が生えていた。

うん、機械的なのだから安心してくれ。別に本物じゃないから、でもなんで？

引っ張ってくださいってご丁寧に看板まである素敵仕様・・・わけわからん。

「一夏、心当たりあるか？」

「う、うん・・・まあ。箒、抜いてもいいか？」

「勝手にしろ、関係ない」

ふむ、箒関係のなのか？え、でもウサ耳とどう関係があるんだ・・・
・やっぱりわからん。

てか地面から生えるウサ耳とかシユール過ぎるぞ、うん。

「まあ、いいや。抜くぞ？」

「おう、なんかやらないと気になって仕方ないよ」

一夏が庭に降りてウサ耳を引っこ抜いた「キイイイイーン」は？

「流、危ない！」

「は？何？つてぶぎや！！！」

なにか重いものが上に乗っかってきた、なんだこれ。てか、きつい・・・ぐふっ！

「やあやあ、いっくん久しぶり〜。おひさ〜！」

「は、はい。束さん、えと、下敷きになってるんで助けてあげてください」

「誰だコラ〜！いきなり下敷きにするんじゃないよ、てか束！？」

重い、痛い、リアルタイムで霊気が減少してるんですが。てかマテゴじゃなかったら死んでたぞこれ。

いつのまにか通りかかったセシリアが青い顔してるし・・・一夏は引きつつてるし。

「でやあああいいい！！！」

無理やりロケット（これってニンジン？）を持ち上げて立ち上がる。お、重かった。

「人が違ったら死んでたぞコラ！」

「なんだよ君は、避けられないのが悪いでしょうが」

は？ナニ言ったこいつ、そりゃ避けられないのも悪い・・・いや、予測不能だつてあれは。

つつかなんでこの人はこんなに冷たいの、てか全然罪悪感がないだる・・・。

「あんなの避けれるわけないだろうが！」

「な、流。待てって、東さんも！」

「ん、流……生身でISを倒したっていつ？」

なんだ今度は、いきなり目がキラキラしてるぞおい。なんなんだこいつ。

「りゅくくんよろしく、さっきはごめんね」

「！？は、はあ」

ナニが起こった？………（唐突すぎて思考停止して
います）

「じゃあ、またあとでね。篝ちゃん！」

一気に走っていった、もう見えないとか……。

「………なんか疲れた」

「すまん」

「あの方が篠ノ之束博士ですか？」

「うん………」

なんか、苦手だなあいうタイプ。てかあれが本当にISの開発者なのか？

うん、疑いたくなるなあ……本当に。てかあとでって言ったけどまた来るのか？

46 天災・・・なんか嫌い(後書き)

さあ、実習だよ

47・そういえば俺達も・・・(前書き)

おお、もうこんなに書いてたのか・・・「二人目の適合者」越えるのも時間の問題かな？

47・そういえば俺達も・・・

「あゝ、それでは実習を始める。篠ノ之、お前には専ら」

「ちゅちゃんー！」

ズドドドドドドと音が聞こえる、この声はさっきのあれだね。なんかもついいや。

姉さんも嫌そうな顔してるし、てか鬱陶しいんですね。わかります。

「さあさあ、ちゅちゃん。はぐはぐしよう、愛をたしかめ、ぶへっ
！」

「黙れ、邪魔だ。早く帰れ」

見事に受け流して地面に埋めた、なんて無駄の無い動き！

「あの、部外者は立ち入り禁止ですが」

「なにを言ってるのかな？ISの関係者は私を置いてだれもいないよ？」

「は、はい、そうですね」

山田先生乙、できればもう少し粘ってほしかった。

まあ言ってることは正しいけど・・・。。。。
てかほとんどの人が状況把握してないじゃん、みんな「なにこいつ？」って顔だし。

「自己紹介しませんか？」

「そうだねー一応やらなくちゃねー。みんなのアイドル東さんだよ
はるはるー。おわり」

え、それでいいの？ 適當すぎじゃないか、一夏のほうがまともな自己紹介をして・・・睨むな睨むな。
みんな「え、なに今の？」って感じだし・・・ひでえ。

「あゝ、こいつは無視していい。 実習を始める、山田先生補助をお願いします」

「は、はい...」

山田先生が走っていった、がんばってください・・・本当に。

「さてと、束」

「はいはい、篝ちゃんにプレゼンター！！えい」

なんかポケットからボタンを出して押した、なにその古風なボタン。しつかり「ピポッ」って音したし・・・ん、なんか飛んでくる。

おお、目の前数センチの場所に金属製の大きいカプセルが落ちてきた。
俺って嫌われてる？ ひとまず避けなきゃ頭部にハッチがぶつかるな、うん。

「さあ、篝ちゃんの専用機。『紅椿』！ ちやつかり第四世代機〜！」

今、第四世代機って言ったぞ・・・まあ蒼月は3.5世代だけど。開発者は大丈夫なんだろうか？

ひとまず、世界中の開発者の苦労が意味なくなった・・・乙です。

「え〜と、すぐに設定するから篝ちゃんはこっち来てね〜」

「は、はい」

これで筈も専用機持ちか、がんばってほしいね。うん。
じゃあ、こっちはパッケージのテストでもしようかなあ。
あ、飛んでった。

おお、速いなあ。………なにかおかし………。
ん、なにかあったのか慌てた顔の山田先生が走ってきた。

「織斑先生！」

「どうした山田先生……わかりました」

む、軍用手話で会話し始めたな。実験機の暴走、共同開発、特務レ
ベルS、至急対処。

こりゃあ、厄介なことになるな……ラウラも顔つきが変わった。

「全員聞け、実習は中止。指示あるまで自室にて待機しろ、違反者
は拘束する。いいな？」

疑問の声が上がるが、真剣な声によってすぐさま撤収を始める。

「専用機持ちは着いてこい」

「了解」

「了解しました」

元ドイツ軍在籍の俺とラウラが返事をする、他のみんなは状況を掴
めていないらしい。

さっさと織斑先生と山田先生が歩いていってしまった。

「行くぞー夏」

「あ、ああ」

これがおそらく――夏は初の実戦になるだろうな。

47・そういえば俺達も・・・(後書き)

ついに・・・福音戦です！長くなりますよー！！

早く四巻買わなきゃ・・・(汗)

48 プリーフィング1 (前書き)

気じけぼすしく異こ

48・ブリーフィング1

今現在、緊急に会議室とされた大広間に専用機持ち8人が集まっていた。

目の前には空中投影ディスプレイが各種情報を映し出している。

「本日午前11時にハワイ沖で試験稼働中だった、アメリカ・イスラエル共同開発『シルバリオスベル銀の福音』が制御下を離れてこちらに向かっていく」

「国境付近を教師陣が空域封鎖していますので・・・」

「そこでお前達専用機持ちに対処してもらおうことになった」

「夏は状況を良くわかっていないのか、他のメンバーと違い戸惑っていた。」

「まあ、実戦経験が無いからなあ。」

「目標の詳細スペックデータの開示を要求します」

「セシリアが手を上げた、まあそこがわからなければ作戦の立てようがないからな。」

「わかった、ただし口外するな。もし機密情報が漏れた場合は査問委員会による裁判と最低二年の監視が付けられる」

「わかりました」

織斑先生がコンソールを操作する、すぐに手前に詳細情報が開示される。

「広域殲滅型か、特殊兵装が厄介だな」

「攻撃も機動も甲龍より上ね、少し不利かな」

「防御パッケージでも数回が限度だな、長時間はきついね」

「格闘性能はこれだけではわからないな、偵察はできないのですか？」

「無理だ、現在も超音速で飛行を続けている。最高速度は時速2450キロを超える、アプローチは一度が限界だろう」

専門的な会話に一夏が困っている顔をしている、仕方ないか……。

「一回きりのチャンスですので……一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

その場にいる全員の視線が一夏に集中する。

「え、俺？」

『当たり前だ』

「お前の零落白夜で落とすのですよ？」

「それしかありませんわね、ですが……」

「どうやって目標空域まで運ぶかだな、誰が適任だ？」

「超高度ハイパーセンサーも必要だし、目標に追いつけなければいかな」

そんなとき、織斑先生が一夏に向き話しかけた。

「織斑、これは実戦だ。無理強いはせん」

一夏は一回うつむき、少しして向き直った。

「いえ、俺がやります！」

「では決まりだな、現時点で最高速度を出せるのは誰だ？」

「運搬も視野に入れた場合は『ブルー・ティアーズ』が適任です。丁度高速戦闘用の『ストライク・ガンナー』が送られてきています。高感度ハイパーセンサーも搭載しています」

「高機動戦闘の訓練は何時間だ？」

「二十時間です」

「ふむ、ならば適任か。ではサポート」

いきなり深螺の後ろの天井の板が外れて東博士が入ってきた、なんだこんなときに。

「え、お帰りはこちらです。ご利用ありがとうございました」

「うんうん、楽しかったよ。じゃあね……って違うよりゆうくん！」

くそ、失敗した。途中まで良かったのに！

「ちゅちゃん、もっといい作戦がなうぶりんでいんぐ！」

「邪魔をするな、帰れ」

「あの、作戦参加者以外は入ってはいけませんので・・・」

山田先生の努力も意味がなく、無駄に無駄の無い動きでひよいひよい避ける東博士。

無駄に無駄の無いとか、一夏じゃあるまいに・・・つまらなくてすみませんでした。

m (| |) m

「断然、紅椿が適任なんだよ！」

む、確かにあの性能ならそうかもしれないな・・・。

「第四世代装備の展開装甲を使えば、余裕でやれちゃうんだよ！」

「展開装甲・・・なんですかそれ？」

全員がその単語に対して疑問符を浮かべていた、ユーンガンムみたいになるのか？

「第四世代装備ってことは、パッケージ換装の必要無しに全戦況対応が可能ってことですか？」

「そうだよ、良く知ってるね。ちなみに紅椿は全身が展開装甲になってるんだよ。全開にすると飛行速度は倍ブッシュなんだよ！」

は？ただでさえ現行機を越えてるのに倍だと・・・てか、マジで全世界の開発者さんの頑張りを無にしやがったこいつ。代表候補生のみんななんか顔面蒼白だよ、なんともいたたまれないなこれ。

「実験として白式の雪片式型に組み込んでいます」

「ちょ、全身がそれってことは……」

「そ、実質最強だね」

『Orz……』

専用機持ち落ち込むの図の完成、出鱈目すぎて笑いもできん。しつこいが、全世界の開発者さんの苦勞が無意味になった。もう……オワタね、うん。やっと試験運用してるところなのにね、これからつてところなのにね。

「なんてことを……」

「ん？どうしたのみんな葬式みたいな空気して……誰か死んだの？」

「やりすぎるな、前にも言っただろう」

「そうだったけ？ごめんごめん」

なんにも悪びれていない様子で頭をこつんと叩く東博士……。ある意味、開発者だと実感した。でも、天才じゃなくて天災だなの人は。

織斑先生にスペックの説明してる、聞こえてくる数字がもう怖い。

「あ、みんな安心してね。完成版じゃないからそこまでじゃないよ？まあ、今回の作戦は余裕だけど」

安心できないって、無印マクロスのころにYF124を持ってつたくらい安心できないって。

あ、意味わかります？わからなかったらググってみてね？

ん、説明終わったみたい。

「調整にはどれくらいかかる？」

「ざつと七分！」

「そうか、ならば・・・」

うん、外されたセシリアが可哀想だ。すげえ不満そうな顔してるもん。

気持ちはわかるけどさ・・・。

「オルコット、インストール量子変換はしているのか？」

「ぐ、まだです」

痛いところを突かれたな、インストールは予想以上に時間がかかる。武装くらいならすぐだが、パッケージとなると追加装備なだけあって大変らしい。インストール後の設定項目も多いし。

「では、次にサポートを決める。運搬を考えずに最高速度が出せる奴は手を上げる」

「はい、『幻影』を装備した蒼月が適任と思われます」

「訓練時間は？」

「ざつと五十時間です」

「では、織斑・篠ノ之・西川の三名で決行する。各員は準備完了させて三十分後に指定区域に集合、解散！」

48 プリーフィング1 (後書き)

明日にでも四巻買わなくちゃ・・・ (汗)

49 作戦決行直前（前書き）

駄猫様、感想ありがとうございます！さあさ、始めますよ〜

49・作戦決行直前

近くから機械音がするが気にせず蒼月の調整をしていた。

「あゝ、なんてもの送ってきたんだよ戦乙女工業……」

追加パッケージの『幻影』を装備した場合には、現行の第三世代機を余裕で越える性能だっというのだから驚きだ。

あれ、俺って代表候補生じゃないのになあ……。

「いつまで見ているのだ一夏!」

「ああ、悪い」

なにやってんだよ……なんか大丈夫か？

「一夏、セシリアにでも高速戦闘について教えてもらえ」

「ん？ああ、わかった。セシリア」

ふう、これでよし。後は……？

一夏もみんなからレクチャーされてるみたいだな、まあ大丈夫かな？

うお、なんだよこのスペック……調整によっちゃあれと並ぶぞ。

流石3.5世代機……やりすぎだぞこれ。

そんな感じで世界中の開発者に思いを馳せていると、一夏が来た。

「流、行こう」

「ああ、わかった」

場所は変わって海岸、指定された集会所だ。
既に日は傾き始めている、今いるのは三人だけ。実戦経験は俺以外
は無い。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「蒼月、頼む」

瞬間、そこだけが光りに包まれて三機のISが出現する。
ステータス確認をしていると、通信があった。

「受諾、西川です」

『オープンでしているから別にいい、各員聞け』

「はい」

「わかりました」

『前線指揮は西川に任せる、いいな？』

「了解」

『篠ノ之、貴様は実戦経験が皆無だ。いつ不測の事態が起こるかも
しれん、用心しろ』

「はい」

言葉は真剣だがさきほどから浮ついている、なにも無ければいいの
だが・・・。

『西川、織斑。篠ノ之は調子に乗っている、頼むぞ』

「わかっています」

「了解」

『それでは、作戦開始！』

一声が合図となり、一気に上昇する。

白式を運搬しているとはいえ、紅椿の速度は想像を絶するものだった。

「会敵まで十秒、行くぞ！」

『ああ！！』

49・作戦決行直前（後書き）

ついに始まった!!

50・落ちる月と蒼い空（前書き）

開始です！

50・落ちる月と蒼い空

「イゲンションブースト 箒、瞬間加速！一夏、構えろ！」

「了解」

「決める！」

目の前を流星のごとく紅椿が走る、感知した福音に向けてこちらから牽制でレーザーを撃つ。

追加で加速して肉薄した雪片が斬りつけるといふ瞬間、急加速で福音がミリ単位で避けた。

「二回目に繋げ、焦るな。箒、援護射撃」

確実な指示のおかげか、落ち着いた状態で二人はこなしている。しかし、箒への心配は拭いきれない。

「敵機確認、迎撃モードへ移行。シルバーベル 銀の鐘稼働開始」

福音から電子音のような声が聞こえる、抑揚のない電子音ゆえに得体の知れない恐怖を感じる。

だが、箒が突っ込んでいつてしまった。馬鹿野郎！

「待て、下がれ！」

「問題ない！」

勢いに任せて斬りかかった箒、だが振り下ろした雨月は捻じ曲がるような軌道で回避した福音の残像を掠っただけだった。

慣性制御をしているISとはいえ、ミリ単位での移動は至難の業だ。

それを難なくやってのけたのだ。

「あれが他方向推進装置か。マルチスラスター一夏、援挟み込むぞ！」
「オツケー！」

体勢を立て直した筈も合わせて、急降下するように福音を取り囲む。

「タイミング、3、2、1・GO！」

ラグナロクと雨月、空裂によるレーザーの豪雨が福音に降り注ぐ！
上空からの広範囲攻撃により、福音に微量ながらもダメージを確実に与え続ける。

「反撃開始、砲門展開」

特徴的な電子音とともに背部の大型翼から水色のエネルギー体が大量に射出される。

一つ一つが羽のような形状であるが、掠った脚部が軽く吹き飛んだ。
爆発するエネルギー弾、それが暴風のように浴びせられる。

「散開、様子を見る！」

「うおおおおおー！」

「一夏！？」

視界の端で一夏が急加速していた、その先には……船？密漁船か……

なぜここに、海域は封鎖されているはずだぞ！

「てえい！・・・しまった！」

船へと向かうエネルギー弾を切裂いたところで雪片が閉じ、近接ブレードに戻る。

エネルギー切れだ。くっ、作戦失敗か・・・。

「一夏、犯罪者など放っておけ！」

福音を意識していない筈にエネルギー弾が向かう。

増設されたブースターを噴かすが、ここからでは間に合わない。くそ！

弾幕に包まれた筈を一夏がどうにか守っていた、だがエネルギー切れの装甲ではそんなに持たない。

すでに紅椿は具現化限界をしている。それに白式もあの状態で瞬間加速インフラストをしたのだ。爆発式の弾をシャワーみたいに浴びてはたとえ絶対防御分が残っていても意味が無い。

リミッターを解除し、悲鳴を上げる自身の体を無視して白式の前に立つ。

「作戦失敗だ。筈、一夏を連れて撤退しろ！時間稼ぎはしておく！」

動かない、一夏は気絶しているようだ。無理も無いか・・・一刻も早く離脱しなければ全滅だ。

それだけは避けなければいけない。

「感傷に浸るのは後にしろ！行け！」

創造主クリエイターを発動させ、無理やりに紅椿にブースターを取り付ける。そのまま強制的に離脱させる。

「ふう、相手は俺だぞ」

「L A . . .」

マシンボイスを響かせて福音が光弾を驚異的な連射でばら撒いてくる。

すでにシールドエネルギーは残り少ないが、状況とは逆の心は落ち着いていた。

月下に重力場を付加して、襲い掛かってきた光弾を全て叩き切る。

「所詮は機械だ、終幕と行こう！」

『幻影』によって強化された全身のレーザーブレードを展開、両手にもアブゾーバーを握る。

瞬間、二機の影が交錯した。

福音は片翼を切り落とされ、流は腹部を存在しないはずのブレードによって貫かれていた。

「なっ！？バカなことがあるかよ……」

滞空する福音とは裏腹に蒼月がパイロットの血を散らせながら海面へと落ちていった。

数秒後、流は海へと飲み込まれた……。

残された福音はその場を飛び去り、静寂だけが場を満たした。

51 不死鳥の飛翔（前書き）

あれ、エリーは？

51 不死鳥の飛翔

「もう少しですよ、頑張ってください」

気を失っている流は答ええない、今も腹部から鮮血が溢れている。

「む、技師！？君はここの・・・」

「危険だったので運ばせてもらいました、早く治療しないと！」

司令室に一報が入ったのはすぐのことだった。行方不明になっていた流が重傷だが運び込まれたのだ、前日に紛れて遊んでいた少女によつて。

「腹部から多量の出血か、今は安定したが・・・」

「まだ安心できませんね、神無さんの話では霊気が大量に減少しているらしいですし」

自身の体が霊気で作られているマテリアルゴーストはある程度のダメージなら、霊気の減少で抑えられる。

しかし、限界以上に減ると実体を保てなくなり消滅する。具現化している状態での致命傷はたとえマテリアルゴーストであつても多大に霊気の損失がある。霊体には存在限界というものがあり、存在できる最低霊気量がある。

現時点での流はギリギリで持ちこたえている状態だ。

だが、不明な点があつた。

福音には近接武装が搭載されていないのだ、マニピレーターでの

格闘はできるが剣状の武装はスペックカタログには載っていない。確認をとったが射撃試験であり、装備していないとのことだった。

「打つ手なしか、切り札は意識不明に指揮官は重傷・・・」

医務室に割り当てられた部屋で箒はうつむいていた。

『力を手にしたら弱いヤツのことが見えなくなるなんておかしいぞ、箒らしくない』

また、周りが見えなくなってしまった。最愛の人が傷つくという最悪の結果に。

自分と一夏を守り退避させてくれた流も運び込まれたが重傷らしい。私が力を持つことはいけないのだろうか、ついそんな考えに行ってしまう。

「あゝあゝ、わかりやすいわねあんた」

「・・・私はもうISには・・・」

バシン

「所詮、戦うべきときに戦えない輩か」

「・・・どうしろというのだ、敵の場所がわかれば私はすぐにでも行く！」

「はあ、めんどかった」

「どうということだ？」

まさか試されたのか？だが、もう気持ちは揺るがない。

「捕捉が完了した、ここから30キロ先の海上で停止していた」

「こっちはもう準備終わったよ」

「すぐにでも出撃できますわよ」

「じゃあ、作戦会議ね」

「ああ！」

流は星空が広がる空間にいた。いや、正確には星空が広がる空間に立っていた。

空気と地面はあるらしく歩くことができた。

「おお、綺麗だな」

五分後……………

「景色が変わらん。飽きた、もう寝る。てか帰る」

「ちよつと話聞いてくれないかな？」

「お？」

なんか声があったので振り返ってみたら、なんか女の子がいた。誰こいつ、てかここどこだよ。

「なにか用？早く帰らなきゃいけないんだがな」

「力が欲しい？」

「力？うゝむ、難しい質問をするな」

少しして口を開く。

「大切な人たちを守る力かな、俺ができる範囲でいいから守りたいんだ」

「ふふふ、蛭に似てるね。みんな行ったみたいだよ、いつてらっしやい」

「ああ、じゃあな」

「ん？」

眼が覚めた、隣には一夏がいる。まだ起きれないのか……やばい、福音はスペックどおりじゃない。急がなければみんなが危ない！

蒼い翼を羽ばたかせて一つの蒼い光が飛び立った。

51 不死鳥の飛翔（後書き）

気づけばエリーがない……

52・蒼い鳥、舞い降りて（前書き）

まがまがですが書き直す予定です

52・蒼い鳥、舞い降りて

6人の連携により、福音を撃破。

だれかが「わたしたちの勝ちだ」というかわないかの瞬間。

福音が落下していった海面が爆ぜた。

同時に付近の海水が巻き上げられ、エネルギーの翼を生やした福音が飛翔した。

「まずい、二次移行だ！」
セカンドシフト

ラウラが叫ぶも言い終わったころには目前に近づかれていた。

後退しようとする直前にエネルギーの繭に包まれて、全身を切り刻まれる。

そして、標的を変えた福音が繭を開放した瞬間。

「蒼羽斬刃開放」
ハツバシロウ

青い羽のようなものが福音に向かって放たれた、そのまま福音の片翼を吹き飛ばす。

気づけばラウラは見覚えのある人物に抱きかかえられていた。

「大丈夫か隊長？」

「ぎ、技師！？体は？」

「まあ、なんとかな。さて、リベンジと行こうか」

蒼月はパッケージである『幻影』を二次移行により取り込んでいた。
アンロックユニット
通常の機械的な非固定部位は生物的な蒼い翼になり、全身の装甲が開きその間から蒼く光るフレームが見えていた。

蒼月の真の姿、『蒼月・不死鳥』

体勢を立て直した福音がエネルギー翼を展開し、飛び掛ってくる。

「準備はいいか？」

『ああ！』

全員が立ち上がる、さきほどまで疲弊していた顔には希望があった。

武器を構え直し、福音を見据える。

「決戦開始だ！」

53・飛来する白き騎士

「全機に通達、福音はスペック以外の武装装備の可能性が高い。注意してくれ」

『了解』

深螺とセシリアの正確な狙撃、シャルロットとラウラの中距離砲撃、鈴と篝の近接攻撃。

さきほどとは見違えるような動きに福音は押されていた。

動きが止まった福音へ、流が超高速で迫る。

その両腕には五本二対のエネルギーブレードが展開されていた。

「せあああああー!!」

紅椿に並ぶ、もしくは超えるような加速で福音へと目掛けて接近する。

いつの間にか生物的な翼は機械的であり生物的なデザインに変わっていた。

その後部からは蒼い光りが放出されている。

福音と蒼月が超高速で交錯する。

二連続の斬撃が福音の装甲を削り取る、福音の剣撃は弾かれたかのように効かなかった。

「対処レベルAに認定、最大攻撃力を使用する」

「荷電粒子ギガランチャー開放！」

福音がエネルギーの繭に包まれた瞬間。

蒼月の背部アンロックユニット非固定部位のバイザーが開き、巨大な砲身が現れた。

砲口に紫色のスパークが発生し、収束を始める。

福音の全方位攻撃が発射されると同時に荷電粒子の奔流が二つ奔った。

「うおおおお!!」

福音を荷電粒子が焼く、残された最後のエネルギー翼が崩壊した。

「……さあて、出番だぞ。ヒーロー？」

「ああ、そうかもな」

白式を纏った一夏が飛来してきた、その瞳は決意に染まっている。

「一夏、一夏なのか……？」

「ああ、そうだ……はいこれ。誕生日おめでとう！」

そう言っで一夏が手渡したのはリボンだった、粹だねえ。

筈も嬉しそうだ、まあみんながせめて今やるなって顔してるけど。

「あ、ありがとう……」

「じゃあ、行くよ。まだ終わってないからな」

「おし、終わらせよう！」

53・飛来する白き騎士（後書き）

さあ、次回。決戦！蒼月がちとすぎる気がするけど、心配無用！だ
といいなあ……………（汗）

54・決戦・対IS戦 洋上の銀影は散り(前書き)

才り展開 k t k r

54・決戦・対IS戦 洋上の銀影は散り

白式は二次移行セカンドシフトによって、新兵器『雪羅』が装着されていた。

「もう仲間をやらせねえ！」

「ああ、ここで決める！」

一夏の思いに答えて雪羅の先端から全長1mを超えるブレードが現れる。

同時に蒼月の両腕部からエネルギーブレード、背部に翼が現れる。

「さて、お返しはたっぷりさせてもらおう！」

両翼がはばたき、福音に肉薄する。

反撃のために展開されたブレードを容易く破壊する。いや、ブレードが砂のように拡散した。

「うおおおおー！！」

流が一撃を加えた瞬間、逆方向から雪羅のクローが更に装甲を大きく削り取る。

続けて形状を変えた雪羅が荷電粒子砲に変化する。

「一斉砲火！」

『了解！』

僚機から、高火力の砲撃がぶつけられる。

「おわらせますわ!」

「これで決める!」

「ここで終わらせるよ!」

「借りは返します!」

全てが命中し、福音が崩壊し操縦者が落ちていく。

「ツメが甘いよ、まったく」

「終わったのか……」

「ああ、そうだ」

『Materialization・System・Active』

パイロットが抜け落ちた福音が電子音声を響かせる。

「え?」

「マテリアル……まさか!」

「みなさん、逃げて!」

だが、福音から発せられるプレッシャーに全員が圧倒されて動けない。

その間にも福音が形を変えていく。

「そんな、ISとマテリアルゴーストが融合なんて……」

それは、最強であり最凶の兵器の誕生の瞬間だった。

54・決戦・対IS戦 洋上の銀影は散り（後書き）

さあ、初めてのオリ展開！上手くできるだろうか……

55・届く思い、閃光に飲まれて（前書き）

ついに決着！

55・届く思い、閃光に飲まれて

「どうやら、狙いは俺みたいだな」

「え、どうして？」

「……一夏、そんなだから馬鹿って言われるんだぞ。俺に。」

「マテリアルゴーストは基本的にマテリアルゴーストでしか倒せない」

まあ、不意打ちされた場合は別だが。臨戦体勢では確実にそうなる。

「……でもなんで流を？知ってるのは俺らだけだろ」

「そこまで知るか。まあ、どっかのIS関連だろうな。やられるわけはないが」

「流、来ます！」

福音、いやだったものは全身が獣のように変化し殺気を向けてとびかかってきていた。

「くそ、意思疎通できればよかったが……仕方ないか」

両腕部からエネルギーブレードを展開、蒼月のリミッターを解除する。

「さっさと終わらせる！」

「……！！！」

言葉にならない雄たけびを上げて福音が斬りかかってくる、すぐさ

ま襲い来る凶刃を捌き続ける。

「でやあああああ!!」

慣性を利用した強力な一撃を叩き込む、だが一部が凹んだだけですぐに修復された。

ズガン!

「少しは頼ってください、技師は一人ではありません」

「まったく、一人でかつこつけてんじゃないわよ!」

斬られる瞬間、福音をリニアガンと衝撃が弾き返した。その方向を見るとラウラと鈴がこちらを見つめていた。つい笑ってしまう。

「ははは。まったく、だったら頼むぞ。福音を開放する」

さきほど鏢迫り合いをしていた間、気のせいかもしれないが「助けて」と聞こえたのだ。

おそらく、憑いているヤツにコントロールを奪われているのだろう。自らの体を誰かに動かされるなんてことほど気味の悪いものはない。

「俺達も手伝うぞ」

なんとまあ、俺ってなんかしたか? まあ、嬉しいな。

「じゃあ、これが本当の決戦だ! 行くぞ」

複雑な軌道を描きながら飛行する福音をスターブレイカーとウィンドスピア？のレーザーで串刺しにする。
体勢を立て直す暇を与えず、超連射の弾丸の雨と高出力リニアガンが襲い掛かる。

「これでええ！！」

零落白夜の刃と二対の刀が福音とマテリアルゴーストを切り裂き、分離させた。

「上等！これで決める！！」

流の思いに答えるように紅が現れた、刀身は通常の赤い光りではなく蒼い瞬きが包み込んでいた。

いや、蒼月が蒼い輝きを放ちヤツと相対していた。
流に握られているのは、ただ標的を消し去るための刃。

「終わりだああああ！！」

全力の一閃、砕け散る結晶の反射光が流を照らしていた。

55・届く思い、閃光に飲まれて（後書き）

や、やっと終わった・・・疲れました・・・

56・帰ってきたら、この始末／(^o^)/ (前書き)

ふむ、一段落ついたら転送前のストーリーもやろうかな・・・あ
くまで」かも」ってところですが

56・帰ってきたら、この始末＼(＾o＾)／

「作戦完了」と言いたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐさま反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意しておいてやるから、そのつもりでいる」

「はい……」

予想外の事態も対処した戦士たちの出迎えは、それはそれは冷たいものであった。

腕組みで仁王立ち状態で待っていた織斑先生にきつく言われ、勝利の感触もおぼろげになりつつある。

現在は大広間で全員正座、既に40分は経過している気がする。

セシリアの顔色が真っ青になり、流の体が少し透けているのが危険信号の目安だ。

「あの、織斑先生。そろそろこのへんで……。け、怪我人もいますし……。ねえ？」

「ふん……」

怒り心頭の姉さんに対しておろおろばたばたしている山田先生。結構前から救急箱や水分補給パックを持ってきたりして忙しそうだ。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断します。ちゃんと服を脱いで見せてくださいね。……。あっ！男女別ですからね！わかっていますか二人とも！」

言われんでもわかつとる、てか『脱いで』のところで女子勢がそれと

なく体を隠したのがグサツときたぞ。

俺ってどんなふうに見られてるんだろつか……シヨック……。なんか一夏もうつむいてるし……。同じことでも考えてたんだろつか。

「それじゃあ、みなさん最初は水分補給してください。夏はそのあたりを意識しないと、いいですね？」

はーいと返事をして、それぞれ受け取ったスポーツドリンクに口をつける。

体に考慮してかぬるめの温度だった。

「いつつ、口切ったのかよ」

がんばれ一夏、後で醤油にわさび入れておいてやるよ（笑）

『んっ』

『早く出て行け！！』

いきなり叩き出された、く、怪我人になんてことを……。まあ、いいか。

「守れたよな、今度は……」

過去を思い出しながら呟いた俺の上では満月が浮かんでいた。

56・帰ってきたら、この始末／＼(^ o ^)／(後書き)

まだ終わらない臨海学校！

57・帰還した夜に（前書き）

やべえこの展開

57・帰還した夜に

夕食を終えた俺は夜の海へと繰り出していた。

「まだまだ未熟か……、もつと強くならなきゃな」

「あんたは人に頼ること覚えなさいよ」

なんか後ろから声が……鈴？

どうしたんだろうか……。

「そうだな……」

「そうよ、あんたは一人じゃないんだから」

「ああ、実感したよ。……その、心配かけてすまん……」

実際、本心だった。もし少しでも深く斬られていたら即消滅の可能性もあった。

どれだけ心配したかなんて予想もできない、ただ家族が受けた気分と同じなのはわかる。

「ほんとうに心配したんだからね……」

そのまま鈴が抱きついてきた、その目は涙が溢れている。

「……すまん」

「もう、誰かがいなくなるのは嫌なのよ」

そっと抱き返す、俺がいることの証明に。

優しく、包み込むように。

「あ……」

「あ、あのさ……」

「ん？おお、すまん！」

思い返せばとんでもないことをしていたので驚いて反射的に離れる。なんか寂しそうな顔をしていたが多分気のせいだろう。

「……あたしのこと意識する？」

「は？いきなりなん」答えて「むう……」

一体どうしたんだ、こいつは。なんなんだよ、てかなにが起こってるんだ！？

あわわわわ……おそらく生きてきて（？）一番パニックした顔をしているに違いない。

「……まあ、うん……」

波音が響き満月に照らされる幼馴染はとても綺麗だった……つてなに見とれてんだ俺は！

こいつが好きなのはあの馬鹿だぞ！お、落ち着け俺。……。

「そ、そうか。ふふっ、嬉しいな」

「？」

わ、わけわからん。その質問はあいつにやるべきでは……む？

「技師はどこだ、む、神無か」

「あなたまで、なぜここに」

げ、あいつらなぜにここに来るんだよ。い、移動しよう。

「ちよい移動しよう」

「へ!？」

鈴の手を掴み岸壁のへこんだ場所に移る。ふう、これでゆっくり話せる。

「え、いや、いきなりこんなとに・・・」

なんか盛大に勘違いしてるっぽいヤツが一名・・・。

・・・なぜに目を瞑ってこちらを向く？

「あ、あのさ」「

・・・なんか真剣な顔をしている鈴から顔を逸らすことができなかった。

し、仕方ない男は度胸だ。なんか違う気がするが・・・。

「あたしさ、好きな人がいるんだよね」

「ん？一夏だろ」

なんだ、違うのか？

「えとね、その人ってすごい優しいの。どんなときでも助けてくれて」

「ほう、良い奴だな。見習いたいもんだ」

ふむ、すごい奴がいたもんだ。

「気持ちを伝えたいけど、もし断られたら今の関係が壊れそうで怖いの」

「女は度胸と言つが、そんなもんか？」

なぜこつちを見る、なんかため息ついてるし。

「でもね、今回のことで一歩進める覚悟ができたんだ」

「おお、いいじゃんか。」

「あはは。でもね、その人は気づいてくれないんだ。一夏みたいに鈍感で」

むう、一体どこのどいつだよ。こんなに好かれてるのに気づかないなんて、鈴が可愛そうじゃないか。

・・・なぜこつちを睨む。

「ライバルも多いんだけどさ。あたしががんばるから！」

「ははは、鈴にそこまで好かれてるなんて幸せ者だな。がんばれよ、応援してるぞ」

「うん、がんばるから！」

で・・・さつきから滞空してるのはなによ。

それをよく見たらビームブレードビット・・・これって残月の・・・。

「うわあー!!」

足元に刺さった・・・うわあ。

「流、なにをしているのですか？」

「他の女にうつつを抜かすとは、嫁失格だぞ」

こっちにブリッツとウィンドスピアが向いてる。ひい！！

「鈴、逃げるぞー！！」

「ふひゃあ！？」

鈴が驚くのも無視して抱きかかえ（お嬢様だつこで）後方からの砲火を避けながら走る。

ちよ、やめろ。今度こそ消える、死んじやう（？）

その後、命を懸けた鬼ごっこは一時間に続いた。

57・帰還した夜に（後書き）

流工・・・・・・・・鈍感すぎるよ・・・

書き直しました！

58・帰還・・・いや、学校にだよ？（前書き）

臨海学校編終了です！

前話を書き直しました、展開がおかしかったので・・・

58・帰還・・・いや、学校にだよ？

「あ、暑い。なんか飲み物くれないか？」

命を懸けた鬼ごっこが終わり、仁王立ちしていた姉さんに説教を一夏と仲良く貰い寝たのが日付が変わってからの午前二時。それから六時からの罰としての労働・・・正直きつい。実睡眠時間が四時間、俺にとっては半端なく辛い。マテリアルゴーストだからって理由で二倍の量をやらされたし。更に暑さによるダメージ。なにか飲み物が欲しい！！

「・・・・・・・・」

神螺に無視され

「つばでも飲んでいろ」

追い討ちにラウラにひどい宣告をされた、鈴は二組だからいない。く、なんて冷たいんだ・・・耐えるしかないのか・・・。

「暑い・・・・・・・・」

物質化を切ったらバスから振り落とされるので駄目だし・・・くう。

『な、流！』

「んあ？」

「西川流君と織斑一夏君っているかしら？」

返事はしたがいいがなんか呼ばれてる、誰だ？

「はい、西川です」

「織斑一夏です。あの、なんでしょうか？」

ん、なんか聞いたことのある声だな・・・どこでだっけか？んむ。

「あ」

「おっ？」

・・・あれ、なんかめっちゃ見覚えがあるぞ。

「西川って・・・エグレンテの修理工さん？」

「ああ、ってナタルさん！お久しぶりです！」

「いえいえ、お元気そうで。大きくなりましたね、助かりましたよ」

「いやいや、仲間のおかげですよ。もしかして福音の？」

「はい、パイロットです。報告書のおかげで凍結されませんでした！ありがとうございます」

「いや、いいよ。まあ、がんばってな。応援してるぞ」

いや、懐かしい人に会ったよ。まさかなあ、修理工房の常連さんとは・・・。

「あ、織斑君ごめんね。福音のパイロットのナターシャ・ファイルスよ」

「は、はあ。どうも」

うむ、慣れてるとはいえスタイル良いからなあ。一夏なんて困ってるな、まあ男なら仕方ないだろ。後ろの一夏ラバーズの顔が怖いし、なんか俺のほう向いてるみなさんも睨んでるし・・・なんだよ。

「それじゃあ、西川さん。・・・お礼です」

ちゆ

「じゃあね〜」

「・・・・・・・・・・!？」

なにかやわらかいものが頬に触れた。・・・ひい!

『はい、飲み物どうぞ!!』

ナタルが去った後、俺たちはそれぞれ500ミリペットボトルの砲撃を食らった。

ひとまず、ナタルを恨んだことについてはここだけの話だ。

なんかエリーを見かけなかったが、熱を出したとのこと。

心配したことを伝えると真っ赤にしてさらに熱を出していた、体には気をつけるよ?

様々な出来事があった俺たちを乗せたバスは潮の香りを運びながら
IS学園へと進んでいくのだった。

58・帰還・・・いや、学校にだよ？（後書き）

やっとです・・・長かったあ。

59. いじものじやーん (前書き)

ggdgdなものをやったためにお気に入り登録件数が減りつつある
Gです。マジで昨日はとち狂ってました、すみません。

いつもどおりの訓練を終えた俺は夜空を見上げながらアリーナを出た。

気持ちのいいほど天気がよく、満月が眩いほどに光を放出していた。

「おお〜綺麗だな」

「そうだな、西川流」

あ？誰だ？

「どこに・・・って木の陰とかやり方古いぞお客さん」

「ステルスでも気づくとは流石だな、貴様を呼んだのはほかでもない」

ひとまず初対面の場合は名乗ろうか、常識でしょ？

「あのさ、あんた誰だよ。返答しだいでは容赦しないがな」

「怖いこと言わないでよ、もう。Tとでも名乗っておこうかしら」

「・・・なんていう仮名、なんのTだよ。てかせめてもう少し良
いの浮かばなかった？

まあいいや、どうでもいいし。

「俺のデータ目当て？それとも一夏の？プリン大福食べる？」

「食べる〜！美味しいよね〜・・・ハッ！」

「<|><|>」

やる気あんのかこいつ、侵入者のくせして・・・。

「ひとまずさ、あげるから目的なによ？」

「……データよ……あなたの」

「あ、そ。欲しけりやどうぞ」

「そくだよね……っでいいの!？」

「うん、役に立たないと思うけど。どうせ意味ないし」

仕方ないのでデータを無線で送る、どういつリアクションするかはわかりきってるけど。

「……(。!)？」

「どう、役に立つ？」

「これって……生物にできる数値じゃないわ」

うん、送ったデータは70%の数値。まあ、実現しても動かせるパイロットも機体も不可能っていう数字ばかりだけどね。だって、操縦者保護機能が全開で作動しても内臓が空気とこんにちわするレベル。

「うわーん、これじゃあ意味ないじゃないの〜」

「そくだね!(キリッ)」

「うう、これじゃあ帰れないよ〜」

「ちなみにあんたみたいに来た奴全員がそんなこと言って帰ってる」

既に外出時含めて8人くらいがそんな状況だ。わざわざ遠路こ苦労様です。

「じゃ、おやすみなさい。ここに置いておくから。じゃあね〜」

「うう、待ってよ〜」

「もう日付変わってるんだよ、寝かせろ」

「あ、ほんとだ。じゃあまた明日」

「おう……へ？」

気づけば声の主の気配が無くなっていた。

また明日ってなんだよ、ふざけんなよ。

まさか次の日あんなことになるなんて思ってもいなかった。

59. いじものじや〜♡♡♡ (後書き)

明日は尊ちゃんsbirthday!!

IS二次を書いているみなさん、お祝いの特別編やりましょうね？

60・篝ちゃんのおめでと〜記念(前書き)

さあさ、七夕と言えば篝ちゃんのお誕生日。作中は違いますがおめでと〜！……！

60・篝ちゃんおめでとぅ記念

「なあ、一夏」

「ん〜？」

既に夕食を済ませ、自室で課題をしている一夏に声をかける。

「篝にお前りボンしかやってないだろ、たまには二人で出かけてきたらどうだ？」

「ん・・・ん〜、そうだな。どこ行けばいいかな？」

「ふむ、ちょうどバイトしてる遊園地あるからそこでいいんじゃないかね？サービスしてやるし」

「おお、ありがとぅな。じゃあ誘ってみるわ」

う〜ん、自覚が無いというの・・・考えものだよな。

〜翌日〜

「おう、篝。行こうぜー！」

「あ、ああ（デートだということに自覚はないのかこの男は）」

なぜかメールで流から

『明日は予定を空けておけ、いいことがあるぞ。たぶん』

と来たのだが・・・いや、嬉しいのは嬉しいのだが。いかんせん相手が相手だからなあ。

どうせただのおでかけと思っているのだろう・・・。

「ふむ、ここは最近できたばかりのようだな」

「ああ、確か案内が付くとか……」

「ん、どうした筈……」

なにか目の前にたこのような、人の顔のようなピンク色の物体が歩いてきた。

なんなのだこれは、可愛げがあるが……一夏も困っている。

「こんにちは、案内役のニッシーだよ。よろしくね」

つい顔を見合わせる。案内がたこかよとか、生首じゃないのかとか、なんかしゃべったよとか……なんなのだここは!?!さっきからうねうねしているし、しゃべるたことは初めてだぞ。

「あ、こんな見た目けどナビゲート用デバイスだから安心してね」

「は、はあ」

「なんか画期的なやりかただな、あはは」

いや、画期的とかの問題ではないような気がするが。

「じゃあ、最初はなにがいいかな?いきなりキスでもする?」

「な、なにを言い出すのだ!ノノ」

「そ、そうだぜ。なあ?」

「その割にはお二人とも顔が赤いよ?」

なんなのだこれは、いきなり何を言い出すのかと思ったらキスなど……。

それは・・・まあできたらいいなとは思うが、まだ早いだろう。

「うーん、じゃあ最初はジェットコースターにしよう!」

「おお、定番だな」

「ふん、おびえるなよ一夏」

「はっ、篝こそ(汗)」

やはり直っていなかったか、昔からあれは苦手になっていたからなあ。強がっていても汗がだらだらと流れているが・・・触れないほうがいいか。

〈数分後〉

「お、お、orz」

「結構高いな」

「落差は業界二位の130mです、どうぞスリルをお楽しみあれ!」

ゆっくりとコースターが登っていく、一夏は顔が絶望に染まっている。

大丈夫なのか? いや、真っ青だから駄目か。

ガコン

「うわあああああああああああ!?!?」

「やっぱり怖いいいいいいい、一夏あああああ!?!」

「俺だって怖いわあああああ!?!」

結局恐怖で互いに抱き合ってしまった……うう、情けないではないか。

だが……／＼

「あゝ、半端なく怖かった。大丈夫だったか？」

「あ、ああ。なんとかな、一夏こそ大丈夫か？」

「う、うん／＼」

くそれからく

「さて、遊園地に来たら必ず来なきゃだめな観覧車ですよ！」

聞いた話では日本一なんだとか。どうしろというのだ……。

「じゃあわたしは寝ますので、時間になったら起こしてくださいね。それではごゆっくり」

いや、だから（ry

「ほ、箒。その、な」

「な、なんだ。はつきりと言えはいいいではないか」

顔を赤くしながらこちらを見つめてくる一夏、夕日に染められてのではない赤みがあった。

「箒、その……」

「な、なんだ。早く言わないか」

視線を逸らす一夏、どうしたというのだ。まったくノノ

「いや、その。今日は付き合ってくれてありがとうな、楽しかったよ」

「いや、私も楽しかったぞ。久しぶりに二人で出かけたからな」

また、こうして行けたらいいな。今度は……いや、今はいい。

「また今日みたいに行こうな！」

「ああ！」

数年ぶりに出かけたのだが、とても楽しかった。こんな日々が続けばいいな、と思った日だった。

60・篝ちゃんおめでとう記念（後書き）

わく こんな話を書くのは苦手でしたので結構省いちゃいました、ごめんなさい！甘い展開なんて上手く書けない自分がうらめしいです、すまん。

兎に角、篝ちゃん誕生日おめでとう！！

本作でも原作でも、他作品でも幸せになりますように。
そんなことを願う作者です。7月7日はまだ時間ありますよ！
まだ書いていない人も特別編やってあげましょう

61 バイト・・・BAITOじゃないよ？(前書き)

なぜ、なぜこつこつ話は長くなるんだ!!

61・バイト・・・BAITOじゃないよ？

「おかえりなさいませお嬢様、どうぞごゆるりと」

レゾナンス近くに居を構えるメイド・執事喫茶の@クルーズで俺は女装をして接客していた。

いや、体は男だよ？でもさ、面接のときに経験があるって言っちゃったから・・・うん。

メイド服で接客・・・別に接客は苦手じゃないんだが、来た男たちが2828して女性がうらやましそうな顔してるんだよ。

俺、男ですよ？

まあ、バイトにしては賃金もいいし扱いも良いから問題無いんだけどさ。

せめて執事の格好が良かったなあ・・・はあ。

「店長・・・あれ、その二人は？」

なんかすごい見覚えがある人物がいるのですが、なぜ、どうして。どうしてシャルロットとラウラがいるんだよ～～～！！

「あ、につちゃん。この二人お願いね、そろそろ本社の人来るからさ」

「え、はい。じゃあ二人とも、こっちへ」

店長から前にも聞いていたが本社からお偉いさんが視察に来るって

のは聞いていた。

更に店員が急に辞めて人数が足りないことも……だからって……
・ねえ？

幸い俺だとばれてないみたいなのがせめてもの救いか……汗だら
だらだが。

「じゃあ、君たちにはこっちの服を着て接客をしてもらおう。え〜と
確かここに」

『につちゃん、そっちの金髪の子は執事服でお願い！』

「え」

「……良いかな？」

「……はい」

スマン、店長の言うことは絶対なんだよ。もし聞かなかったら……
・思い出したくない。

「あ〜と、ここでは誰でもニックネームで呼ぶんだけど……希望
はあるかい？」

うん、困るよね。普通名前だもんね〜、俺だって最初は驚いたぞ。

「……デユノをお願いします」

「むっ、ラビットでいいか？」

おい、シャルロットならまだしもラウラ……いや、いいけど。
黒じみだからですね、わかります。

「じゃあ、二人ともお願いね。わからなかったら聞いてね！」

『につちゃん、三番テーブルお願い』

「はい。じゃあ、デュノちゃんにラビットちゃんもお願いね」

「はい！」

「了解」

くそれからく

「デュノちゃん、6番テーブル！」

「はい！」

「ラビットちゃん、2番にDプレート！」

「はい！」

思っていたより二人の作業が的確で後半は指示無しでも動いていた。普段の二倍のお客様を接客していたのだから驚きだ。あ、もうそろそろ休憩入らせたほうがいいかな？

「二人とも、休憩入ってく」

客足もまばらになってきたので呼ぶ、流石に二時間続けていては疲れる。

だが、よくやったな二人。

「はい、アイスティー」

「ありがとうございます」

「す、すまん」

自分もグラスに口をつける。ふひひ。

ガタン

ん、お客さんか？

「はい、今行きm」

目の前にいきなり銃を突きつけられて発言を中断させられた。

……なに？

「おら、動くな！」

後ろに二人、格好からして強盗さんですね。

「おとなしく投降しろ！」

警察の対応も古い、ほかのお客さんもそんなこと言ってるし……。まあ、古いよな……どうしてやるうか。

「まあ、どうぞこちらに。紅茶に致しますか？もしくはコーヒード？」

さりげなく誘導、コアネットワークを使いテキストメッセージを送信。

『目標は三人、それぞれUZI・ベレッタ・AK-47装備 熱々
珈琲よる by西川』

二人がはっとしてこちらを見るがウィンクでさりげなく返す。
ため息をついたかと思うとラウラが頷き、シャルロットが厨房へと
向かう。

「ブルーベリーケーキです、どうぞ」

「おお、わかつてるじゃねえか」

「兄貴、大丈夫なんすか？警察来てますよ」

「俺らには人質がいるんだ、心配するんあっちいいいい！！」

だろうな、いきなり60の珈琲かけられたらな。
まあ、知らんが。

「大丈夫ですか？すみません」

「ふ、ふざけんな！！」

AKを向けて発砲してくるが、当たっているのに俺は倒れない。し
かも笑顔で近づいてくる。

店内から悲鳴があがるが、顔を伏せているため銃声によるものだ。
まあ、怖いだろうな。銃弾食らってニコニコしながら迫ってくるん
だもの。

UZI持つてる奴は顔面蒼白だ。

「あらら、弾の無駄使いになっちゃいましたねっ！！」

手刀で中央から叩き割る。

カシャン　カツンカツン

部品がバラバラになり、床に落ちる。

「な!?!」

後ろでは部下らしき奴らがこちらにブレッタとUZIを向けている。

「It is a turn! (出番だ)」

「Le consentement! (了解)」

「Es ist eine Drehung! (了解)」

返事と同時に二人の鉄拳がそれぞれの腹部に打ち込まれる、そのまま後ろに吹き飛ぶ部下(笑)

『チエックメイト』

シャルロットとラウラが取り落としたブレッタとUZIを強盗三人組に向ける。

ちやつかり組みなおしたAKも向けた。

おそらく手に持っているものを見なければ天国だろう。

なにせ美少女メイド二人と美少年執事がこちらを向いているのだから、笑顔で。

「ひ、ひいいい!?!」

「命だけはあああ!?!」

「せいっ！」

首筋を狙って手加減した手刀で気絶させる。

「終わった〜くそつたれ!!」・・・!?!」

なんとということでしょう、ここまで古臭い手段とは。

店内から残念なものを見るような視線がリーダーさんに突き刺さる。

だが、爆弾のスイッチが押される瞬間。

銃弾が配線すべてを切り裂き、無力化する。

「はい、おしまい」

もはや目の前に起こった出来事を理解できないのか、リーダーも気絶した。

てか、体ギリギリを銃弾が掠めるからなあ。

「さて、二人はささっと行っていいよ。目立つちゃだめですよ?」

「うん、ありがとう」

「すまん、技師!」

裏口から駆けていくのを見届け、立ち入ってきた警察官に強盗三人組を引き渡す。

ちゃっかり、ブロンドの執事と銀髪メイドの話伝えて。

ちなみにその話は夕方のニュースでも取り上げられていた。

「あゝ疲れた。あれ、二人ともどうさ
ばらすな〜!!」

追伸 ポコポコにされました。

61 バイト・・・BAITOじゃないよ？(後書き)

至上最長になっちゃった

なぜだ・・・

62・弱点・・・おいおい

「つつう・・・ここは？」

見慣れない場所、おそらく廃工場だろうが・・・どこだここ？
壁に鎖でつながれ動けないようにされている。なにがあったんだ？
自分以外に誰もいなかったのだからどうなった経緯を思い出すために朝
からの出来事を確認する。

「む、西川。今日もバイトか？」

「ああ、まあな。そうだ、スーツ出しておいたから変えといて。帰
ったら洗濯しておくから」

「いつもすまん」

「いいって、世話になってるんだからこれくらいさせてくれよ」

で、@クルーズに行つて・・・午前のシフトだから終わって。
家に行つたら・・・なんか殴られたな・・・そこかよ～～！！

「うわ、油断しすぎだな。あゝあ」

うん、体強化してない通常の物質化じゃあ丈夫さは普通だからなあ。
てか後ろから殴って気絶させるとか古いなあおい、もうすこしまとも
なやり方はなかったのか。

つつうか早く洗濯せないかんのに！

「目が覚めたかい？」

錆付いた扉を開けて紫色の長髪美人が入ってきた、今は見とれて
いる暇はないが。

放出される雰囲気から戦闘慣れしているのがわかった。歩き方に無
駄がなく、隙がなかった。

「……目的はデータ、もしくはDNA？」

「どうせ逃げられるからね、データがとれないなら死んでもらうわ」

そう言って注射器を胸ポケットから取り出し、こちらに歩いてくる。
よく見るとラベルには王水（k本的になんでも溶ける、てか生物に
は半端なく有効）

「おいおい、溶かすなんて趣味悪いな」

「銃弾食らって平気な奴に言われたくないね」

「それを知ってるなら、いいか」

全身に力を込め、鎖を無理やり引きちぎる。さながら戒めを解かれ
た巨人のようだった。

「さて、どうされたい？」

62・弱点・・・おいおい(後書き)

オリジナル展開k t k r!

63・非科学に裏打ちされた存在（前書き）

スーパー人外タイム・・・

63・非科学に裏打ちされた存在

「さて、ISがないからって油断したんだよね」

そのまま残っていた右足の鎖を握りつぶして投げ捨てた。

メキメキと音を立てて鋼鉄製の鎖が弾け飛ぶ、人外？当たり前だろ。

「上から聞かなかったのかい、人外だって」

しゃべりながら女性に向かって歩く、たじろいで後ずさりするがすぐに壁にぶつかり止る。

「く」

ISを展開してくるが気かけず歩く。おそらく、みんなには見せないな。

なにせ、四肢が機械的なものに変化し右腕がガトリング砲に左腕が鋭い金属製の爪になっているのだから。

左目もターネーターのようなレーザー照準器に変化している。

「な、バカな。そんなこと」

「そうだね、一番有名なのでも教えてあげようか。恥ずかしいけどね」

恐怖に歪む顔を見つめながら、やれやれと手を振る。

「Skeleton doll」

世界中で都市伝説としてその筋では有名な歩兵の名前だ、単独ノークイルで戦車大隊を迎撃した。

その姿はまさに怪物だったそう。榴弾も効かず、大口径機銃もものともせず、その腕で装甲版を殴り壊した。

さらにはどこからかガトリングガンを取り出し上空5000mを旋回していた当時最新鋭のF-18を撃ち落した。

だが、ISが実用化され始めた時期のため関係者や物好きしか知らない。

「お、知ってるみたいだね」

「知らない人などいない、ISに並ぶ者だぞ!？」

そう、その話には続きがある。迎撃にISが投入されたのだ、だが結果は引き分け。

かたやシールドエネルギーを0にされ、機体は損傷度D。

かたや頭部含む全身の肉が抉れて髑髏が見えているのだ、だがそれは損傷をものともせずこちなくだが戦場を去っていった。露出した髑髏からSkelton dollの名がつけられたのだ。

「さて、どうする。殺すつもりはない、早く目の前から消えてくれ」

「見た目だけでそれだと、騙せると思うなあああ!!」

近接ブレード、おそらく実戦向きの高周波振動剣が振り下ろされる。

ガタン

左腕の鉤爪の一閃によって瞬きほどの時間で持ち手から刃が斬りおとされる。

まるでバターを高温のナイフで切り分けるように。

「止めとけ、経験あるならこれで力がわかるだろ」

「ゆ、油断したただけだ！」

「はあ、まったく。少し痛いぞ」

ガトリングガンの砲身が回転を始めつんざくような音を出しながら鉛弾を土砂降りの雨のように吐き出す。

スラスターを噴かし回避しているが対峙しているジェーン・エリザベスは内心焦っていた。

吐き出された銃弾は命中した工場の壁を瞬く間にバラバラに砕いていくのだ。

しかも少しずつ射線が近づいて来るのだ。さきほど掠っただけでもシールドエネルギーが数発で10%ほど削られたのだ。

「もう、レディーにはもう少し優しくできないのかしらね！」

「残念ながら、戦場は範囲外でね！」

いきなり瞬間加速並みの加速で西川流イゲンリッシュンブーレストだったものが眼前に迫る。

無機的な機械の瞳が私をその視線で貫く、気づけば腹部に砲口が突きつけられていた。

「まだ昼間だけど、Good night!」

瞬間、腹部に衝撃は走った。5秒と持たずにISが強制解除される。

ああ、私はここで死ぬのか。

「残念ながら殺しは趣味じゃないんでね」

カッーン

待機状態のブレスレットが落ちる音が聞こえるが、私は抱きかかえ

られていた。

先ほどの恐怖を与えるような顔ではなく優しげな青年の顔が私を覗き込むように覗いていた。

「っと、怪我はないか？攻撃した奴の言う事じゃないが」

「・・・大丈夫・・・降ろしてくれない？」

今の状況を理解したのか、西川流はなにか気づいたような顔をして地上に降りた。

なにか文句を言っていたようだが気にしない。

そして、お互いに人の姿で向かい合い話し始めた。

63 非科学に裏打ちされた存在（後書き）

流君の姿は骸音シーエを参考にしていただければわかりやすいかと

今日の目標は達成したけどあと一回あるかも？

64・ヒントはタグにあり(オイ>>)・(・)(前書き)

一応、この作品はESとマテリアルゴーストのクロスであることを
お忘れなく。設定捏造はマテゴ読者じゃないとわからないかな・

64・ヒントはタグにあり(オイ>>)・()

この女、ジェーン・エリザベスの話を聞いたところ気になるワードがあった。

「ヴァンシュタイン」

それは人口強化霊能者を開発していた施設の名前、この世界には存在しないはずのもの。

最近聞いた話では前世であった世界の繭事件の犯人もそうだったらしい。

その後は普通に暮らしているらしいが……。

「お前も造られた一人か……」

「ええ、兵器としてね。この力を使えば常人には負けないからってね」

自虐的に語るジェーンを見ていると胸が痛かった。

だが、なぜこの世界にも？俺たちが消したはずなのに……。

「あんたに負けちゃったから、私は殺処分ね。話聞いてくれてありがとう」

「さ、殺処分だって！？どうして」

思わず肩を掴んで質問してしまう。

「い、痛いわよ」

「！・・・す、すまん」

自分の行動に気づき手を離す、落ち着け自分。
深呼吸して動揺した心を鎮める。

「もし他の研究機関で調べられたら技術独占の意味が無いからよ」
「だからって、殺すなんて。まるで人を物のようにするなんて。どこまで腐ってるんだよ！」

まだ、そこらの秘匿研究機関のほづがまともなやり方じゃないか。
許せない、絶対に。

「ジエーン、君は生きたいかい？」
「できるならね、もう無理だけどさ」

諦めたような顔の彼女を見ると、過去の自分と重なった。現実に絶望して歩くのを止めた自分に。

あのときは周りに仲間がいた、だから今の俺がいる。もう、自分の二の舞はさせたくない。

「なら、生きなきゃ。ね？」

「ど、どうやってよ」

「じじいじいとき、ちょっと待っててね」

ポケットからケータイを取り出す、そしてある人物に電話する。

「・・・はい、そうです。ええ、実技専門教師が一人・・・ありがとうございますー！」

ジエーンが頭の上に？マークを浮かべているが、まあいいか。

「さて、君はここで死んだ。今日から君は二度目の人生を始める、
おk?」
「は?」

概要はこうだ。

- 1・ジエーン・エリザベスは戦死したという情報を裏ルートで流す
- 2・新たに滝見白^{たきみハク}という人物の戸籍を作る
- 3・目の前にいるジエーンを滝身白として人生再スタート
- 4・安全措置としてIS学園教師として設定

「がんばってね」

「いや、おい。待てよ、どういうことよ?」

「どういふこともなにも、君はこれからも生きていけるってことだよ。文句ある?」

困ったような嬉しいような表情を浮かべる彼女。気づけば髪が灰色になっていた。

「なんであなたを殺そうとした奴にこんなことをするのさ」

「まだ君は生きているから、生者に死者は尽くすものさ。君には生きる権利があるからね」

「あなた・・・いい人だよ。もう・・・うう」

ジエーン改め白の瞳から光る水滴が流れ落ちる、女性を泣かすのは嫌なんだがなあ。

なんか気まずいのでしつかりと、背中をポンポンと優しく叩きながら抱きしめてあげた。

「一人で寂しかったよな」

「うん」

「もう、一人で悩まなくてもいい。誰かに頼ってもいい」

「うん」

「だから、今は泣いていいよ。好きナだけ」

「う、うう。ありがとうよう・・・」

そのまま、泣き止むまで二人は抱き合っていた。

そんな二人を見つめるかのように壊れた廃工場の屋根の隙間からは三日月が覗いていた。

ちなみに家で千冬が自棄酒を飲んでいたことはここだけの話である。

64・ヒントはタグにあり(オイ>>)・(・)(後書き)

オリジナルキャラ登場！(ヒロイン未定)

名前の原案は・・・ご想像にお任せいたします。

流しい奴やあゝ。そんなわけで今日はこのへんで(＾o＾)／

65・新生活への一歩(前書き)

ちよつと話が進みます。

65・新生活への一歩

あゝ、うん。今、職員朝会に参加中です。

え、なぜかって？うん、実技専門だけじゃなくて技術専門の教師も足りないらしい。

だからってなぜ俺に……いや、まあその分給料は出るらしいけど。

「それでは新任の滝見白さん、これからよろしくお願いしますね」

「あ、はい。未熟者ですがよろしくお願いします」

「それから、西川君。学生の身ではあるが頼みますね」

「はい、精一杯やらせていただきます」

白さんは普通にしている時は髪が灰色らしい、なんでも能力強化の弊害で力を使わないときはそうなんだとか。

ちなみに異例の専用機持ち教師、経験があるらしいから問題ないみたい。

なんかさつきから姉さんが睨んできているが……怖いって。

そついや、俺が技術専門教師にされたのは……ふざけて作っていたISの装備などが評価されたかららしい。

まあ、ドイツでやってたことも少なからずあるみたいだが……。

「それでは職員朝会はここで終わります。初日ですのでお二人ともがんばってくださいね」

『はい！』

「あ、流。・・・どうしてスーツ？」

「馬鹿、西川先生だ」

『は？』

近くにいたエリーと深螺、更には箒にセシリアまで驚いた声を上げる。

ラウラはうんうんと頷いているが・・・おい、一夏。白式整備してたの覚えてないのかよ。

そんなことを考えながら教卓の後ろに立つ、そうしたところでチャイムも鳴った。

「あゝ、臨時だが。このクラスのES技術教師をすることになった、この時間だけは君たちと違い教える立場だ。改めてよろしく頼む」

なぜか姉さん口調・・・まあ、ずっといっしょだったしなあ。

ラウラはなんか目を輝かせてるけど、そんなにいか？

「え、西川君が先生？」

「ここでも技師の指導が・・・」

「あゝ、静かに。授業を始める、技術基礎35ページを開け」

キーンコーンカーンコーン

「今日はここまで、わからないところは後で聞きに来い」

『はい』

「次回は38ページからだ、予習はしておけよ？それと次は実習だ、遅れるなよ」

『は〜い!』

久しぶりに教師として活動したために結構疲れた。うあく。
だが、座ることもできずに更衣室へと向かう。

「流、すごかったぞ」

「ははは、そうか。ありがとよ、さっ実習だ。行くぞ」

「お、おお」

「西川、空を走るな」

「すみません」

まあ、うん。はい……。あ、白さんが苦笑いしてる。
ですよ〜、ちなみに遅れそうだったので一夏は置いてきている。

「流、てめえー!!」

「はい、織斑君。並んでください」

「え、あ。はい」

早速の授業参加の白さん、いきなりの登場に一夏がつい言う事を聞
いてしまう。

まあいきなり大人の女性に言われたら普通はそうか。

「今日から新任の滝見白たきみハクです。戦技専門教師をやらせていただきま
す」

「白先生は一年担当だ、実力を知ってもらったために……。そうだな、
ラウラ!」

「は？私でありますか技師」

「ああ。どうした、自信が無いか？」

「い、いえ。やらせていただきます」

白さんが戸惑っているが気にしない、なんで実力あるのに自信持てないんだか。

逆にラウラは自信満々だ、いや良いんだけどさ。ちなみに説明係として今回も実習に教師として参加。

「西川先生、いいんですか？」

「はい、解説しながらですのでゆっくりお願いします」

「わかりました、じゃあ行きますよボーデウィツヒさん」

結論から言おう、ラウラが手加減されていたとは言え一発も入れられずに負けた。

つまりはそういうこと、元からの実力が高いってことだね。

ラウラも目を丸くしてたし・・・すまん。

そして説明聞きながら動いてくれた白さんはすごいよ。

「これでわかったと思うが、実力はすばらしいほどだ。これほどの人物に教鞭をとってもらうので全員真剣にやるように」

『はい！』

その後の実習では今までに見たことのないほどに真剣にやっていた。白さんが教師モードになって鬼教官だったからなのかは知らないが・・・。

65・新生活への一歩(後書き)

まさかの流・白の教師化・・・

66・わからない人のための用語解説（前書き）

不明点はここで解消できれば幸いです

66・わからない人のための用語解説

マテリアルゴースト

実体化し、霊視能力が無い一般人でも視認できる幽霊。戦闘能力は外見と霊気保有量に比例する。

現代兵器では倒すことはできない（特殊装備や専用兵器の場合は別）ISでの攻撃は有効だが強力な兵装でなければ消滅に追い込むことは難しい。

（例・荷電粒子砲、最高出力のレールガン、衛星レーザー砲など）

人口強化霊能者

高い霊能力を持つ人間の遺伝子を組み合わせて生み出された強化人間。

危機察知能力や身体能力が高く、兵士としての観点では理想。

戦闘能力では一般人以上であり、熟練の兵士と同等。

本来は除霊を確実にするためだったが、その能力の高さ故に誤った方向に使われてしまった。

ヴァンシユタイン

流やエリー、深螺がいた『マテリアルゴースト』の世界に存在していた組織。

人口強化霊能力者を作り出していた私設集団。『IS』の世界にも存在していたが・・・。

西川技師

ドイツ軍のIS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」に所属していたIS整備技術士官。

その見た目からは想像できないほどの器用さ。西川技師が整備した機器は性能が30%上昇するとも言われている。

事実、使われていた第二世代機は全て開発時スペック以上の数値を叩き出している。

臨時の織斑千冬教官とともに除隊した。部隊内では「頼れるお姉さん」として活躍していた。

正体は女体化した西川流。

エグレンテ

ドイツにある機械修理工房。職員は6人という少人数であるが個人それぞれが優秀であるために大人数の工房にも作業速度は負けていない。また、損傷具合にもよるがほとんどの機械製品は修理依頼後は改良されて返ってくる。

流がドイツ滞在時に勤務していた修行場所。ISの整備ができるのもここでの経験が原因。

知る人ぞ知る古くからの名店、ナターシャ・ファイルスもそのころは常連だった。

戦乙女工業

「蒼月」「残月」を製作した日本の企業。

国内企業では最先端を行くがあまり有名ではない。しかし同社から販売されているISスーツは評価が高く、正式採用している国家も

ある。副社長兼開発部長が高校生という変わった企業。

66・わからない人のための用語解説（後書き）

他にわからないことがあれば感想やメッセージで質問してください。
ネタばれしない程度ですがお答えします。

そして、お気に入り登録100件ありがとうございます。
こんな駄文がここまで来れるとは正直思っていませんでした。
今後とも『IS・ゴースト』をよろしくお願い致します。

近日にでも記念話をやりますので希望ございましたらどうぞ

67・夏Ⅱあちい(前書き)

今回は急いで仕上げたためにやっつけです。

67・夏Ⅱあちい

「あゝ、帰ってきた」

「久しぶりだな、さして庭の手入れでもするか」

「それは明日でいいだろ、ひとまず休もうぜ。暑いし」

今日から夏休み・・・暑くて動く気がしない。

というわけでソファアでぐでぐとしてる、家事は既に終わらせた。

まあ、成績や追試とかの教師の仕事が残ってるが・・・。

てか、白さんが良くやってくれるから助かる。

でも、雰囲気は大人っぽくないんだよなあ・・・。

「ん？誰か来たみたいだな」

「俺が出るよ・・・お、シャルカ」

もしかして・・・「来ちゃった」ってやつか。

暑いなかごくろつさまなことだ、まあお茶で出すか。

「いらつしゃい、アイスティーどうぞ。あ、一夏、俺仕事するから」

「そうか？せっかくシャルカが来たのに・・・」

「じゃあ、どうぞごゆっくり」

ここで邪魔するのも無粋だしな・・・てか、確実に他のメンバーも来るな。

あゝ、がんばれ一夏。う、眠い・・・zzz。

「ん？」

「すうすう」

いつの間に寝てたんだ俺は、あゝあゝ作業進んでね。

うわ、パソコン起動してすぐ寝ちまったのかよ……。

で、なんか背中が重いんだが。この銀髪は……。

「ラウラ？」

「すうすう……うにゅ、技師？」

「おお、起きたか。ってなんでここに？」

学園の自室に入ってくるのは日常茶飯事だが、自宅にはダメじゃないか？

もしかして……。

「ボーデウィツヒが行ったが大丈夫なのか？」

「いくらなんでも流は心配ないって」

「さっきの寝顔可愛かったなあ」

「やっぱりなぐくんは可愛いよ」

オイ、ナゼにエリーまで。てか寝顔見られた！？

鈴まで……深螺が今日は仕事でいないのだけが救いだよ。
でも、恥ずかしいノノ

「誰が可愛いだって？」

まだ目覚めていないラウラをおんぶしながら居間に移動する。

「教師の寝顔を見るとはどついつたことかな？」

「いや、家だし」

「無用心なのが悪いのよ」

「変わらないね」

それを言われたらどつしよつもないじゃないか。

つか、ほくほく顔でいるの止めてくれないかなあ。

「まったく。あれ、千冬は？」

「さつき電話あったからそろそろ帰るってさ」

「そうか、ところでみんなは遅くまでいるのか？そうなら夕食を」

『やらせて…！』

『o r n』

すごい気迫ですね、流石ー夏ラバーズ。ああ、エリーは違うか。

うーむ、まあ面白いことになるかもしれないからやらせてみるか。

67・夏Ⅱあちい(後書き)

明日にでも修正します、どうかお気に入り登録が減りませんように。
・
・
・
・
・

68・イレギュラー（前編）（前書き）

原作クラッシュ！！

68・イレギュラー（前編）

「ただいま」

「おかえりなさい。ご飯にする？お風呂にする？それとも・・・おれ？」

「ふん！」

ズガメキゴスン！

「ま、まったくノノ」

「く、冗談だつてのに。それくらい分かって」

ええ、近接ブレードを生身で振り回す人間の鉄拳を食らいました。床に叩きつけられたよ・・・痛え。

『（織斑先生・・・もしかして）』

そんなことを流ラバーズが思ったのはここだけの話。

ん、女子勢を見回したかと思つた途端。

「ああ、すぐに出かけるから好きにしる。女子は泊まるなよ？」

ちやつかり布団が無いからなと付け足して居間を出て行く。

下着が汗で透けていたことは流だけの秘密だ。

居なくなつたと同時に女子勢からため息が出た。

そこまで息苦しいか？一夏も首をかしげてるし。あ、スーツの代え

を出したの言うの忘れた。
まあ気づくか。

「さてと、じゃあ夕食の食材でも」

「そうだな、じゃあみんな」

「どうせなら全員で行こうよ、ね、みんな？」

ちょ、エリー。なにを言って・・・。

「当たり前だ」

「どうせならね？」

「嫁の買い物に夫が付き合うのは常識と聞いたのでな」

「日本のスーパーというのも気になりますし」

「どうせ荷物持ち足りないでしょ？」

まったく、こうまで言われたら断れないな。まあ大勢で買い物も楽しいか。

「よし、じゃあみんなで行くか。一夏、着替えてこい」

「あ！？わ、わかった」

と、言うわけで急遽専用機持ちによる外出が決まったのである。ちなみに出かける直前の千冬がにやけ顔の女子勢を見て軽く引いていた。

「一体なにがあったんだ・・・、行ってくる」

「いつてらっしやい、待ってるからね（うるうる涙目）」

「あ、ああ。今日は帰れないから、すまん」

そんなこんなで近所のスーパーへ

68・イレギュラー（前編）（後書き）

あれ、いつのまにフラグを……。あ、キーワードにフラグメー
カー2がある……。汗

69・イレギュラー（後編）（前書き）

関係ありませんが「桜ノ雨」聞いたけどめっちゃ良かったです！

69・イレギュラー（後編）

「こつやって大勢で買い物つてのも懐かしいな」
「そうだね」

自衛隊にいたときにはこつして部隊内全員で買い物に出かけたりしていた。

え、なんでできるんだって？察してくれよ。

「そうだったの？」

「ああ「同棲してたしね」間違っではないが」

『同棲！？』

ほら、みんながこつち見てるよ。別にそんな関係じゃないつてのに、てか鈴。怖いぞ。

「いや、同じ部隊だからだつて。隊長と副隊長だし」

「おお、隊長か。すごいな！」

「なるほど、そのときの経験……自衛隊？なぜそれほどの力が？」

「いや、相手が相手だったからさ……。さあ、着いたぞ」

ちよい昔を思い出して暗くなってしまったが、すぐに戻す。

別にこいつらには関係ないし、今となっては終わったことだ。

「さて、ところでお前ら。何をつくるつもりだ？」

ちなみに俺だけは姿を転生前（転送じゃね？）の姿になっている。

まあ、学生だけってのも危ないからな。今まで無理だったのに今だけなんでってツッコミは無しだ。

『あ』

おいおい、そりゃ無いって。一夏も引きつってるし、せめて決めとけよ。

「秘密にしようってやるからこれで買っとけ、いいな？」（小声）
『GJ!』

「一夏、俺らは切れてる調味料とか買ってこよう。食材はみんなに任せて」

「あ、ああ。わかった」

さて、どんなのを買ってくるのかなあ？ふむ、胡椒と砂糖が切れそうだったしなあ。

あ、包丁も欠けてきたし買い替えかな。お、中華だしが安い。

「さて、終わったかな？」

「もちろん」

「当たり前だ」

「あはは、セシリアが塩と小麦粉間違えたのは驚いたけどね」

「そ、それは言わない約束ですよ！」

「じゃあ、行きましょ！」

さてと、じゃあ女子勢に任せますか。・・・一夏、やってくれるっ

てんだからそわそわするなって。
まあ、こんな状況は滅多に無いからなあ。うん。

で、さあ。遠目から観察してるんだが・・・なぜ色が足りないからとケチャップを、ああああ！！

ラウラはナイフでなんか切ってるし、顔怖いぞ。鈴はじゃがいもの皮厚く削りすぎだし。

うげ、今セシリアがタバスコを入れやがった・・・（汗）

一夏もなんかだらだら流してるし、わかるよその気持ち。

（少しして）

「（嫌な予感がするが大丈夫か？）」

「（大丈夫じゃない、大問題だ）」

一瞬のアイコンタクト、俺と一夏だけの。いや、緊急時のみ使える意思疎通手段。

うん、セシリア。なぜハツシュドビーフから辛い香りがするんだ。

絶対おかしいって。

なんかさつき光ってたし。

鈴、美味しそうだけどもうちょいじゃがいも上手く皮剥こうな。お前は腕はあるんだから。

ラウラ、なんでマンガがおでんなんだ？おでんってこんがり狐色になるものだったっけ？

ふむ、シャルロットは一口大の唐揚げか。食べる側のことを良くわかってるな。

筍は、言うことなしだな。鯖の味噌煮からはいい匂いがする。

あ、エリーは俺が昔に教えたハンバーグ作ったのか。覚えてくれて

たなんて嬉しいな。

以上、0.5秒間の西川視点の評価でした。

「さてと、じゃあ食べようか」

「そうだな、それにしても待ってるのって結構腹空くのな」

「じゃ」

『いただきます!』

こんな風にして大勢で食事するのが幸せだと、再び実感した日だった。

あれを食べるまでは……………。

「か、辛えええええええええええ!!」

69・イレギュラー（後編）（後書き）

はい、タバスコ入りのハッシュドビーフでございます。

急募

本作品のお気に入り登録数100件記念話の内容投票！

- 1・流×深螺の過去話
- 2・流×エリーの出会い話
- 3・流のドイツ滞在記
- 4・白さんとのデート（？）
- 5・いいから本編進める馬鹿作者

上記のうち、これを読みたい！と思うもの一つに投票してください。
もちろん「6・俺得の???話」でもok
期限は来週の日曜日！！
投票待ってますよ〜。

もちろん登録ユーザ以外の方でも投票ok！！

70・もう少し考えるよ(前書き)

夏休みだからこそその展開

70. もう少し考えろよ

「西川、フランスまで旅行に行かないか？」

「はい？」

夏休みのある日、それは唐突に起こった。

「いやな、デユノアの付き添いだ。どうも実家が不審な動きを見せているようだな、信頼できる護衛を探してほしいと」

うん、なんで俺？そりゃ戦闘能力はあるかもだけど、俺が今注目されてる人間だってわかってるのかよ。

つか、実家に帰るだけで護衛って……。

「それで俺なのかよ」

「嫌ならいいが、報酬はプリン大福1ケースらしいぞ」

「よしわかった、何時からだ？」

え、変わり身が早すぎるって？知るか、プリン大福の為なら何でもしようじゃないか。

たかが大福だろって言った奴出て来い、そもそも（ry

「いきなりごめんね、こんなこと頼んじゃって」

「いや、いい。あれの為ならこれくらいお安い御用だ」

うん、教師時に着るスーツ着用&黒のサングラス。

以外にはばれないものだった、ちなみに今はデュノア社前。ここまで何も無かったし、結局杞憂だったみたいだな。

「では、行きましょう」

「う、うん。やっぱり慣れないなあ」

てか、護衛というよりは執事のような気がしてならない。こういうのは慣れないんだよなあ・・・ホント。

やろうと思えばできるけど疲れるし、トラウマだし。

「久しぶりだな、シャルロット」

今日の前にいるのがデュノア社長、シャルロットを男装させて学園に入学させた張本人だ。

見たところそこまで悪い人には見えないがなあ・・・。普通に良い人みたいなんだが。

「わたくしめは外で待機しております」

「うん、ごめんね」

「いえ」

（大気中（誤字ではない））

さつき社長が悲しい目をしながら出て行った、うん？シャルロット

の話聞いたイメージとはやっぱり違う。
うん、これはもしかして……な。

「流」

「はいよ」

お呼びがかかったので実体化し、部屋へ入る。案の定暗い顔をしたシャルロットがいた。
ふむ、確実にあつたな。

「シャルロット、もしかしたら。お前の親父さんは親ばかりかもしれん」

「え？そんなこと」

ガチャン

後ろから扉が開く音がした。誰だ？女のようなのだが。

「ふん、やはりあなたですか。シャルロット」

「あなたは……」

なんか金髪のツインドリルが現れた、しかも前のセシリアよりひどい。

確実に男を奴隷、いや道具としてみてる輩だ。女尊男卑の社会でも女性からも敬遠されてるタイプだ。

うわ、一番嫌いなタイプじゃねえか。てか、なにその下品なドリル。

某天元突破のほうがかっこいいよ。え、なにそれって？ggrrks

「なんですのその方は！馬鹿にしていますの！？」

あれ、わかった？

「流、そんなあからさまに嫌そうな顔してたらわかるよ」

「そうか？まあ、顔まんまのことw考えてたが」

「あなた、わたくしに失礼ではなくて！？何者ですよ！」

めんどくせえ……めんどくせえ（大事なので二回言いました）
あく、どうするかなあ。てか、シャルロット、流って言っなよ。ば
れてないみたいだが。

「いや、うん。IS学園臨時技術整備教員、西川流って言えばいい
かな？」

「言っちゃっていいの？」

「いや、シャルロットが先に言っただじゃねえか。気づいてなかつ
たみたいだが」

なんか前方が騒がしいが無視、なんか決闘だとか言ってるが……
・！？

「フランス代表候補生であるわたくしに、もう我慢できませんわ。
決闘ですよ！」

ふうん、候補生ねえ。あくまで候補なだけなのだが、他にも結構な
数いるぞ。

代表ならまだいいが、てか実力で負けてたからシャルロットが学園
に来たんだろつが。

「別にいいが、名前は？」

自己紹介してくれんと意味が無い。初対面では大事だぞ。

「わたくしは、デュノア社長の娘。フォレット・デュノアですわ！」

70・もう少し考えろよ(後書き)

オリ展開k t k r

アンケートはまだまだ受付中ですよ！
(69あとがき参照)

71・キーボードをクラッシュしたくらいイライラする(前書き)

まさかの展開

71. キーボードをクラッシュしたくらいイライラする

イライライライライラ（ry

「指定時間になっても来ないとは何事だ」

約束した午前10時を過ぎても、あのフォレットとかいう女が来ない。てか、遅れるという連絡も無い。

データ取りに来ている人たちも額に四つ角が浮いてる。どうやらほとんどの奴に嫌われているらしい。

「あら、居ましたのね」

「遅刻するとはいただけないな、そのドリルで地面でも掘ればいいんじゃないか？」

イラついて仕方ないので挑発、発散しないと胃に悪い。つか、遅いんだよ！！

11時ってどういう神経してんだよ、あゝムカつく。

「さあ、始めましょうか。わたくしとラファールナイトメアの鎮魂^{レクイエム}歌で！！」

「.....はあ.....」

こいつ相手にするの疲れる、蒼月が機体整備のため予備機を展開する。

コアを乗せ変えたただだから問題は無いし、こっちが愛機といえばそつだ。

まあ、技術士官してたときの作業用にまk.....改良したラファールだが。

「流、今魔改造って言おうとしたよね」

「き、気のせいだ。うん」

別に機体はチューンしてあるだけ、武装がおかしいんだけどね！

メインカラーは黒、背部ウィングは某Zガ ダムみたいに二枚、その間にテールスタビライザー。

右腕には特殊装備が搭載されている、インストールしてる武器も既製品の改造版だ。

ぶつちやけ、作業用というよりは模擬戦に付き合つたために作つたつてのが一番の理由なのだが。

「その機体・・・名前は？」

「あ？ああ、ネームレスだが？」

「そうですね、ですが負けませんわ！」

ナイトメア？どつかで聞いたような気がするが、どうみても砲戦仕様に見えるんだが。

つて、なにその馬鹿でかい物理シールド・・・あ、モニタールームの後方にある作業服のおじさんが泣いてる。

大変だったんですね、お疲れ様です。でかけりゃ良いって問題じゃないんだが、閉じたら顔以外見えなくなるなんて。

どこのフルシールドさんですか。

「さあ、行きますわよ！！」

それと同時に二挺の大口徑マシンガンの銃弾がスコールよろしく降り注いでくる。

うわあ、下手な鉄砲数打ちや当たるの精神ですか、そうですね。

「おい、壁を壊したいのかよ」
「ちまちま避けるからですわ！」

変則的な軌道で鉛弾を避けること20分、懲りずにぶっ放すものだから標的を見失った弾はアリーナの壁面に吸い込まれる。

その結果、あちこちが削られて・・・
無残にも綺麗だったアリーナは着弾痕で彩られていた。もったいねえ、情けで当たる訳にはいかないが。

「そろそろ終わるぞ」

「できるものなら！」

「んじゃ、遠慮なく」

右腕が意思一つで装甲をスライドさせ、特殊装備を開放する。
そして、内部カバーが三方向に展開し青白い光を放つ銀の砲身が現れる。

緊急時制圧用急速凍結エネルギー砲『アブソリュートゼロ』起動。

こいつに搭載した趣味100%武装、その割に成果は結構あるという噂の特殊兵装。

おゝ、驚いてるなあ。なにせこれを使っていた奴は有名だからなあ。

「なぜあなたが氷結魔女の武器を!？」

とまあ、中二的ネーミングをつけられてるが。

「それは恥ずかしいから止めてくれないか？」

「もしやあなが？」

モニタールームも騒がしくなってるな、まあそうだろう。非公式戦
トップ2だからな。

「じゃ、そういうことで」

イグニッションブースト
瞬間加速で接近する、もちろん対シールド用ライフルを左手に携えて。

ちなみにこのライフルに使われているのはIS用破碎貫通弾。

ズガン バキンッ

つまり厚い物理シールドも破壊する自作弾頭、ぶっちゃけチートだが今回は無視。

そのまま更に物理シールドに撃ち続け、全てを文字通り砕いた。

「なっ！？そんな馬鹿な！」

「隙あり！！もらったああああ！！」

動きが止まった瞬間、地面を蹴り、跳躍して懐に飛び込む。

フェレットの胴体に右腕ごと突き当てて、心の中でデリンジャーのトリガーを押し込む。

ゼロレンジショット
「零距离射撃！！」

そのまま、白い光が溢れ二機を包み込んだ。

「しよ、勝者。西川流！！」

歓声が沸き起こる、良いのかそれで？

悪寒がした途端、横に跳んだ。避けたかどうかギリギリのところを青いレーザーが掠める。

「どうやら、お客さんらしいな。」

「西川流、貴様をスカウトしに来た」

逆光で顔が見えなかったが、深紅に染められたISを纏った女性がそう呼びかけた。

71・キーボードをクラッシュしたくらいイライラする(後書き)

またオリジナル展開・・・

まだまだアンケート投票受付中

このままだと少数意見だけです！

72・襲撃者、人気者ですわって？

「西川流、貴様をスカウトしに来た」

そう一言、どこの誰だよ。そして何のスカウトだよ。てか、なんで初対面は自己紹介が無いんだよ！

（過剰なストレスによりおかしくなっています）

「あいにくだが、もう就職しててね。悪いがお引取り願おうか」

「そうか、では今回は引こう」

あれ、無理にでもやると思ってたんだが・・・。

「まあ、情報の礼だ。受け取れ」

その瞬間、プレゼントボックスのばら撒きよろしく小型ミサイルを放った。

嬉しくも無えよ！！

「くっ間に合わねえ！！フェレット！！」

「やってますわ！！」

モニタールームへと向かうミサイルを片っ端から叩き落す。ここは学園と違って防御シールドが無い、知っててやってたなあいつ！

「逃げて！！」

あわただしく状況を理解した人が逃げようとするが間に合わず、モニタールームにミサイルが一発突っ込んでいってしまった。

「くっ、フェレット!!」

「わかってますわよ!指図しないでください」

すぐにモニタールームに向かう。だが、衝撃とともにISがダウンした。

焦っていた代償か、エネルギーが切れた。

「きゃああああ!!」

「ったく、こついつとときに!!」

待機状態になったISを一瞥し、落下していくフェレットを抱きかかえる。そのまま、モニタールームに向かった。

「ぐ、シャルロット。無事か?」

ミサイルが飛び込んできたモニタールーム、離れていたにも関わらず父さんが真っ先に僕を瓦礫から守ってくれていた。

今までの道具として見ていたような目ではなく父親の目だった。

「どうして・・・」

「父親が子を守るのは当たり前だろう、すまなかったなシャルロット」

「え・・・」

瓦礫を投げ捨てて、僕を抱きしめてきた。別に嫌だと思わなかった。

「会社のことに関わらせて不幸になってほしくなかったんだ、すまないな。苦しい思いをさせて」

そんな、離させるために父さんは嫌われるような行動をしていたんだ。

僕のことを思つて……。

「あいつも、会いたがっているよ」

「う、うう。父さん!!」

「ふう、あんたも大変だったな」

「さあ、知りませんわ。」

「素直じゃないねえ、仲良くしたいなら今だぞ?」

「今はいいですわ、時間はありますもの。それに素直じゃないのは父上ですわ」

そう、経営危機のデュノア社に所属していたのでは愛人の子であるシャルロットは倒産した場合に真っ先に狙われる。

情報を知る関係者として。それを危惧した社長はそうなる可能性が確実になってきたために、法を犯してでも縁を切るうとしていた。

つまり、無関係の人間として。

更に、男として学園に入れたのもカモフラージュのため。干渉は一切受けないからだ。

しかし、金が無いからには生活ができない。そのために一時的ではあるがテストパイロットとして多額の報酬を与える。

結局は子を思つての悲しい親心というやつが暴走だった。

まったく、大好きなら他の方法考えろよ。

「父さん、僕はいつまでもここに居るよ。守ろうとしてくれたなら、今度は僕が守る番だよ！」

「くう、嬉しいよシャルロット！父さん頑張るからな！」

「まったく、素直じゃない父親だねえ」

「同意はしますわ」

その日、デユノア本邸からは家族の団欒が聞こえたそうなの。
めでたし、めでたし……取調べされた俺は夕食逃したが……。

72・襲撃者、人気者ですわって？（後書き）

悲しい親心、ううむ。上手く書けた自信がない、書き直すかもです。

現在、1・3・4に一票ずつです。これだと決められません、まだまだ受け付けていますので投票お願いします！

記念話を決めるのは君だ！！

73・一件落着……だといいなあ

「シャルロットさん、失礼な言動をお許してください」

そう、深々とフェレットが背を折り曲げて礼をしていた。まるで別人のように。

「いや、その。気にしてないよ」

「いえ、いくらあなたの為とはいえ母上を侮辱する発言。お許してください」

あれって演技のレベルじゃなかったがなあ、あれが演技って……侮れないな。

……フェレット……あ。

「僕の為だったなら、怒らないよ。逆に、僕が謝らなきゃいけないもの」

なんとか一件落着か、まあ良かったな。

「さてと、じゃあ俺は土産でも買っておくよ。終わったら先に飛行機で待っててくれ」

「うん」

あゝ、うん。千冬にはワインでいいか、専用機持ちにはこのロールケーキで！

いつも疲れてそうだし、本場の甘いものでも

(甘いもの、ワインが大好きです)

「お、この髪飾りは深螺に似合うかも。こっちはエリーか？」

くそれから

「さてと、向こうに着くのは夜中か。わだかまり解けて良かったな」「うん！みんな良い人ばかりだったよ、父さんもフェレットさんも」

ふう、後は帰国まで何もなければいいなあ。

だが、その期待は裏切られた？

起床しているのはパイロットと俺だけになった深夜、プライベートチャネルからアラートが鳴り響く。

「はい、西川」

『はいはい、お久しぶり』

ぶつり

『Tさんだよ、前はあり』

ぶつり

『まだなに』

ぶつり

「いい加減黙れ、寝させろ、用件はなんだ」

『暇だったから』

「そうか、そうか」

ぶつり

え〜と通信拒否と。さてと、仮眠とるか。

その後、通信拒否のおかげで久しぶりに熟睡できた。次会ったらTさんぶちのめす。

「あ〜、ただいま帰りました」

「な〜くんお帰り〜！」

職員室に入ったのに最初の出迎えがエリーとはなにごとか。

つか、なんで深螺も？候補生だからってわけじゃないみたいだが・・・。

73・一件落着・・・だといいなあ(後書き)

次回から大きく動きます？予定は未定ですが(汗)

74・因縁・・・あきらめろよー!! (前書き)

たあち、動きますよー

74・因縁・・・あきらめろよ!!

「流、あれを使ったな？」

あれとは・・・あれね。

「ああ、ちよいとな。一応護衛用に持っていたが、隠蔽はしてあるぞ？」

「知っている。だが、ある組織からこんなものが届いた」

そういつて手渡されるたのは、ネームレスを纏った俺が中央に写る写真だった。

アングルから言つてあの侵入者が撮影したものだろう。

「あゝ、そういうことか」

「心当たりは？」

「無いな、おそらく整備士兼操縦者狙いだろう。まあ、使ったのは不可抗力だが」

うん、まあ、模擬戦はしなくても良かったような気がするが・・・
。今更どうこう言われても意味がない。これで終わりかと思いきや、
驚愕の言葉が吐き出された。

「これを送信してきた組織は『ヴァンシユタイン』と名乗っていた」

『は!?!?』

深螺・エリー・俺含む三人が驚きの表情になる。

二人が俺を見るが頷くことしかできなかった。ヴァンシユタインは俺たち共通の悪敵であったのだから。

「更に差出人名に『ハデス』とあった。ここまででどうだ？」

「そこまで同じっていうのは偶然ではないですね」

「もし本物なら、覚悟しなきゃいけないわね」

「既にここまで来てたか」

「おいおい、勝手に話を進めるな。どういう関係なんだ？」

う、しまった。千冬を置いていってしまった、悪い癖だ・・・すまん。

「俺たちが転生者トランスファーってことは前に説明したよな？」

真面目に話し始める、忘れることはない。世界の命運を懸けた戦いを。

「・・・そういうわけだ」

それから数分間に渡り説明をした、白さんにも来てもらった。

「ふむ、因縁の相手か。お前たちはどうするんだ、まさか前世通りには動けないだろう？」

「まあ、そうだな。俺以外は候補生、俺自身もイレギュラー。おそ

らく複数の組織に狙われてる。あまり大きく動けない」

それは確実だ、ISが使えることが公に知られるようになるで一夏もだが国家から民間まで多くの組織に狙われている。

この写真が送られてきたということは、おそらく俺に集中する。氷結魔女は裏社会では有名過ぎる。

「おそらくですが、学園のイベント開催時が危ないかもしれませんね。人が集中して警備が困難な時は狙いやすいですし」

「逆に少人数の場合もだね、用心しなきゃいけないですよ」

事実、一人でいたときに狙われたしなあ。白さんは視線をそらしたが……。

「結論は？」

「本拠地が割れるまでは襲撃者を確保、なるべく学園には干渉させない」

千冬が少しコメカミに手を当てる思考する、流の目は少年ではなく指揮官の目だった。実戦を経験した、戦士の瞳。

普通の若者がする目ではなかったが、なにか安心させるものがあった。

「わかった、だが無茶はするなよ？」

「ああ、了解！つと、そうだ。タイミング逃しちゃったが、ほい」

スーツケースを開け、綺麗にラッピングされたワインボトルを手渡

す。

「す、すまん。ありがたく飲ませてもらうよ、そのときは付き合えよ?」

「はいはい、ほらお前らにもあるよ」

むすつとした顔の二人にも箱を渡す。

「わああ」

「綺麗ですね」

お守りとしてあったペンダント、青い宝石が中央に光り、裏面には「SDFGAB」の刻印。自衛隊心霊対策班の略称だ。長いだろうか?大丈夫だ、気にするな。

「それと、はいこれ」

千冬の首にそれを掛ける、うん。似合ってる。

「これは?」

「世話になってるお礼だよ」

赤い宝石がはめ込まれた小さめのネックレス、ちゃっかり結界を作る機能付き。

「まったく、変に気を利かせおつてノノ」

なんか二人が睨んできているが無視、レポートとかの書類をやらなきゃいけないんだよ。

さてと……2828し過ぎだぞ、千冬。そんなに嬉しかったの

か？

まあ、喜んでくれるなら良いんだがな……。

「ホント、人気者は辛いね〜」

「そうですね」

「そうだね〜」

「まっただくだ」

衝撃的な事実直面したというのに、呑気な俺たちの声が職員室に響いた。

ちなみにそのあとは食堂でお茶したりしていた、緊張感が無いと言われそうだが、することが無いんだもの。

74・因縁・・・あきらめろよ!! (後書き)

まだまだアンケート募集中!

票が足りなくて決められません、どうか投票をお願いします!!

m | | m

記念話を決めるのは・・・君だ! (- o -) b

75・肝試し・・・おい(前書き)

スーパ― JINGAI タイム!

75・肝試し・・・おい

「ふう、ここか」

「ええ、それにしても久しぶりですね。二人で行動するもの」

現在草木も眠る丑三つ時、風で雑草が揺れる中、俺と深螺は寂れた教会に来ていた。

もちろん、駆除の依頼があったからであるが。何の駆除だって？ g
g r k s !

「さてと、お前ら。隠れてないで帰れ、怪我するぞ」

『ギクツ！！』

さきほどから感じていた気配がする方向に声をかける、すると動きがあった。

椅子の陰から祭壇に向かって一夏・鈴が出てきた。

つておい、エリーまで混じってどうするよ・・・。ため息をつきながらそこへ歩いていき右手を振り下ろす。

スパパパン！！

千冬直伝の出席簿アタック素手バージョン炸裂、しつかり力は抜いているけど。

無論、普通に痛い。事実、全員が蹲っているからな。

「まったく、餌捲いたらお前らが来てどうするんだよ」

「いや、なんか出かけていったからさ」

「だって、一人で行ったから・・・心配になるじゃない」

「こんな二人の護衛だよ」

はあ、エリーだったら今から何やるかわかるだろうに。
つか、もう、はあ。なんで俺の周りは心配性が多いんだか・・・。

「お前ら、早く帰らなk」

ゴシヤン

言い終わる前に天蓋を砕いて巨大な人型のマテリアルゴーストが舞い降りてきた。

周囲に割れたガラスの破片が飛び散る、まったく空気読めよ。

「エリー、深螺、こいつら誘導。俺は引き離す！頼むぞ」
『了解』

「え、ちょ」

「ほら、死にたいの？」

「もう、だから止めたのに！」

おそらく、この大きさだとISじゃ勝ち目は無い。おそらく、逃がしてしまえば市街地は火の海だ。

所詮、マテリアルゴーストはそんなものだ。まあ、知能があれば別だが・・・。

「さあ、化け物同士お話ししようじゃないか」

壊れていない椅子を蹴り、上方まで飛び上がる。残念ながらISを使えば楽だろうが対MG兵器ではないため、使えない。

ただでさせ有名な機体ネームレスだから居所が知れたら面倒だ。まあ、不特定

多数の組織に知られてるが・・・詳細な場所まで知られたら、ねえ？

「せいっ！！」

重力をプラスした拳を頭部に叩きつける、グラついて倒れこむ瞬間に胴体に蹴りで追撃する。

全身が悲鳴を上げるが気にしない、これくらいの動きは問題ないからな。

まあ、音速で拳と脚を叩きつけるのは流石に人外だが。まあ、これくらいで倒せる相手じゃないがな。

「————！！！」

言葉にならない悲鳴を上げながら巨人が走りながらその拳を振り上げる。

近づいてくるそれを一瞥し、床に転がしていた紅を足で跳ね上げて左手で掴み、腰に当てる。

「フッ」

「——！！！」

風を切る音がして、自分に当たる手前で紅を抜き放つ。赤い光跡とともに巨大な右腕が切り落とされる。

床に落ちる前にその腕は光の粒子に変化し、掻き消えた。

巨人の体が薄くなった、その分霊気を消費した、いや消滅した。所謂、最低霊気量という奴、までギリギリなんだろう。

「まったく、これだから面倒だ」

知能がない分、自身の状態を考えずに標的に襲い掛かる。まるで機

械人形のように。

まあ、ボロボロでも突っ込んで来てくれるから倒すのは楽だけど。

でも、腕を複数の鎌にするには嫌だなあ。まあ、食らってあげないけどね！

紅を投げ捨てて、振り下ろされる鎌に跳躍して飛び乗り、同じく鎌に変化させた右腕で錐揉み回転しながら腕から切り刻んでいく。

周囲に金属片が撒き散らされる。腕を失った巨人は、皮肉にも月光の反射で照らされて綺麗に輝いていた。

まったく、綺麗だよ。今から消える存在は。

「ふう、なんか受信したみたいだが。終わりだ！」

四肢全てを鎌にして空気を切り裂きながら急降下する、こちらを向くがもう遅い。

既に刃は食い込んでいるのだから。

「good night！」

床まで刃を押し込み、叩きつける、確実に砕くように。

床に刃が触れたと同時に周囲に白い結晶が表れ、音を立てて砕け散っていく。

マテリアルゴーストが成仏、もとい消滅していくときの現象だ。

「ふう、終わったぞ」

屋外に言葉をかけると、四人が入ってくる。一夏と鈴が驚いていたが、深螺とエリーは苦笑していた。

まあ、あれだけの怪物を倒しちゃえばな……。

「うわ、一人で倒したのかよ」

「ホントすごいわね」

「あはは、前より強くなったね」

「まったくです、以前でさえ人外だったのですし」

おいおい、深螺。本当のこと言うなよ、事実だけどさ……。否
定できないのが悔しい！

まあ、そのときの話はそのうちか……。ああ、眠い。

「ほら、帰るぞ馬鹿共。今度からは俺が深夜に出かけても気にする
なよ？」

「いや、だって」

「一夏君、これは裏の世界のことだから深入りしないほうが良いよ」
「そうです、普通に暮らしたいならそれ以上は知らない方が幸せで
す」

まあ、そうだな。厳しいかもしれないが、知ったら最後、普通の人
生は送れない。

そんな存在の一つだがな……。

「一夏、もしお前の手が必要なら言うさ。だから、それ以外は黙っ
て待ってる。良いな？ 鈴木」

「……わかったよ、無理はしないでな？」

「はいはい、どうしてもって時は私も呼びなさいよね！」

75・肝試し・・・おい(後書き)

さて、描写がわかりにくかったような気がします・・・気のせいってことにしておこう、うん。

アンケートの締め切りですが、投票がそれぞれ同数で決められなかったので・・・期限を延ばします。いや、ねえ？

本作品のお気に入り登録数100件記念話の内容投票！

(投票数も少なかったため、一人二つに入れてください)

1・流×深螺の過去話

2・流×エリーの出会い話

3・流のドイツ滞在記

4・白さんとのデート(?)

5・いいから本編進めろ馬鹿作者

上記のうち、これを読みたい!と思うもの一つに投票してください。いや、マジで(汗)

もちろん「6・俺得の??話」でもok(マジで俺得です)

最終締め切りは7月24日です、常連・初見関係なく投票受け付けております。どうか、どうかお願いします!(懇願)

深螺「無様ですね、作者」

「言わないで。」

76・とある人外の戯れ（前書き）

千冬さんLOVEな方は非難してください！

（キャラ崩壊が激しいです）

キーワードがここで生きるのさ！

76・とある人外の戯れ

「おい、寝るんじゃない」

スパアアン！

のどかな昼下がりに、職員室で俺は・・・寝ていた。
仕事は終わっていたが、昨日の疲れでやばかったorz

「zzzz・・・」

「起きろ馬鹿者！」

ズガガガガン！

無理して靈気を大量に使ったから動けない、飯食えよって言われても動けないんだよ。

つか、普通に書類片付けてただけでも疲れた。教師って大変ですね。

「うにゅ、ふひゅう・・・zzzz」

「まったく・・・無茶しおって」

西川は睡眠中です

そういえばこいつが来てからもうこんなに経ったのか。早いものだな、どんなときも身を挺して助けてくれていたな。

まったく、ただの子供かと思っていたがな。それにしても、一夏が幽閉されていた場所に転生するとは・・・運が良いのだから悪いのだから。

「千冬……」

「なんだ？」

感謝はしきれないな、それにしても。寝顔がここまで可愛いとは……
触ってもいいだろうか（ゴクリ）

「また脱いだ服投げとくなよww」

「……」

ズガン！！

まったく、ドキドキして損した。なんだと思えばそれか、くう。つておいおい、いくら中身が成人しているとはいえ……えい。

プニ

「うみゅ、すうすう……」

これは……なんか良い。というか、この感触は癖になる。
も、もう一回。

ふに

「む……」

こ、これはいいものだあ！（夏の暑さにやられていると思うてください）

「あれ、どうかしたんですか織斑先生？あ、西川君寝ちゃってますね」

「うむ、疲れているみたいだからな」

「それにしても織斑先生いじってましたよね」

く、見られていたのか。恥ずかしいな、もう。

「あはは、西川君の寝顔可愛いですね」

「ま、まあな／＼」

「・・・ん？ああ、寝てたのか。そうだ、ってお二人何か？」

むう、寝起きの流も良いな・・・。

どうやら最近の私はおかしいようだな、まったく。

「あ、そうだ。千冬、明日暇？」

「ん？ああ、どうした？」

「だったらここ行かないか？」

そう言ってみせてきたのは、夏祭りのちらし。篠ノ之の実家が、ああもうこんな時期か。

久しぶりに見に行くのもいいか。

「良いぞ、たまには良いだろう」

「おし。じゃ、また後でな！山田先生、こっちの書類も片付けておきましたんで」

「わあ、すみません。助かります！」

二人きり、か。ふふっ良いな。

76・とある人外の戯れ（後書き）

さて、アンケートもまだまだやっていきますが・・・先に言っておきます。キャラ崩壊済みませんでしたー！！

というわけで投票待ってますー（＾|＾）ノ

77. JIのインストールって・・・(前書き)

いや、2828できるかな？・・・あははは・・・はあ。また千
冬さんキャラ崩壊です(汗)

77・このイベントって・・・

「待ったか？」

「いや、今来たところ。お、着物似合ってるじゃん」

千冬が珍しく着物を着てきた、いや、マジで珍しいぞこれ。雨でも降るんだろつか、というよりそれって彼氏に見せるものじゃないのか？まあ、いいか。

「さ、行こうぜ。早く行かないと人増えるからな」

「そ、そうだな」

「ほら」

手を出したんだが、顔赤くして俯いてしまった。どうしたんだ？まったく、早く行くぞ。

「むぎゅ」

「？ほら、行こうよ」

なんか変な声だしたぞおい、手を繋ぐくらいでどうしたってんだか。まったくもう、さてと最初はどうするかなく。

せっかく黒地に金のラインが入ったものを着てきたというのに、似合っているなどと・・・ノノ

くう、なぜこいつは女を喜ばせることばかり言うのだから。嬉しいが・・・まあ。

「ほら」

ふわ!?いきなり手を掴むなど、驚くだろうが!つて聞いてないか、さっきなにか変な声を出したのは気のせいだ。
うん、そうだ。気のせいだ気のせいだ気のせいだ(いきなりの出来事により気が動転しています)

「おお、やつぱ出店は多いな、何か食べたいのあるか?」

「はひ!?ああ、何でもいいぞ」

なんだ?何に緊張してんだか。お、焼きそばか、丁度いいや。

「おじさん、一つください」

「お、坊主は彼女連れかい?じゃあ、サービスだはっはっは」

いや、違っただが。ああ、もうやつちまったよ、なんか千冬が彼女・
・と怪しく呟いているけど触れないほうがいいなこりゃ。ってか
乙女か!つか、キャラ崩壊激すぎる・・・これは学園生徒には見
せられないな。

えくと、座れるところ座れるところ。お、丁度いいところに。

「ほら、ひとまず座れよ。腹減ったろ?」

「まあな」

さてと、まずは女性からだよな。えつとどうだっけ。

「はい、あ〜ん」

「!?!?あ、あ〜ん」

うん、美味しそうに食べてくれてけっこう。さてと俺も。

「おお、これ結構美味いな」

「あ、ああ。いいものだな／＼」

ちなみに心の中で千冬が悶えていたことを流は知らない、というか気づかない。

(現在、描写できないほど千冬がパニックっています)

そっぴや、この後は花火だったか。

「美味かったな、花火見るのに良い場所知ってるか？」

「ん？ああ、そっぴえばそんな時間か」

「じゃあ、その場所で見よう。どうせなら人がいないほうがいいだろう」

さーてと、お、もう始まっているな。お、綺麗だな。

「綺麗だな」

「そっぴだな」

「千冬のほうが綺麗だな」

「え！？おい、なにを言ってる」

「な、にきよどってんだよ、まったく。うおう！？」

冗談なのに……なにも本気で殴らなくても……痛えなあもつ。……ちやつかり腕組んでるこいつはなんなんだよ、まあ良いけどさ。

「これくらいは偶に良いだろ」

「まあ、ね」

そんな俺たちの上で花火がいくつも星のように輝いていた。

77・Jのイベントって・・・(後書き)

さて、2828していただけたでしょうか。できましたら幸いです！

まだまだ投票受け付けていますので奮って投票ください

(一人二つ選べますよ！)

78・兵どもは夢のあと(前書き)

ストレス溜まってるよね〜って話

78・兵どもは夢のあと

いや、良い天気の日って気持ち良いよね。なんか気分が晴れるっていうか、いや、晴れすぎて暑いのは嫌だけど。

「さあ一夏、特訓だ」

「いや、なんで二人がかりなんだよ」

ん？戻ってきたラウラとだが、何か問題でも？ドイツ仕込のレント・・・1対多の訓練だ。

「今リンチって言ったよな!？」

「おお、地の文を読むのはデフォルトなんですね。わかります」

「掲示板じゃねえよ!」

ううむ、なんと貴重なツッコミ要員。やはり世界が狙うのも納得がいくな。うん。

「いや、違うから。ポイントそこじゃないから」

「あ、そうか？でも貴重だぞ、ツッコミ要員。なあ？」

「うむ、ツッコミあつてのボケだ。忘れるな一夏」

「え~~~~~」

あ、おかしって？知るか馬鹿、最近色々ありすぎてイラついてるんだよ。わかるだろ？

「さあ、まずは・・・」

ズガシャー

！」 ガスガス！

「なあ、なんか声がしたんだが」

「気にしたら負けだ・・・多分（汗）」

通常営業に戻ります（b yシステムメッセージ）

「はあ、ふう、ふふ、ふははははははは・・・はあ」

さあ落つこちてきたいつぞやの無人機（あれ、声がしたような？）をフルボッコにしてやったぞ。

まったく、始末書増やさせやがって。あ、なんか悲鳴が・・・。

「うゝ、ひどいよゝ。素手だなんてふぎや！？」

スパパパン！！（ハリセンです）

「あ？不法侵入で突き出すぞコラ、お前の親友が始末書で困ってるの分かれ天災」

え、今どうしてるって？天災の首掴んで持ち上げてますがなにか？

「あ、束さんだ」

「う、む。なんというか・・・」

「もしもし、うん。ああ、そう。わかった」

さあ、電話したから待ってようねゝ 今、強いお姉さんが迎えに来

地面に寝そべった姉を見た篤の一言が昼間のアリーナに響いていた。
(使い物にならないISは学園がいただきました)

78・兵どもは夢のあと（後書き）

はい、暴走回でした。どうでしたかねえ……（滝汗）

まだまだ投票受付中です、そのあなたは是非お願いします。

エリー「無駄なあがきよね、まあ、暇だったらお願いね」

79・先輩すみません、とつくに話数超えました(笑)(前書き)

今回は読まなくてもいい感じですよ

79 先輩すみません、とっくに話数超えました(笑)

「……………」
「……………ねえ……………」

なんで返事しないって？身体と魂が入れ替わるっていう古典的なイ
ベントが起こったんだよ。
幽霊・人間間で……………」

「なぐくん、どうしよう、どうすればいいかな？」

「喚くな、五月蠅い。どうしようもないだろう、てか。マジでかよ
きっかけは模擬戦だった、超高速戦闘の演習をしていたら……………
蒼月とエリーの専用機「イブニンググロー」が激突したのだ。仲良
く頭から……………」

「はあ、なんでお前となんだよ。いや、他の誰かだったら良いって
わけじゃないけどさ」

「うう、あたしの声でなぐくんがしゃべってる」

いや、仕方ないだろ。これは。てか、なんてテンプレなことだ。ど
うしようかこの状況。
マンガくらいでしか見たことないって、もしこの状況を見られたら
どうしようか。

いつものふわふわ感がないエリー
逆にふわふわした流……………恐怖以外のなにものでもないな。

「お〜い、流〜」

げ、一夏が来た。どどど、どうしよう!??

「わ〜い、一夏く〜ん!」

「へ!?!流?え、ちょ、ま」

「すまん、トラブツた」

「は?エリーさん?」

パニックつてるな一夏。まあ、普段俺が抱きつくなんて無いし、エリーが冷静にしているなんてありえないしな。むしろここまで冷静な自分に驚きだが。

「いや、実は」

その後数分間状況を説明した、なんとなくわかってくれたみたいだが。

あ〜、どうすれば戻るんだろ。あんまし動けないじゃないか。

「ははは、まったく。マンガじゃあるまいし、流石だよ」

「いや、笑ってられないよ。一夏君」

「自分の声でしゃべられるんだぞ?落ち着かないって」

事実、さっきからくねくねしながらエリーが俺の身体動かしてる。俺は頭抱えてるが・・・頭痛の種がまさか身近にあったとはなあ。

「あはは、シニールだ・・・」

「だよな」

「あつはっは、そつだ。深螺に聞いてみよつよ」
「おお、その手があつた」

えつと、ケータイ。もしもし。

「はい、エリー？どうしました・・・ああ、中身は流ですか」

「うん・・・どうすれば直るかなあ？」

「・・・gggrks・・・としか言えませんね。前例がありませんし」

うわ、まさか深螺からそれが言われるとは。むつ、仕方ない。調べ
てみるか。

（自室）

「・・・いや、そりゃあ。ねえ？」

「うん、まあ。予想はできてたけどさ」

パソコンのディスプレイに映し出された解決法とは

1. 同じ状況をもう一度繰り返す

「死ぬわ！」

「あたしの身体が持たないよ」

2. 雷に打たれる

「殺す気か？」

「やっぱりあたしの身体が・・・」

3. 諦める、そう、良くあるドラマのように

「いや、ふざけるな」

「諦められないから調べてるのに」

仕方ない、コアネットワークで……かくなる上は……。

「受諾、クラリッサ大尉です。技師でいらっしやいますか？お久しぶりです」

「あゝ、うん」

「？声が違う……何者？」

「いや、私だ。今、面倒なことになっていてな。所謂……入れ替わりだ」

「……本当ですか!？」

「ああ、どうすれば元に戻る？」

少しの間、もしやクラリッサなら……。

「もう一度同じ状況を繰り返してください、それが一番です。それではご武運を！」

……そうですか、もういいや方法がこれ以外まともなものないし。

はあ。

「行くぞエリー!」

「了解！」

ガッン！！

『ふわう！？』

あ、なんだ？何が起こった……あ？

「アリーナ内では速度を落とせ、ばか者が。お互いにぶつかりにくなど」

「……も、戻った？」

「やったよ、なぐくん！」

え~~~~。投げられた近接ブレードでって、なんとというか……うん。

オチが無いぜ！

79・先輩すみません、とっくに話数超えました(笑)(後書き)

さあ、夏本番はオリジナルてんこ盛りで行こうと思っています。

あ、投票はまだまだ受け付けていますので。どしどし投票ください！

80・80話突破記念？（閑話）（前書き）

オチが無い話

80・80話突破記念？（閑話）

エ「やったよな〜くん、『IS・ゴースト』が80話だよ！」

な「え、マジで！？よく続いたなあ、どうせ凍結するだろうと思っ
てたからなあ」

ー「そんなこと言っていていいのか？」

というわけで記念回です。

ほ「なんだ今の」

深「気にしたら負けですよ」

ラ「最近嫁ばかりで出番が無いのだが」

シャ「それを言ったらエリーはどうなるのさ、やっと前回専用機出
たんだよ？」

ラ「むっ」

な「お〜い、みんな。記念祝いの飲み会だっさ〜」

ー「俺たち未成年なのに？」

鏡「だ〜いじょうぶ、そこは配慮してるから。多分」

な「80話記念、かんぱ〜い！！」

全「いえ〜い！！」

作「いや〜驚きですね。まさかここまで来れるとは思いませんでし

たよ
「

千「なんでお前がいるんだ、さつさと仕事行け」

作「いや、もう終わったから。あ、すみません。チューハイっ」

セ「いきなり飲み始めるのですか」

鈴「まあ、仕事終わりだから良いんじゃない？ここで飲むのはどう
かと思うけど」

エ「な〜くん、いえ〜い」

な「酒臭い！？お前、身体はまだ子供だろうが！」

エ「魂はもう大人だもん！」

深「まだ直っていないかったですね」

な「助けてくれ〜」

エ「な〜くん〜、え〜い！」

な「だから、上から覆いかぶさるな！」

一「うわ、すごいことになってる」

ラ「く、こうなったら私も！」

ほ「え？」

ラ「技師〜〜！！」

な「へ？ほぶあ！」

千「ははは、面白い」

作「大丈夫なのか？まあいいや、面白ければよし」

一「良いのか？あ、また関節外されてる」

な「やめ、イテテテてえ！？」

鈴「うわあ、流石にあれに入るのは無理だわ」
シャ「だよね・・・うあ」

深「まったく、酔いやすいのは分かりきったことだというのに」
鏡「止めなくていいの？」
深「いつものことです」

作「リア充爆h」
千「ふんっ！」

作「ぐへら・・・（ログアウトしました）」

セ「って待ちなさい！」

作「はい？なんですかテンプレお嬢様（笑）」

セ「な！？ナニを言ってる！」

作「いや、ねえ？まあ、サーセンww」

セ「侮辱しましたわね！お食らいなさい！」

作「え、ちょ。私生身の人間なんでsぎゃあああああ！！（再びログアウトしました）」

な「だあもう！離れろ、重い！」

ラ・エ『ふみゃ！』

一「あはははは、そーいや千冬姉神社に二人で行ったんだってな」

千「な、何故それを！？」

一「いや、流がさ」

千「ほう、そうか。どこまで聞いた？」

一「え、いや。普通に回ったってただけだけど？なにかるのか？」

千「いや、ならいい」

作「あ、あと4巻のイベント回収したら5巻に入ります」

エ「な〜く〜ん!!」

な「いや〜!!今は女よ〜!!」

鈴「なんであなたはそのときに胸そんなにあるのよ〜!!」

ラ「お、女の敵!!」

な「いや〜!!」夏「!!」

一「これ、オチあるのか？」

千「知らん。おい作者、ビール持って来い」

作「ええっ!?!?こき使うなんて・・・わかりましたよ〜」

80・80話突破記念？（閑話）（後書き）

どうせなら女体化した流メインの話でもやろうかと思う私

まだまだ投票受付中！

81・不意打ちは苦手です(前書き)

またかよ！っていうお約束と言っ名のテンプレ

81・不意打ちは苦手です

「あゝ、疲れた。すいません、アイスティー一つ」

「かしこまりました、少々お待ちください」

「ふっ」

え、何してるって？いや、今日の仕事終わったから喫茶店で休んでるんだよ。悪いか？

教師してる奴はわかるだろ、多分。あゝ眠い、早く帰って寝よ。

「お待ちせしました、アイスティーでございます。こちらサービスのクッキーです、それではごゆっくり」

あゝ、美味い。涼しい中でのアイスティー、落ち着くよホント。夜通しでやりすぎるのもあんまし良くないな。

まあ今はアイスティーでも楽しもうか。ふいゝ。

「あゝ、アイスティーはやっぱいいなあ」

「そうだな、西川流。そこだけは同意しよう。そしてオヤスミだ」

「は？っ、しまっ」

またか、そりゃあ普通に真っ向からだとな勝てないだろうが・・・睡眠薬をアイスティーに混ぜるとは。

せっかくの休み時間が・・・あゝあ、めんどい。またかよ、今度はどこの組織さんだ？

つて、また鎖で繋いでるよ。しかも四肢+胴体+首・・・いや、ねえ？

それよりだったら他にまともなやり方あるだろうに、なんでこんなパターンなんだよ。

前回と同じじゃられかたじゃねえかよ、もうみんな飽きたってこの展開。

「やあ、お目覚めかな？西川技師」

「テンプレ乙、協力するつもりは無い。以上」

いや、面倒だし。こいつらにかまけている時間は無いんだよ、うん。第一、俺が作ったやつは俺以外には使えないしなあ。

「そうか、なら」

ピッ

「ぐッ！」

この女、人の手首の動脈切りやがった。くそ、血が半端無く溢れてるよ。あゝくそ、靈気が減る。

「さあ、早くしなければ死ぬぞ？」

「はっ、これくらいの脅しで観念すると思っただか？」

わざと睨みつける、意識が危うく飛びそうになるがどうにか気力で繋ぎとめる。

ここで実体化を切れば逃げられるが・・・身体のことをバレたら面倒だ。

うわ、地面が血の池だよ・・・う。

「ふん、強がりと言ったところで貴様の不利は変わらないぞ？」
「けっ、気絶させて連れ去るなんて卑怯だよ・・・くう」

ドサリ

「はっ、氷結魔女も所詮この程度か。あっけないものだ」

女が抱き上げ、流を連れ去った。誰も知らない場所へと・・・。
その場に残されたのは鞆だけだった。

『もしもし、流？今から出かけない？ねえ』

持ち主を失った携帯電話がむなしく少女の声を響かせるだけだった。

81・不意打ちは苦手です（後書き）

少女って誰って？流ラバーズの一人ですが何か？

もし投票数が同着の場合は決戦投票になってしまいますのでご注意ください。

82・影と光の交錯

「知らない天井だ・・・当たり前か」

うん、誘拐されちゃった

別にいいだろ、現実逃避しただけだから。えくと、あれから一日経ったのか。

うわ、帰ったら千冬に殺される・・・。

あ、誰か来た。

「物質化を切っても逃げられないぞ、しっかり靈気を減らしてやっ
たからな」

どうりで身体が弱ってるわけだ、ちくしょうめ。だが。

「ああ、無理して逃げようとしても無駄だよ。これを使ってるから
ね」

そういつて女が見せてきたのは何かしらの文様が描かれた札だった。
見覚えがある、昔に深螺が使っていた対マテリアルゴースト用の足
止め用の札だ。

未完成品とはいえ霊体の状態固定をさせてしまう代物だ。

「悪いが、こうでもしないと君を捕獲できないものでね」

「技術なら提供は拒否させてもらう」

「これでもかい？まあ、この子が怪我しても良いならね」

そう言つて女が見せてきたのは一つのモニター、そこに映し出され
ていたのは。

「鈴・・・！」

「千冬さん！」

「なんだ、鳳。こんな時間に」

今は細かいことに構っている暇は無い。

「こ、これを見てください！」

「む、西川の携帯電話だろう・・・血が・・・どういうことだ」「返事しないからGPSで場所を探して行ったら・・・これが」

血が付着した携帯電話、しかも傷だらけ。

「む、動画・・・」

バッテリーが残っていたのか、自動的に撮影されたのだろう映像が再生される。

「さあ、早くしなければ死ぬぞ？」

「はっ、これくらいの脅しで観念すると思ったか？」

誰か知らない女の声と流の声が聞こえる、おそらく流のらしき手首が映っているが。

そこは刃物で切り裂かれたように内部が覗き、血が流れ出していた。流の荒い息も聞こえた。

「けっ、気絶させて連れ去るなんて卑怯だよ・・・くう」

ドサリと音が響き、画面に赤く染まったスーツがいつぱいに広がる。

「はっ、氷結魔女も所詮この程度か。あっけないものだ」

女の声がして、画面がぶつりと切れた。

千冬さんが珍しく焦った表情を浮かべていた、普段ならありえない顔だった。

「鳳、私がどうにかする。ここで待っている」

「おやおや、教師が動いて良いのかい？織斑千冬」

「流？」

私たちの目の前には流に似た少年が立っていた。まるで鏡写しのようだった。

「やあ、初めまして。ブリュンヒルデ」

「何者だ！この生徒では無いな、鳳、下がっている」

「なに、戦うつもりは無いさ。彼の場所を教えてあげようかよね」

82・影と光の交錯（後書き）

さあて、寝ます。投票してね。

白「投票お願いしますね」

深「あの子の話は恥ずかしいので止めてください」

エ「いいじゃん、m「お静かに」むぐぐ！..！」

83・吹雪と龍と月の影（前書き）

こんな二次創作で大丈夫か？

83・吹雪と龍と月の影

「貴様、名を名乗れ。あいつの関係者か？」

「ははは、当たり前じゃないか。リベル・ヴァンシユタイン、これでわかったかい？あいつから聞いてるんじゃないかな」

ヴァンシユタイン、流たちが前世で叩き潰した悪逆非道の組織。事実、人間を兵器の部品としか見ていない。

だが・・・流にこいつは似すぎている。どういうことだ？

「ふふつ、当たり前だろう？世界最強の人間のDNAを使って造られたんだから」

「ふん、そんな輩がなぜあいつの場所を知っている？」

「僕の仲間が誘拐したんだから当たり前じゃないか、馬鹿なのかい？」

『太平洋上を航海中の錆びたタンカーだよ、頑張つてね。アハハハハハハハ！！』

それだけ言ってそいつは消えた、まるで空気中に掻き消えるように。

「許可を下さい、お願いします」

「無理だ、お前は白先生にも勝てないだろう」

「ですけどー！」

「……………どうしてもと言うなら、私も行く。いいな？」

「はいー！」

「千冬さん、それは？」

「ああ、あいつが作ったIS。『月影』だ」

「うわ、遂に作っちゃったんだ。規格外ねえ」

「まっただ、さて、行くぞ」

「はい！」

「ふむ、ブリュンヒルデもか。面白いね」

「な！？くそ、外しやがれ馬鹿野郎」

「まあまあ、スープでも飲みなよ、すぐに面白いことになるんだから」

モニターに映る二人を見ながら、俺はタイミングを見計らっていた。つて熱う！！くそ、人のことだと思いやがって……あ、これ結構エネルギーに……。

「流！！」

「流！！」

「おや、早かったね。ほら、来たよオリジナル」

「そうだな、栄養も貰ったし。やっと回復したよ、ありがとさん」

そのまま全快した身体で全身全霊の右ストレートを繰り出す。え、どうしてって？

食事したから霊気が回復したんだよ、札も効力が切れてきたしな。

「悪いな、面倒かけて」

「まっただ、無事だったから許すが」

「もう、ビックリしたわよ。さて、帰るんでしょ？」

「もちろん」

戦乙女工業にまた蒼月を整備に回したからなあ、無理させたのが原因だが。

コアも合わせて調整って言ってたから手元にはISが無い。よって。

「せい！」

Skeleton dollyしか手段が無いんだよな、仕方ないけど。

「ははは、まさか君がそれだったなんてね。面白いよ本当に！」

俺を誘拐した女がISを展開する……え、ラファール？マジで？カラシニコフぐらいにシエア多いなあ。

「リベルさま、私にお任せください」

「ああ、頼むよ。じゃあね、オリジナル！」

なんか俺の自衛隊現役時代に似た奴が走っていった、オリジナル……？

何を言ってるんだ、ってめっちゃ似てるなあ。気持ち悪い。

「……はあ、まったく。面倒な因縁だよ」

「そうみたいだな、まあ。今はさっさと終わらせて帰るぞ」

「そうよね、お詫びに帰ったらチャーハン作ってもらわよ！」

「ははっ、良いぞ。帰ったらなあ！」

黒・赤・銀の影が走り出した。

「流、礼を言っぞ」

「どれだけ高性能なのよ！」

「はっはっは、現行の第三世代レベルだよ。装甲が特別ただけがな！」

流の右腕から光弾がばら撒かれ、鈴から衝撃が撃ちだされる。

「ぐう、くそつたれがああああ！！」

命を刈り取るように禍々しい鎌を振り下ろしてきた女を千冬の斬撃が切り裂く。

その一閃には迷いなど無かった。

「っていやあああああ！！」

そして、流の左腕の黒光りするクローがとどめとばかりに振るわれる。

切り裂かれて装甲が砕け散る、袈裟懸けにされたおかげでシールドエネルギーが0になる前にISが停止する。

いや、稼働できなくなったISがバラバラになる。

最後にコアが音を立てて落ちた。

「さて、全部吐いてもらおうか。それとも君が僕にしたことやってあげようか？」

「ちっ、くそが！」

瞬間、辺りが閃光に包まれる。

「く、閃光弾か！」

「趣味悪いよ、まったく！」

「目が痛い、なに考えてるのよあいつ！」

ハイパーセンサーで鋭敏化された感覚、この場合は視覚だが。弱点として、鋭敏化された感覚は強烈な干渉を受けた場合に操縦者にも鋭敏化された情報がダイレクトに伝えられる。

「く、逃げられたか」

「今はいいだろう、鳳、戻るぞ」

「は、はい」

この日、私たちは流の相手が強大なものだと知った。三人がかりだったとはいえ、あの操縦者の腕は国家代表レベルだったからだ。更に、DNAからコピーを作り出す技術。あの男から感じた気迫がそれを物語っていた。

「はいよ、二人とも」

「いただきま〜す・・・ホント美味く作るわね」

「こいつができる奴なのは今に始まったことではないだろう」

83・吹雪と龍と月の影（後書き）

うえ〜い、遂に動き出したヴァンシュタイン。流に瓜二つな少年は
一体……。次回IS・ゴースト「84・休日には休みたい」

やってみたかったです、はい。

投票も待ってますよ〜

84・夏のある日(前書き)

さあ、夏だ!!

84・夏のある日

「暑い」

夏休みもこれからという時期にそれは訪れた。

「流~~~~!!」

「ほづぐわあ!!」

「さ、行くぞう!」

「人を目的地に連れてきてから言うセリフじゃないぞ」

あつと言つ間も無く、今年新設のウォーターワールドに引きずられ・・・もとい引つ張られてきた。

鈴、もう少し手加減してくれ。ちゃっかり荷物まで持ってきてるし、いや暑いから丁度良いけどさ。

「で、一日付き合えばいいのか? まあ、良いけど・・・大丈夫か?」

「これってやっぱり・・・うふふふ・・・ハッ、何でもないよ!」
なんか言っていたが気にしないほうがいい気がする、突っ込んでいいことは無い。

経験的に・・・まあ、いいか。

「さてと、じゃあ行くか」

「うん！あ、手・・繋がない？」

む、ああ、人が多いしなあ。はぐれたらつて、なんか顔赤いぞ。

風邪とかじゃないみたいだしいいか、あゝ涼しい！

「お、おおゝ。結構色々あるなあ。最初はどこ行く？」

「うゝん、あ、ウォーターライダーとか面白そうじゃない？」

「はゝ、結構高いな」

え、どんな格好つて？俺は青い海パンだぞ、男に興味無いって言われても困るんだが。

だって、ねえ？まあそりゃ、男の水着姿見ても俺だって楽しくないが。

「ほら、行くわよ！」

「へいへい」

ちなみに鈴は赤とオレンジのスポーツタイプの子キニだったりする、活発な鈴には結構似合ってる。

最初に見たときに一瞬見とれたのは秘密だ。あゝ、身体に精神が引っ張られてるなゝ。

「早くいくわよ」

「わかってるつて」

一応一昨日まで怪我人だったんだが、まあ、心配かけたし・・・少しくらい言うこと聞いてあげなきゃいけないか。

「きゃあああああああ!?!」

「うおわあああああ!?!」

現在進行系でスライダーを滑走しております、うひひひひひひ!!
視界がぐるぐる回ってわけわからん、てか鈴。いくら怖いからって
俺の首掴んで揺らすなああああ!?!

「あうえおいうえ、Y A M E R O !」

「いやあああああああ!?!」

ダメだこいつ、早くどうにかしないと……うががががが!!

「のうわっ!?!」

「ひひやう!?!」

見事にスライダーから放り出されて落下する俺たち。
く、首が!!もげる、苦しい……ぐふっ……。

バッシャン

「ぷはあ!流、大丈夫?」

「ぶくぶくぶく……ふひい、死ぬかと思った。怖いなら最初に言
つてくれよ」

「だ、だつて……/」

あゝ、首が痛い。滅茶苦茶に振られたおかげでダメージが……
むぐっ。

「一回休憩しないか？喉かわいたろ」
「うん、そうしましょ」

イスに座らされた、俺が買いに行くって言ったのに……こういつときって男が行くものじゃないのか？

いや、まあ、良いんなら良いんだけど……なんか悲しい。

「はい、買ってきたわよ。ごみ増えるからこれにしたけど」

そう言っつて鈴が買ってきたのは……おい、それはカップル用のじゃねえか。

あの一つのグラスに二つのストローっていう……う、うむ。

困った、非常に困った。てか気まず……くないな。昔エリーがめんどいつてやってきたし。

あ、でも気まずいなあ……。

「飲まないの？」

「いや、飲むよ。ふう……」

お、これ結構美味いな。

「……………」

「……………（なんだ？）」

なんか顔赤くしてるな、まあ暑いしなあ。太陽キラキラだし、眩しいな。

……………現実逃避しても恥ずかしいです、はい。

なんか俺だけ恥ずかしがってないか？

「ふはあ！」

「ふはあ……」

なんか嬉しそうだし……いいか。なにでかは知らんが。
ん？

「園内にお越しのお客様にお知らせです、ペア参加での沖縄旅行チケット争奪戦が一時から開催されます。ぜひご参加ください」

「行くわよ！」

「うえ？」

そのまま俺は鈴に手を引かれて受付に連れて行かれたのだった。
なぜそんなにやる気満々なんだよ。

84・夏のある日(後書き)

まだまだ続くよ、今回は

投票受付中!

85・ある夏の日(前書き)

流爆発しろ！(そんな話です)

85・ある夏の日

周囲から視線という圧力を感じながら受付を済ませる俺たち。

周りの男共の視線が痛いし・・・大丈夫なのかこれ？なんか「リア充氏ね！」とか「リア充爆発しろ！」とか聞こえたが・・・誰に言っているのやら。

「さあ、絶対に手に入れるわよ！」

引くくらいやる気全開だし、そんなにペア旅行チケット欲しいのか。誰と行くんだよ誰と。

「まあ、面白そうだからやるけどさ」

「？」

「なんでもない、さあ、始まるぞ」

さつきから司会のお姉さんが跳ねるたびに外野の男共が騒ぐ。お前からそういうの目的で来てるだろ。

涼みに来たんじゃないのかよ。え、なんでこっち睨むんだよお前ら。なぜ殺気を感じなきゃいけないんだ。

『さあ、いよいよ全ペアがスタート地点に着きました』

隣には屈強そうな女性二人組だったり、おそらくカップルと思われる男女。

どうやら俺たちが最年少みいだな・・・。

『さあ、開始です！！』

近くのポールに備え付けられていたスピーカーから開始を告げるブザーが鳴り響く。

どうやら50mプールを円周に沿って作られた螺旋状のコースを通り抜けていくらしい。

中にはペアで無ければ突破できない障害もあるのだとか、今鼻歌しながら二人で通り抜けたが。

「楽勝楽勝！」

「地雷原歩かされたときよりは簡単だな、よつと」

できれば地雷原の話は聞かないでくれ、結構トラウマだから。

おゝ、失敗して転落するペアも増えてきたな。ちなみにプールに転落したら最初からやり直しという素敵仕様。

「どつりゃあー!!」

今も鈴を抱きかかえて二つ目の浮島にジャンプしてたりする、ってさつきから妨害目的のやつらうざい!!

てか、しつこいぞ。まあ、あれだけ暴れればなあ……こっちをマークするよなあ。

「待てやコラー!!」

恐ろしい形相で追いかけてくる美人女性
だったもの
だったり

「俺はこいつと行くんだ〜!!」

って彼女

おそらく
を背負って全速力で追いかけてきたり
まあ、さようならするけど。

「よっ」と

「うわあ!?!」

浮島に着地した途端に足かけて転ばせてプールに落としたり

「あたしが貰うのよ!!!」

「え、ちよ、うひゃあ!!!」

「い、いやああああ!!!」

鬼神のように二人まとめて背負い投げしたり（プールへ）

って鈴、顔が怖いぞ。どこからそんな力が出るんだよ……。
せめて手加減してやれよ、あの二人涙目だぞ？

『なんと、最年少カップルが現時点一位です！そしてその後方を追
うのはオリンピック代表ペア!!!』

え、ちよ。司会のお姉さんによると……オリンピックでレスリ
ングと水泳での金メダリストらしい。

うわ、厄介な……めっちゃ身体ががっしりしていらしゃる……
流石というか、なんというか。

仲も良いらしい、負ける気はしないがな！

「鈴、絶対取るぞ」

「当たり前よ!」

うおわ、話してる間にもうすぐそこまで来てる！仕方ない、本気で

やらせてもらおう。

「鈴、先に行け！ここからは俺のターン！！」

「負けるかああああ！！」

まずは一人目が力任せに振ってきた腕を掴み、そのままの勢いで回す。そう、独楽のように！
床が濡れてるから簡単に止まらない、しかも揺れてるから無理に動く・・・ほら転んだ。

「てい」

転んだ人を勢いに任せてプールに押し出す、目が回ってるみたい。
こんなのがオリンピックメダリストで大丈夫か？

ボシヤン

「美紀~~~~！！良くも美紀を！！」

え、だって・・・ねえ？外野は黙ってる、そして胸ばかり見るな。
睨むな。

そして、俺を恨まないで・・・ね？

「っせいやー！！」

目の前を小柄な少女が飛んでった・・・鈴だったよ、今通過したときの風がありえない速度だったが気にしないほうが良いのか。

「んなあ！？旅行~~~~！！」

こちらに手を伸ばしてみるも届かず、残念でした。綺麗に波紋を作
って着水。

「さあ、仕上げだ!!」

「もちろん、でええええええいい!!」

鈴を抱きかかえ（俗に言うお姫様抱っこだ）最後の島に跳ぶ、いい
つつやっほおお!!

そして、二人で手を繋いでゴール地点に走る。

85・ある夏の日（後書き）

今日が締め切りです、もしかしたら決戦投票になる可能性が・・・

86. ねんがん(?)のりょうちけつを(ry)前書き

短い大丈夫か?

86・ねんがん(?)のりょうちケットを(ry

「とつたああああ!!」

すぐさま会場に広がる歓声、ところどころ「リア充氏ね」とか「男の敵」とか聞こえる気がするが気のせいだろう。

いや、気のせいだ。てか、どこが敵?リア充って・・・おいおい。

『なんと、最年少ペアが他のペアを全て撃退してしまいました!』

『わあああああ!!』

「やったな、鈴」

「うん!」

いや、嬉しそうでなによりだ。そっぴや誰連れてくんだ? まあ、いいか。

『さあ、チケットを勝ち取った二人に盛大な拍手を!!』

おお、嬉しいくらいに拍手喝采だねえ。うんうん、良かった良かった。

本気だした甲斐があったってものだ、そう思わないかね?(ムカ風)

「楽しかったな」

「うん、久しぶりにはしゃいだわね。これも手に入れたし」

そう言って見せてくるのは沖縄旅行のペアチケット、何気にすごい手に入れたな。

そういや旅行とか行ってないな、まあ教師だし別にいいか。

「そうだ、流が居たからこれ取れたんだし。二人で行かない？」

「ん？良いのか、誰か他の奴と行きたいんじゃないのか？」

まあ、貰えるものは貰う精神だからいいんだが……。

「いや、あたしは流とが良いの。ダメ？」

ぐふっ、上目遣い＋涙目＋お願いポーズとか……卑怯な！！

これを断れる人間では無かったと言っておく、うん。

ちなみに疲れで寝てしまった鈴を背負って帰ったら深螺とエリーに騒がれた。

86. なんがん(？)の りょこつチケットを (ry)後書き(

さて、結果はどうなったでしょうね？

87・閑話ではまだ夏休みだが、大丈夫か？（前書き）

閑話ではまだまだ夏休みです、ちなみに投票結果はあとがきで

5巻入りました？

87・閑話ではまだ夏休みだが、大丈夫か？

「よつと」

「うええええええええ！？」

今、一夏を月下で切り伏せた。エネルギーを消滅させるのなら物理シールドで防げばいい。

「いや、簡単にできることじゃないから」

「そうか？まあいいや、一夏。もう少し燃費を考えた動きをしろ、じゃないとすぐに負けるぞ」

「む、ぐう。わかつてはいるんだがなあ」

事実、白式は第二形態になってから更に燃費を悪くしていた。零落白夜でさえ、シールドエネルギーを大量に消費するのに・・・雪羅が追加されたおかげで拍車がかかった。強力な武装はその分代償もあるってことだよな。

「そつだ、流さん。手合わせ願えませんか？」

「ん、ああ良いぞ。つと、実弾訓練で良いかな？」

「は、はい。すみません」

そう、いくら燃費が悪いとはいえエネルギー兵器が効かない白式は強かった。

事実、レーザー兵器が効かないのだ。レーザー兵装が全てのブルーティアーズには不利だ、候補生なのに模擬戦である程度の成績を修められないのはきついしな。

「ほらよ」

戦乙女工業から送られてきた、もとい開発部長の暇つぶしの設計図に書かれていたライフル。

しかも対IS貫通弾専用セミオートライフル……暇で作った奴（威力パネエ）

こんなのを個人に送っていいのだろうか？しかも俺に……。

「これは……なんですの！？スペックがおかしいですわ！」

だろうな、普通の物理シールドを一発で碎けるレベルだからな。ふざけてやったらこんな化け物ライフルできたからビビったし。なんてものを考えるんだらうなあそこの開発部長は……確か同い年だったか。

「気にするな、俺は気にしない」

「気にしたほうが負けというものですわね……」

まあ、ね。いや、これ作ったのは俺だけど設計したのは工業の人だからそんな信じられないような目で見ないで。いくらなんでもやりすぎだろ、これは。

「さて、始めるぞ。あんまし時間も残って無いしな」

「ええ、お願いしますわ」

すぐさま二機のISが飛翔する、200m地点に上がったところで向かい合って停止する。

『start!!』

同時に時計回りで円軌道を描きながら互いを狙って発砲する。

「やはり流石ですわね、エリーさんの言うとおりですわ！」
「はっ、セシリアも腕上げてるじゃねえか。そう来なくっちゃあ！」

球を描くように高速で撃ち合う二機の青に他のメンバーは見とれていた。

「実弾でここまでって、やっぱりセシリアはすごいわね」
「僕でもここまでではできないよ」

「俺もあんな風にできたらなあ・・・」
『無理』
「ひでえ」

87 閑話ではまだ夏休みだが、大丈夫か？（後書き）

え、まだ続くのって？もちろん。

投票結果をお知らせ致します

1 流と深羅の過去話 3票

2 流とエリーの出会い輪 2票

3 ドイツ滞在記 1票

4 流と白さんのデート？ 3票

5 さつさと書け 0票

6 俺得 2票

な、なんと1と4が同数・・・どうしましょうか・・・

というわけで決戦投票をします。

A 流と深羅の過去

B 流と白さんのデート？

C どちらも書け

上記の三つでの決戦投票を行います、というか行わせてください。
どうか皆さんの意見を尊重しておきたいんです。
期限は7月末まで！！

88・お笑いって難しいよね(前書き)

ネタ回???

88・お笑いって難しいよね

今日はIS実習の日だったりする、今回は俺も生徒側だが。

「いや〜、無駄に広いな」

「仕方ないだろ、男子が俺らだけなんだから」

普通は女子で埋まってしまうアリーナの更衣室で俺たちはISスーツに着替えていた。

本来は女性しか使えないISだからこそその措置なのだが、シャルロツトが女子ということ公にしてからは・・・。
また二人だけでの利用になった。当たり前だが。

「じゃあ、先に行ってるぞ〜。遅れるなよ〜」

そろそろ時間が近いのですぐさま出る、後ろからなんか「裏切り者」とか聞こえるが無視。

ん、誰か入ってたな。誰だ？

「織斑、遅刻だ」

「夏がぜーはぜーはー言っただけで走って来た、1分遅刻だぞ？」

「いや、あの、知らない女の人が（ry）」

なんか「省略するな!」とか聞こえるが・・・千冬が呆れたような顔

をしている。

まあ、そうだろうな。見知らぬ女生徒と話していて遅れたなんて、馬鹿だなあ。

おそらく俺が入れ違いになったあの人だと思うが……。

「織斑先生、相互訓練として実弾射撃を提言します」

「そうだな、デュノア。織斑とやってみろ、本気で構わん」

一夏、焦っております。シャルロットは殺る気だ!! ！どうなる、おっとアサルトライフルでの雨あられだ!! ！一夏、必死の形相で避ける！

(なぜか実況です)

ああつと、ここでシャルロットが笑顔でショットガン連射だああああ!! ！一夏は追い詰められて大量の鉛弾を受ける、美しい継ぎ目のある装甲はボロボロだああ!! ！

バシン!! ！

「変な実況をするな」

「大丈夫だ、問題n」

バシン!! ！!! ！

い、痛い。せめて最後まで言わせてくれよ、せっかくのネタなんだから。

「時事ネタはいけませんよ」

深羅まで・・・ちくせう、あ、一夏がやられました！！
ざまあwwww

「そんな技術で大丈夫か？」

「大丈夫じゃない、問題だ（キリッ）」

その日、ネタに走った二人は放課後にグラウンドの清掃を言い渡されたとか。

88・お笑いって難しいよね（後書き）

久しぶりにネタをやらせてみた、つまりはこれがやりたかっただけ。

決戦投票お待ちしております!!

89・集会・・・一応教師なんだが（前書き）

助け舟に定評のあるラウラ

89・集会・・・一応教師なんだが

「それでは生徒会長からお知らせです」

今、SHRと一時限目を使った集会だったりする。もちろん俺も生徒側で。

なんでも今月なかごろにある学園祭についてだとか、てか生徒会長出てくるのって遅すぎないか？

普通は年度初めにはもう出ると思っただが・・・。

「諸君、初めまして。私が生徒会長の更識さらしき楯たて無なよ、よろしく」

水色の髪に長身、スタイルも良いときた。なぜか周囲の女子から黄色い歓声上がる。

あんときの人か・・・なんで生徒会長が一夏に？まあいいか。

なんかエリーと同じ人を巻き込むタイプに感じる、むしろひどい感じがする。

どうか何もありませんように！！あ、一夏もなんか祈ってる。

「今月開催する学園祭だけど、特別ルールを導入するわ。その内容は」

慣れた手つきでいつの間にか取り出していた扇子を背後にあったスクリーンに向ける。

扇子に感嘆符が描かれていた気がする・・・うん。

それで、映し出されたのは・・・俺と一夏の顔写真。

「名づけて、『織斑一夏・西川流各部対抗争奪戦』！！」

『はい？』

状況が飲み込めない俺たちを置いて周囲の女子勢が騒ぎ出す。
おい、その二年、大会は捨てるなよ。てか、どゆこと？

うん、毎年の評価一位の部に出された助成金が今年は俺たち男子二人になったんだってさ。

いくら生徒会長でも本人の意思を尊重するべきだと思っただ、うん。ひとまず、面倒なことになった。

『はあ』

今くらいはため息したって良いよね？

「で、だ。一組では何やるかを決めるわけだが」
「みんなはなにか案あるかな？」

そんな呼びかけで返ってきたのが

- 1 . ホストクラブ
- 2 . ツイスター
- 3 . 王様ゲーム

などなど、しかも「織斑一夏と」「や「西川流」とが最初につくとい
う具合。

俺たちをなんだと知っているのかね？てか確実にお前らがやりたい
だけだろ。

そんなクラスメイトに困っていると・・・。

「メイド喫茶はどうだろうか、費用の回収も行えるし休憩所として
の需要もあるはずだ」

おお、ラウラナイス！！服もあてがあるから大丈夫だぜ、流石ラウ
ラ。

助かった、マジで。だってみんなの目が本気だマツったんだもん。

一夏も胸をなでおろしてる、同感だよ。

「あゝ、良いんじゃないかな？二人には接客か厨房をやってもらえ
ば」

「二人とも料理上手いですしね」

「えっと、じゃあ良いかな？」

『さんせー！！』

ふひっ、やっと決まった。じゃあ職員室行くか。

89・集会・・・一応教師なんだが（後書き）

女装させる気満々のクラスメイトの思惑を流は知らなかったりする。

決選投票お願いしまっす！

90・面倒な奴が来たよ・・・（前書き）

会長の口調とキャラが大丈夫か？大丈夫じゃない、心配だ。

90・面倒な奴が来たよ・・・

「まあ、がんばれよ。経験者がいるからな」

放課後に織斑先生へ概要の報告を済ませた俺たちは職員室を後にした。

経験者とは凶らずも俺だろう、しかも笑ってたなあ。嫌な予感がするが・・・。

その予感が当たった、出てすぐの曲がり角に見覚えのある女性。いや、天災（誤字にあらず）がいたのだから。

「やあ」

「あ、あのときの・・・」

「生徒会長か、よくもまあ巻き込んでくれたもんだ」

事実、教師も一教科だがやってる俺は大変だ。仕事があるのに・・・まあ、基本的にささっと終わらせれるが。

「いや、貴重な男子にかの有名な魔女さんだもの。気になるじゃない」

「興味本位でやられても」

「・・・」

なんかこれ以上言っても無駄な感じしかしないので俺は黙る。

ついでに何か言ってるが・・・ちやっかり俺も襲うのかよ、勘弁してくれ。

「せい」

「あら、流石ね」

足払いに続いての襲撃者の右腕を掴んで、そのまま背負い投げ!!
なんか一夏があんぐり口を開けてるが、どうかしたか？

「ちょ、おい。流、やり過ぎじゃないか？」

ピクピクしてるくらいでやり過ぎだなんて言ったらどうするんだ、
まあストレス発散も少し(75%)入ってたが。
おいおい、これくらいはできないと自分も守れないぞ。

「いや、流石にその動きはできないって」

「まあ、その動きは魔女のものですしね。光栄ですよ」

学園最強に言われても嬉しくない、どうせ決闘申し込みされるんだ
ろ。

そんなのばかりだから非公式戦ばかりになるんだよ、疲れるし。

「できればそれは言わないでくれないか、中二病すぎる」

事実、恥ずかしい。名乗り口上で言ったことは無いが……。

「あちゃ〜、それじゃあ何て呼べば良いですか？」

「普通に、西川でも、流でも良い」

「じゃあ、西川技師で良いよね？」

く、まさかのそれで来たか。まあ、魔女って呼ばれるよりは良いか。
。。。

「ところで何か俺たちに用事ですか？」

先ほどから蚊帳の外だった一夏が口を開く、確かにそれは気になる。あと、この後も仕事残ってたりするんだよなあ。

「いや、生徒会室でお茶でもどうかな。プリン大福もあるんだよね。」

「行きましょう、ええ、すぐに行きましょう！」

「え、流！？おい、お前仕事あるんじゃないのかよ？」

「それくらいすぐに終わる！！！」

え、餌につられてる？気のせいだ、俺はただ単に甘いものが好きなだけだ（キリッ

べ、別にプリン大福が大好きで食べたいわけでは・・・ある！

「あ、りゅーりゅーとおりむーだ。」

ゆ、ゆるい。いつもどおりにゆるかった、のほんさんはやっぱりゆるいな。

これでも生徒会役員だというのもいささか怪しい気もするが・・・。事実らしい、どうやら姉の虚さんが頑張っているのだろう。ってちやっかり椅子に腰掛ける会長は絵になるなあ。

「で、一夏君はなんでこうなったか知りたいんだよね？」

「まあ、あれ、流は？」

「お前ほど馬鹿では無い」

一夏が睨んでくるが気にしない、あんまし細かいこと気にすると疲れぞ？

90・面倒な奴が来たよ・・・（後書き）

やばい、会長さんのキャラが合ってるか心配すぎる。もし指摘しなきゃ良かったですらお願いします。

91・エリーはまっとうな子(前書)

影が薄いエリー・・・

91・エリーはもっとうひょうい

「あ、すいません」

「いえいえ」

虚さんがお茶を出してくれた、うむむ……美味しい。どうすればこの美味さが出るんだろうか。

一夏は説明には納得したみたいだ、いや、一夏と俺が部活入らないからっても、ねえ？

一夏はともかく教科担やつてる俺はどうなるんだよ、これ以上すること増えたらどうするんだよ。

予想はしていたが……なあ？

「そういうこと、わかってくれたかな？」

「はあ、まあ」

「俺は一応教科担やらされてるんだが、どうするんだ？」

一番気になっていたことだ、種類によるがやれないこともないというこの身体を恨みつづ問う。

事実、馬鹿みたいに稼働実習・整備実習を授業＋補修・放課後教習をしても力リーメイトを1箱食べたなら疲れが吹き飛んだ。少しの食事で疲れが吹き飛ぶからなあ……（遠い目）

「まあ、できるときだけで良いわ。あくまで教師を優先してね」

「ならいいか、まあ、善処するよ」

くそれからく

「ただいま」

「おかえりなさい」

『！』 MGSの見つかったときのをイメージください

俺たちの目の前に、裸エプロンの楯無さんが居た。すぐさま一夏がドアを閉める。

「なあ」

「気のせいではないな、入るぞ」

まったく、裸エプロンなぞエリーで間に合ってるってのに。何戸惑ってるんだよ、これくらい。

ああ、そうかドイツで俺は慣れてるだけか。入らなきゃどうしようも無いが。

ひとまずベッドが一つ増えていたと言っておこう。

「ただいま」

「おかえりなさい、あたしにします？あたし？それともあたし？」

「選択肢が無い！」

「あるわよ、一択なだけで」

うん、漫才乙。俺は仕事だ、一夏が助けを求めてくる。

「おい、流は良いのかよ!？」

「こんなの幼馴染とドイツに比べたら軽いからな、どうせ権限だらう？」

「もちろん、でも興味無いのは悲しいなあ」

興味が無いわけではないが、極端に興奮できない、というか耐性が

ついたつてのが正しい。
良かったな一夏、お前は普通に茹蛸になるがいい！

「わ、ちよ。楯無さん、普通に着てください・・・なんだ、良かった
あ」

「一夏くん可愛い」

「ぶはははは、一夏。着てないわけないだろうが、何考えてんだか
ね〜って楯無と向き合って笑う、これだから一夏は弄りがいがある
んだよなあ。
楯無もわかってらっしゃる、こういうのは下に着ているものをしっ
かり隠してやるのが一番だからなあ。
なんで知ってるって？察しろ。」

「それでさあ、流君は教えてるの？」

「俺が教えられるのは少しだけだからなあ、ドイツ式だと一夏が逝
くからなあ」

事実、普通の常人よりできる程度の人には着いて来れないやり方だし
なあ。

確か前に試しにやってみたら一夏がタヒってたからなあ。

「あれはやばかった、平気な顔してるラウラとエリーさんは凄かつ
たけど」

「じゃあお姉さんが教えてあげる」

「そりゃ助かる、良かったな一夏」

後日、一夏と俺は女子勢にボコボコにされた。特に一夏ラバーズに
・・・失念してたよ、スマン。

91・エリーはまっとうひざし(後書)

白さんは影で頑張っていますよ

92・一夏の受難

くその1^

「う、ん。朝か……>|<>|<!？」

今、言葉にならない声を発した一夏がベッドから起き上がっていた。それで俺も起こされたわけだが、どういっただってんだ朝っぱらから。

「どうした、静かにしろ」

「いや、楯無さんが……」

「あ？……ああ、なんだこれくらい」

別に下着姿にワイシャツで寝てらっしやるだけじゃないか、うわ寝相悪い。

将来の夫は大変だな、ご愁傷さまです。

「あら、二人とも早いわね」

やっと起き出した楯無、もう少しきっちりとした生活したほうが良いと思うが……。

スタイルいいつすね、一夏も目が釘付けになってるし。

おそらく鈴辺りが嫉妬するんだろっなあ、他は結構体つき良かったりするし。がんばれ鈴。

「ズボンを穿いてください！」

「暑いだろ」

「そっよそっよ、流石、わかってるわね」

「いやいや」

「俺の理性が瞬間加速するから頼む！」

イグニッションブースト

くその２く

「あゝ今日も何事も無く終わった」

「そうだなゝ、やっぱり風呂はいいなあゝ」

やっぱり一日の最後は風呂だよなゝ、しかもこんな大浴場だし。
む、誰か来たようだ。

ガラガラゝ

「やあ！」

「ういゝす」

「うええ！？」

一夏が五月蠅い、男がこの程度で慌ててどつするんだ。まあ例によ
って俺がおかしいだけなのかも知れないが。
いやゝ、俺って精神までおかしいのか？その君、君はこの状況で
冷静にいられるかい？

「無理だつての」

「そりゃそうか、まあ頑張れ」

ざばゝ

天井を見上げながら桶（自前の木製）ですくいお湯をかぶる。
すっかりタオルを頭の上に乗せるのも忘れずに。ゆったりゝ

「一夏君、背中流してくれないかしら？」

「ええっ！？それは流に頼んでくださいよ」

「ちえく、つまんないの」

「まったくもって詰まらん、男だろ」

「そういう問題じゃねえ！」

まったく、これくらい刺激が強いには入らないだろう。・・・え、違っつて？

知るか、耐性が無い奴に言われたくないな・・・ああ空しいなあ。

ちなみに後日、深羅に残月でズタズタにされた、何か俺したんだろうか？

「女性と入浴など、するものではありません！・・・・・・私となら良いですが・・・」

最後らへんが聞こえなかったが・・・まあ、今後は自重しますので・・・
・やめ、アツーーーーー！！

92・夏の受難(後書き)

白さんの出番は次回です、何気に人気？

93・開幕！学園祭「一日目」(前書き)

遂に始まります！

93・開幕！学園祭「一日目」

「・・・なあ、なんで俺女装？」

遂に今日は学園祭当日、頑張ろうと思いき着替えたのだが・・・うん。

『お姉さま・・・』

なんて熱っぽい目で見られるし・・・山田先生、はあはあしながら近づかないでください。

なぜに一夏だけ執事服なんだよ、なんかエリーが笑ってるってことは・・・ふん、そう。

「まったく、今日だけだからな。エリー、覚えてるよ」

「似合ってるのに、ねえみんな？」

「そうだよ、そうだよ」

「お姉さま・・・抱いてください！」

「綺麗・・・」

なんか怪しげなのが聞こえた気がしたが無かったことにしよう、気にしたら負けだと思っ。

ちなみに女体化じゃない、正真正銘の女装だ。クラスの皆さんの息が荒いのは秘密だ。

「え〜と、じゃあ皆さん。今日から頑張りますよー！」

『は〜い〜！』

うん、元気があつてよろしい。さてと、俺たちも始めますか。

「よし、一夏。やるぞ」

「ああ、どうせなら最高にしよう」

こうして学園祭一日目がスタートした、絶対に楽しい学祭にしてやる！

「おかえりなさいませお嬢様、こちらでお休みください」

「こちらレモンティーとくるみのクッキーでございます。どうぞ「ゆっくり」

『（すげえ慣れてる、てか完璧過ぎる）』

こんなことをクラスメイトが思っていたことなど知りもしない流は満員状態にも関わらず華麗に接客していた。

事実、指示も的確でちよつとしたメンバーのミスを入れても問題無いほどだった。

「ふひっ、一段落か」

「わあ、綺麗ねえ。流石魔女ねっ」

誰かと思ったら楯無か、魔女って呼ぶなって言ったのに、まあ今女

装してるから仕方ない・・・のか？
てかクラスが魔女？って顔してるからやめろ。

「お姉さんがお手伝いしてあげるから二人とも見ていらっしやい」

「おお、そうか。よし、行くぞ一夏」

「そうだな、ありがとございます楯無さん」

さて、と。蘭ちゃんが丁度予定が被ったから来れないんだよなあ、
確か弾を一夏が招待したんだっけ？

この時、俺は失念していた。自身と一夏の境遇に関して。

93・開幕！学園祭「一日目」(後書き)

今日が締め切りでしたね、本日最後の更新で結果発表しようと思
います。

お楽しみに・・・頑張るよ私は！

94・久しぶりに役に立った身体（前書き）

気になる結果発表はあとがきで！

94・久しぶりに役に立った身体

「お、来たか」

「久しぶりだな弾」

「おひさ〜」

校門前で弾がなにか落ち着かない顔で待っていた、すぐに気づいたが・・・

なに凝視してんだよ。

「一夏、遂に一人に決めてくれたか!」

「おいこら」

こいつ女装した俺見て気づいてないのか、声でわかるだろうが! ああ何てこった、こいつ、早くどうにかしないと。

「俺と一夏が付き合うわけ無いだろうが!」

ウィッグ（茶髪）を外しながら弾を軽く殴る、まあ身体はメイド服なんだが・・・。

髪を最近切ってなかったから伸びてるしなあ・・・頼む、気づいてくれ!

「うお!? 流かよ・・・」

「そんな落ち込むな、俺だっけきついんだ」

「ははは、実は「お姉さま〜」って呼ばれてるんだよ」

笑顔で手を振り返す、できれば空気読んで欲しかったなあ・・・あ、弾が軽く引いてやがる。

ちくしょうめ、こうなるなら着替えてくれば・・・意味無いか。

それから、弾がトイレに行き（遠いのに・・・）俺たちだけが通路脇で待っていた。

「すみません、織斑一夏さんに西川流さんですよね？」

スーツ姿のポニテ女性が話しかけてきた、企業視察の人か。お勤めご苦労様です。

「わが社の製品を使っただけなんでしょうか？」

うーん、俺は戦乙女工業からの試作品（趣味100%もしくはオ리지ナル）を使ってるし、白式は拡張領域が無いから無理だし。

「すみません、こいつはバスロット空いてなくて。俺も企業製品の試験者みたいなもんで、すみません」

「そこをどうかお願いできませんでしょうか、見るだけでも！」

うう、しつこい人は嫌われるぞ？まあ、実績出さなきゃ生活できないだろうけどさ。

仕方ない、靈気をちょっと使って意識干渉ステルス！

「一夏、行くぞ」

「あ、ああ」

なんとか捲いた俺たちはその後弾と合流し、次の場所へと向かった。

94・久しぶりに役に立った身体（後書き）

さあ、皆さん待ちに待った決選投票の結果発表です。

A・流と深羅 2票

B・流と白さんのデート(?) 1票

C・どっちもやるつよ 3票

うえ、マジで?どっちもやるんですか!?
もちろん、喜んでやらせていただきます。

最後に

フォンフォン様 零崎人識様 鉄屋様 いーちゃん様 駄猫様 俊
様 無零怒様 T D A K 2 4 様

上記の皆さま投票ありがとうございました!
本気で書かせて頂きます。またいつもお読みくださっている皆さま、
今後とも「IS・ゴースト」にお付き合いくださるようお願い致します。

本当にありがとうございました!

95・泣けるぜby流（前書き）

なぜこつこつという話はサクサク書けるんだろつね？

95・泣けるぜby流

「おお、それじゃあ俺は適当に回ってるわ」

「わかった、何か困ったら連絡してくれ」

「後でな、弾」

突然劇に参加して欲しいと楯無に言われ、体育館（そのレベルではない大きさ）へと向かっていた。

思えば体育館以外にもESが思う存分動かせるほどのアリーナも、広大なグラウンドもあるのだが。

「あ、来たわね。早速これに着替えてね」

そうやって手渡されたのは・・・どこかの王子様のような服。ごく丁寧に古風な王冠まで・・・何の劇するんだ？

一夏も戸惑っている、俺だって困ってるよ。アナウンス通りにやってくればいいってば聞いたがなあ？

あ、始まったみたいだ。まあ皆が楽しめるようにしますか。

「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」

お、普通だ。なにかするかと思ったよ

「否、それはもはや名前では無い。幾多の舞踏会を駆け抜け、群がる敵兵をなぎ倒し灰燼を纏うことさえいとわぬ最強の兵士たち。人は彼らをこう読んだ『灰被り姫』と！」
シンデレラ

『はあ！？』

珍しい、一夏も同じことを考えていたみたいだ。わけわからん、どうしろって・・・うおわぁ！

「技師、その王冠頂戴する！」

「一夏さん、いただきますわ！」

ラウラがMG3、セシリアがM16A2でバリバリ撃ってくるんだ、本物を。

一夏を蹴って急かし、本来なら怒られるのだがM1911二十連マガジンフルオートカスタム（個人の趣味全開だぜ！）を二挺コールし、足元へ向けて牽制射撃。

「流！！よこせええええええ！！！」

「一夏ああああああ！！！」

鬼のような形相で俺には鉈を持った鈴が、一夏には日本刀を持った筈が飛び掛る。

いつから戦場になったんだここは！？うおっ！

「うぎゃあああ！」

「危ない！！！」

どうやら一夏に向かった銃弾をシャルロットが庇ったらしい、ここから見る分には良いのだが反対側にいる皆さんの顔が怖い。

「流、それを頂きます！」

「なぐくん、貰うよ〜！」

ここ、ここいつらまでかよ。しかも懐かしのMP5にUZI・・・癖のあるあれを選んだってことは厄介だな。なにせあいつらの愛銃だも

んな、どれくらいの腕かは良く知ってる。ドレス着た傍目から見ても美少女（一部鬼神化）が銃やら刃物やら持って襲い掛かってくるのはシニールだが。

「一夏、逃げるぞ！」

「あ、ああ。すまんシャル！」

シャルロットが名残惜しそうにしているがこっちはそんなことを考えている暇など無い、逃げなければ殺られる。

なぜなら、観客参加型という説明通りにステージ下からもシンデレラが大量に襲い掛かってきたのだから。

数百人に色々得物を持った状態で追いかけられるのだ。恐ろしいだろう？

「お姉さま〜！！」

「織斑くん！！！」

字面は良いが目が血走ってるんだよ！一夏は真っ青になってるし・

・やべ、行き止まり・・・。

詰んだな、さよなら一夏、さよなら現世。今日俺は色々な意味で終わります。

「ちよ、おま。あきらめんなよ！？」

「無理だ、もう困まれたww」

逆に笑い出すしか無いよね、ねえ？

そんな時、上からロープが垂れてきた。すかさず一夏が掴む、むぐう！？

「ま、待ってくれよお」

「夏が捕まった途端夏ごとロープが上がって行ってしまった。
え、俺は？」

95・泣けるぜby流（後書き）

いや、一夏は何もしてませんよ？

記念話は書き終わったら順次やりますのでwktkしててください。
い。

それでは〜

96. こんなことなぞ、あっているのか！? by 某隊長さん (前書き)

原作読者でないとわからないかも

96. こんなことなど、あっていいのか!? by 某隊長さん

「・・・・・・・・チャオ」

一人残された俺は一夏を心の中で恨みながらあるモノを取り出す、すぐさまそのピンを引き抜く。

何かに気づいたラウラやセシリアはすぐに袖で目を保護するが、理解できていない女子勢が迫ってくる。

そんな女子の中に俺は全力で投げ込んだ。瞬間、視界が真っ白に染まる。

所謂、スタングレネード閃光手榴弾だ。しかもとびきりの特別製。

「流石です、技師！」

ラウラがなんか言っているみたいだが良く聞こえない、それだけ強力なものだ。

それこそ、眼前にまで迫ってきていた女子の軍勢を気絶させてしまっくらいいは・・・・。

まあ、やり過ぎた感はあるよね。数十人、ステージ下も合わせれば数百人も気絶させたんだもの。

「な、なんて威力よ」

「くっ、まだ目が開けれん」

「・・・・・・・・（目を回している）」

「流石私の嫁だけある、惚れ直しました技師！」

ひとまず、シャルロットごめん。投げる場所間違えた、いっしょに気絶させてしまったよ・・・後が怖い。

さて、と残ったのは……なんか見慣れない女子一人と……
セシリア・ラウラ・鈴・エリーか。
うん、鈴とラウラの目が怖いんだよね。獲物を見つけた獣みたいで。

「……よし」

『?』

俺の言葉を聞き取れなかったのか二人が首をかしげる、よし！

「逃げるが勝てぐへえ!？」

ステージギリギリに立っていたものだからバランスを崩して転がり落ちる、なんか知らん女の子の声が聞こえたような気がする……
何が起こった？そして身体の前面が痛い……状況の確認を……

「あの……」

俺のらしき王冠を困ったように持っている女の子が目の前にいた。

「ああ、大丈夫だったか？」

「ええ、はい……」

なんか後ろが五月蠅い、なんだよ？

「これで劇は終わりだろ、起こすの手伝って」

「あ~~~~!!」

「な、馬鹿な……こんなことなど……」

「あはは、なぐんだいたぐん！」

『はい？』

どういふことがわからず、俺と見知らぬ少女の声だけが体育館を反響していた。

なに、どういふこと？

96・じんなじとなぶ、あっているのかー？bY某隊長さん（後書き）

まだまだ続きますよ！

97・大丈夫なわけ無い、大問題だ！！いや、マジで！（前書き）

キャラが心配だ

97 大丈夫なわけ無い、大問題だ！！いや、マジで！

『・・・・・・・・・・』

え、何してるって？エリーに劇の説明を受けたところだよ、俺と女の子・更識^{なほしき}簪^{かんざし}さんとともに啞然としているんだよ。

「マジで？」

「そっだよ」

「な」

「え・・・」

ついつい顔を見合わせる・・・・。どういふことかと言いつつ。

1 参加者による王冠争奪

2 手に入れた者はその持ち主と同室（強制）

3 簪さんは友人に無理やり参加させられた

4 簪さんが俺の王冠を持っている、というか持ってしまった

「真に申し訳ございませんでした！」

全てのプライドを捨てての全力の土下座、これしか方法は無い。おそらくあの楯無のことだから拒否権は絶対に無い、どちらかが拒否しても、いや、拒否してくれたら嬉しいのだが。多分、いや、確実に生徒会長権限でやるはず。

「いや、良いよ。私は別に嫌じゃないし」

「でも、男と一緒に流石に・・・なあ？」

「だって、世界的に有名な技師と同室は嬉しいから・・・」

「・・・さ、最後の希望さえ消えた。俺はどうすれば良いんだ、初対面の女子と同室なんて・・・不幸だ。」

いや、もう、何なの、神様（笑）に俺は嫌われているんだろうか。ああ、死にたい、もう死んでるけど。

そんな感じにg d g dと思考の渦に飲まれていると、一夏の声が聞こえた。

『くっそ、ここで死んでたまるか！』

「どうしたの？」

不思議そうな顔をしたエリーが質問してくる。でも、その声は届いていなかった。

「いや、一夏の声が・・・！あそこか！」

その場にいた全員を置いたまま、俺は一夏の声が聞こえた方向に走った。

97 大丈夫なわけ無い、大問題だ！！いや、マジで！（後書き）

簪登場、キャラ崩壊が心配すぎる・・・

99 ぜいけんじょうけんじょう (前巻)

遂に、遂にいいいいいい！

98・やっと見せ場ですう〜

M1911に高火力炸薬弾を込め、一夏を感じる方向へと学園の廊下を走っていた。

そして、一つの扉を蹴り開ける。

「一夏あ!!!」

「やっと来たか、西川流」

そこにはロッカーに背を着けどうにか立っている一夏と、勧誘してきていた企業の女性が立っていた。

すぐにセーフティを解除し、銃口を女性に向ける。感覚でわかる、こいつは経験者だと。

「動くな、さもなければ撃つ。いや、もう撃たせてもらう」

すかさず引き金を四肢目掛けて撃ち尽くす、それこそ生身の人間ならば一瞬で肉塊になるほどに。

だが、全て命中したにも関わらず、女性は生きていた。

「ははは、流石あの人が認めただけある」

「お前らの組織とは初対面なはずだが？」

ガバメントの弾装を交換しながら身体を戦闘用に変化させる、こうしなければ人外な戦闘能力を使えないからだ。どこが完全なんだか知らんが、今は関係無い。

「覚えがあるだろう？第二回モンド・グロツソの時だよ、簡単に言

えは貴様がこの世界に来たときとでも言おうか」

「・・・あのときのISか」

「え、流だったのかあの人は？」

「ああ、そうだ。そうだろう？心霊対策班隊長さん」

俺の前世を知っているとはどういうことだ、知りようも無いはずだが。ましてや役職まで。

「なぜそれを知っている、知りようが無いだろう？」

「ほう、ならば貴様が轢かれて死んだのは偶然だとしても？」

いや、もしこいつの組織がヴァンシユタインと繋がっているとしたら可能性はある。

だが、死因までとは・・・ありえない。

「偶然じゃないとはどういうことだ？」

「そのままの意味だよ！」

瞬間、女性が光に包まれ。巨大な装甲脚が鋭い先端を向けて迫ってくる。

「流！」

「せいっ！！」

服を脱ぎ捨て、ISスーツになり、上方向にジャンプして装甲脚に飛び乗る。

そして月下を展開してそれを半ばから切り落とし、蒼月を展開させた。すでに左手にはラグナロクがコールされ、特徴的な紫色のエネルギー光をちらつかせていた。

「俺が策略で死んだんだらうと関係ない、この世界を奴らから、貴様らから守り抜くだけだ！」

「はっ、ならば精々頑張れ。これでも言えるならな」

「俺だって、やれるんだ!!」

「な、馬鹿、来るな！」

女性・データを抜き出した結果、オータム・・・確か英語で秋だった。は何か機械的な球体状のものを投げた。

それが俺を突き飛ばした白式にぶつかった途端、一夏が驚愕の表情を浮かべる。

なぜなら、その身体から白式が消えていたからだ。怪我をしていないことから、先ほどの機械が強制解除したのだと容易に想像ができた。

「ああ、名乗っていなかったな。亡国企業が一人、オータム様だよ。これは貰っていくぞ！」

「ふう、照準は？」

「もちろん!!」

夕日のように暖かさを感じさせるオレンジに染まった機体、「イブニンググロウ」が第三世代兵器である『バレットシャワー』を起動させていた。簡単な話、肩と脚に搭載された四本のサブアームだ。しかも今はそれぞれに新型アサルトマシンガン、通称蜂の巣・ビハイブ・を六挺保持している。

「一夏君、下がってね」

「は、はい！」

六挺もの銃口から吐き出されるのは特殊散弾、面制圧ならばおそらく最強だろう。

なにせ装甲脚をいとも簡単に残り三本にしてしまったのだから、校舎もこぼれ弾によって粉々だが……。

「さあ、どんどん行くよ！」

98. せつと見せ場です~~~~~(後書き)

イメージはジ・Oですね、隠し腕最高!

99・因縁は続く(前書き)

原作ブレイク!え、いつもだって?

99・因縁は続く

「ちっ、馬鹿みたいな性能しやがって」

仲間と通信しているのだろう、だが、まったく隙を見せない。それほど腕だということだ。

「逃がすと思うか？」

久しぶりに創造主を発動させる、瞬きほどの時間が過ぎ、一つの長大なライフルが現れる。

戦乙女工業から送られ、俺が完成させた規格外の実弾砲。名を「煌き」という。

通常でさえ物理シールドを破壊するそれが輪をかけて強化された、もはや弾速はハイパーセンサーでさえ感知できないほど。レールガンを超える実弾超加速実弾銃撃砲に変化していたのだ。

「一夏あ！求めろ、そうすれば白式は答えてくれる！！」

何かに気づいたように一夏は右手を掴み瞼を閉じる、そして自らの剣を強く求めた。

「A3軌道、C8で攻める！」

「了解、一夏君頑張つて！」

高速の弾丸がオータムを、強いてはアラクネの装甲脚を削り取る。息の合った元同僚の猛攻は世界が違っても変わらなかった。着実に機体の損傷度が上昇していく、二人は機体損傷による戦闘不能を狙っていたのだ。

場所は変わり、校舎に一番近い第三アリーナ付近に映る。

「セシリア！」

「わかっていますわ、流さんから受け取ったこれで！」

対峙するのは先日強奪されたティアーズ二号機「サイレント・ゼフィロス」、パイロットは顔が半分隠れてしまうほどのバイザー型ハイパーセンサー、一号機から増設された六機のブルー・ティアーズでの偏光射撃で見事なまでに対抗していた。

だが、レーザー兵器にしか対抗できないシールドビット・エネルギーアンブレラ - は高速の弾丸に撃ち抜かれる。

回避行動が行われる前に銃弾が到達しているからだ、中距離ではトリガーとほぼ同時に着弾。

「煌き」の名に相応しい性能だった、無論その性能に驚いていたのはラウラだけでは無かった。

「素晴らしい銃だな、誰が作ったものだ？」

大人らしい女性だった、バイザーの影からは綺麗に輝く黒髪が覗いている。まあ、注目する人間などその場にはいなかったが。

「戦う技術者ですわ、それもとびきりの！」

「守るための剣を作る一人の男だ！」

少しずつMは押されていた、最初こそ余裕で迎撃できていたが今は逆に押されている。たかが代表候補生に。

しかも片方は欠陥を抱え、実弾兵器を搭載していないはずの一号機。情報部に心の中で悪態をつきながらAICのエネルギー波を切り裂き、スターブレイカーで牽制しながら退却を始める。

『M、イレギュラーが多すぎる。撤退だ』

オータムからの通信を受けてチャフバレットをばら撒きセンサーを無力化、続けざまにスタンバレットを各機の目前に的確に撃ち込んで攪乱。悔しい思いをしながら学園を後にした。

「そんなことがあったのね」

戦闘不能に陥ったものの、撤退していった亡国企業の機体が見えなくなっただころに来た楯無に報告をしていた。

まだ黒い光からの気持ち悪さは消え去っていなかった。

「亡国企業はおそらくヴァンシユタインと繋がっている可能性が高い、おそらく俺が受けたのも霊気干渉兵器だと思われる」

霊気干渉兵器とは空气中に散らばる霊気を媒介として霊能者を目標とした兵器だ、主に極度の体調不良や吐き気・悪寒。最悪の場合は血液の逆流や動脈の破裂による失血死が引き起こされる。正直、二度と会いたくないものだった。

あれで恩人を亡くしているのだ。

「つまりは現時点以上の戦力を保持している？」

「証言からも把握はできた、でなければ俺の死因を知ることまでできない」

全てを話した、これで対策を練らなければおそらく何もできないまま全て殺られる。それこそ、悪霊に気づかないまま憑かれて自殺に追い込まれたり、身体を乗っ取られて同士討ち。あまつさえ魂を持つていかれる。

「わかったわ、神無家との共同調査・亡国企業の情報収集。強化しておくわ」

「こちらでもできる限り調査する、情報共有は確実に頼む」

これで少しはマシになるはず、一応事件に一段落が着いた。何か大事なことを忘れている気がするが・・・。

99・因縁は続く(後書き)

はい、セシリアとラウラが強いです。だって・・ねえ?今までまともな見せ場が無かったの?(?)お詫びとしてやっっちゃいました!

100 流の受難（前書き）

簪さんのキャラがわからない・・・指摘ありましたらお願いします
す

「む、ぐ、むう……」

あれから、マジで簪さんと同じ部屋に……鈴が悔しそうにして
いたが、代わってくれるのなら代わってくれ。

「あがりましたよ……入らないんですか？」

「あ、いや、うん。今入る」

慣れてる人じゃないから心臓がバクバク言ってる、てか顔赤いんじ
やね今！？あゝ、誰か助けてくれ。

色々と落ち着かなくて駄目だ、うあゝゝゝゝ！！

翌日……

「大丈夫か流？」

「大丈夫に見えるか？」

「まあ、見えないけど」

俺が男なのをわかっているのか知らんが簪さんが警戒無さ過ぎる、
昨日だって仕切り出さないで着替え始めたし。

一応俺は男なのに……そりゃあ、変なことはしないけどさ。男
に警戒無いつてのはどうかと思うんだ。

「く、俺はどうすれば良いんだ。あいつらは幼馴染だし……むう、

耐性ができるのがいつかわからん」

「俺を笑ったツケが来たんだな、ははは」

そうなのか？ そうなのかもしれないが、いつもの耐性が働かないのはきつい。 正常な男子の反応が顕著に現れてしまう。

そうなるのは困る、うが~~~~~!!

しかも、調査の代わりとして会長権限での同室が固定されてしまったので変えられない。 これくらいで済むのならと余裕ぶっこいていたあのときの自分を殴りたい。

「な、流」

「ん？・・・くぁwse drftgyふじこ1p!？」

笑顔で（目は笑ってない）出席簿を振り上げた世界最強がそこにいた。 なにか背後にオーラが見えたのは気のせいではないはず・・・ひい！

ズドガン

「.....!!」

声にならない悲鳴を上げて苦しむ俺を見下ろしながら千冬は一言。

「席につけ馬鹿者」

「.....はい」

あのさ、ISでも歯が立たないマテリアルゴーストを一撃で悶絶させるってどういうことだよ。

むう、ズキズキする・・・助けてエリー・・・。

「自業自得乙」

ひでえ、五文字で断られた、そのとおりだけでもさあ。

「それでは教科書38ページ、実弾兵器とエネルギー兵器の長所短所を説明しろ西川」

「はい」

とぼつちり・・・ではないよね・・・。その後、どうすれば落ち着いていけるか考え事をしていた俺は何回も叩かれた。

100・流の受難（後書き）

紳士キャラ崩壊WW

101・無理するな(前書き)

キャラ崩壊警報発令中

101・無理するな

それはどうにか耐性が構築されはじめたある日、整備室でネームレスの改修をしようと向かっていた。

カタカタ・・・カタ

軽機関銃を装備した一個小隊が突撃しているかのようにキーボードを叩く音がした。

心地良いその音の発生元は・・・簪さん？

「お、何面白そうなことしてるの？」

「あ、いえ」

画面に映っているのは見たこともないISの設計図、傍らには未完成らしきIS。打鉄に似てるなあ。

サブモニターにはプログラムの羅列、興味深いな。

「ふむ、ふむ。なるほどな、いいセンスだ」

「そ、そんなことはありません。私は・・・」

確かISを自力で作ろうとしてる人がいるとは聞いていたが・・・まさか簪さんだったとは。

そっぴや部屋でもキーボード叩いてたもんな、頑張りやさんは嫌いじゃないな。

「いや、自信持ったほうが良いよ。ここまでする人を見たことない」

「・・・そうですか、でもここからできなくて。どうしても一人で

やりとげたいんです」

「それはお姉さんに対抗したくてかい？」

少しの沈黙、じっと見据える。

「はい、こうでもしなければ勝てないんです」

「・・・そうか、馬鹿らしいなまったく」

それだけ言って離れる。すぐさま自分の作業に入ろうとすると

「馬鹿らしいってなんですか！」

「何故、人に頼らない」

顔を伏せる簪さん、その頬には涙が流れていた。

おそらくすつと一人で頑張ってきていたのだろう、まあ、それを否定されたも同然だ。

560

「君はなぜ頼ろうとしないんだ、手を取り合うのが人間じゃないのか？」

「で、でも、それじゃあ。意味が無いのに・・・」

はあ、楯無エ・・・こうなる前にどうにかできただろうがよ。妹だろつにさあ、世界に目を向ける以前に妹を見てあげろよ。まったくもつ。

「あんなに万能に見えるお姉さんでも、できないことあるだろう？」

「確かに・・・料理できないし、寝起きも悪い・・・」

「そういつこと、わかったかな？」

ふう、長かった。まったく、楯無め・・・後で妹について教えてや

らねば。

っと、そのまえに。

「で、俺はどうすればいいかな？」

「……手伝って……ください」

「よし、よくできました。さあて、じゃあ始めちゃうよー！」

気づき、学んだ人は好きだからなあ。ん、どうした？

「どうし「俺も妹いてさ、ほっとけなかったのさ」……そうなんですか」

そうさ、妹をほっとくような奴は許さん。つまりは楯無を後でボコるよ。

「少しだけど、手伝うよ。もちろんメインは簪さんがやること。いいかな？」

「はい。あの、簪って呼んでくれませんか」

「うん？いいよ、じゃあ簪は流って呼んでくれないかな？」

「は、はい……流／＼」

ふむ、なんとかやっていけそうだ。良かった良かった。

101・無理するな(後書き)

流は・・・シ コンだったりww

いまだに簪のキャラがつかめないorz

お気に入り登録100件突破記念その1「流と深羅のある非日常」(前書き)

まずは第一弾、流と深羅の過去話から！

お気に入り登録100件突破記念その1「流と深羅のある非日常」

「ねえ、流」

「ん〜？」

今現在、鈴と模擬戦を終えた俺は整備室にいた。もちろん事後の後始末だが・・・変なこと考えた奴はあとで吹き飛ばす。

「深羅ってあんたと同じ転生者トランスファーよね？」

「ああ、そうだな。それがどうかしたか？」

「なんか思い出のエピソードとかってあるの？」

う〜ん、昔のことだぞ？まあ、特に記憶に残ってるのはあれか？

「聞きたい？」

「うん、嫌？」

ぐ、だから涙目+上目遣いは卑怯だって。これでエリーにいくら騙されたことか・・・。

まあ、別に話しても良いよな？

あれは確か・・・23万年前、いや通算して・・・数えたくないが確か俺と深羅で調査しに行ったときか。

「何で隊長が動くんだよ、普通下士官の仕事じゃね？」

「仕方ないでしょう、そちらで空いてるのが流だけなのでから」

ある日、自衛隊心霊対策班に調査命令が出た。神無家との洋館の合同調査を行えというものだった。

なぜか海上自衛隊から急に配備場所が変わった俺とエリーはそんな部隊に追いやられ、日々怪奇現象が起こるといふ場所や心霊関連の事件の調査、あまつさえ悪霊退治をやらされる。しかも公表されず、まあ神無家の干渉も公表されないから当たり前だが。

「だからって相方がお前とは思わなかったよ、美希さんだと思ったんだがなあ」

「母上は他の調査に行っていますし、当主は別件で動けません。鈴音は動かしたくありませんし」

ちなみに深羅は極度のシスコンだったりする、妹をこの世界から遠ざけるためにわざと突き放したり。

逆効果だと思うのだが、あえて言わない。もちろん鈴音嬢にも伝えてない、こういうのは下手に他人が干渉することでは無いと思うからだ。まあ、最近は微妙にやばいかな？と思うようになったが。

「まあ、仕方がないか。誰だって妹を危険な目に会わせたくないよな」

「そうですね、それは流も良くわかるでしょう？」

「……否定できん」

実は高二になる妹がいる、確か鈴音嬢と同一年だ。名前は西川沙耶、家族総出で自慢の妹だ。

これがまあ可愛くて可愛くて、最近は落ち着いたみたいだが今だに兄離れができないでいる。

兄としては早く男の一人でも紹介してほしいんだが……鼻屑目を覗いても俗に言う美少女の部類に入るし。まあ、変な男が寄ってきたらぶっ飛ばすが。

「そっぴや深羅、例の駅の調査はどうなるんだ？」

「確か来週にでも調査になります、頑張ってください」

「またこっちかよ、人使い荒いよ上は」

ちなみに鈴音嬢と沙耶の通う高校だ、一回調査に行ったこともある。なんと綺麗な学校だったなあ……。

「着きましたよ」

「ボロいなあ、まさに出そうな感じだ」

本当に、マンガで出てきそうな廃墟の館。大きなステンドガラスはところどころ割れ、壁は随所に苔が付き崩れかけている。若い男女が肝試しに来て翌日死体で見つかるなんてB級ホラーで使われそうなほどだった。

「それにしても巫女服は着なきゃダメなのか？」

「これが正装です、嫌ですか？」

「別に・・・似合ってるとは思うがなあ、身体の線が出すぎじゃねえか？」

見事に似合ってるんだが深羅のモデルも逃げ出すほどのスタイルの良い身体を巫女服が締め付けるようになってる。そんなわけで、自然に浮き出るようになるってことだ。

「……………えっち……………」

「っおい」

俺は注意しただけなんだが何故に批判100%の視線を食らわなければいけんのだ？

何か悪いこと言っただろうか。

「はいはい、悪うござんしたよ」

「わざとなのにそれだけなんて、私が馬鹿みたいではありませんか」

「何か言っただか？」

「いえ、早く行きましょう」

細かいことは気にせず、俺たちは廃墟（笑）へと入っていった。もちろん俺が先導で。

お気に入り登録100件突破記念その1「流と深羅のある非日常」(後書き)

流の知られざる過去が・・・細かいところは見逃してくれたら嬉しいなあ

お気に入り登録100件突破記念その2「流と深羅のある非日常」(前書き)

え、前回で登録数が減ったからって泣いてませんよ・・・ええ

お気に入り登録100件突破記念その2「流と深羅のある非日常」

「つぷは、ほこりがやばいな。大丈夫か？」

「けほけほ、なんとかです。まったくもう」

うん、テンプレよろしく蜘蛛の巣だったり扉開けたらほこりの嵐だったり。

そのたびに振り払っている、正直面倒だ。あゝ、掃除してえ、マジ掃除してえ。驚くほど綺麗に掃除してえ。

「あゝもう、幽霊も良くこんな場所にいるもんだ」

「こういう場所みたいに人が寄り付かない場所で無ければ今の時代大変ですよ」

確かに昔ほど学校で　　が出た！とか聞かなくなった、事実特別なわけじゃないかぎり最近では調査がこんな場所が多くなった。

「まあ、ささっとここの調査終わらせよう」

「ええ、暗くなつてからでは面倒です」

「つて思っていた時もありました」

「確実にハメられてるよな、これは」

うん、確実にいることはわかったんだが洋館から出られない。

いや、出られないようにされていると言うのが正しいか。

階段を上がっているにも関わらず地下に向かっていたり、右側の扉を潜ったのに左側の扉から出てきたり。

赤い絨毯がランニングマシンのようになっていたり・・・e t c .
・・・

「つ、疲れました」

「同感」

何事も無かった部屋のベッドに腰掛けて二人して息を吐く。

正直、このような心霊現象を体験したことの無い人間ならば恐怖していたらろうが・・・。

俺たちはあいにく幼いころから経験がある、まあここまでイラついたことは無いが。

「あゝ、聞こえてるなら出て来い。話がある」

「私たちはあなたの言うことがわかります、あなたに関係することですので」

すると、動きがあった。

「そうなの？」

俺たちがいる部屋の入り口、そこから幼い・・・おそらく6歳くらいに見える少女が歩いてきた。

ピンクのワンピースに小さなハイヒール、長めの髪を三日月の形をした髪飾りでポニーテールで纏めていた。

「わたしに関わる？」

「うん、君に関係することなんだ。聞いてくれるかなあ？」

「ちょっとしたお願いに来たんです」

まあ、要約すると

「なんか民間人に危害いたやうしすぎなんだよ、大人しくしないと本職に成
仏させるぞコラ」

というわけだ、頭の固い政府の高官からの書類に載っていた。
実際は子供レベルのいたずらだったんだがな、まあ壮大すぎて危害
とかつて言われたんだろ。

錯覚させて歩きまわさせたただけだが・・・。

「じゃあ、我慢すれば良いの？」

「うん、ダメじゃないけど回数減らしてほしいんだ」

「そうしてくれば私たちはこれ以上干渉しません」

基本的に成仏させるって命令が出ていても俺たちはこんなふうの説
明、理解をしてもらい幽霊生活をエンジョイしてもらっている。害
が無いならば強制的に成仏させる必要など無い、共存ができるのな
らばそうする。だって、ねえ？

「わかった、嫌だっと思ってる人にはやらない。私約束する」

「ありがとう、そんなお嬢ちゃんにはこれをあげよう」

そう言ってポケットからブラックサ ダーを取り出して渡す。

え、なんで渡せるのって？知るか、気づけばこうなってたとしか言
えん。

まあ、同じような体質になった少年がいるという話だから良くある
ことなのかも知れないが。

「わあ、チヨコレートだ！」

「じゃあ、俺たちは行くよ。じゃあね〜」

「ばいばい！」

それから数分後、食べたあとのごみを受け取り。洋館を後にした。ちよつと遊び相手になったのだが「パパとママみたい」と言われて深羅が顔を赤く染めていた。

一体どうしたのだろうか？気になるが・・・まあ、ツツコンだから負けだ。

お気に入り登録100件突破記念その2「流と深羅のある非日常」(後書き)

あと一話くらいで深羅編は終わりです

お気に入り登録100件突破記念その3「流と深羅のある非日常」(前書き)

あゝあ、オリ主の過去がああ・・・

お気に入り登録100件突破記念その3「流と深羅のある非日常」

さて、あれから数日。今度は近所の遊園地（噂が絶えない）に来ている。

また俺と深羅なわけだが……。俺は青のTシャツに灰色のスポン、深羅はメトか！って感じの服装……。

「……………」

「……………」

深羅が怖がって調査区域のお化け屋敷に入ろうとしないんだよ。もっと恐ろしいのを相手取ってる人がなにビビッてるんだよ、本職が遊戯に立ちすくむって。

「大丈夫か？なんなら俺だけで行くが」

「い、いえ。仕事ですから……（チラ）」

勝手にしやがれ、神無家との合同だから俺だけでできないんだよ実際は。

で、だ。この漆黒の巫女さんはなぜに俺の腕に抱きついて離れないのでせうか。

マジで落ち着かないんですが、主に俺が。よし、腕に当たっているこれは肉まんだと思えば……。やっぱり無理！

「い、行きましよう」

「声が震えてるぞ、あと抱きつくな。暑い」

事実だ、そうさ、事実だとも！顔が火照って暑いのもあるけどな！こっぴつには慣れてないんだよ……！！

「む、くう。そうですね、私も暑いです」

「後で何か飲み物でも買ってやるよ、さあ、行くところか」

「おお、上手く考えてるなあ」

「ひ、ひひゃううう!?!」

「なるほど、こういうやり方もあるんだな」

「きゃあああ!」

「うお!びっくりしたあ、これはすごいなあ」

「ひぐ!.....」

あれ、静かになった.....って気絶してるよ。おいおい、昼間の調査でこれかよ。
起きろ〜〜。

「.....はっ!.....あれ、私は.....」

「中盤で気絶しやがったから出てきた」

いくら女子が体重軽いからって言うてもそれなりにあるからな?てか、夜の調査どうするんだろうか。

「す、すいません。私としたことが・・・」

「ははは、鈴音嬢に笑われるなこりゃ」

「い、言わないでください！」

よし、鈴音嬢に後でメールしておこう。たまにはこつこつ面白いのも良いだろ、主に俺得だがww
つと、仕事が今日は夜勤決定ってことですよね。ああ、沙耶に会いたいよ兄貴は。

「シスコン乙」

「言うなシスコン」

なぜ俺の考えていることがわかったんだか、あゝあ。まあ、お互い
のこと言えないが。

「もしもし、エリー？」

『はいはい？（ポリポリ）』

「残業決定したから、オペレート10時から頼む」

『はいは〜い、頑張つてね〜』

「おう、あと職務中に煎餅食べるなよ？」

『!?!?』

はあ・・・で、ベンチに座ってるわけだが。

「飯食いに行くか、ほら行くぞ」

「うひい!?!? あ、はい」

なんか手を引いたときに顔が赤かったのはなんだろうかなあ?別に
どうでもいいが。

お気に入り登録100件突破記念その3「流と深羅のある非日常」(後書き)

まあ、うん。優しい兄貴ってことにしておいてください

お気に入り登録100件突破記念その4「流と深羅のある非日常」(前書き)

マテゴ読者でなければわからないネタが多いです

お気に入り登録100件突破記念その4「流と深羅のある非日常」

「ぷはははは、本職が作り物に負けるとはな」

「笑わないでください、初めてだったんですから」

そう、昔から深羅はお化け屋敷に入ろうとしない。幼いころから本物を見ていたのだから当然かも知れないが・・・。

ちなみに今、近くにあつたレストランで夕食をとっている。腹が減っては戦はできぬと言つし、落ち着かせるためでもある。まあ、この後のために靈気の補充も兼ねてだが。

「ふむ、カツ丼はやつぱ美味いな」

「うう、やつぱり食べなきゃだめですか？」

こいつ、いつもどれだけ靈気（体力と言える）を大量に消費しているのを忘れたのか？

いくら実力があり、消費が少ないとはいえ短時間での大きな消費は身体に過度な負担をかける。

だからこそ、他の靈媒師などは経文を徐々に強力なものにしていくのだ。

「そうして後で介抱するのは誰だよ、俺はもう嫌だぞ」

事実、緊急時だからと言ってこいつは強力な経文をいきなり叩き付けて倒れたこともある。

そのときはそれで決着がついたから良かったのだが、もし戦闘中だったらと考えると今でも怖い。

「はい、すみません」

やっと観念したのか、もう冷め切っている野菜たっぷりなスープを
食べだす。うわ、湯気が無いし、しょっぱそうだな・・・あゝもっ
たいたい。

「そういえば、物質化範囲に異常はありませんか？」

「発現してから変わらず、半径きつちし3m。拡大はしてない」

「ならば良いです。あ」

「なんだ？」

「いえ、鈴音から聞いた少年に来週にでも会いにいつてきてはどう
ですか？」

「鈴音嬢がラブってるらしい？まあ、なにかしらアドバイスはでき
そうだしな。確か今は同居霊が居るんだったか」

うーん、俺のときもちょっと大変だったしなあ。どうやら大怪我し
たときに発現したらしい、俺も同じだけど・・・ご愁傷様だな。ま
あ、自動車に撥ねられただけまだましだが・・・。

「ところで、あそこにいたのは何が何体だ？結構視線は感じたが」

「そのまえに、あの場所は最初何だったか知っていますか？」

「・・・ツ、処刑場か・・・」

元は、江戸時代の凶悪人を処刑。その数は記録に残されているだけ
でも万を超える。

今ではそれが売りになっている、しかし、無念・怨念が染み付いた
土地が数百年で浄化されるはずもない。たとえ霊が成仏しても、残
留しつづける思念は周囲から霊を引き寄せる。

「紅を持ってきたのは正解かもしれないなあ」

「ええ、あれならば確実に倒せます」

妖刀・紅

かつて戦国の世に名も無き武将が振るったかつての名刀、幾百の命を絶ち続けたそれは無念を持って死んだ兵の思いを纏い、さらに人を斬り続けた。ある書物には禁じられた刀（俗に言うブラックリストに）として記されている。伝記にも載っているアヤカシに挑んだ豪傑・桐生善之助の愛刀としても有名だ。
なにせ込められている怨念は数え切れないほどだからだ、刀身は微かに赤く染まっているのがそれを物語っているが。

「一応、B級装備も許可されてるし。そろそろ行くか」

「ええ、迷える霊を成仏させるのが私たちの仕事ですから」

そう答えた深羅の顔は、名実ともに認められている次代神無家当主とされている霊能者「神無深羅」であった。

お気に入り登録100件突破記念その4「流と深羅のある非日常」(後書き)

次回、人外じゃない流と本気の深羅のバトル!!

お気に入り登録100件突破記念そのファイナル「流と深羅のある非日常」(前

流と深羅の過去話は今回で決着!

「おし、もう少しか」

「ええ、思っていたよりは楽です」

現在、除霊（俺は物理的にだが）の真つ最中。深羅は黒い札（霊気を餌にしたブラックホールのようなもの）、俺は紅による斬撃で切り伏せる。本来ならば幽霊に触れることなどありえないのだから異様な光景だろう。まあ、今では慣れているが・・・。

「そついや、今日は着替えないんだな」

「ええ、めんどろでしたし。そういう流はその年でそんな格好じゃないですか」

いや、だって。刀振り回してたら暑いもの、ジャージでも良いだろ。誰だ、なにその祭弱防具wwって言った奴、これは特注の防刃ジャージ（価格・6700円）だ。まあ、結構ひどい切り傷を貰った経験からこうしているんだが。事実、全治一ヶ月ものだったからなあ・・・。

「しつかり対策はしてますよっと！」

振り返りざまに一閃、黒い人型の影が紅い残像に切り裂かれて掻き消えていく。

反対方向では、深羅が特殊な札を的確におびき寄せた霊に向けて放つ。

瞬間、小爆発（傍目には黒い粒子が影から噴出しているようだが）が起こりそのまま暗い光を称える禍々しい黒い札に飲み込まれる。

「これだけ見ればそりゃあ、『漆黒の巫女』って呼ばれるよなあ」
「中二病的ネーミングをされるのは嫌なのですがね」
「ははは、違くないな・・・おおっと」

深羅に向かう、首なしのカラスを掴みそのまま近くにいた足なしの人型に投げつける。

え、滅茶苦茶だって？できるんだから有効活用しなくちゃ意味が無いだろ、お、今日は上手く飛んでったな。

「はあ、本当に見事ですよ」

「苦笑いしながら言われても嬉しくないんだが『集合体の接近を確認したよ！』はあ、ラスボスのお出ましか」

数では敵わないと悟ったのか、小型の鳥型から人型が一箇所に集まり、巨大な怪物（これはいくら下ヨ子でも無理だな・・・まあ、どんな霊能者でも大変だと思うが）に変化し、拳を振り下ろしてきた。

抵抗力の無い人間ならば、その思念に飲まれてしまうほど。最悪、自身の霊気を飲み込まれて死ぬ。

「まあ、相手が悪かったな」

「ええ、私たちが相手ですからね」

『ランク3だから楽勝だよ！』

ランク3 - 通常の霊能者では無理（というか、こんなアクティブな除霊はしないからな）であるが・・・物理攻撃と、霊気の対消滅による霊体攻撃ができるので問題無し。

「さあ、仕上げと行こうか！」

「私たちのコンビネーションに敵うのはいませんか」

対靈氣消滅札（簡単な原理説明をすれば電気のようなもの、+には、
、には+の靈氣を叩きつけ相対的に0・・・この場合は靈体から、
空气中に存在する靈氣に還元する）

深羅が足に向け、走りながらそれを投げつける。空気を裂き、青い光を纏った札が接触。脚部の靈氣が失われる、物質化しているので弱体化した足では立つことが困難になり倒れこむ。

「今です！」

「でやあああああああ！」

俺の方向に倒れ、接近してくる靈体（あれ、そういやババコンに似てるなあ）を背骨に沿って全力で切り上げる。刀身は込められていた思念が共鳴して血をイメージさせるような深紅に輝いている。死を望む復讐の思念は触れた部分から靈体を破壊、そのまま放出される靈氣を貪欲に飲み込む。

返す刀で止めを刺すため、半身ごと回転させ心臓がある部分を一刀両断する。

無論、紅は貪るように靈氣を吸収していた。

断末魔の悲鳴が聞こえなくなったころ、そこには俺と深羅が立っていた。靈氣を貪り満足したのか、紅は輝きを収めたただの刀に戻る。鞘に収め、深羅と向き合う。お互いにやり遂げたような顔で笑い合う。

左記ほどまで命を懸けた戦いをしていたとは思えないほど。

「お疲れ様」

「ええ！」

「これが一番の思い出かな、多分一番良い動きができたと思う」
「そうですね、全盛期でしたし」

『うおわあ！？』

いきなり出てきたからびっくりしたよ、まったく、気配消して近づくなつての。

「前世の時点で人外だったわけね、なんかもう凄いわね」

「そうか？」

「普通でしたがねえ？」

「十分凄いわよ、そういえば千冬さんに呼ばれてなかった？」

「・・・げ、やば！？すまん、いつてくる！」

流が走り去った後

「あれで自分のことにも敏感だったらしいのですがね」

「うん、てか、前世でもああだったんだ」

「はい」

お気に入り登録100件突破記念そのファイナル「流と深羅のある非日常」(後

気が向けば前世での物語もやりたいなあと思っています

次回は本編にいったん戻ります

102・メカトーク(前書き)

短いし、暴走気味です

で、自室に戻って二人で開発計画を話し合っているのだが……。

「マルチロックか……現時点ではミサイルの照準操作のみか」

「まだ技術的には完成していません、もう少しなんです」

うん、システムの理論構築はできているけど実用レベルじゃないと……。

これは……出番かな？

「これは……流石日本ってとこだけど、イメージインターフェイスのシステム構築にこれを使ってみようか」

ポケットから取り出したるは小さな赤い宝石がはめ込まれた特殊な素材。

不思議そうにそれを見つめる簪に手渡す。

「これは？見たことないですけど」

「ふふふ、聞いて驚くなかれ。思考操作プログラムエディター!!」

まあ、本来ならば細かいイメージが必要な操作を補助するサポートシステム。

全てのイメージ操縦をパイロットにやらせるのでは無く、あらかじめ入力しておいた軌道を状態に応じて選択、そこへ細かい修正を入れて操作。簡単な話、もう一人の自分の提案した動きにリアルタイムでの適正化による負担軽減をすること。

このイメージインターフェイスの操作部分が完成してなかったんだ

よね、それ以外は完成してる日本の企業はどうなってるんだか。倉持技研じゃなくて戦乙女工業に任せたらすぐにあの規格外部長さんがやっちゃいそうだけど。

「え、これって・・・すごい。流石です！」

「いや、ちよい前に簪が作ったCADデータを参考にさせてもらった」

なんか知らんが、見せてもらったときに見たデータがほぼ実用可能レベルだったんだよ。

流石にこれには驚いた、なにせこれまで作っておいて困っていたんだから・・・。

絶対才能があると思うんだ、俺が保障しよう！

「え、でもあれって失敗だったはず」

「98%完成してたからちよっち手を加えたら完成したよ、あそこまで一人でやっちゃうなんて凄いなと思う」

「いやいや、そこらの技術者じゃあ考えられないよ。もっと自信持つて！」

だって、ビビツたもの。いくら万能（笑）な楯無でもこれはできないだろ！ってレベルの完成度、正直、将来が楽しみです。ここに未来の博士がいるぞ〜〜〜！！

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・！！」

誰か助けて、簪がメカニカルトークに入った途端に世界の意思もびつくりのマシニングトークが始まった。あれ、こんなキャラだったっけ？誰か教えてくださりませんか、目の前にいる目を輝かせてアキチユエーターがどうのP.I.Cの制御がどうの……実はめっさ得意だろ！つてくらしいの専門用語と理論に羅列……。

「あの、そろそろ寝ませんかね簪さんや」

「……!?はっ、すみません、ついつい話すぎてしまいました」

「いや、良いよ。中々に興味深い内容だったし」

うん、疲れてしまいました。あと、近すぎましたし……まだ完璧に耐性ついてないんだよ！

ああ、まだこんなに耐性付く前の地獄を思い出す。良くあの時理性が持ったと思うよ。

102・メカトーク（後書き）

なんとか鬼畜仕様にはならないっぽいですが、どうなるかは知りませ
んけど

103 主夫ってのは存在する(前書き)

はっはっは、簞のキャラ崩壊は免れませんでした

103・主夫つてのは存在する

休日、倉持技研の第三開発室に機械の作動音・金属切削・さらにはキーボードを叩く音が響いていた。

中央にはコックピットが開放された一機のIS、付近には作業服を纏った男女二名がいた。

「よし、装備も完成まであと少し。ちゃちゃっと仕上げちゃおう」

「はい、思考操作プログラムエディターユニット組み込み完了です！」

慌しく動き回るのは、世界で唯一ISを動かせる幽霊と一人の日本の代表候補生であった。

いつそ華麗とも言える動きは突風の如き速さでISのパーツを組み上げていく。

なぜ、俺たちが居るのかというと。近々行われる「キャノンボールファスト」に簪を出場させたっていうことで。倉持技研のスタッフにおどs・交渉して協力を取り付けたのだ。

なんでも、打鉄式式が完成しなかったのは白式の製造とデータ取りに人員が割かれてしまったからなんだって。ちなみに俺の場合は戦乙女工業に毎月の武装のデータのみ送っている、別に男性操縦者のデータが欲しいわけではないらしい。偶に機体の耐久度などの機体データは要求されるが聞いたところ一番良い状態で使ってほしいだけだとか。珍しい企業だよ。

「あとは、武装のインストールだな。一回休憩しようか」

「・・・・・・・・・・」

あれ？

「もしもし！」

「・・・・・・・・・・」

ええっ！？どうしたんだろうか？ええい、かくなるうちは・・・・・・・・。
てい！

「ふみゃ！？」

「ふう、やっと戻ってきた。大丈夫？」

「は、はい。すみません」

いやまあ、軽くおでこを小突いただけなんだけどさ。うん、集中し
すぎで周りが見えなくなるのは悪い癖だね。まあ、集中できるのは
良いことだけどほどじゃなきゃね。

「はい、お弁当作ってきたから食べよう？」

「良いんですか？」

「うん、お腹空いてるでしょ？腹が減っては戦はできぬってね」

数分後〜

『ORN・・・・・・・・・・』

「あれ？どうかした？」

うん、普通にお弁当食べただけなんだが・・・・・・・・なんでつまんだ

皆さんまで落ち込んでるんだ？

簪に至ってはなんか棒泣きしてるけど・・・なんか失敗したっけかな？

「流？」

「はいはい？」

おお、なんとか持ち直したみたいだ。良かった良かった、心配したよ。

『女の敵~~~~!!』

「うええええええ！？何かしたか？」

何か悪いことしたっけか？全然心当たりが無いぞ、はっ！まさか、おふざけ半分で山嵐のミサイルをフルメタルミサイルに変えたのがバレたのか？あと、非固定部位を稼動物理シールドにしたのも・・・。

600

「なんでそんなに料理が上手いんですか！」

「え？」

103・主夫ってのは存在する(後書き)

ネタがわかる人いるかなあ？

104・そしてこの鬼畜仕様である(前書き)

やっと完成・・・いまだに消えたショックが癒えませんが

104・そしてこの鬼畜仕様である

「さあ、ご覧あれ。打鉄式式を！」

技研の人々も興味津々で見つめる中、完成した式式にかけられた幕を取り去る！

そこには、灰色で流線型の装甲に黒と黄のラインが流れる一機のI Sが現れた。

背部には二門の陽電子砲、両肩部には特殊装備が搭載された非固定部位。アンロックユニット

代表候補生、更識簪の努力の結晶である。

「これが、私の・・・」

感慨深そうに見つめる簪、そんな彼女を見ると先ほどまでの疲れが吹っ飛んだ。なにせ見たことのない笑顔だったのだから。おそらくこれが本当の笑顔なんだろう。

「さあ、装着してみよう」

「はい！」

お、元気が良いね。一人の技術者として嬉しいなあ。

簪が開放されたコックピットに乗り込んだ途端、初期設定が始まる。脚部から始まり、胴、腕と順番に身体に合わせた適正化が進行する。

『設定完了・確認ボタンを押してください』

こうして完全に簪のものになった打鉄式式は待機形態のオレンジ色の宝石が嵌った指輪に変わる。

「今までありがとうございました」

深々と頭を下げる簪、少し狼狽してしまったのはここだけの秘密。だが、毅然とした態度で返す。

「全ては簪、君の努力の結果だ。俺はその熱意の後押しをしたに過ぎない。頑張つてな」

「はい！」

場所は変わりIS学園第4アリーナ、相対するは二機のIS。片や魔女の異名を、片や熱意の結晶。機動テストを兼ねての模擬戦をすることになったのだ。

「よし、行くぞ」

「はい、全力でやります」

今、二つの影が走り出した。

104.そしてこの鬼畜仕様である(後書き)

仕方ないのでシヨートです

105・機動テスト・・・やり過ぎと違うか？（前書き）

なんと、作者的コントロールが効かないキャラ第一位がまさかの簪さん！

（予定より強くなってしまったorz・・・）

105・機動テスト・・・やり過ぎと違うか？

「っせい！」

「く、強い」

模擬戦ということでありナでやっているのだが、予想以上に適正が高く現時点では五分状態になっていた。
機体性能に助けられている部分もあるのだが、それを抜いても十分
式式を動かしていた。

「っく、もしかして訓練機でやってた？」

「私の稼動データを組み込んでいるので手足も同然です！」

言葉通り寸分の狂いも無く式式は薙刀「夢現」ゆめげんを大きく振るう。
その重い一撃は軽々と月下を弾き飛ばしてしまう、まあ、薙刀と刀
では当たり前か。

「じゃあこれはどうだい？」

ラグナロクから紫の光刃が伸びる、所謂、銃剣形態バヨネットモードである。重力場
のエネルギー剣が真っ直ぐに簷へと向かう。

「っく！」

特別に組み込んだ物理稼動シールドが特徴的な作動音を響かせて刃
を受ける。本来ならば実弾や実剣を防ぐもののだが、効果的に動
いたみたいだ。特殊素材を使った新世代の防衛装備「通電硬化装甲」
を使用している。まだまだ改善点はあるが問題なかった。

「今・・行ける！」

背部搭載されていた陽電子砲「春雷」^{しゅんらい}が跳ね上がる、白式の雪羅を元にしたそれは単発の破壊力の連射を可能にしていた。エネルギー供給をカートリッジ式にしたのが良かったのだが・・・なんて鬼畜仕様！

「貰った！」

「ぐつつおおお！？」

単発ならまだしも高出力のエネルギーを連続で食らってしまった、一般機ならば確実に二・三発で撃墜できるほどだ。まあ、自分が協力した機体に負けるわけにはいかないが。

「って言っても結構削られちゃったなあ」

事実、至近距離での連射により今は200まで減少していた。フルで800だからそのダメージの大きさがわかると思う。

「まあ、ここで負けないけどさ」

^{イグニッションブースト}瞬間加速で肉薄する、^{ヤマアラシ}相対する簷も山嵐を起動する。

移設した氷結魔女の名の由来になった武装を、式式の稼動シールドにはマルチロックオン・システムによる脅威の槍が呼び出される。

『終わりだ（です）！』

瞬間、二機を包むように爆発が起こった。

「つ、冷たい!？」

「うおわああ!？」

煙が晴れたそこにはISスーツになった二人がいた、簷の周囲は氷塊が、俺の付近にはフルメタルミサイルが突き刺さっていた。うわ、怖ええええ!あと一歩動いてたら大怪我だ・・・あ、出力抑えなかったら簷が氷漬けだったな・・・。

「大丈夫か?」

「な、なんとか・・・寒いです」

だろうなあ、なにせ絶対零度のエネルギー弾を叩きつけられるんだからな。気温も・・・冬場じゃねえか!

さっきまで暑かったアリーナが真冬になったよ・・・これでも出力は30%・・・我ながら恐ろしいものを。

いや、3発直撃でシールドエネルギー削って腕部装甲大破させたフルメタルミサイルはもっと恐ろしいけど。

『やり過ぎた・・・』

その後、ボロボロになったアリーナの修復作業をする流の姿が見かけられたとか。

105・機動テスト・・・やり過ぎと違うか？（後書き）

あ、「執事にされた記憶喪失少年」もよろしくお願いしますね。
一応平行して続ける予定です。

106・なにこの説明回、だるいんですけどbry読者(前書き)

え、素晴らしいほど(皮肉)の説明になっております。
もしわからないことがありましたら聞いてくださいな。

106・なにこの説明回、だるいんですけどbY読者

「すう・・・すう・・・」

「ははは、疲れてたのか」

データを提出した後、観客席で休んでいたのだが簪は疲れが溜まっていたのか俺に寄りかかって眠ってしまった。

今は午後4時、そろそろ日が傾いてくる時間だ。

「~~~~~」

前世、いや、まだ生きていたころはこんなに平和な生活ができていなかった。

毎日のように戦い、傷つき、気づけば身体はボロボロだった。今の世界でも奴らが動いているみたいだが、それでも前よりはマシだった。

「五十嵐さん、今の俺は守れてるのかな」

今はいないかつての命の恩人を思い出しながらその名を呼ぶ、マテリアルゴーストの大群をその身を張って退けた人。

まだ若かった俺達のために死んでしまった人、未熟だった隊長を支えてくれた対策班のメンバーだ。

最初で最後の殉職者だ、もう少し力があれば失われずに済んでいたんだ。

「あんたに助けられた命もくだらないことで失っちゃった」

電車に轢かれて死ぬなんて、例え誰かのせいだったとしても申し訳

ない。せつかく救われた命だったのに、それを早くに終わらせてしまった。

「因縁・・・か・・・」

前世の世界で戦った「ヴァンシユタイン」

それは人類が文化を持ち始めたころから続く霊能者、いや、呪術師の集まり。本来は精霊信仰による人々の平和を願ったものだった。しかし、第一次世界大戦に入ったところに権力者達は破壊の力を求めた。そんな思想を隠し持った人間がトップに立ってしまっただけから、かつての思想や目的・信念は失われてしまう。

特殊能力者・特に身体能力など戦闘に向いているもの - を人工的に作り出そうとした。

中には胎児に悪しき霊気を送り、今というDNA操作や人体改造のようなことをしたという記録も残っている。

そして、それは大戦が終結した後も続いた。

なにせ、安価に高性能な兵士を作り出せるのだ。本来ならば人々を守っていた組織は既に逆の道を歩んでいたのだ。

金に目が眩んだ者はいたずらに実験を繰り返し、人と呼べないような化け物や霊気を使った生体発電機など人の道を外れたことをしました。

本格的に対抗していたときには妹を人質に獲られたこともあった、世界の繭事件に遅れてはしまったが壊滅させたはずだった。あの世界では消えたが、今、この世界でも同じことを繰り返そうとしている。

「絶対に思い通りにはさせない、何があっても」

「ん・・・流？」

「お、起きたか。腹減ったろ、食堂行こうか」

「ん、うん・・・」

まだ完全に起きていない簪を背負いながら、俺はアリーナを後にした。

106・なにこの説明回、だるいんですけどbry読者(後書き)

簪さん空気・・・ごめんなさい

白さんとのデートはまだ完成してないのでもう少しお待ちください

あのさ、大きなお友達に聞くけどさ・・・ノクターンで読みたい？

107・一応教師だからな？（前書き）

久しぶりにあの人が登場！

107・一応教師だからな？

「つまり、いくら防御して攻撃を防いだとしても機体内部には少なからずダメージが行く」

今現在、「あの西川流技師（なんか有名らしい）」を迎えた特別授業が行われている。いや、行っているが正しいか。

実戦での注意点や整備など、知っておくべき重要なポイントを講義してくれという学園からの依頼だ。

「その場合を考えて、通常は機体にかかる負担を軽減するような立ち振る舞いを心がける」

アリーナで一学年全員を相手にやっているものだからプレッシャーが半端ない、できるか？うん百人の目の前で講義を。

「であるからには、自分の使っているISの部品配置を把握しておく必要がある」

「そういうことだ、それでは今回はここまで。各人復習をしておくように」

なんとか一日かかった『特別講義』が終わる、遠くに見える突っ伏

した一夏と真剣な顔の簪が対照的だ。

技術開発志望の生徒は真剣だったが、注意するまで操縦者志望の奴らは適当だった。

『操縦できれば良い』ってことじゃないぞ、理解してどれだけ効率的に動かせるかなんだから。

「あゝ疲れた、まったく人使いが荒いよ」

「お疲れ様、はい紅茶」

「おお、悪いな簪」

いやゝ、優しさがココロに染みる。もう少しこういう優しさがあれば箒も上手くできるのになあ……そうは思わないか？いやまあ、誰に話しかけてるかは知らんが。

「はふう、疲れが吹き飛ぶよ」

「そ、そう？良かったあ」

ああ、いつごろだろうこんな優しくされたのは……。沙耶くらいかな、ここまで純粋な優しさは。兄貴はここで生きてる(？)よ〜〜！

「どうしたの？」

「ん、ああいや。妹を思い出してさ、簪みたいに可愛いんだよ」

「ふへ！？か、可愛い？……／＼／＼」

なんだ？いきなり顔が赤くなったぞ、一体どうしたんだか。そういや沙耶もたまに顔を赤くして湯気出してたなあ。

「西川先生、手伝ってください！」

「滝見先生……だから言ったでしょう、一人では無理だって」

誰だ、久しぶりに出てきたって言った奴。あとで指導室に来いよ？

「だって、慣れた仕事だったから……。今日中じゃ片付きません！」

「だから人に頼めって……。え、まだここ？やばいな、簪、今日は帰りが遅くなる」

「わかった、無理しないでね？」

「おう」

107・一応教師だからな？（後書き）

流はシスコンだって言ったじゃないか！

108・リア充爆発しろ(前書き)

そういえば、鏡音リンレンと鈴の中の人って同じらしいですね

「……く、む、ぬう。沙耶、ごめんな……」

エイリアスさんから聞いたけど、妹思いの優しいお兄さんだったみたい。まだ高校生の妹さんを残して死んでしまったのがいまだに悔しくて申し訳ないって言ってた。どれだけ思っているかなんて、今流れている涙を見ればわかる。

なにせ、会ったばかりの私にさえ手を差し伸べてくれたのだから。

「ねえ、なんでそんなに優しいの？」

もちろん、答えてくれるわけが無い。だけど、なぜか今は悪い夢を見ているかのように寝言を言っている流を支えたかった。これくらいしかできないけど、これで楽になってくれたら良いな。

「……くう……んう……」

「まったく、困ったなこりゃ」

そっぴや、沙耶（俺の自慢の妹だ！）に簪は似てるんだよな。なにが頼みごとされたら断れない自信がある……多分。

なんか寝言聞かれたかなあ、そうだったら恥ずかしいなあ。ひとまず明日の朝が怖い。

「流……」

「ん？どうした」

「ありがとう……」

108・リア充爆発しろ(後書き)

最近、鈴が可愛くて生きるのが辛い

109・通算??歳です(前書き)

やばい、簪可愛い(今回は名前だけ)

「え、一夏の誕生日って今月なの!？」

「流もだけどな、同じ9月の27日」

あゝ、そついや今月だったか。幽霊の誕生日ってのも不思議なものだけど、立ち上がるまでに驚きか？

ああ、シャルロットだもんな。てか、教えてなかったのかよ。俺も教えてないけど。

「なぜ嫁の誕生日をなぜ教えないのだ！」

ひとまず座れラウラ、パン食ったまま立ち上がるな。行儀悪いのはダメだぞ。

「まあ、知っていて教えないのもいるが」

『ギクツ!』とか口で言っている篤・鈴・深羅。なぜに口でリアクション? ははは、27日で通算したら十分なおっさんじゃねえか。いくつかは言いたくないが。

「確か日曜だったよな？」

「ああ、久しぶりに休日だ。……ああ、通算したくねえ」

ひとまず一夏ラバーズは座ろうか、一応ラウラも。

「日曜ですね?」

「ああ、そつだぞ」

確実にセシリアとシャルロットは来るなこりゃ、え〜つとあれとそれと多目に買っておかなきゃな。

「一応、中学のときの友達も祝ってくれるけど。みんなも来るか？」

「今のうちに人数把握しておかないと準備もあるからな」

「もちろん、何時から？」

「四時くらいかな、そうだよな流？」

「おう、その予定だ。確かその日はアレがあつたな」

全員が「そういえばそうだ」という顔をした。

ISによる高速バトルレース「キャノンボール・ファスト」。本来ならば国際大会で行われる種目だが、そこはIS学園。市の特別イベントとして一般市民を招いて行われる。それに生徒が参加するというやり方だ。

まあ、一般生徒と専用機持ちで部門が分けられるが……。学園外の巨大アリーナ（2万人収容可）で開催される前に緑のツインテ少女アイドルがライブを開催して、やっと満員にできたらしい。それまでは満員になることは無かったらしい（結構な数のアイドルや歌手が挑んだが）。そのおかげで今現在ではライブでの使用申請は滅多に無い。

「そういえば明日からそのための調整始まるんだっけか、具体的に何するんだ？」

「基本は高機動パッケージのインストールだ、もっとも白式には無理だが」

「そういう場合は増加ブースターや内部設定での出力変更だな」

例えば「ブルー・ティアーズ」ならば『ストライク・ガンナー』など。白式や紅椿ならば基本スペックが規格外だが。

「そういえば蒼月はどうなんだ？」

「あゝ、二次移行のときにパツケージと融合しちまったからな。セカンドシフト
カンドフォームになれば十分行ける」

本来なら、荷電粒子ギガランチャーや展開装甲はパツケージ装備だったし。一体化したのには驚きだけど……いまだにどうしてそうなったとしか言えないしなあ。

「誰か練習付き合ってくれないか？」

「私なら良いぞ」

まあ、代表候補生じゃないからな。候補生ならば情報国家機密の関係で当日まで教えられないし。俺の場合は開発者の一人として簪とやるけど。

「流はどうするの？一夏たちとやるわけ？」

「いんや、とある努力の天才のアフターケアをするからな」

みんなして誰？って顔してるが、まあいいか。別に最終調整とかで本当の意味での完成をさせるだけだし。最近は簪も良く笑うようになったし、楯無からは逆に睨まれるようになったが。

「あ、そうだ。セシリア、あのライフルのライセンス許可がとれたから後で職員室に行って書類受け取っておいてくれないか？」

「はい、助かりましたわ。これも流さんと戦乙女工業のみなさんのおかげですわ」

簡単な話、イギリス政府に脅s・・・お話して『実弾とレーザーの同時利用による戦闘の柔軟対応が必要』ということに無理やr・・・洗n・・・交渉した結果だ。すぐに許可出してくれた戦乙女工業には驚きだが、まあ、輸出販売先になったからありがたがられたが。

「さてと、じゃあ本番に向けて頑張ろうか！」

『お〜！』

109・通算??歳です(後書き)

やばい、この先の展開分からない。原作読まなきゃ・・・!

110 予定は決定

「うん、ここは合金フレームから複合材フレームにして」「どうせなら超硬繊維合金にすれば良いと思う」

いつものように式式の完成のために最終調整のための話し合いをしていた。
「いや、最初はどくなるかと思ってたけど杞憂だったよ。技術者同士つてのも良かったのかもな。」

「なるほど、良いセンスだ」

「そういえば流の誕生日っていつ？」

「ん、9月27日だけかどうかしたか？」

なんか一夏はシャルロットとセシリアとで買い物に行くって言うってたな、俺は俺でパーティーのために必要な買いにいくけど。

「あのさ」

「おう」

「誕生日パーティーがあるって本当？」

「そうだな、日曜日だからみんな集まって盛大にやる予定だ」

「私も行っていいかな？」

「おう、人数多けりゃ楽しいからな。いいぞ」

祝い事に限らずパーティーでもなんでも人数が多いともっと楽しくなるもんだ、っと先に。

「鈴、いつまで盗み聞きしてるつもりだ？」

『ギクッ！』

ドアを開けて苦笑いしながら鈴が入ってくる、まったく用件あるならさっさとノックすりゃいいのに。

「あたしは鳳鈴音、中国の代表候補生よ。よろしく」

「4組のクラス代表・・・更識簪」

うんうん、仲良く握手してるなあ。なんか火花が散っているように見えるのは気のせいだろうか、いや、きっと疲れてるんだ。そうにちがいない、絶対そうだ。

「ところで何か用でもあったのか？」

「あ、忘れてたわ。流、あんた腕時計持ってなかったわよね」

「そうだな、別に必要は無いけど」

基本的に時間はケータイで確認するし、着けると汗で擦れて痛いんだよな。ドイツにいたときは結構な頻度で壊れたし。まあ、買おうとは思ってるけどさ。整備してたら時計見ないし。

「なにかと便利よ？」

「まあな。あゝ、土曜日の買い物ついでに見てみるかな」

前にバッテリー切れ起こして困ったしな、それで職員会議に遅刻したときは・・・思い出したくない。

「どうせならあたしが見てあげても良いわよ」

「そりゃ助かる、俺じゃどうなのが良いかわからないからな」

ついでに工具セットも買い換えるかな、今のも結構古いし。

「そつだ、簪も何か必要なあるか？」

「整備ゴーグルの部品が必要、いつしよに行っても良い？」

「おし、決まりだな。じゃあ土曜日に駅前に集合な」

なぜか鈴が睨んでいたように見えたのは多分気のせいだ。

110 予定は決定(後書き)

なんとも作者とは正反对だなあ

111・大抵は障害が多い(前書き)

やばい、手が勝手に簪を出せ！ってやる・・・どっしょ

111・大抵は障害があることが多い

「あ、あの。人を待ってるので」

「いいじゃんいいじゃん、俺たちと行こうよ！」

集合時刻前に来たのは良いけどなんか金髪に染めた感じの悪い男の人に強引に誘われていて・・・正直怖くて動けません。

「あゝつとごめんよ〜」

笑顔で私の肩に手をかけていた人の腕を音がするくらいに握る流、なんか聞こえちゃいけない音がする。

「俺の連れになにしてんのかな？」

そついう流の顔は凜々しくてかつこよかった、思わず見とれてしまつくらいには。

気づけばさきほどの人たちは退散していた、良かったあ。

「大丈夫だったか？」

「あ、うん。ありがとう」

まったく、この女尊男卑の世の中で勇氣あるなあまったく。人によつちやあナンパだけで逮捕されるなんてこともあるんだし。

「ところで簪、俺の顔になんかついてるか？」

「え、いやなにも。ところで鈴さんは？」

ちなみに簪は髪と同じような色のタンクトップにモノトーンストラ
イプの薄手のジャケット、下は薄めの黒ズボン。

思わず見つめてしまった……俺だって男だよ。

「……／＼」

「っと、ああ鈴だったな。今日は来れないらしい、なんでも監視官
が来たとか」

うん、腕時計はこんどのおきにでも頼むか。そっぴや来週だなあ
く、なにもなければ良いんだが。

「え？」

「へ？」

いや、どうしてって顔されてもなあ。遅れてるって言ってた「キヤ
ノンボール・ファスト」用の装備だし、早めにテストしなくちゃい
けないだろう。

「そんなわけで俺ら二人だけなんだが……大丈夫か？」

「う、うん。じゃあ行こう？」

「（これってデートになるのかな？多分そうだよな）」

「（うぐ、まともなエスコートなんてしたこと無いぞ）」

何気なしに手を繋いで歩くその姿はカップルに見えないわけが無か

つ
た。

111・大抵は障害が多い(後書き)

まだ続くよ、うん。多分鈴も出てくる予定・・・です

112・鈴……不憫な子(前書き)

流×簪でも良いんじゃないかと思うころ

112・鈴・・・・・・・・不憫な子

「うーん、帝都も良いけどB&Xも良いなあ」

「個人的にはブルテックスとかウエンダーが使いやすいけどな」

え、なにか。ホームセンターで工具の吟味中ですが、簪の意見でおそろいにしようってことに。

今はIS用のインパクトレンチを見てるんだ、やっぱり自分に一番合うやつじゃないと仕上がりも違うからな。

「あ、どうせならレオニックインダストリーにするか？」

「確かに使いやすいけど・・・・やっぱり高い」

まあ、ISが登場する前からの工具産業界の古株。世界中の職人の8割はこのものを必ず一つは使っていると言われるほどの有名メーカーなものな。技師やってたころも使ってたし、ドライバーは全部揃えてる。質が良い分値が張るんだけどな。

「うし、じゃあまあ。式式が完成したお祝いで」

「いや、でも・・・・」

「そうか、これからも頑張ってもらおうと思ったんだが。それなら仕方ないか」

どうせおそろいならば良いもの使ってもらおうと思ったんだがなあ・・・・がっくし

「う、わ、わかったからそんなに落ち込まないで？ね？」

「ホント！よし、じゃあ早速」

多分今俺はすごい笑顔だと思う、いや〜これで簪も立派な候補生・専用機持ち。おめでたいね。
お祝いはいくらでもしてあげたいたちだからなあ、どうせならあれもこれも。

と、そんなこんなで当初の目的を終えてホームセンターを出た俺たち。簪も嬉しそうでなによりだ、ちなみに人が多いからはぐれないようにと手を繋いでる。まあ、休日だからなあ。

「そっぴや、腹減ってないか？朝は軽くしか食べてないだろ」
「実は結構お腹減った」

ふむ、あ、ちよいとそこの浮遊霊さん。うどんの美味しい店知ってません？

A「ちよい行ったとこに『卯月』って良いところがあるぞい」

B「裏通りにある『ジンベエ』ってところは名店だよ」

ユウ「それよりも冷凍いくらをこはんに」

なるほど、隠れた名店は良いな。ありがとね二人（？）とも、こういうときって役に立つよね。

なんか少女の霊が五月蠅いけど無視、『神様に向かってなんという態度！』さあて行くか。

「よし、良い事聞けたしどっか入ろうか」

「え、ふえ！？」

さて、かき揚げうどんはあるかな？隠れた名店にさあ行くぞ！と。

「美味しい、良くこんなところ知ってたね」

「え、ああいや。ちょっとそこらへんにいたおじさんに聞いたただだよ」

「ふうん、でも嬉しいな」

さつきから美味しそうに浸したかき揚げを食べている、助かったぞB氏！いくらなんでも下調べを忘れたとは口が裂けても言えないが……。

「はい、あ〜ん」

「うえ!?!」

「美味しいよ?」

「む、ぐ。あ、あ〜んむ」

お、出汁が効いてて美味しいな。なるほどな鰹節と昆布に……梅干をか、どつりでさっぱりするわけだ。

あゝ、業務用のフライヤー欲しいなあ。てか簪ってこんなキャラだったか？まあ元気なのは良いことだしいいか。

「美味しいなこれ、出汁は参考にできるかもな」

「うん、ありがとう流」

「お、おう……./」

顔が近いぞ簪、まだ完全に抵抗ができてるわけじゃないんだが。て

か、不意打ちはよしてくれ。心臓(?)に悪い。

「今日は楽しかった」

「そうだな、鈴が来れないってのは残念だったけどな」

あれ、なんでいきなり睨むのでせうか。まあ気にして聞いても良い事は無い、女子に限っては必ず。

それで今まで何回痛い目にあっただろうか、一夏は学習してないみたいだが。

「・・・・・・・・すう・・・・・・・・くう」

ありゃ、倒れてきたと思ったたら寝ちゃったか。まあ簪にすれば結構大変か、まあ少しくらい寝させてあげても良いか。最近は色々大変だったし。

「ははは、まったくなあ」

「ふひゅう・・・・・・・・くう」

俺たちを乗せたモノレールは夕日を受けながらISS学園へと向かう

1 1 2・鈴・・・不憫な子(後書き)

やばい、鈴が不憫すぎる・・・ごめんなさい

113・あと少し(前書き)

危ない危ない、最近投稿が遅いなあ

あとがきにお知らせがあります

113・あと少し

「はい、今日は高速機動の実習をしますよ」

第六アリーナでの今週末のキャノンボール・ファストに向けての授業だ、ちなみに専用機持ちは全員参加での最終調整込みだ。ただし1・2組での合同なので簪はいない。本気モードの山田先生の声が響き渡る。

「ここ、第六アリーナは中央タワーと繋がっていて高機動実習に使われることは先週言いましたね？」

そうだよ、OPPのときのあれだよ・・・なんか最近電波受信するなあ、なんなんだかまったく。

「では、高機動パッケージを装備したオルコットさんと出力調整した織斑君に実演してもらいましょう」

ちなみに蒼月もパッケージを機体に取り込んでしまったためにパラメータ調整組だ・・・蒼月エ・・・

まあ、セカンドフォームがトンデモ性能になったんだけどさ。さあて一夏は大丈夫かな・・・高機動時のバイザー型ハイパーセンサーに戸惑ってるな、あ、セシリアが教えたみたい。

「よし、鳥になってこい！」

煌きのトリガーは引かれ、超音速の弾が撃ち出される。スターターが使うのってこんなんじゃないかと思ったと思うんだがなあ。

スパンツ！

これは銃器の発砲音では無いと思うんだ。やっぱり候補生だけあってセシリアは手馴れてるな、ストライク・ガンナーを上手く軌道調整して飛んでる。全ビットを推進装置にしてるから半端ない速度が出てる、一夏はどうか追いついてるな。

「さてと、俺は俺で調整しないとな。え〜っと」

整備用のパネルを開いて休止状態のままセカンドフォームへ、速度重視だからランチャー内蔵のウィングで良いか。広範囲攻撃用の翼だと飛行よりかは滑空になるからな、あとは・・・。

一般生徒は訓練機での実習、専用機持ちは調整や試験飛行をするこ
とになっている。さっきから打鉄やラファールが周回コースを駆け
回ってるし、待機エリアでは各々の整備が行われている。

「いいか、やるからには結果を出せ。経験は将来役に立つものにな
る」

本来ならば整備科が本格化する二年からなのだが、今年は相次ぐ問
題（無人機とか暴走とか）や異例なほどの専用機の数などで一年か
らの参加になったのだ。まあ、専用機持ちが多いのは一夏や俺がい
るからなのだが。

「流はどうするんだ？」

「俺も同じ出力調整組だ」

話してる間もキーボードを叩く、無論一枚だけだが。流石に簪みた
いに何枚も同時操作はできない、腕増やしても式見みたいになるし。

「ちよつと筭にアドバイスしてくれないか、困ってるみたいなんだ」
「本物の展開装甲だったか」

どうやら絢爛舞踏の発動が上手くできないらしく、エネルギー切れ
を防ぐために試行錯誤中らしい。

まあ、ワンオフアビリティが無ければ零落白夜と同じだからなあ。

「む、流か」

「調整が上手くいかないって？ちよい見せて」

『おお』

整備用ケーブルをコイルした整備用PCに繋ぐ、紅椿は全身がだか
ら・・・推進は背部と脚部PICの連動にしてつと。あとは腕部と
必要無い脚部の展開装甲を閉じて・・・必要に応じて適正出力での
稼動つと。

「こんなもんか、どうだ？エネルギー効率は30%上がってる」

「なるほど、こういうやり方が。流石だな」

「うん、まったくわからん」

これ、白式にも応用できるんだがなあ。

「ちなみに一夏はどうするんだ？」

「雪片は使わないでスラスタとPICにエネルギー全振りだ」

「攻撃されたら？」

「よける」

「仕掛けるときは？」

「体当たりか格闘」

え、どこからその自信が来るんだろうか。てか武器使わないっておいおい、いくらなんでも……人のこと言えないや。

「そうか、わかった。じゃあ調整は終わってるんだな？」

「おう、完璧だ」

まあ、白式自体スペックは高機動型に引けを取らないからな。紅椿も。

第四世代はすごいやまったく、さあて一周してこようかな。

「山田先生、ちょっと回ってきて良いですか？」

「はい、一般の皆さんもいますから気をつけてくださいね」

「あ、流君だ。つて速っ!？」

「ひゃあ!え、なにあの速さ」

高機動用ハイパーセンサー搭載の専用バイザーを降ろして中央タワーまで一気に加速する、景色が流れるつてこれを言うんだな。ちなみにバイザーを展開したら顔の上半分が見えなくなった、なんか使ったことあるなつて思ったらネームレスが現役のころに使ってたやつだった。非公式での試合のときに使った偽装マスク兼タイムラグ解消ハイパーセンサー……まあいいけどさ。

「まったく、なんて速度だよこれ。どこが擬似展開装甲なんだよ」

なにせ束博士製の展開装甲がエネルギー食いなのに対して、工業製はラグナロクの応用で空間圧での加速なのだ。どつりで出力が上がったときは光が紫になるわけだよ。

「さて、一気に行くぞ！」

キャノンボール・ファストまで、あと三日

113・あと少し(後書き)

そついや流が立ててるフラグはどうなってんだ?っていう質問があったので(いつだかの感想の返信とは変わってます)

LOVE

鈴・簪・深羅・千冬(?)・ラウラ

LIKE

エリー・楯無・白・篝・セシリア・蘭・ナタル

「IS・ゴースト」は7巻まで進んだら白さんとのデート(?)をやったら原作8巻出るまで休止します。いや、矛盾発生したら大変です。

114・トラブルメーカー(前書き)

開幕、キャノンボール・ファスト!

114・トラブルメーカー

「第一陣か、調子はどうだ簪？」

「大丈夫、行ける」

専用機持ちが多いために異例のグループ分けになった、まあ10機もあるからな。他の学年だと多くても三機程度なのだから異例だつてのが良くわかる。

第一陣

織斑一夏（白式） 〓 機体調整

セシリア・オルコット（ブルー・ティアーズ） 〓 高機動パッケージ
ラウラ・ボーデウィツヒ（シュヴァルツェア・レーゲン） 〓 追加ブ
ースター

西川流（蒼月） 〓 セカンドフォーム

更識簪（打鉄式式） 〓 機体調整

第二陣

シャルロット・デュノア（ラファール・リヴァイヴ・カスタムEE）
〓 追加ブースター

篠ノ之箒（紅椿） 〓 機体調整

神無深羅（残月） 〓 高機動パッケージ

鳳鈴音（甲龍） 〓 高機動パッケージ

エイリアス・凧沙・リヒテンシュタイン（イブニンググロー） 〓 大
丈夫だ、問題ない

「圧巻だな、これだけの数って」

「ああ、負けないぞ？」

「私も・・負けない」

「機体の性能が勝敗を分けるものではないことを教えてやる」

「わたくしも負けるわけにはいきませんわ！」

観戦席には一般市民が集まり、おおいに賑わっていた。なにせ普段目にする事のないISが国際大会競技ごと見れるんだ、家族連れやカップルに学園志望の中学生も来ている。無論、世界中からお偉いさんに企業の視察、開発者も来ている。

「確か開始は11時からだっけ？」

「さてと、第一グループは移動だ。全員問題無いな？」

『はい！』

スタートラインに五機のISが並ぶ、バイザーが降ろされ、視界が見えない膜に包まれる。高機動用モードに切り替わった証だ。と言っても顔半分が隠れるのは俺だけみたいだけ。

『俺（私）が勝つー！！』

開始のアラートが鳴り響く、遂にキャノンボール・ファストの火蓋が切って落とされた。

「もらいましたわー！」

ストライク・ガンナーを装備したセシリアが独走している、強襲離脱用とあって加速性能も目を見張るものがある。全ビットを推進器にしているために爆発的なロケットスタートだ、しかもセシリアの技量も相まって安定した飛行を続けている。

「そうはさせない！」

モデルとなった打鉄の防御重視とは反対の機動力重視設計の打鉄式が左サイドに躍り出る、アンロックユニットと背部スラスターの計算された連動により複雑な軌道を描く。

「っひゅう、バトルレースつてのを忘れてたらダメだぞ？」

右コーナーに入る瞬間に前方に目掛けて「煌き」で牽制する、もちろん後方からのリニアガンの弾は避けながら。

「私もいるぞ、油断するなよ！」

「俺だつているぜ！」

イグニッションブースト
瞬間加速で一夏とラウラが前方に飛び出す、簪は夢現でゆめうつし一夏と切り結んでいた。雪羅のクローで上手く対抗しているところを見ると特訓していたことがわかる。

「懐かしいな！」

「もちろん！」

擬似展開装甲を腕部だけ閉じて内臓されているレーザーブレードを起動し、プラズマブレードを展開したラウラと並走しながら刃をぶつけ合う。ずいぶんご無沙汰だったが、この感じは心地いい。

「おっと、セシリアも忘れてないぞ」

インストールした機雷をばら撒く、当たり前に撃ち抜かれるが。

「まだまだ！」

「ここからが本番だ！」

レースも二周目に入るといふ瞬間、突然上空から飛来した影に先行していたラウラと簪が撃たれた。

「あれは・・・サイレント・ゼフィルス！」

ブルーティアーズ搭載試験2号機、強奪され、先日以来のそれが目の前に現れた。

だが、その後方に黒い影があることに誰も気づいていなかった。

114・トラブルメーカー（後書き）

舞い降りるは災厄、どうなる次回！

115 ドッペルゲンガー（前書き）

亡国企業側はほぼ原作通りです（描写無いですが）

115・ドツベルゲンガ―

「今度こそ、仕留めますわ!」

前回の襲撃時に取り逃がしたのが影響してかセシリアが構わず飛びかかって行った。

「大丈夫か!？」

高出力のレーザーが直撃した二人はどうにか立っていた。

「どうにか、な」

「助かった、早く行かなきゃオルコットさんが」

イグニッションブースト
瞬間加速と同時の擬似展開装甲による重力場シールドでどうにか直撃は防げたが……半端ない威力だったために後退してしまった。

「やあ、流石だねえ」

「え、流……?」

「ぎ、技師……?」

「一夏もセシリアの方向へ移動していた、すぐに俺たちも思ったのだが……俺に瓜二つの容姿をした男が声をかけてきた。」

「やあ、久しぶりだね。オリジナル」

「ああ?知らないな、誰だお前」

ひとまずの鏡写しのようだったのはわかった、だが、なぜだ?

「流、下がって!」

「鈴!」

「あっちにはみんな行ったから安心して!」

見れば白式の周囲にはいつもの面子がいる、なら大丈夫か。それにしても、こいつは何者だ。

今の俺と瓜二つ、コピーしたかのように顔も、髪も、声も、なんにもかも。

「おや、まだ理解できないのか。じゃあ簡単に言おう、父さん?」

「俺に子供はいないぞ、抱いた女もいない」

愉快そうに笑う俺の偽者、ある程度の予想はついているが自分の声でというのは以外に嫌なもんだな。

「そうだよ父さん、DNAを使って造られた傑作さ。世界最強の人間のコピーだよ!」

「お前に父さん呼ばわりは、されたく無いな」

「あなたには前回のツケ、払ってもらおうよ!リベル・ヴァンシュ
ティーン!」

前回・・・そうか、助けに来たときの。なら、手加減は要らないな。蒼月のリミッターを解除する、本来ならばスポーツ用なんだが先日
に戦乙女工業で実戦用にしてもらった。

「ここで父さんには消えてもらわなくちゃいけないんだ、ごめんね
!」

「はっ、俺が偽者なんかに負けるかよ!」

「ああああああああ！」

「あははははは！」

全ての動きが鏡写しだった、月下で斬りかければブレードで返し。ライフルを撃てば高速機動で避ける、ただのコピーではないのはわかったが事実上決め手が無い。動き方、癖、対応も同じだった。

「貰った！」

「な!？」

深紅のエネルギースピアが俺の腹部に迫る、もう、間に合わない。

「やらせない！」

「簪!？」

式様に装備された荷電粒子砲「春雷」が跳ね上げられ、高出力のエネルギーを放つ。そのまま放たれたエネルギーは偽者の右腕を破壊した、その反動で切っ先が反れる。

「人間ごときが、でしゃばるなあああ!！」

「あんたは、許さない!！」

風フエに搭載された拡散衝撃砲が火を噴く、それはまるで鈴の怒りを体現するかのようになりベルの体を貫く。

「今だ!！」

「ああ!！」

AICによりレベルが全身の動きを止められる、今がチャンスだ。おそらくここで仕留めなければいけない。俺と同等の力を持った人間が破壊活動を試みる、自惚れでもなく残酷な結果になる。

「はああああああ！！」

右腕の擬似展開装甲から絶対零度のエネルギー刃が伸びる、全力の一閃が振り抜かれる。

115・ドッペルゲンガー（後書き）

もはや超展開すぎでした

116. じめんなさい

純白の刃が絶対防衛を発動させる暇も与えずにリベルの左腕をIS
アーマーごと切り落とす。
全てを凍りつかせる剣の残像を追いかけると、鮮血が弧を描いて
飛散する。

「ぐあああああああ！！」

傷口を押さえながらリベルが流を睨む、誰もが見守る中彼だけはそ
の瞳に殺気を乗せていた。

「所詮俺の劣化コピーか、おいリベル。なあ？」

「ふん、この程度で勝ったと思うなよ」

凍気を纏った剣を向けたままの流を見据え、周囲の人間を一瞥する。

「全てを貫く槍！」

叫んだかと思うとリベルの右手に8mはあろうという大きさの長槍
が現れた、しかも刃先は鍵爪状になっていて禍々しさを更に助長し
ていた。それを軽く振ったかと思うと目の前から消えた。否、瞬間
加速ヨシブーストをしていた。その切っ先は………鈴へと向かっていた。

「え、い、嫌」

自分へと迫ってくる狂気の刃、恋する人と瓜二つの人間から向けら
れる経験の無い純粹な殺意。

陽光を受けて輝く切っ先、世界がスローモーションに感じた。死を

覚悟した瞬間、とつさに目を瞑る。

人体に何か突き刺さる音が聞こえた、しかし来るはずの痛みは無く。目の前には一人の人間がいた。

「へっ、生者を守るのが死者の役目ってな」

「流っ!？」

唇から赤い液体を溢しながら腹部を槍に貫かれた流の姿がそこにあった。皮肉にも福音の時と同じ場所から血で染まった槍を覗かせながら。

「っく、邪魔をしやがって。興が冷めた、戻るぞM」

仲間と通信をしているのかりベルが槍を引き抜き後退する、しかし誰も仕掛けない。技量が違いすぎるのだ、ただでさえ普段は流が手加減をしている。まして本気の戦いなど誰も見ていない、先ほどの戦闘でほぼ互角に戦っていたりベルがどれだけの實力を持っているかが分かってしまったからだ。

「それでは、またその日まで。じゃあね父さん！」

飛び去っていくりベル、その背を追えるのはその場に誰もいなかった。

「流、大丈夫なの？」

「なんとか、な。すまん、栄養ドリンク無いかな？」

場所は変わり医務室、腹部に包帯を巻かれた流がベッドに横たえていた。心なしか薄く見えていた。

「は、はい」

「ありがと簪……んつくんつく……はふう、生き返る」

飲み終わった途端、流の身体が一瞬光ったかと思うと薄さは消えていつものように戻った。

一回物質化を切り、靈氣に還元したのだ。

「その、すまん」

頭を垂れて謝罪する流、その先には簪と鈴、ラウラがいた。

「まったくもう、心配するじゃない。馬鹿」

「もう少し周りのことも考えろ、悲しむ人間もいるのだからな」

正直言い返せない、ただでさえ福音に一回墜とされて消滅の危機だったんだ。今回はいつもより多く食事して靈氣が多かったから良かったものの、一歩間違えば……だったかもしれない。

「あたしたちを守ってくれるのも良いけど、もっと自分を大事にして！私が助かってても、あんたがいなきや意味無いのよ！」

その言葉は俺の心に深く刺さった、泣きながら言う鈴の姿が昔を思い出させる。無茶をして生死をさまよった時に同じことを妹に言われた。

「はあ、ここでも言われるとはな。なんで忘れてたんだか……情けないな俺」

思わず口に出してしまつ、滅多に泣き言を言わない流にしては珍しいことだった。

悔しさからかその拳は強く、強く握られていた。それこそ血が滲むくらいに。

「もつと頼つて、流は一人じゃない。私たちは一人じゃ弱いかもしれないけど、みんななら助けになれると思う。だから一人で背負い込まないで？」

涙目ながらにしゃべる簪、鈴モラウラも頷いていた。なにかに気づいたかのように顔を上げる流。

周囲には笑顔を見せながら自分を見つめる三人の少女、その誰もが自分に対して手を差し伸べていた。

「こんな俺でも、助けてもらつていいのか？」

「当たり前でしょ、借りがあるんだから返させなさいよ」

「仲間を助け、助けられる。そういう人になれと言つたのはあなただ」

「助け合うことを教えてくれたのは流だよ」

嬉しいこと言つてくれるなあ、頭が上がらないよこれじゃ。ここま
で言われたなら、もう引けないな。

「ありがとう」

なんかボシュって音して三人とも向こう向いたけどどうしたんだろ
うか、なんか「その笑顔は卑怯よ」とか「不意打ちとは・・・」とか
一体どうしたんだか、熱は無いみたいだし。

「ほら、良くなったんなら行くわよ」
「どっ行く？」

『誕生日でしょ（が）（だろ）！！』

116 ごめんなさい(後書き)

次回は誕生日パーティーですよ奥さん!

117 ハッピーバースデー！（前書き）

先に言っておく、ごめんなさい

117・ハッピーバースデー！

『誕生日おめでとう！』

夕方5時織斑家宅、総勢15人が集結していた。簪に鈴、シャルロットに篝・セシリアとラウラ。楯無に虚さん、のほほんさんに深羅とエリー。蘭ちゃんに弾と数馬という面子。正直良く入れたと思う。俺と一夏合わせて17人だ。

「一夏もおめでとう」

「流こそ、おめでとう」

いや、こんな大勢に祝ってもらえるなんて嬉しい限りだな。ちなみに千冬は俺の誕生日ってことで俺がやるべき仕事も引き受けてくれた、そのうちお返ししないとな。

「はい、腕時計。買い物に付き合えなかったから」

「おお！Tレクオーツか、ありがとな。大事に使わせてもらっよ」

体温・日光・振動など様々な運動から発電して稼動する万能時計。横のスイッチを押すと空間投影するという代物だ、日常・仕事どちらでも使える。鈴がせっかく選んでくれたんだ、ありがたく使おう。

「流、危なっかしいあなたにこれを」

「悪かったなあ、お、おお」

手渡されたのは小さな刀、所謂魔除けの破魔矢の刀版とでも言おうか。思いの込められた手製のお守りだ。いつでも身につけられるようにネックレスになっている、懐かしいなこれ。

「もっと自分のこと考えてくださいね」

「わかってる、すまん」

「そうそう、ラウラさんが庭で呼んでますよ」

「……遅いぞ」

「んなこと言われてもなあ」

事前に直接言えば良いのにと言ったら怒られた、なんでだ？そうすりやすぐに伝わるのに。

「うおおあ！？……ん、ナイフ？これお前のだろ」

「護身のために毎回霊気の消費は避けてほしいのでな」

う、ごもつとも。そうだよなあ、零落白夜と同じでなにか霊気で武器でも作ると自身の構成している霊気を消費するんだよ、微量だけでも。つまりはガチでHP消費してるってこと。

「それではな「待って」ん？」

「ありがとう」

「！？あ、ああ／＼」

なんだ、いきなり茹蛸みたいに顔赤くして。普通にお礼しただけなんだがなあ、女つてのはつくづく不思議なもんだ。あ、ホルスターも丁寧に着けてある。いつでも持ってるってことな、常備しておくものが多いな。嬉しいけども。

「流？」

「簪か、チーズケーキ美味しかったか？」

「うん！じゃなくて、これ！」

そう言って両手で差し出してきたのは女の子らしいピンクの包装がされた小さな箱だった。

丁寧に包まれたそれにはブルーのリボンの飾りがついている。

「開けていいか？」

「うん！」

なんだろうか、ゆっくり包装を解いていく。すると現れたのは青い色のマフラーだった、もしかして手編みか？

「最近寒いときも多いから、編んでみた」

「こりゃ暖かそうだ、助かるよ。ありがとうな、じゃあ早速」

首に絡ませて巻く、うんぽかぽかだ。思わず顔がほころぶ、俺って幸せ者だなあ。こんなに多くの人に祝ってもらえるなんて。

「もっと頼っていいんだからね！」

腰に手を当てて人差し指を立てて注意してくる、夕日の中で眼鏡を外した状態では。いつものようにできるはずもなく、思わずまじまじと見つめていた。

「可愛いな、簪は」

「ふへ！？」

「え、あ、いや。冗談じゃないぞ」

人間正直に生きるのは大事だぞ、こういうときも正直に言うものだ。いやまあ、正体隠してた俺が言えることじゃないが。

「あはは、ありがとう。そういつて貰えると嬉しいな」

「そ、そうか。なら良かった」

ん、あれは一夏と筈か。まあそつとしいてやろう、俺は空気も機微も分かる大人……のはず。

「流」

「ん？どうして……」

その瞬間、俺と簪の唇が重なった。いや、重ねられたが正しい。つてうええ！？ちょ、おま、はいいいいいい！？ナニがオコッてるンダこの状況……。 (不意打ちは苦手です)

「ぶはあ、心配させた罰だからノ」

「は、はい。ごめんなさい」

あ、そういうことか。なんだと思ったようあ、頭が上がらないな
当分。

117 ハッピーバースデー！（後書き）

大丈夫、鈴の救済策はあります

118. まったくこのフラグメーカーは・・・え、違う？(前書き)

今回は短いです、いやまあ、丁度良い切りどころが無かったもので

118・まったくこのフラグメーカーは……え、違う？

「いや、嬉しいもんだな」

「ああ、あんだけの人数に祝って貰えるなんてな」

え、主役がなんで自販機前にいるかって？準備とか全部終わって俺たちがやること無かったんだよ、俺は怪我人だからって余計。せめて何かさせてくれてことで飲み物の買出しなんだよ。

「レジ袋持ってきて正解だな」

「17本とかだもんな、つとあとウーロン茶だ」

「おう」

缶ジュースの落ちる音が響く。ガコンガコンガコン……うひゃあ。

「あ、丁度売り切れた。ギリギリ助かった」

「じゃあ戻るか」

レジ袋に缶ジュースが大量に入ってる、誰がここまで入れられると想像したろうか。多分無いな。

「うお、重い」

「ははは……ん、あれ誰だろ？」

一夏が指差した方向を向くと電柱の影から一人の女性が出てきた、なんだ。またフラグ立てたのか？

「え？」

「あ？」

だが、俺たちは空いた口が塞がらなかった。なぜならその女性、いや、少女は千冬にそっくりの容姿をしていたのだから。おそらく若い頃の千冬にそっくりなのだろう、一夏は動きが止まっていた。

「誰だ・・・？」

15・6歳の少女はその質問にうすら笑みを浮かべながら平然と答えた。その笑みは千冬に似つかなかったが。

「私はお前だ、織斑一夏」

「な、なに？」

一夏を指差しながら冷笑を浮かべる少女、正直気味が悪い。

「今日は世話になったな」

「もしかしなくても、ゼフィルスのパイロットか貴様」

「ほう、あいつのオリジナルか。まあいい」

一夏に近づきながらその少女は口を開く。

「私の名前は」

「織斑マドカだ」

織斑・・・いや、一夏には千冬以外に家族はいない。なぜ一夏と同じ苗字、いや、どうしてここまで千冬に似ているんだ！？そして何故そこまでの殺気を放つ？

「私が私であるために、織斑一夏。お前の命を貰う」

すつと差し出された鈍く光るその引き金が引かれ、パンツと乾いた音が響き渡った。

118・まったくこのフラグメーカーは・・・え、違う？（後書き）

凶弾が狙うは少年の命、そのとき彼は何を思う・・・

次回予告の試験です、好評だったら今後こうしたいと思います

119・モヤモヤ・・・うん

二挺の銃声が響いた、硝煙を上げるのは二方向。

「いきなり撃つなんてな」

「チツ、邪魔ばかり入るか」

マドカのM1911と俺のS&W M500の銃弾がぶつかり弾け飛ぶ。

ま、間に合った・・・。

「た、助かった」

「走馬灯見るのはまだ早いぞ一夏、さてマドカさん。どういことかな？」

銃口を向けて声をかける、できれば拘束したいが・・・無理か。

「ふん、貴様はコピー品のことを考えたらどうだ」

「あいにく今はそういう場合じゃ無いんでね」

引き金を続けて押し込む、だが当たることなく地面に弾ける。

「逃げるなら上に伝える、ヴァンシュタインと手を切れってな。食われるぞ！」

「ふん、そこまで無能では無い」

そのまま、ISを展開してマドカは飛び去っていった。流石に市街地で戦闘はできない。

「まったく、空気読みやがれってんだ。帰るぞ」
「あ、ああ。流、マドカのことは」黙ってる、お前の判断でやれ」
悪い」

『襲われた（の）！？』
「まあ、な」

翌日、食堂で一夏がシャルロットと篝に言い寄られていた。
勿論、織斑マドカの名は伏せて。俺はいつも通りに簪と並んでかきあげうどんをすすっていた。
昨日は何も言わず普通に誕生パーティーをあの後も楽しんだ、水をさすのは嫌だったからな。

「流は大丈夫だったの？」
「まあな、何が目的だったか良くわからないけど」

事実、一夏を恨んでいるのはわかったが何故なのかはわからない。
第一、織斑家では家族の話題はタブーが暗黙の了解だ。俺に聞く権利など無いし、わざわざ聞かなくてもこれは二人の問題だ。あ、セシリアが一夏に卵焼き食べさせてもらってる。

「あらあら、楽しそうですね」

山田先生と千冬が並んで食堂に来た、プレートを持っているあたり
今から食事なのだろう。

俺が負傷したことだからか俺がした仕事量は少なかったから今食べられてるんだよなあ。

まあ、山田先生曰く「西川君の仕事スピードが異常なんですよ」「らしいが。」

「まったく、負傷した奴が元気とはな」

そついや昨日、簪にキスされたんだよな………/ / やばい、今になって思い返すと恥かしい。

「ん、流、熱でもあるの？」

「あ、いや、大丈夫」

なんで俺がここまで緊張するんだ？今まで普通に冷静な紳士的対応ができてたはずなのに……うゝむ、わからん。

「あゝ、なんか具合悪い。今日は部屋で寝てるわ」

「そうか、てか幽霊でも風邪引くのか？」

「実体化してたら普通に人間だから引くんだよ」

実際はモヤモヤしているからなのだが……なんだか変な気分だ。うあゝ。

そんなスッキリしない気分のまま、俺は昼間だと言つのに自室へ移動した。

ちなみに襲撃事件の後始末が大変すぎて月曜日だと言つのに休みだ。

119・モヤモヤ・・・うん(後書き)

あれ、どうしてこうなった？

119・決意する？0歳

「ふい、打鉄もやっぱいいな」

蒼月をリミッター解除して絶対零度のエネルギーブレードなんて振り回したものだから、内部パーツの一部が分子結合崩壊して破損・戦乙女工業に強制送還。修理が終わるまで1週間だってさ、本気をちょこつと出した結果がこれだよ。

そのため、授業での模擬戦を急遽訓練機でやることに。ちなみにいつだかやった学年総合の講義二回目である。

「さて、皆さんは機体性能が試合の結果を左右すると思っている人が多いでしょうね」

観覧席では操縦者志望の一般生徒が頷く、まあ、そうだろうな。

「ですが、実際はどうでしょう。基本性能では専用機に比べて劣りませんが」

そう言っただけで地上に降りる、安定性はやっぱりピカイチだな。

「例えば、イグニッションブースト瞬間加速」

講義協力は鈴が快く承諾してくれた、助かった。

『3・2・1・ゴー！！』

山田先生の元気な掛け声で300m先のラインまで走る、俺の場合

は地面を蹴った。

「え、うそ!？」

「同じ速さ出てる!」

地面を蹴ってからの丁度良いタイミングで通常加速、観覧席からは驚きの声があがる。

なんか一夏も驚いてるし、てか鈴まで・・・お前は候補生だろうが。

「簡単な話、軽く地面を蹴りながらスラスターを噴かしました。応用すれば上空への高速回避もできます」

それからの二時間は実習、専用機持ちと教師をリーダーにグループで。

整備科志望の生徒には特別講習、やる気があるから教えがいがある。

「さて、応用だ。打鉄の近接ブレードの量産を第一にした改良案を考えてみよう」

『はい!』

「優れたものは実際に試験運用してもらおう、さあ開始!」

そんなこんなで午前中の特別講義を終えた、中々に良いアイデアが出てきた。こりゃあ来年の整備科は安泰だな、今日は午前授業。久しぶりのバイトだ・・・@クルーズの。

「あつ〜」

「はいはい、次ホットケーキセット二つ!」

港近くのベンチでポリを飲みながら夕日を眺める、綺麗だなあ。ちなみに外は寒かったので簪から貰ったマフラーを巻いている、勿論腕時計はしっかり着けてる。

「あ、あのさ」

「ん？」

いつになく真剣な顔の鈴、俺も思考を切り替える。こういうときは真面目な話をするという予兆だ。

「いきなり、居なくならないでね。いくら因縁の相手がいるからって」

いきなり、か。確かにここへ来る前は突然死んでしまった、深羅に聞いたところ沙耶も含め大勢が悲しんだらしい。正直なところ一度話しにいきたいがそれも無理、世界を超えるなんて不可能な話だ。

「そうできたら良いな、俺だってこれ以上悲しませることはしたくない。二度とごめん」

この世界にも大切に失いたくない人がいる、逆を言えば俺を失いたくない人もいる。

「俺は、どこにも行かない。誰も泣かせたくない」

鈴を抱き寄せて頭を撫でる、もう、誰かを悲しませるなんてごめん。大切な人だけじゃない、大切な人が守りたい世界ごと守る。俺も含めて誰もが悲しまないように。

「だから、俺は強くなる」

一度終わらせたからこそ、二度目は許さない。自分の手が届くならば伸ばすまで、届かないなら歩み寄れば良い。次の人生は絶対^{エンディング}にハッピーエンドにしてみせる。

119 決意する？0歳（後書き）

使いどころを間違えた！

120 とある少女のはじめの一步(前書き)

うわゝ、またかよって内容です

120・とある少女のはじめの一步

とある木曜日、調理室で夕食を終えた簪は赤々と熱を放つガスオーブン前で焼き上がりを待っていた。

現在焼かれているのは抹茶のカップケーキ、簪の数少ない得意料理である。

「（流、食べてくれるかな・・・）」

「・・・・・・・・」

時計を確認すると既に10時を回っていた、「残業で遅くなる」と言っていたため。差し入れとして作っていたのだが、急がなければ仕事の速い流のことだ。今にも帰ってきてしまうかも知れない、早く焼きあがれと思いつながらオーブンを見つめる。

チンッ！

ぱあっと顔を笑顔にするといそいそとミトンをはめてトレーごと取り出す。

砂糖が焼け、抹茶とともに甘く芳醇な香りが辺りに広がる。

ほわ〜っと湯気があがるのが成功の印だ。

「よし、できた」

冷めないうちにあらかじめ準備しておいた袋に丁寧に一個ずつ入れていく、バレないようにするのが大変だったのは言うまでもない。

「（あとは・・・食べてもらっただけ！）」

職員室に両手で袋を抱きながら歩く、いつもならばすぐの道のりも今だけは長く感じた。

「お疲れさまでした〜、あら、簪さん。どうしました?。」

一組の副担任、山田麻耶が話しかけてくる。どうやら今仕事を終えたようだった、やはりどうみても背伸びしたような印象を受ける。

「あ、あの。流君いますか?。」

「あら?そういうことですか、奥でまだ頑張ってますよ。簪さんがンバー!。」

「は、はい」

それだけ言うと山田先生はいつものように小走りで去っていった、中を覗くと最奥で眼鏡をかけてキーボードを叩くスーツ姿の流が見える。その顔は真剣で空間投影ディスプレイは高速で文字列をスクロールさせられていた。

「失礼します」

「はい・・・お、簪かどうした?。」

缶コーヒーを片手にこちらに歩いてくる流、スーツに青い眼鏡をかけたその姿はいつも以上に簪にはかっこよく見えた。

「た、食べて!。」

袋を手渡す、流が面食らったような顔をしているがすぐに受け取り中身を見た。

「うお、抹茶のカップケーキ！？マジかよ！いやっふう、ありがとう
な簪」

「う、うん。は、はいあ〜ん」

つつい早く食べてほしくて口に近づける、流も驚いたような顔を
したがすぐに食べた。

流の顔があっという間に笑顔に変わる、そのまま流がソファーに案
内した。

「ふひ〜、久しぶりに甘いもの食べたな。ありがとう」

「う、うん。喜んでくれたなら良かった」

本心からの笑顔で感謝の言葉を言う流、いつになく笑顔だったため
に簪は少し頬を染める。

「あ、あの。流！」

心臓が高鳴る、今まで経験が無いほどに顔が熱い。真っ赤になっ
ているであろうことが鏡を見ずともわかる。

「あなたのことが、好きです。付き合ってください！」

思いのたけを全力で伝える、達成感があったが・・・何か今聞こえ
てはいけない音が聞こえる。

「すう・・・すう」
「え」

思わず硬直、そして恥かしさで顔を抑えて歩き回る。
結果的に、流は眠ってしまっていた。良く見るアニメの鈍感主人公のように・・・。

「・・・はあ、まったくもう」

ため息をつくが、その顔は自信に満ちていた。なぜなら、相手が寝ていたとはいえ言えたのだ。

過去の自分ならば言えずに何もできないまま終わっていただろう、おそらく簪の心には「勇気」が芽を出していたのかもしれない。

「私は、負けないからね」

120・とある少女のはじめの一步(後書き)

や、やばい。このままでは簪 になっってしまう。これでは鈴に殺される！

いや、別に・・・うわ、やめろ、なにをさぎやあああああああああああ
あああ！！

121 某神「なんで私だけハブられるの!？」 (前書き)

簪 有力説浮上中、意見ありましたらどうぞ

怖い、そう、「中に居る」と対峙したときや「顔剥ぎ」がいきなり出てきたときより怖い。

誰かが言っていた、「一番怖いのは人間」だって。

「あゝ、あれはなんだ!？」

わざとらしく明後日の方向を指差し、なぜかスーツのポケットに入っていたロードローラーのミニカーを投げる。なんで入っていたのか、なぜ投げたのかはわからん。

「あ、ロードローラー!!！」

なぜか目を輝かせて去っていった鈴……どうしてこうなった。

「はゝ、疲れた。誰と組むかな？」

ちなみに強制参加、何故か男同士組むのは却下された。なんでか知らんが。

「やばい、あと5分……誰かああああああ!!！」

ちなみに時間を過ぎると生徒会長直々にポコポコにされる、というか終わる。

仕方ないので職員室へとぼとぼ歩く、うあ”くく”。

「あ、流!」

「おう、簪か。良かったらタッグ組んでくれ」

最後の神頼み、俺が知ってる神はアニメ好きだったが……。萌

えが抜けてるよ！」なんか聞こえたような気がするが分からん。きつと疲れてるんだろう。

「う、うん！私も流を探してたの」

「おお、貴方が女神か。ありがたい、早速手続きを」

どこの見た目だけ良い中二病神よりマシだ「解せぬ」なにも聞こえん、とにかく書類に書いて〜と。

そついやこれ、どこかで見たことあると思ったら婚姻届に似てるんだな。まあ別物だけでも。

「まあ、頑張れ」

「はいさ！」

バシン！

「一応教師なのだから真面目にしろ、さもなくば切り伏せる」

「はい、済みませんでした。失礼します」

あゝ、怖かった。簪なんか軽くビビッてたし、まああれで20%なんだけども気迫は。

そついや腹減ったな。

「飯が美味しい店知ってるんだけど、行く？」
「行く！」

その後、赤い髪の友人になぜか食事中に睨まれた。一体どうしたんだろうか？
まあわからんが、ひとまず神（笑）は引つつかんで鏡花の部屋に投げ入れておいた。

121 某神「なんで私だけハブられるの!？」 (後書き)

神(笑)はマテゴ読んだことあればわかるかと、あとロードローラー
ネタは下田さん繋がりでです。

7巻のイベントがほとんど潰れてるんだよね(遠い目)

122 タツグマツチ・・・か(前書き)

主人公は流と言つことをお忘れなく

122・タッグマッチ・・・か

「それでは開会の挨拶を更識生徒会長よりお願いします」

虚さんが一歩マイクスタンドから下がる。

ちなみに俺は教師として開会式に参加している、ちなみに一夏は生徒会副会長として並んでいる。

さつきから眠そうにしているのはほんさんを教頭が睨んでいるのは仕方ない。

ところで教頭先生（笑）は逆三角形メガネによくあるお団子結び、なんか赤いスーツ（趣味悪い）にケバケバしい化粧（濃い口紅にベタベタのファンデーション）の今俺の右隣にいる人だ。

生徒の中では「鬼ババア」と有名である、事実俺が臨時教師にされるときに男だからって唯一拒否ったし。

人にあれこれ言う割りに自分じやなにもできないと言う教師間でも嫌われている人・・・（ざまあww）

しかも見た目や性格から自衛隊時代の政府の監察官に似ているという嬉しくもない事実。

「どうも、皆さん。今日は専用機持ちによるタッグマッチトーナメントが開催されます。どれも皆さんにとって有意義な時間になると思います、しっかり見て学んでくださいね」

なにせ男子二人が入学したことにより各国から第三世代兵器を搭載した最新機ばかりだ、注目すべき点も多い。

「まあ、それは皆分かってると思うけど！」

楯無がいつものようにどこからか扇子を取り出して開く、そこに書かれるは「博徒」の二文字。

「今日は楽しんでもらうために名づけて「優勝ペア予想応援・食券争奪戦」を企画しました！」

生徒が一気に騒ぎ出す、しかしそれに不満を言う教師はいない。

「って賭けじゃないですか！」

「安心なさい、織斑副会長。根回しはしてあるわ」

同時に俺と端にいる千冬が額に手を当てる、そう、この企画。公認である。なにせ。

「賭けではない、ただ自身が応援するタッグに食券を使って思いを示すだけ。見事当たったら配分されるってことだし」

「それを賭けって言うんです！」

『意欲向上のため』という正論を否定できないため、というか会長権限で半強制で決められた。

しかも生徒の心をすっかり掴んでいるために反対も無理だった。

更には一夏が貸し出しでいない間に決められたのだ。

「それでは、対戦表を発表します」

さてさて、どうなるかな？……………え。

『更識 楯無& a m p ; 凰 鈴音VS西川流& a m p ; 更識簪』

第一試合、まるで運命の悪戯かと思いつつ開会式を終えた俺は更衣室へと向かおうとしたのだが。

「流、待って」

「ん？どうした簪」

いつものゴーグルを外し、本気モード（俺命名）になった簪が扉に手をかけた俺を引き止める。
はて、心配事でもあったっけ？

「あの、終わったなら5時にシンボルタワー前に来て」

「ああ、わかった。じゃあまた後でな、頑張ろう」

「うん！」

この様子だと、姉が相手でも問題無さそうだな。後は全力で行ければ問題無し。

そういえば一夏は筭と抽選の結果（一夏ラバーズによる）組むそう
な。

「さあて、番狂わせしてみますか」

オッズは鈴・楯無コンビが一位、俺と簪コンビは5位だ。まあ、色々
と怪我してるしなあ。

123・恋する乙女は無双伝説・・・うわぁ

いや、天気が良いね。日光が当たってポカポカして気持ちいい、絶好の昼寝日和じゃないか。

簪が眠そうにしている俺をひっぱたいて起こそうとしているが・・・。

「早く、もう向こうのピットの準備終わってるよ」

「・・・わ、わかったから止めてくれ。結構痛い」

どうやればマテリアルゴーストに実体ダメージを与えるピンタを出せるのか、謎だ。

まあ、そろそろ本気で行くか。そうだ、優勝したら簪にもプリン大福を食べてもらおう。

うん、そうしよう。

「よし、絶対勝つぞ！」

「もちろん！」

拳をぶつけて勝利を誓う、というか勝たないと鈴が怖い。いや、勝つてもおそろくボコられるだろう。

あの目は「覚えてなさい」って目だ。やはり鈴の考えることはわからんな。

「おし、行こう」

「うん！」

だが、現実はそのままで優しくなかった。なにせ、クラス対抗戦よろしく無人機（と書いてお約束）がアリーナに侵入してきたのだから。しかも嬉しくもない詰め合わせ、5機も来やがった。一言言おう。

「邪魔ばっかしやがって、今日という今日は許さん！さっさと済ませるぞ簪！……簪？」

あれ、いない。どこだろ……。あ、もう行っちゃったのね。俺も行こう、既に遠くで一機爆発してるけども。簪……。怒ってるのね。何にかはわからんが。

「私の……邪魔をしないで!!」

式式のアンロックユニットの外部シールドが横にスライドし、6×8門のミサイルポッド「山嵐」が展開される。

「軌道選択、速度、方向、オールコンプリート。行け！」

次々に吐き出されるは特殊超硬度金属弾頭が搭載された物理破壊ミサイル、通称「フルメタルミサイル」がその銀色に輝く身体を見せつけながら二機目に襲い掛かる。それこそ獰猛な肉食獣のように。本来ならば高出力ビームすら防ぐエネルギーシールドは対光学兵器コーティングが成されたそれに貫かれる。

「なんて威力よあれ」

「簪ちゃん……いつの間に」

残りの二機を相手取って苦戦していた鈴と楯無は啞然としていた、なにせず近くで鈴にとってはライバル・楯無にとっては妹が自身では手間取る敵をいともたやすく屠っているのだから。

しかしそれも長くは続かない、連続発射により二機目を撃墜したところで砲身がオーバーヒート。更にはリロードまで使用不可、と表示されたのだ。

「しまった！」

気づいた頃には眩いほどの光が目前に迫っていた、残った無人機による規格外の大口徑レーザー！。

その威力は一角が吹き飛んだアリーナの剥き出しになった構造体が物語っていた。

「簪に、手を出すな！」

式式の背後から蒼き流星が舞い降り、跳ね上げたラグナロクを撃ち放つ。紫の禍々しい重力場は付近の空間を捻じ曲げながらレーザーとぶつかり大爆発を起こす。

「待たせたな！」

青い光を放つ蒼月、海のように真っ青な翼を広げたその姿はまさに天使のようだった。

「さあ、行くか。お邪魔虫を退治しに！」
「絶対、倒す！」

怒りに燃える簪（恋する乙女）にはもはや恐怖などなかった。あるのは思い人とともに目の前の敵を倒すことだけ。姉との真剣勝負を邪魔した無人機たちへの純粹な怒りだけだった。

「お姉ちゃん、鳳さん。手伝って」

「お、お姉ちゃん・・・わかったわ。妹のためならやりましょう！頑張っちゃうわよ！」

「了解、さっさとやっちゃうわよ！」

ちなみに他の専用機持ちはその熱い空気に気圧され、出るタイミングを失っていたのはここだけの話だ。

「あれが、簪さん？」

「そう、なのだろうな。気迫は凄いが」

「あはは、恋する乙女は違うねシャルちゃん」

「そうですね・・・」

なににせよ、集う全員の思いは同じだ。

『絶対負けない！』

ここに戦いの火蓋が切って落とされた。

124・ただ、突き進め。必要なのは強き思い(前書き)

サブタイがアレですが気にせずどうぞ

124・ただ、突き進め。必要なのは強き思い

「各個撃破、全機突撃！」

流の合図とともに残された三機それぞれへと色とりどりのISが向かっていく。

そこにいる誰にも恐怖は無かった、一人の少女が勇気を見せてくれたから。

「てやあああああああ！！」

エネルギーを消滅させる刃が無人機のエネルギーシールドに叩きつけられる、しかし出力負けしているのか弾き返された。

「くっそ、どれだけ硬いんだよ。うおつと！」

人体にはありえない制動をかけながら無人機がピンク色のプラズマブレードを振り下ろしてくる、重量が無いはずのそれはまるで斧のように重い一撃を放つ。

「やらせはせん！」

絢爛舞踏を発動させた紅椿を纏った筈が白式に触れる、その瞬間、零落白夜の刃が普段以上。いや、見たことの無いほどの長大な大きさに伸びる。

最大出力のリニアガンが一機のシールド発生装置を砕く、動きが止まった無人機の隙をセシリアが見逃すわけが無かった。

「ブルー・ティアーズ、フルバースト!!!」

フレキシブル偏光射撃の集中砲火がレーザーの網を作り出し、縦横無尽に駆け抜け敵機の装甲を穿つ。高出力状態になったAICが無人機の動きを止めるどころか、強制的に空から地面へと撃ち落とす。

「深羅さん!」

「今だ!」

「言われなくとも、貰います!」

そこへ残月のレーザーランス『風穴』が搭載されたブースターにより加速し、衝撃波を放ちながら無人機へと突き刺さる。

瞬間、十字に光の十字架が走り爆発。無人機一機を徹底的に破壊した。

別の場所では円軌道を描きながら鈴が衝撃砲をばら撒き、無人機へと弾雨を浴びせていた。

対したダメージにはなっていなかった、ただの足止めだ。

しかし、下方では楯無の専用機ミスティアス・レイディが全身のアクア・ナノマシンを蒼流旋に集結。

鋭く、そして光を反射したそれは今まさに全てのエネルギーを集約させていた。

これこそが一撃必殺の破壊力を持つ学園最強に相応しい力、『ミストルテインの槍』。防御を捨て、ただ己の一撃に魂を込めたそれは今まさに放たれようとしていた。

「鈴ちゃん、行くわよ！」

「はい！」

同時に制限解除され、放熱板が展開された龍咆が雷を纏わせながら高エネルギーを放出する砲身が覗く。

甲龍に装備された、崩壊覚悟の決戦兵器『雷炎』だ。

「碎け散れっ！」

「いけええええええ！」

周囲が暗くなるほどの雷撃の弾丸と全てを包み込み貫く槍が無人機を挟み、交錯した。

小型気化爆弾と衛星レーザー並みの破壊力を持つ威力に、耐え切れず無人機は音を立てることもなく爆散した。

「さあ、あとは二人に任せましょう」

「頑張つて、二人とも」

爆発を防ぐためにシールドエネルギーが0になった二人はアリーナの壁に背を預け、最後の一機へと向かう蒼と灰の影を見つめた。

124・ただ、突き進め。必要なのは強き思い（後書き）

次回、決戦

125・乙女の心はフォルティッシモ

『砲身冷却完了』

「流、行ける！」

「おし、後はアイツだけだ」

ちなみに、無双状態の簪がめっさ怖かったなんて口が裂けても言えない。プライベートチャネルで一夏が「女子にはそういうこともある」って言ってたのが気になるが・・・お前に何がわかると言うところだ。

「簪ちゃんを頼むわよ」

「了解、魔女に任せんかい」

いやまあ、男なのだが。久しぶりに強敵だ、昔の（たった数年前だが）血が（一応流れてる）騒ぐ。というか、早く仕留めないと授業ができなくなる。何かの行事ある時に限って事件あるよな。

「ロツク、行けえ！」

式式の複合スラスタから山嵐が再び展開され、銀白色のミサイルが大量に吐き出される。

同時に極小の蒼羽が視界を埋めるほど広がる、蒼月セカンドフォームの広範囲攻撃用の蒼羽斬波だ。

青い空間を奔る銀の弾丸は大気を切り裂きながら無人機へと迫る。

「受け取りやがれ！」

機械的な蒼翼のバイザーが開き、長大な砲身が現れる。高出力荷電粒子砲『ギガランチャー』だ、初期装備のラグナロクを上回るその威力は一般機ならば一撃で屠るほど。

しかし、それほどの攻撃を一度に受けたはずの無人機は煙の中から傷一つ無く現れた。

「そんな、ありえない！」

「ありえないことこそありえないってな！」

イグニッションブースト
瞬間加速で肉薄した流がシールド発生器に触れる、その瞬間。それまで全てを拒絶した盾が消滅。空中に浮かんでいたシールド発生器が落下する。

「非科学にはご注意くださいってね、さあやっちゃえ！」

「うん！」

簪が春雷を跳ね上げ、トリガーを押し込んだ。

『ブレードモード開放・限界時間まで2分』

「はああああああ！」

二門ある荷電粒子砲の照射部の安全装置が解除され、現行の近接武装を遙かに凌駕した剣が現れる。

強力な磁場で形状固定された荷電粒子の刃が容易く無人機の強固な装甲をバターのよう^にに切断、いや、溶断していく。

「フォローは任せる！」

限界時間を過ぎると焼き切れてしまうが、その威力は十分だった。だがそれも、流の後方からの援護射撃があつてこそだった。通常は振り回すためでは無いために重量がある、それを剣よろしく振り下ろすのだ。命中すればこそ力を発揮するが、その分重量により動きがどうしても遅くなる。

「これで、決める！」

機体よりも長くなった荷電粒子の刃がコアごと最後の無人機を真っ二つに両断した。

同時に春雷の砲身が焼け落ちるとともに無人機が爆発の花を咲かせた。

「お姉ちゃん！」

「何年ぶりかしらね、そう呼ばれるのは」

場所は変わり保健室、捨て身で高威力の武装を使用した楯無が検査のために運ばれたのだ。

鈴が抑えたおかげで直接的ダメージを防げたのが幸いした。

「無事で良かった・・・」

「うふふ、簪ちゃんが頑張ったからこれで済んだのよ」

事実、序盤で簪が二機撃墜という離れ業をやつてのけたため。ピットで待機していた他の操縦者に被害が無かつたためだ。その結果全員が万全の体制で対応できたために無傷だったのだ。無論、捨て身の攻撃をした楯無は軽い捻挫だったが。

「まったく、恋する乙女は強いわね」

「はうっ／＼」

どうやら姉はお見通しだったらしい、凶星だった簪はボンツと音を立てて赤くなる。

「あああう・・・お姉ちゃん！」

「男の子を待たせちゃダメよ」

人差し指を立てて妹にウィンクする楯無、すでに調子は元に戻っていた。

「結果は教えなさいよ！頑張つて！」

「う、うん！わかつたお姉ちゃん！いつてくる」

もはや、これまでの壁は綺麗に無くなっていた。駆けていく妹を見送りながら楯無は微笑みながら手を振っていた。

125 乙女の心はフォルティッシモ（後書き）

さて、次回の「IS・ゴースト」は！

簪、走る

待ちぼうけの流

急展開

をまとめた一本でお送りします、次回もまた読んでくださいね！

じゃん、けん、ぽお~~~~ん！

126・恋する男女の夕日は燃えて

ささつと書類と報告、見舞いを済ませた（といっても楯無に追い出されたようなものだが）

なぜか笑っていたのが気になる、というか何か企んでる予感がする。

「ふう、まったく。疲れたな」

ちなみに缶コーヒー（ホット）を飲みながらシンボルタワー前なうまだ寒いからプレゼントのマフラー巻いてる、結構重宝してるんだよねこれ。

現在16時47分、あゝ息が白いな。まあ冷えてるものな。

「お疲れだね」

「なんでここにいるユウ、式見なら寮だぞ」

なぜか前世での浮遊霊がいつのまにか居た、なんで居るんだこいつ。

「いやね、流に伝えることがあって」

「何だ？冷凍イクラは要らんぞ」

一回試したが気持ち悪かった、あれのどこが良いんだか。ちなみにこいつは鏡花・もとい式見蛭に憑いていた幽霊である。なぜか萌えアニメが好きと言う変わった奴だ。

「体のことなんだけど」

「マテリアルゴースト、だろ？今更どうしたんだよ」

結局は物に触れる幽霊でしかない、成仏は不可。死は消滅を意味す

る、故に死を望むことは事実上不可能。無論大怪我をして靈気を多量に消費すれば消えるが。

「蛍が前に言ったこと覚えてる？」

「・・・パーフェクトだっけか？どこがかはわからんが」

「マテリアルゴーストの性質を持った人間ってことさ」

ユウの隣にいきなり現れた黒髪長髪の女性、もとは男なのだが。

「式見か、ってどういうことだそれ？」

「つまり、僕と違って人として生きていけるってこと。疲労を感じるのが一番の証拠だよ」

確かに、ゴースト化した式見は全然疲れが無いっていった記憶が・・・靈気の集合体だから疲労が溜まらないんだよな。早い話が体力の消耗がない、なにせエネルギー消費して動く人間じゃないから。

「え？」

わけがわからないよ、マジで。

「あれ、理解してない？」

「そつみただね、うーん」

なんか喋ってるが、思考の海に入っている俺には届かない。

くぁwせdrftgyふじこlp・@:」「・・・・・・・・落ち着け俺。

「jつすいさznkjhsくjckhcbh」

「落ち着け！」

「ほぐわあ!?!?!?!お、俺はなにを」

周りを見回すと、二人がいない。……なんだったんだ、まあひとまず人間として暮らせるってのは安心だな。あ、もう17時だ。

「流〜！」

「おう、一体どうした？」

同じマフラーを巻いた簪が駆けてくる、どうやら笑顔ということは姉とは打ち解けたみたいだな。良かった良かった、これで安心だな。

「あ、あの!?!?!」

いつになく真剣な顔の簪、強い決意が感じられる。俺も缶を置いて向き合う。

「な、流!?!?!」

涙目で両手を胸の前で組み、簪が顔を染めながら迫ってくる。

「も・・・」
「も？」

「もう、好きって気持ちがありません。私と付き合ってください」

え

え

え

・・・
ええっ!?

す、好きって・・・か、顔が熱い!これってLIKEでは・・・
ないよ、なあ・・・?

というか、この胸の熱さはなんだ?お、俺・・・どうしてこんなに
ドキドキしてるんだ?

なんで、こんなに嬉しいんだ?

「お、俺は・・・」

おそらく俺の顔は今までで一番赤くなっているのだろう、簪も顔を
染めたまま俯いてしまっている。

俺の気持ちはどうなんだ、確かに簪は好きだが。この暖かいのは何
なんだ?

「だ、ダメなら、それでも良い・・・」

「だ、ダメじゃない！」

思わず、簪を抱きしめていた。強く、強く。

「あ……」

「俺も簪が……好きだ。友達としてじゃなく」

頭で考えるより先に、声が出ていた。それがきっかけになったのか、俺の中にあつた思いが、奥底に眠らされていた、諦めていた思いが溢れ出す。

「頑張る簪が好きだ、背伸びする簪が好きだ、勇気を出せる簪が好きだ！」

「う、う、嘘じゃない？」

震える声に耐え切れず、さっきより強く抱きしめる。

「絶対に、絶対に守り抜く。愛してる、だから、俺の傍にいてくれ！」

人生で初めての、心からの告白

「流ええええええ！」

ここまで、誰かを愛しいと思ったことはなかった

「私も、愛してる！」

世界で一番幸せだったんじゃないか、このときの俺達は。

このとき一人で見た夕日はいつも以上に美しく、
幻想的だった

126・恋する男女の夕日は燃えて（後書き）

あえて何も言わない

127 俺の妹がこんなに凍々しいわけがある(前書き)

ちょっと寄り道しますよ

127 俺の妹がこんなに凜々しいわけがある

俺はあのあと簪と二人で夕飯食べていつしよに寝たはずなんだが、別に変な意味ではないぞ。

「ここは・・・」

見慣れたアルミ合金製の扉、仕事用の金属製の机。その上には俺の写真が飾られていた。

そして、かつて俺が座っていた椅子には一人の少女が真剣な表情でペンを走らせていた。

「兄貴、あたしは頑張ってるからな」

聞き覚えのある声、特徴的な黒髪のサイドテール。俺の肩くらいまでしか無かった身長は伸び、安心感を与えるほどたくましくなっていた。

少女の名は、西川沙耶。俺の、実の妹だ。

「おうおう、頑張るのは良いがここ誤字だぞ」

「あ、ホントだ。うわ、またかよ」

相変わらず頭を掻く癖は直っていないみたいだ、どうやら俺が死んでから4年が経っているみたいだ。

さっきカレンダー見たらそうだった、ふむ、しっかり仕事はできてるみたいだな。

「いや、心配だったけどこれ見て安心したわ」

「そりゃあそうだ、兄貴が居れない分頑張ってるからな」

ふむふむ、なるほど。心霊対策班の・・・お、隊長か。俺の使った制服が懐かしいな。

あ、ソファでエリーが腹出して寝てる。こいつも変わらないのか。

「って、兄貴!？」

「おう、久しぶり」

気づくの遅くないか、さっきから話してたのに。

「あれ、深羅さんに転送されたんじゃないのか？」

「いや、寝たんだが気づいたらここにいた」

む、沙耶がなんか震えてる・・・俺何かしたか? いや、盛大に心配かけたな。

できれば父さんと母さんにも会っておきたいな、何も言わないで行っちゃったし。

「兄貴!」

「ほぐふ!」

沙耶に抱きつかれて動けん、というか力がまた強くなったなこいつ。元気なのは良いがいてててて!!

「痛いから一回離れてくれんか沙耶よ」

「あ、ごめん兄貴。いつまで居るの?」

「多分、俺が目覚めるまでだから・・・9時間か」

明日は土曜日だからもしかしたら昼ごろまでかもな、まあそれは良いとして。

「あれからなんかあった？」

「あたしに兄貴の能力付加なった」

え、てことはなにか。物質化能力が？マジかよ、まあ直接幽霊叩けるから良いのか。

「そついや親父とお袋には伝えてあるのか？」

「うん、だから別に凹んでないよ。ただ、お盆には帰ってきなつた」

「できたら苦労してねえよ、まあ、元気そつで良かった」

誰だ、シスコン乙って言ったのは。妹の心配して何が悪い！顔剥ぎのときに触手で叩かれたんだぞ、それ以来は守りきってたが。

「そつだ、どうせなら久しぶりに家に行く？積もる話もあるでしょ」

「まあな、じゃあ行くか」

127 俺の妹がこんなに凜々しいわけがある(後書き)

ちよこつとの間前世にいます、もちろんESメンバーは・・・うん
!

128 俺の知り合いが来るわけがあった(前書き)

沙耶には何か思い当たることがあるようです

128・俺の知り合いが来るわけがあった

「たっだいま」

「あら、お帰りなさい」

どんな状況でも驚かない、ピンチだろうと動じない。息子が幽霊だとしても気にしない、それが俺の母。

西川澄子だ・・・せめてここくらい驚いてくれ。

「ああ、お友達が来てるわよ。あなたもIS学園ってどこかしらね？ やつと彼女できたみたいで安心したわ」

誰だろうか、というかなんか覚えがある気配がする。主に自室から。

「!?!」

「兄貴、IS学園っててか彼女!?!」

「ん、今俺が行つてるところだが? どうかしたか? あとなんでそんな焦ってるんだ?」

「あ、いや。大丈夫、問題ない」

なんか沙耶が嫌な汗をかいてる・・・なんだ? まあいいや、ひとまず誰がこつちに来てるんだ?

黒歴史もあるから不安だな。

『お邪魔してまゝす!(るぞ)』

え〜と、一夏・篤・鈴・セシリア・ラウラ・シャルロット・簪・千冬。

なにこのメンバー、私服だつてのが救いか。学園の制服だと浮くからな、どこのコスプレ集団だよって話だよ。

「みなさん寝て気づけばというパターン？」

うん、なんかそうらしい。てか、ひとまずこの人数でどうしようか。

「はーい、紅茶とお菓子持ってきたよ」

「悪いな沙耶、疲れてるだろ？」

「いいのいいの、兄貴がいつもすみません」

あー、なんでみなさん以外な顔するかなあ。そんなに俺の妹がこんなのが以外ですかね、てかラウラはさつきから「義妹!？」って言うな。

「そつえば、兄貴を落とした人がいるって？」

「!？」

それとなく視線を彷徨わせる俺と簪……をガン見する鈴とラウラ、奪い取る宣言があつたんだよな。

というか、一夏のこと言えないほど鈍感だったなんて嘘だ!

と、落ち込んでいるといつのまにか簪が沙耶に捕まえられていた……
・おい、なにやってんだ。

「ふひゃあ!？」

「む、むう……。あたしよりあるわね……」

「や、やめへ。ふにゃあ!？」

ズゴム

ふざけた沙耶にチョップ、音は気にするな。そして健全な高校生の前でなにやってんだ、まったく。

「くうくうくう、やっぱ兄貴のは効くわ」

「馬鹿者が、まったく。大丈夫か？」

「う・・・うん」

「へへ、ここが流の職場か」

現在、心霊対策班詰め所。なんでも俺が働いてた場所が見たいんだってさ、そう気になるものかねえ？

「ふむ、装備は整っているな」

「自衛隊なのにこの装備なんだ」

いや、相手が相手だからね？もしかしたら近代兵器が効かないかもつてのを相手にしてるからなあ。

まあ、特務Sクラスの特特殊装備もあるけども。

「うお、日本なのにライフルとかあるぞ」

「む、そうかと思えば刀か」

だから相手が（ry

「ほら、これが兄貴愛用のMG3だよ」

「おお、これが」

「まさかここまでとはな」

「仕事だからな、俺ができることがそういうことだったってことさ」

事実、霊視と物質化能力があつたから配属されたんだ。無けりや普通に通に味気ない人生送つてたかもな。

P L L L L P L L L L

「はい、対策班」

『クラスAの霊体が三体、水無月町第一公園に出現。住民に被害が出る前に殲滅してください、装備はSクラスが許可されています』

「了解、ただちに出撃します」

あ、癖で連絡受けちまった。まあ大丈夫か、久しぶりの仕事もしいなあ。

「ふむ、仕事か？」

「後任に先輩は見せなきゃならんでしょ、ちよいと行って来る。いくぞ、二代目」

「ふへ、は、はい！」

そんなわけで俺は、二代目を連れて格納庫に走った。一夏が口をポカンと開けていたが気にしている暇はない。クラスAとなると、霊気保有量が多いから物理干渉ができるレベル。もし民間人に襲い掛かったら怪我では済まない。

沙耶「(IS学園……ISってラノベだったと思うんだけどなあ?)」

129・懐かしい面子が出てくるなあ

「ほっ、ほっ、よっ」

「兄貴いゝ待って」

現在、二人してSクラス特殊装備『ストライカー』を背負いながらコンクリート塀の上を走っていた。このほうが速いんだよね、実際。

『ストライカー』

心霊対策班に配備された最高クラスの兵装、対マテリアルゴースト用兵器。

使用者の靈気を増幅させたエネルギー弾を撃ち出す全長140cmの大口徑キャノン砲。

装備時には超硬度のサポートジャケットを着なければいけない（反動相殺、取り回しのため。装備者の身体能力強化も兼ねている）

「遅れるな、お前が隊長なんだから」

「兄貴が凄すぎるんだよ」

そう言いながら普通に着いて来てるのが俺の妹らしい、あ、あいつらバレないと思って尾行してやがる。

まったく、まあどうせなら見せてやってもいいか。

「おし、ささつと片付けるか」

背負っていたストライカーが背部カバーを展開し、トリガーユニットを覗かせる。

そこへ右腕を差し入れると前腕部を包み込むように固定される。

「懐かしいなこの感触」

確かこれを使うのは10年は余裕で経ってるか、これだけはホントにオーバーテクノロジーだからなあ。

なにせ近代兵器が効かない相手にダメージだからなあ、もしかしたらISとも戦えるかもしれないな。

考え事していると既に遠くに大きな影が見えた、まあクラスAレベルだとなあ。

クラスCだったら対戦車砲弾で十分なんだがなあ。

「まったく、お前らは下がってるよ？」

『ギクッ』

ここでオーバーテクノロジーの塊を出すわけにもいかないだろ、第一ISの武装使ったら気をつけてても住宅地がボロボロになる。『日本の住宅地で詳細不明の兵器！？』とかつてニュースになったらどうするんだ。

「先手必勝！」

地面を蹴り上げて上空から弾雨を浴びせる、砲口から青いエネルギー弾が吐き出され吸い込まれるように次々に命中する。

「D-8R-2で狙撃、チャージ」

「りよ、了解！」

0レンジで一体を撃ち抜き、蹴り飛ばす。結晶崩壊を始めたそれを

足場にし再び飛び上がる、月に照らされたその姿に誰もが見とれていた。流が見事な立ち回りをしているのに対して、沙耶は上手く照準を合わせられずにいた。

「沙耶、演算速度2倍。バースト」

「ええっ!？」

「いいからやれ、それくらいできるだろ」

サポートジャケットの身体能力強化機能は、マニュアルで数値設定が可能であり装備者の反応速度なども霊気調節により可能である。ISで言う超高感度ハイパーセンサーのようなものだ、操縦者保護機能は無いのが致し方ないところだが……。速度5倍とかにすると余裕で骨折するしな。

「ああもう、2倍バースト!つく……。」

ちなみに脳に多大な負担がかかるから鍛えないと1・1倍でも頭が痛くなる。

「30秒で片付ける、いいな？」

「は、はい!」

エネルギー弾が高速で飛び交い、同時に二つの影が公園の敷地内を駆け回る。

影が交差した場所にいた一体が十字砲火を浴びせられ結晶崩壊し、消えていく。

「これが、流なのかよ。今までののはなんだったんだ」

「おそらく、私たちが知っているのはほんの一部だと言う事なのだろうな」

「チャージ、3。クロス」

「了解、チャージ3クロス！」

二人のストライカーの砲身からエネルギーの刃が進る、Sクラス装備所以の破壊力を持つそれは文字通り世界一の威力だ。

「はああああああ！！」

「せやあああああ！！」

二つの影が交差し、最後の一体が光の剣によって切り裂かれた。瞬間、結晶が砕け散り光の渦へと変化し消えていく。幽霊が成仏されたときの光だ、この場合は強制的にだが。

「つく、ふはあ」

倒した途端、沙耶が膝をつく。通常の二倍の速度で動いたのだ、当たり前である。流は汗一つかかずに涼しい顔をしている辺り熟練者だというのがわかるが。

「はい、お疲れさん。もっと励めよ沙耶？」

「うぐ精進します、兄貴。やっぱ兄貴は凄いや」

「お前も頑張ればできる、ダメならエリーに教えてもらえ」

俺の自慢の妹だからな、とだけ言うと流は沙耶を抱きかかえる。所謂、お姫様抱っこだ。

「ふにゃあ！？な、なにを」

「歩けないだろ、さあ帰るぞ。お前らも出て来い」

木陰からぞろぞろといつものメンバーが出てくる、ラウラの目がキラキラと輝いているのはまあ気にしない。

「西川、飛べ！」

「アリス？」

瞬間、銃声が響き渡った。

129 ・懐かしい面子が出てくるなあ（後書き）

マテゴを読んだ人なら、最後に出てきた人わかりますよね？

130・知識が無くちゃ意味無いでしょ（前書き）

皆さん待望の流の妹さんと気になる「心霊対策班」の説明です！

130・知識が無くちゃ意味無いでしょ

前世編キャラクター

西川沙耶にしがわみや

流の実の妹、3歳年下。腰までほどある長い黒髪を纏めて右サイドテールにしている。

兄である流を兄貴と呼びとても愛している（家族的意味で）ただし重度のブラコンである。

4年前に鉄道事故により流亡き後はかつて流が隊長を務めていた「心霊対策班」の二代目隊長に着任。

エイリアスとともに日夜忙しく働いている、実力はそこそこだが「ストライカー」の使用がまだまだ未熟。

やる気は人一倍あるが、空回りしてしまうこともある。

ちなみに着ている制服は流が愛用していた物、ところどころ綻びているが本人は形見同然に扱っている。

深羅から真相を聞いているために、あまり落ち込んでいない。

スタイルは良い方だが、まな板である。神無鈴音とは同級生であり仲良し。

流が転生（転送？）した後に、西川流・式見蛸が有していた「霊体物質化能力」が発現している。

ワード説明

「心霊対策班」

超法規組織の一つ。国家付きの霊能者家系「神無家」と同様に心霊現象、もしくは霊体による事件の解決。調査、悪性霊体の討伐などの非科学的存在に対する専門の特殊部隊である。霊体物質化能力を有していた神無家の次期党首「神無深羅」の幼馴染である「西川流」が初代隊長を務めた。

対悪性霊体用の特殊兵器「ストライカー」が配備された世界唯一の組織でもある。しかし、相手が非科学的存在であるためにその存在は政府の重役や国内の一部霊能者のみが知っている。

日本国内で一番の武装を有しており、隊員の戦闘能力も世界屈指のものである。表向きは自衛隊広報課ということになっている。そのため、仕事が無い場合は中学校などで説明会をしている（現守高校にも流が毎年行っていた）

ちなみに初代部隊員は流とエイリアスの二名のみだった、現在でも二名だが・・・。霊視能力を有していることが最低条件であり、ほとんど入隊者がいないのが悩みである。

130・知識が無くちゃ意味無いでしょ（後書き）

お久しぶりです、完全復活したGです。なんとか体調も元通りになり、というかむしろ元気になり過ぎた感もしますが。

ただ、今後は体調に気をつけていこうと思います。皆さんもお気をつけて、ね？

131・前世戦線プロローグ(前書き)

オリジナル入りまーすが！残念なお知らせがあとがきに

131 前世戦線プロローグ

「つく、沙耶。怪我不いか？」

「う、うん。あれ、何？」

沙耶を狙った凶弾は蒼月の腕部展開で防いだが、なんでこういう時に限ってこいつが出てくるんだ？

ありえないだろ、ゴーレム？が三機出てくるなんてよ。

「え、なんでここに？」

「そんな、なんでこの世界にあれが居るんだよ!？」

「住宅地が戦場になるぞ！」

後ろのメンバーからそんな声が聞こえる。IS、しかもリーグマツチで侵入してきたタイプ・・・もしこの場所が戦場になったら確実にここ一帯が更地になる。この世界には旧世代の兵器しかない・・・。

756

「全機、2時方向3キロ先の窪地へこいつらを追い込む。住宅地から引き離すぞ！」

『了解!』

沙耶には申し訳ないが、な。ストライカーなら攻撃できるかもしれないが、生憎、沙耶には機動力が足りない。最低でも演算速度3倍は必要になる。

「沙耶、ここで待ってる。良いな？」

「う、うん。怪我しないでね」

「俺を誰だと思ってるんだよ、じゃあ、行ってくる」

踵を返して視線の先にいるゴーレムを見据える、故郷の世界は絶対に傷つけさせない。絶対に！

131 前世戦線プロローグ（後書き）

お知らせです

前世編が終わったら更新休止です（主に原作関係で）

白さんとのデート（？）もやりますが・・・アイデアく・れ・な・
い・か？

そんなわけでお知らせでした・・・今後も「IS・ゴースト」
にお付き合いいただけたら嬉しいです

132・そーじじゃない(前書き)

台風・・・もっと逸れろ、Gです

132・そこじゃない

「でやああああ!」

一機のゴーレムの胸部を蹴り、一撃で遠くへと吹っ飛ばす。一応はエネルギーシールドが無いことに全員で嘆息する、あれは流石に骨が折れたからなあ。

「まったく、俺のホームにまで来るなんて嬉しいことしてくれるじやねえかよ」

「嫁の地元は私たちが守りきる、そうだろう?」

『当たり前!』

「で、ここまで追い込んだは良いが……どうするんだ、流?」

「ん? ああ、簡単だ。叩き壊す!」

さも当たり前だろうというどや顔で胸を張る流に、一同はため息をついたのだった。

ゴーレムでさえがくりとリアクションを見えないところで行っていたのはここだけの話だ。

「そおい!」

月下がゴーレムの腕を易々と切り落とし、100人が見ればそういう
うであるくらいに鬱憤が込められた銃弾の豪雨を降らせていた。

「でやあ!」

一夏が零落白夜の一閃で別の一機を切り伏せ、動きが止まったところをセシリアがコア目掛けて蒼穹のレーザーを放つ。

「貰いましてよ!」

勿論、BTレーザーはコアを正確に撃ち抜きゴーレムが爆発する。
ちよろいと言われるだけある。

「行けえ!」

式式から8連装ミサイルポッド「春雷」が6機展開され、合計48
発の高性能爆薬を詰んだミサイルが同時に吐き出される。
各々が固有の動きで弾幕を掻い潜り残った三機へと襲いかかる、更
に後方から鈴の龍砲の不可視の弾丸が追い討ちを掛ける。

「あたしだって、やれるわよ!」

赤いレーザーの網が逃走しようとしたゴーレムの進路を阻む、そこ
へ大出力のAICが叩きつけられ二機まとめて空中に磔にされる。

「今だ!」

「ここで、決める!」

静寂が戻ったそこにはゴーレムを構成していたであろう部品の粒子が月光を反射してキラキラと輝いていた。

「ふいふ、よし戻るか！」

『待つて（ください）（よ）（兄貴）！！』

目の前の惨状をあつさりとスルーした流にその場の全員が突っ込む、いや、突っ込むしか無かった。

「なんだよ、終わったぞ。以外に楽勝だったな」

『そこじゃない（ですわ）（よ）（から）！！』

一体皆どうしたってんだ、早く戻って收拾付けないといかんのに。てか、沙耶が来ちゃったよ終わったから良いけど。

「あれって何？」

「戦乙女工業製第三世代兵器、空間圧重力衝撃砲「ラグナロク」。蒼月の製作者が寝ぼけ眼で作った奴だとさ」

なんでも、やろうと思えばブルーティアーズの偏光射撃フレキシブルみたいにくげられるらしい。やったこと無いけど、ちなみに残月とエネルギーバス接続して撃つとIS学園くらい一撃で吹き飛ばせるそう。

「兄貴、製作者って何者？」
「若干15歳でIS装備開発企業の設計責任者だとさ、一回会ったが・・・トンでもない男だった」

なにせ、設計図の中に第4世代の構想が入った奴や第3世代兵器のアイデアの草案なんか散らばってたからな。
ポケットからレンチが出てきたり、バタフライナイフが飛び出した
りしてたし。本人曰く「量子化技術を応用した似非四次元ポケット
だよ(ドヤア)」ってやってたし。なんか「こっちはいつ作者は再会
するんだろっね？」とか訳分からんことも口走ってたし。

『あゝ』

「技術だけ言えばな、勿論知識ある常識人だったが」

よし、コアは・・・貰っておこう。そうしよう、これは落ちて
たんだ、盗んだわけじゃないしな。

「じゃあ、帰ろうか」

「そうだな」

「はい、はいわかりました」

「どうした沙耶？」

携帯電話で誰かと話していると、沙耶が微妙な顔をしていた。な
んだ？

「アリスさんが早く来いって、伝えることがあるって」

132・そこじゃない(後書き)

あゝ、誰かデート編のネタください

133・一息ついたし(前書き)

今回は結構難産でした・・・

133・一息ついたし

「ただいま」

「おかえり〜な〜くん」

ふへ？エリーが起きてる・・・というかなんかIS操縦者としてのあのエリーがダブって見える・・・？

「あ、そうそう。今ね、あっちの意識を繋げてるの。だからこの私はおやすみちゅ〜」

「ほんと出鱈目だな、それも深羅か？」

「うん、多分かんちゃんも同期してると思うよ？」

同期って・・・事実そうかもしれないがなあ、というか神無家は一体どれだけチートなんだ？状況が飲み込めなくて千冬でさえ口をだらしなく開けてるぞ、なにせ平行世界の壁越えてるんだからな。

「で、アリス。急用ってなんだ？」

「ヴァンシュタインの残党が騒ぎ出している、おそらくそちらもだろっ？」

かつて命を懸けて戦った造られし少女、過去にヴァンシュタインによって人工霊能力者として遺伝子操作により生み出された。後に某帰宅部に所属、物腰も柔らかくなり今では同性すら惹きつける女性になっている。もちろん霊能力があるため、各地を日々回っているのだが。

「まあな、俺のコピーまでいつの間にか作っていやがった。こっちは？」

「各地で強化型の使役霊が暴れている、大型が出るのも時間の問題だろう……そいつらは？」

アリスの視線の先にはいつものメンバー、なぜか箒と沙耶が座布団の上で緑茶を飲んでいる……のんきだねえ。

「俺が深羅に転生……いや、転送された先の人たち。IS学園の生徒と教師が一名」

「なるほど、ところでお前は物質化能力は残っているか？」

「半マテリアルゴーストなもんで」

「なら話は早い、定期的にこちらに空間を越える指輪でもなんでも作って来い。こちらにまた現れ始めているんでな」

今度は一夏がポカーンと口を開けて、ラウラがめっさ目を輝かせている……おそらくここにクラリッサが居たらテンション高いんだらうなあ。

「うわ、厄介だな。ただでさえこっちでも手間取ってるのに……ストライカー予備の一機持つてって良いか？」

「ああ、既に国でもレベルAでの命令が出ている。それにお前が言えれば簡単だろう」

「なんか、凄い話になってるわね」

「ええ、流さんも頼もしい感じですし」

そんな真面目な二人のとなりでは。

「はぶ」

「ふひ〜」
「ふ〜」

沙耶、箒、一夏の三人が番茶を座布団の上ですすっていた。なんとも年寄り臭い。

簪とシャルに至っては、机の上で情報収集をしていた。無論、ISのある世界に比べれば旧世代になる性能の。

「う〜ん、現時点だとやっぱりISに勝てるのはストライカーくらいだね」

「絶対防御と飛行能力を除けばほぼ同性能、製作者は不明」

「む、これは。AK47に小型―THEL《衛星攻撃用対空レーザー砲》・・・日本とは思えんな」

「それほどマテリアルゴーストが厄介だということなのだろう、ISでかるうじての相手にこの程度で挑むとは・・・あいつも侮れんなそんな化け物相手には」

「それで、お前は向こうで何を？」

「ISつつうスポーツ用の兵器の操縦者育成専門学校の生徒兼技術教師、ついでに鈍感を自覚」

「遅すぎるな、式見より遅い。どこの誰だったか、『俺が鈍感？H A H A H A』とか言っていたのは」

「・・・俺だな、うん」

なぜ前世にまで来て弄られなければいかん、てか緊張感無い奴もいれば国家機密普通に覗いてるし・・・一応言っとくがこいつらに

霊視能力は無い。だからさっきから俺の頭の上で踊ってやがるナ
ス幽霊に誰も気づかない。

「そおい！」

「みぎやあ~~~~~」

だから窓から遙かあなたにぶっ飛んでいったのも気づかない、てか、
まだ成仏してなかったんか。

ひとまず、対策練って会議したら全員纏めて一度帰ろう。どうやら
身体ごと来てるみたいだし。

「ひとまず、もう遅いから未成年は寝とけ」

抗議の声上がるが、もう12時だ日付変わってるじゃんかよ。と
いうわけで沙耶も眠そうにしていたのでいっしょに帰宅してもらっ
た。

「さて、久しぶりに飲みに行きますか。千冬もどう？」

「ああ、お前とは飲みたいと思っていたところだからな」

「わ〜い」

「久しぶりなんだ、積もる話もあるだろう」

こうして、そろそろ20代後半な二人とまだ20代前半の二人のグ
ループが居酒屋に繰り出して言ったのだった。

133・一息ついたし(後書き)

ね、ネタが浮かばん

どうでも良い情報・ノク

134・帰還・・・代償は

「あゝ、頭痛い」

「くう、飲みすぎたな」

「あゝたゝまゝいゝたゝいゝ」

「久しぶりだからと言って飲み過ぎだったな」

「全員二日酔いって・・・千冬姉、どうするの？」

「別に、戻ったら休日だろう？」

「そんなぐでぐでとした感じに言われても困るんだが。まあ、そうするつもりだけど」

夜が明けて、午前9時。いつもキリツとしている千冬がぐでぐでしているのを一夏がなんとも言えない顔で見ている。ラウラはさっきから目を瞬かせている、きっと目の前で起こっていることが理解できていないんだろう。俺も二日酔いの千冬なんて初めて見たが、なんとも頼りないな・・・。

「まあ、ずっとこちらに居ても仕方あるまい。指標でも置いて今は帰ると良い」

「ああ、そうさせてもらう。沙耶のこと頼むな」

「ふん、任せろ。それと織斑千冬」

「な、なんだ・・・」

「そのうちまた飲もう、お前とは良い酒が飲めた」

「ああ、私もだ。今回はいささか量が多かったがな」

まあ、異論は無いな。さてと、長居しても仕方ない来ようと思えばいつでも来れる・・・はず。俺が疲れるけど。世界の意思のバックアップが無いから靈気の消費が多いんだよね。

「指標で俺のナイフ置いていくよ」

「ああ」

指標が無くても空間移動系のアイテムはまあ作れるのだが、簡単な話。目的地を明確にしたほうが霊気の消費も抑えられる。「所定の空間へ移動」よりも「自分のナイフのそばに移動」のほうがはつきりして確実だしな。

「さて、みんな準備は良いか？忘れ物は無いよな」

「まあ、荷物は持って来てないからな」

「流の実家に来れたし、暇なときにまた連れてきなさいよ？」

「俺が疲れるんだが、これ零落白夜以上に燃費悪いし」

俺にHPの80%を消費しろと！？てか、これ毎回栄養ドリンク必要だね……緊急時どうすんだよ。ひとまず何日も行方不明ってのは困るな……どこへ飛ぶか。

「千冬、ひとまず家で良いか？」

「仕方あるまい、私が学園に説明するからそれで良い」

「わかった、ほれ全員手繋いで。じゃないと移動しにくいから」

転送する標的は一つのほうがやりやすいでしょ、自分で言ってることかとんでもないことってのはわかるけども。そんなこと普通に俺が言うものだから全員が驚いてるし、同じ世界だけと昔アリスはそれで俺達から逃げたからな。

「まさか自分ですることになるとはなあ……」

さて、今の俺の世界に帰るか。あんまり長くいると帰りたくなくな

るからなあ、向こうで俺にやることがまだ残ってるしな。まあ、盆には帰ってくるようにするか。

「じゃあ、沙耶。頼むぞ」

「任せて兄貴、今度はいつしよに飲もうぜ！」

「あいよ、そのうち逆にこっちに呼んでも良いかもな」

さてと、もう帰るか。名残惜しいが妹の立派な姿も見れたし、満足だな。あゝ、なんか目から水が流れてきた。

「あ、兄貴！？」

「ああもう、また来るからな沙耶！絶対だぞ！」

「う、うん／＼」

さあ、帰ろう。沙耶分も補給できたし、えつと空間を越える指輪つと。自分の中から靈気を少し出してイメージを定着させる。マジシヤンがやる何も無い中から指輪が！？って感じに。

「おし。移動対象、織斑一夏・織斑千冬・更識簪・セシリア オルコット・ラウラ ボーデウィツヒ・凰 鈴音・シャルロット デュノア・西川流。移動先、織斑家居間。総員衝撃に備えよってな じやあな！」

瞬間、沙耶の目の前の空間が眩いほど光り輝きそこにいた人物たちは消えていた。

「兄貴……」

「ふふっ、アイツも余程のシスコンだな」

アリスが指差したそこには、青い羽が落ちていた。しかも鳥の形に

組まれた状態の。

—「うおっ!」

箒「なあっ!」?

セ「きやあっ!」

ラ「なにっ!」?

シャ「ええっ?」

流「のわあ!」

簪「ふわあ!」?

千「つく・・・帰ってきたのか?」

どうにか帰ってきたみたいだが、移動した高さがずれていた。やべ、高度設定忘れてた。天井近くに出たものだからそりゃあ・・・・・・・・落ちるよね。

「う、靈気が足りない・・・・・・・・使いすぎた・・・・・・・・ぐへえ」

やべえ、いきなり全力疾走でフルマラソン5本走らされたような疲労感があ!う、動けない・・・・・・・・。

「ひ、ひとまず立たないか?って流!」?

「おお、なにか栄養をくれ。薄くなる・・・・・・・・」

靈気の大量消費で身体が薄い・・・・・・・・使いすぎた、もう少し座標設定するんだった。うへえ。

どうにか帰ってきたけど、考え物だなこれ。飲んだアルコール大半が靈気で消費されたし……HPの80%も削ってまではやばいって。

「い、一夏。すまんが寝させてくれ」

「あ、ああわかった千冬姉……」

二日酔いというよりは転送酔いか？まあ、慣れないわな。ひとまず帰ってこれたことを喜ぼう、うん。

「ただいま！」

134 帰還・・・代償は(後書き)

たあ、あとは白蛇などのゴキウター(?)です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7949t/>

IS・ゴースト

2011年10月5日13時27分発行